

親鸞「三」（吉川英治）

法敵篇

氷柱の下

一

冴え返った春先の夜である。月明りは雪のように白かった、樹々の細い枝は水晶を思わせる。

「才才寒……」心蓮は、立ちすくんだ。

八寒の底から吹いてくるような風が、裾を払って、河内街道の彼方へひゅうと翔けてゆく。

昼間は、もう草萌えの温む土、温む水に、春の肌心地を感じるの、油断して、薄着のまま出てきたが、夜になると、急に棘のある空気が、風邪心地の肌を寒気立てる。

心蓮は、水漬をこすって、

「宿をとればよかった……」と、悔いを洩らした。

一日も早く帰りたい——師の房の顔を見たい——友の声も浴びたい——と矢も楯もなく立ってきた彼の気持

が、この深夜をも、ひた向きに、京へと足を急がせてきたのであったが、無理だった、体に微熱があるせいか、脚がだるい、鼻のしんが風に痛む

立ちどまれば、風は、裾を吹いて、よけいに悪寒がしてくるし、果ては、坐ってしまいたくさえる。

わんツ、わんツ——どこかで、猛々しい犬の声がした。静寂をつんざいて、幾声もつづく。

「おや？」凡の犬の声とも思えないのである。畜生の吠えるうちにも喜怒哀楽はあるものだ。心蓮は、釘を打ちこまれたように、犬の傷む心を、共に傷んだ。

「——この林には、家も見えぬが？」彼は疎林の中へ入って行った。まだ葉を持たない痩せた雑木が、どこまで行っても、同じような密度と芝地の肌を見せてくる。

がさ、がさと、心蓮の足に、落葉が踏まれてゆくのが、敏感な動物に、人間を感じさせたものとみえ、やがて不意に間近な樹蔭から、

——わ、わ、わんツ！

発狂しているような犬の声が猛り立った。

「才才」心蓮は、恐かった。

しかし——不惑さに捨てては逃げられなかった。

その一つの樹の根に、荒縄で縛りつけられている大きな黒犬は喉から断られてしまいそうに首を長く伸ばして、ほとんど、飛び出しそうな眼を、心蓮の影へ向けているのだ、訴えているのだ、何とも、言語のある人間には表情のできないような表情を必死に示して——
「どうしたのだ、百姓の子でも、咬み殺したのか、おま

えは……」心蓮は、恐々、寄って行った、黒犬の体は、狂いに狂っていたためであろう、自分の血でよごれていた。

それを摺りつけて、犬は、心蓮にからみついてくる——。眼やにをもつて、そして、血ばしった眼に、涙のようなものをもつて。

「待て。——これっ、そうからんでは、解いてやることもできないではないか。離せ、お離し……」やっと、振りもいで、木の根の縄を解いてやったのである。すると犬は躍つてよろこんだ、狂喜というのはこういう態であろうと心蓮は眺めていた。

突然、黒犬は、征矢みたいに駆け出した。

「あつ……」と、呆れてながめている間に、もうその影は、灌木の下を突き切つて、街道へ出たかと思うと、いっさんに、彼方の丘へ向つて飛んでいった。

丘には、松が多く見える。そして初めて心蓮も気づいたのである。そこに、チラと灯がまたいていることを。

「お……あの山門は磯長の叡福寺ではないか。……そうだ、聖徳太子の御廟のある……」

彼は、犬の後から、遙かに遅い脚で、その灯をあてに歩みだした。

二

山門は閉まっている。心蓮は、丘の下まで来て、「はて、今ごろ、門をたたいても……」と、ためらつて

いた。

太子の御霊を感じるの、その山は、神々しかった。しかし、もし魔が棲む山と見たなら、轟々と鳴る暗い松風もものすごい形相なのである。

「どんな所でもよいが——」心蓮は、寝どこが欲しかった。ともかく、ここまで来たことである、訪れてみよう、そう考えて、崖の段を踏みかけた。

さつき——林の中で縄を解いてやった犬の声が——その時ふたたび遠い寺域の裏山で聞こえた。

ぞつと、心蓮は背に水を浴びた。その時の犬の声は、さつき、街道で耳をとめたそれよりは、いっそう陰惨な殺気さえおびている——一種異様な吠え方である。

しかも。その犬の声は、恐ろしい迅さで、またこつちへ近づいてくるらしい。それと共に、誰なのか、大股に幅ひろく駆けつけてくる人間の跽音も近づいてきた。

「盗賊か？」咄嗟には、そんな程度にしか想像できなかった。心蓮は、大きな櫓のうしろへ走りこんだ。

上の柵を破つて、崖の竹むらへ飛び込んだ人間がある。——一人なのだ。手にキラと何か光ったものを心蓮はたしかに見た。

「畜生っ」すさまじい怒りをふくんでいる男の声がすぐ側へ来て聞こえた。見ると、それは額に兜巾をあてている山伏である。

けん！ けんっ！ 黒犬は、山伏の袂に——裾に——まるで死にも狂いの慕い方をして、追い纏っているのである。それを、腹立たしげに、

「うるせえっ」山伏は、蹴った。悲鳴を上げて、犬は腹を見せて仆れた、しかし、屈しないのだ、すぐにまた、噛みつくように、山伏の後を追う。

「ぶつた斬るぞ」ひっさげている直刃すくはの戒刀を、山伏は、怒っている眼の上にふりかぶって見せた。——それには、さすが血迷っている犬も怖れをなして、いと悲しげな声をあげて、尾を垂れて逃げすくむ。

「——みろっ、てめえが飛びこんできたおかげに、綽空の奴を、どこぞへ、逃がしてしまったじゃアねえか。おれを追うより、綽空をさがせ！ 今夜こそ、あいつの息のねを止めてしまわなければならねえ。——よっ黒犬くろ、おれを主人と思うなら、おれの狙う綽空を一緒にさがしてくれ」

しかし——犬に聞きわけのあろうはずもない。犬はただ、浅ましい飼主の血相を悲しみ、そして恐れるだけだった。

「——どこへ失せやがったか？」唇を噛んで、山伏は、そこらを睨ねめまわして歩くのである。心蓮は、たましいが竦すくんでしまった。——見つかったら、人違いでもしかねまい。逃げようか、じっとしていようか。彼は、ひとりでに五体がぶるぶるふるえてくるのをどうしようもなかった。

「街道のほうだな」そのうちに、こうつぶやくと、山伏は引っさげ刀のまま、彼方へ韋駄天いだてんのように走り去ってしまった。

もちろん、黒犬くろもその後について——心蓮は、ほっと

した。

われに返ってくると、冷たい汗が腋わきの下をぬらしていた。ふたたび戻ってこないものでもない、今のうちだ。彼は、崖を駆け上がった。そして山伏が破って出た柵さくの間から寺内へ入ってみると、ここは、寂じやくとして樹海の底に沈んでいる真夜中の伽藍がらんが眼にうつるだけなのである。

「お、誰か起きている」心蓮は、奥ふかい堂の渡り廊下に、一つの小さい燈火が流れてくるのを眼にとめた。

三

「お願いの者にござります」近づいて、心蓮が地上に額ぬかずくと、紙燭しそくを持って、ちょうど橋廊架ろうかのうえを通りかけた寺僧が、

「——旅のお方か」と、下を覗いていう。

心蓮が、疲れを訴えて、一宿のおゆるしを賜われまいかと乞うと、

「はい、それは承知しましたが、ただ今、頻りに猛々しい犬の声がしたのは、貴僧の姿を見て、野良犬でも吠えたのですか」

「いえ、その犬ならば、今、当寺から駆け出して行った山伏の飼犬らしゅうございます」

「山伏が」

「さようです、刃やいばを持って」

「はてな？」

「恐い血相でござりました」寺僧は、そう聞くと、あわてて奥へ駈けて行った。盗賊が入ったのではあるまいかといういい交わしつづにわかになんが右往左往し始めた。

すると、太子廟のほうを見に行つたうちの一人が、「こよい御靈廟に参籠していた善信御房（親鸞）のすがたが見えませぬぞ」と、告げ廻つた。

さては何か、奇禍に罹られたものではあるまいかと、老僧までが先に立つて、松明を点させ、裏の御葉山へまで、その赤い灯が点々と登つて、

「善信どの——。善信御房うつ……」と、呼び歩いた。心蓮は心の裡で驚いていた。

善信というからには、都にある、法然上人の室にあつて、共々に師事していた同門の綽空ではあるまいか。

つい昨年——建仁三年。その人は、前の九条関白家——月輪禅閣の息女と結婚して、法門に未曾有な問題を起した人物である。

また、叡山を去つて、吉水の念仏門に身を投じ、自力難行から他力易行へ転向して、その折も、ごうごうと世上の輿論に渦まかれた人でもある。

以前には、綽空といい、結婚して後、善信と名を改めたという風評も田舎で耳にしたことがある。

「もしや……かの綽空なら」心蓮は、急に、自分もじつとしていられない気持になり、そして胸噪ぎに駆らるるまま、どこというあてもなく、叡福寺の人々と共に探し歩いた。

「そうだ」彼は、山門を出て、街道のほうへ走つてみた。

さつき、山伏はこの道の方へ刃をさげて走つたのだ。——綽空が難を避けて行つたとすれば、この道にちがいない。

だがもうその山伏の影も見えないし、黒犬の声も聞えなかった。心蓮は、霜をふくむ風の中に、ただうろろと立ち迷つていた。

寺へもどつても、この騒ぎに——また、自分と同じ師を持つ同門の者の不安をよそに、楽々と、眠るわけにはゆかない気がする。心蓮は、背中を風に押されながら、風の行く方へただ歩みつづけた。

すると、どこからともなく、誦經の声が聞えた。耳のせいかもしれないが、そうでもない。

「？……」風に顔を反向けて振向いた。水車小屋がある。水車は晒布を掛けたように、氷りついで止まっていた。その小屋の廂の下に人影が屈んでいるのだ、石のうゑに腰かけて。

心蓮は、眼をみはつた。やはり自分と同じような貧しい法衣の旅人である。

「もし……あなたはもしや、以前綽空といわれた善信御房ではありませぬか」

「そうです」人影は、石から起つて、いぶかしげに、「そう仰っしゃるあなたは？」

「三年前に、上人からお暇を賜わつて、笠置の田舎へかくれ込んだ心蓮です。——あなたとも半年ほど、吉水で共に暮したことがあるあの心蓮です」

「善信御房——」心蓮は、いぶかしげに、また訊ねて、
「軒からは、氷柱が下がっているし、風は吹きさらすし、
さような所であなは、何を好んで誦経しておられたの
ですか」

「実は、ある者の刃に趁われて、逃げてきたのです」

「逃げるならば、叡福寺の僧房へでも、おくれになれ
ばよいのに」

「僧房を騒がすのは気の毒でしたから。——それに皆、
静かに眠っているところを驚かしてはと思うて」

「なるほど」心蓮は心を衝たれたように、

「危急に迫って、自分の生命が脅かされる間際にも、
あなたは、慈悲を忘れないお方とみえますな」

「——お恥しいことだ」善信は微笑して、

「そんなつもりではありません。山伏の刃が恐くて、た
だひた走りに、ここまで走ってきたに過ぎない。——そ
して、奇蹟のように危ないと助かったのが、何か
こう御仏の手でこれへ体を運ばれたような心地がして
——有難さに、われを忘れて、経を誦していたものでご
ざいまする」

「一体、あの山伏は、何者ですか。何を怨みにふくんで、
あなたを殺そうとしたのですか」

「さ……それをお話し申すには長いことになりますが、
掻いつまんで申さば、心蓮どのも見かけたらしいあの山

伏は、私が幼少からの学友で、今では聖護院の印可をう
け、播磨房弁円と名乗っておる人物」

「弁円？ ……私もどこかでその名は聞いたような気が
する。——して今夜は」

「私は、あの叡福寺の御葉山のふもとにある聖徳太子の
御廟へ、ちと、心願がありまして、籠っていたのです」

「ふむ」

「すると、弁円が、いつの間にか私の背後に、抜刀をし
のばせていたらしいのですが、すでに、その刃が私の頭
に下ろうとした瞬間、アア今思い出しても奇蹟です——
いや私にとつて、慈父たり、恩師たり、母たり、常に心
のうちで渴仰し奉る聖徳太子のお救いかもわかりません
——その髪一すじの危機に迫った時、忽然と、弁円の開
けて入った妻扉から中へ躍りこんできた一頭の黒犬があ
ったのです」

「えっ？ 犬が」

「弁円の飼犬なのでしよう、一声、もの凄いい声をあげて
吠えました。驚いて振向いたので、私は初めて、私を殺
そうとしている人間がすぐ後ろにいることを知ったので
す。犬も、飼主に力を協せて、私へ向って噛みついてく
るのかと思っていますと、さはなくて、弁円の刃を持
っている腕へ武者ぶりついて離れないのです——私が辛
くも逃げることできたのは、その隙があったからで、
思えばあの犬は、畜生とはいえ、怖ろしい殺害の罪を犯
すところであつた飼主をも、同時にその罪から救うたも
のといえまする」

「ほ……」心蓮は、いよいよ心を衝たれ、
「さても、ふしぎなこともあるものですな。その犬は、
この先の雑木林の中に縛りつけられてあったのを、私が、
縄を解いて放してやったのです」

「あなたが？」

「そうです——私が」

「……」氷柱の軒下に立ったまま、二人は黙然と、
いつまでも顔を見合っていた。眼に見えぬものの大きな
力をこの宇宙に感じずにいられないもののように。

もし心蓮が、あの時、黒犬の縄を解いてやる気になら
なかったら、善信は今ごろどうなつたろうか。

二人は坐ってしまった。御葉山の御廟のほうへ向って、
われを忘れて、数珠の掌をあわせ、仏の弟子である欣
びに声を出して念仏していた。

ちかっと、朱い光が、御葉山の肩に映した。

夜が明けたのである。

——雲にも、野にも。二人のうえの氷柱の刃は、いつ
の間にか麗朗な珊瑚のすだれのように輝いていた。

一

——いつまでこの春はこう寒いのだろうか。

門外の御弟子、聖信房湛空は、たまたまその夜、吉
水禅房の一間に泊つたのであるが、夜もすがら花頂山の
いただきから吹きおろす風や、三十六峰の樹々の音や、
戸を洩る針のような寒さに、

「よく皆は寝ていられる」と、夜の具に襟を埋めながら
思った。

ミリツと時折に、柱や梁が、乾燥した空気と寒に裂け
る音を走らせる。

「上人もお年を老られた——この禅房の建物も」湛空
は、ふと、人間の寿命と、建物の盛衰などを思うて、う
ら寂しい「無」の観念にとらわれてしまった。——こう
して有りと見える柱も天井も、寒いと感じている肉体も、
その「無」でしかない空でしかない。

「いつかは、形を失う日が来る……。それを早めようと
しているのが、叡山の人々だ、南都の大衆だ、高雄の一
山だ」

——今。この新しい芽ばえの宗教、浄土宗の屋を吹き
めぐる木枯しは、三十六峰の風ばかりではない。おそろ
しい法敵がほかにはある。

叡山の大衆は、伝統の威権と、その社会的な力の上から。

明慧上人をいただく高雄の僧団は、主として、教理の検討の上から。

また、奈良の解脱上人たちは、主にその教化の方面から、

（流行ものの邪教を仆せ）と、叫んでいるのである。

その手段として、あらゆる運動の方法と、迫害の手が、法然上人の身には今、潮がつつむように寄せつつある

「ああ、どうなることか」

湛空は、いよいよ、身をちぢませた。

「上人は、そも、どんなお気持でおられるだろうか……」その師の法然房の寢所は、高縁を一つ隔てて彼方にあつた。——おや？ と湛空はそう思った時に頭をもたげて、

自分の耳を疑うように眸をすました。

唱念の音が聞えるのである。凜々とした声ではないが、低いうちにも一念の倦くことなき三昧が感じられる念仏の声であつた。

「——誰だろう？」次の瞬間、彼は、われを忘れたように身に法衣をつけ、つうと、縁へ出て行つた。

「上人のお部屋だ……」さまたげてはならないと誠めながらも、彼は、次の間まで忍ぶように入つて行つた。

——何を思い出されて、この深夜に。

近ごろは、めっきりお体もすぐれないのだ。ことにこの冬は、たびたび邪熱を発しては床に臥せられていた有

様である。

湛空が隙間見た燭は白く冴えていた、氷の部屋のようにそこは冷たい、火の気のあるうはずはない。

彼は、次の間に、凍りついたように坐つたまま、師の心を、さまざまに思ひいたわつて、上人が眠らぬうちは、自分もこうしていようと決心した。しんしんと草も木も眠っているこの真夜中に、ただ一人でも、師の房の念仏をどこかで魂に受けとっている者があるとすれば、一塊の炭火ほども、師の心を温かにしはせまいか——と。湛空は、そう考えたので、

「えへん」次の間に、侍側している御弟子がございます——ということを知らせるつもりで、軽く咳をした。

すると、翌日。いつものように大勢の弟子たちの朝礼を受けに出てきた上人は、常になく不機嫌な顔色をして、いった。

「その辺に湛空はおらぬかの、ちよつと呼んでくだされい」

二

湛空は、その朝、師の御房が呼びでございますぞ——と同門の者からいわれて、

「はい、ただ今」答えながら、心のうちで、すぐこう思つた。

さては昨夜の自分の真心を上人もお酌み下すって、何か、ご機嫌の麗しいおことばでもかかるに違いない——

と。

彼はいそいそと、法然の前へ出て行った。そこには隨身の他の弟子たちも大勢いて、上人が何で改まって湛空を呼ばれたのかと、まだ解せない面持ちでいたが、湛空はひそかに得意であつた。

「お召しでございましたか」

「む……」法然の眉は霜のようにちと峻厳であつた、琥珀のように茶色をおびたいつもの眸がじつと湛空の面を射た。

「――昨夜、この法然が、称名しておる折に、近くの室で、咳ばらいをしたのはおもとでござつたの」

「はい、私でございました」

「なにゆえに？」

「は」

「なにゆえに、さようなことをなされたか、申されい」

「……」湛空は、案に相違した師のきびしい語氣に、肩を竦ませたままであつたが、

「……されば」と唾をのんで答えた。

「ゆうべは、臥床の中にあつても、爪も凍るかと思う寒さでござりました。その深夜に、ふと上人の御称名の声を聞きました、勿体なや、あの御齡に――とありがたさにお居間に近づき、四隣は眠り、人はみな知らぬ時刻ではあれど、わたくし一人は、ここにいて聴聞いたしております――侍坐いたしております――さような心持を持って、何氣のう咳ばらいをしたのでございまる」法然は、それを聞くと、近ごろにもいつにもめず

らしい不機嫌で、声を励ましていった。

「湛空一人のみならず、皆もよう聞き候え。この法然が念仏を申すのは、人に聞かそうためではさらさらない。念仏専修の門をひらいて、ここもう幾十年、おもとの修行もすすみて、いつ、この法然が世を去るとも、この吉水に咲いた座行往生の菩提華は散り果てる日もあるまいぞと、常に喜ばしゅう思うていたに、さような心得ちがいの者がまだあると思えば法然は心もとのう存ずる」心から悲しまれているらしい様子なので、弟子たちは皆、肅然と襟を立てて、一人として、師の顔を仰ぎ見る者はなかつた。法然は、ことばを続けて、

「はや、法然も老いの身、ゆうべの寒さも一しお身に沁みた。――が、それにつけわしの思うたのは、かく温かに夜の衾を重ねても堪えられぬ心地のするものを、その昔、法蔵菩薩の御苦勞などはいかばかりであつたらうか。火の中にも幾千劫、水の中にも幾万劫。それも畢竟、誰のために。……誰のために」

つよい語尾だった。打ちふるえていったのである。そういう熱情がどうしてこの老齡な人の舌端から走るだらうかと疑われるくらいであつた。

「衆生行を起し、口に常に仏を称せば、仏はすなわちこれを聞きたもう――。称えあらわす称名の声は、たとえ、誰ひとり聞く者はなくても、仏は、一声一声これを受けたもうのじゃ。念仏は人に聞かすものではない。法然はただ一人で喜びそして満足に思っている。――湛空を初め一同も、他人に聞かそう念仏などと心得ては大

きな誤りでありますぞ」

朝の陽が、上人の背の近くまで映^さしていた、人々はいつまでも、峻^ひ巖に打たれていた。

湛空は、涙をながし、

「不心得を仕りました」手をつかえたまま泣いているのである。

そこへ、弟子の一人が、

「心蓮どのが戻って参りました」と、法然へ告げにきた。

三

「心蓮が？」——これは法然にも他の弟子たちにも意外らしいことであつた。

なぜならば、もう三年前になる。

その心蓮は、この吉水禅房で、ひたすら修行していたが、ある時、師の法然に向つて、突然、お暇を下さいといい出して、この門から自分で出て行つた男である。理由というのは、

（こうして、繁華な都の中に、大勢して念仏門の道場をかまえ、夜も朝も、雑多な、信徒や、様々な心をもつた同門の人々と起き臥しを共にしていたのでは、どうも、ほんとに心を澄まして、一念の称^{しょう}名^{みょう}に入ることができません。こういう修行のしかたは私の考えでは、誤っていると思います。——で、自分だけは、まったく、世俗の塵^{ちり}を絶つた遠い田舎^{いなか}へ参つて、人間の騒音から離れ、清浄孤寂な生活をまもつて、一心三昧^{さんまい}に入つて、道を得

たいとぞんじます、どうか、私を破門して下さいまし）
そういつて、心蓮はここを出て行つたのである。

——それが、忽然^{こつねん}と、またこの門へ歸つてきたというのだ。

人々は、法然が、それに対してなんというであろうかと、推し測るように顔を見ていた。——と、法然は、

「通しなさい」そういつてから、すぐ、

「疲れておるようであつたら、休ませて、粥^{かゆ}など与え、その後でもよいぞよ」しかし、心蓮は、すぐ導かれてそこへ入つてきた。

「お……」なつかしい旧友。

久しく仰ぎ見ない師の房。

この柱、この天井、また庭の樹々——

心蓮は坐ると、瞼^{まぶた}を赤くしてしまった。何かいおうとしたが手をつかえると、それなりしばらく黙つてしまつた。

「心蓮か」

「はい……戻って参りました……。面目もございませぬ」

「よう戻つてこられた」

「穴にでも入りたい心地がいたしますが……。ほかに、心蓮の行く所はございませぬ。やはり、この吉水禅房のほかに、往生の床^{ゆか}はないと、こんどはよく分つて戻つて参りました」

「よい修行をされたとみえる。この三年、お汝^こはどこにおられたぞよ」

「ずっと、都遠く離れて、笠置^{かさぎ}の山里のさる豪家の持つ

ている山の中に、一庵を借りておりました。一日一度、食物を運んでもらうほか、人の顔も見ず、夜も昼も、念仏に送って、まったく世間の音から離れ、草が伸び、木の葉が散るのを見て、月日を知るような生活をしておりました」

「そして、何を得たかの」

「何も得ません。初めの半年ぐらひは、これこそ、念仏行者の道ぞと、澄みきった心のつもりで、行い澄ましておりました、一年経つと、なにかこう自分が空虚うつろのような不安を感じて参りました、二年目には、心がみだれ出し、自然の中の寂じゃく寞まokuさが常に心をおびやかしてききました。——一念無想に念仏をとなえているつもりなのが明けても暮れても、都のことを考え出してきたのです。眼をとじれば、京の灯が見え、耳をふさげば人間の恋しい声が聞えてくる。そして、夢にまで、人間と交わったり、都へ帰った夢ばかり見るのです。……堪まらないほど、私は、口がききたくなりしました。——旧友と、世間の人と、信徒たちと。——すべて初めに厭いとって逃げてきた者がやたら無性むしように慕わしくなり、矢もたても無くなったので、実は、お恥かしい限りですが、夜逃げのように、笠置の奥から舞い戻ってきたのでございます」心蓮の正直な体験の告白を、一同は、興味ふかく、また教えられるところもあって、和なごやかに聞き入っていた。

法然は、もうすっかり、常の柔和な眼ざしに返っている、

「それが分つたのはなによりじゃった。したが、三年は

ちと長うあったの……」と、微笑すらたたえて、さて、侍坐の一同をかえりみて、

「今朝はまことに、おもとたちにとって、尊い朝でござつたの。法然にとつても、うれしい朝——」と、くりかえしていった。

四

往生。それは、往ゆきて生きん、ということであるところでは説くのだ。安樂に眼をねむったり、寂滅じやくめつの終りを意味する言葉ではない。——往きて生きん——往きて生きん——人生へのあくまで高い希望とつよい向上の欲求。それを往生とはいうのである。

吉水の講堂では、きょうも嚴肅げんそうのうちに和なごやかな半日が禅房のひさしに過ぎた。講義をしている上人の声は、肅しゆくとしてゐる奥の方から表まで聞えてくるのだった。あれが齡よわいもすでに七十を出ている老人の声だろうかと疑われるくらいであった。

しかし、その老人から先になって、この浄土門では、（往きて生きん）の理想に専念しているのだ。

また、そのため、

（人間いかに生くべきか）の真理を求め探してやまないのであった。

上人はそれに対して、

（ただ念仏。一にも二にもただ念仏を）と、教えた。ただ念仏のみが、最も前のふたつの人生の欲求を充みたして

くれるものだと言いた。

戸外の春も、一日ごとに、菁々と大地から萌えていたが、この吉水の禪房も、若草のようだった。新しく興り、新しく起ち、すべての旧態の殻から出て、この人間の世に、大きな幸福の光燈をかがげようとする青年のような意気が、七十をこえた法然上人にさえあった。

他の年の若い弟子には勿論、聖覚法印とか、蓮生とか、分別ざかりの人々にも、なお、叡山をはじめ、ほかの歴史あり権威ある旧教の法城が、なんとなく、落莫としてふるわない傾向があるのに、それらの大法団から比べれば、隠者の一草庵にもすぎないこの吉水の禪房が、いつとなく時代の支持をうけ、精神社会の中心かのような形にあるのは、なんとしても不思議な現象といわなければならぬ。

だが、社会はその不思議を正視しようとはしなかった。むしろ、畸形なもの、邪まなものとして、あくまで白眼視するのみか、その成長ぶりを見るに及んでは、（これは捨ておけない）とにわかに、迫害を以て、この浄土門を今のうちに踏み潰してしまおうという形勢にさえあるのだった。

今日も——ようやく講堂のひさしに陽もうすずいて、上人の説法が了り、一同が礼儀を終って、静かに席を散らうとすると、それへ外から息をあえいで戻ってきた一人の弟子が、

「たいへんですぞ、おのおの」眼のいろを変えて、自分を取り囲む人々へ話すのであった。

「慈円僧正が、とうとう天台座主を退かれて、叡山から降りてしまわれたという噂だ」

「え、座主をおやめなされたって？」

「罷めたというよりは、いたたまれなくなって、ついに、自決なすったというほうがあたっているだろう。——何せい、慈円僧正がいなくなつては、いよいよ、これから吉水と叡山とは、うるさいことになるうぞ」

「上人のところへは、まだ、僧正からなんの御消息もないのかしら」

「あるまい、不意なことだ。——そして叡山では、またぞろ、今夜も何度目かの山門の僉議をひらいて、本格的に、吾々の念仏門へ対して、鬭争の備えを立てなおし、一方には、政治問題にして、念仏停止の請願を院へ向つてする企てだと聞いた」

「ふーム、それは容易ならぬことだ」

「吾々も、じつとばかりしていたのでは、ついには、彼らのために、せつかくここまで築いてきた念仏易行の門を、めっちゃめっちゃにされてしまうかも知れぬ」

「上人は、どうお考えになつているのだろうか」

「まだ、何もご存じあるまいと思う。——ひとつ吾々が打ち連れて行つて、お氣持をうかがつてみようではないか」

五

「いや、待ちたまえ」一人が、頭を振った。

「上人は、ああして揺るがぬおすがたはしているが、なにもかも、ご存じあるにちがいない。なまなか、吾々が参つて、顔に血をのぼせたりすることは、かえって、上人にご心配を加えるようなことになる」

「では、叡山のなすままに、吾々は、じつと自滅を待っているのか」

「そもなるまい」若い弟子たちは、なにかささやき合つて、禪房の外へ出て行つた。そして裏の森にかたまつたのは、この不穏な空気を上人に感じさせて、さなきだに近ごろ健康のすぐれない法然に胸を傷ましめまいという師弟の思いやりからであつた。

「どうする？」そこで再び前の問題を評議に上せて、人々は、もう憚るところのない声でいい合つた。

「いったい、叡山の凡衆どもは、何を原因にして、この吉水を、そんなに敵視しているのか」

「知れているじゃないか、嫉妬——ただ嫉妬にすぎないのだ」

「人を救おうという者が。しかも、千年の伝統と、あの巨きな権力をもつ叡山が。——考えられないことだ」

「それは、人間の感情というものを外においてのことで、叡山の者にも、感情はあるから、近年の吉水と、自分たちの蟠踞している叡山と、どっちが社会に支持されているか、較べてみれば、おのずから焦々せずにはおられない」

「卑屈だ」

「もちろん旧教の殻に入っている僧侶などは、卑屈でな

ければ、ああしておられるものじゃない。——彼らはただ、伝来の待遇を無事にうけて、実社会からは、遊離しようとして、なんであろうと、自分たちだけで威張つていたのが願望なのだ。——そういうところへ、新しい教義を称えて、民衆をうごかす者が出てくることは、それだけでもすでに禁物なのだから」

森の木洩れ陽が、若い弟子たちの黒い法衣の肩に斑をうごかしていた、ちらちらと風の戦ぎに光るのだった。

「それさえあるのに」——と他の者が次にいった。

「叡山には、一日ごとに、有力な檀徒や碩学が、みな山を見捨てて去つてゆく。……今朝ほど上人からあんな手

痛いお叱りをうけた二尊院の湛空どのもその一人だ。弁長、念阿、証空、数えきれない人々が、叡山から吉

水へ移つてきている」

「うム」眼がみなうなずき合う。

「中でも、安居院の法印聖覚どの。西塔の名僧といわれた鐘下房の幸西法師。——それから、先ごろ、月輪殿の

ご息女を妻としてごうごうと喧しい取沙汰の中に、毅然として、念仏門の行者の範を垂れている善信どの。

——みな以前は叡山にいた方々で、後に、念仏門へ参られた人たちだ」

「なるほど、そう数えあげてみると、叡山が、嫉妬するのも無理ではないの」

前関白月輪公が、まず第一に指を折られる。次に、大炊御門左大臣、花山院兼雅、野々宮左大臣、兵部卿基親など、殿上の帰依者だけをかぞえても、十

指に余る。

武門の人々では。熊谷直実の蓮生をはじめ、甘糟太郎忠綱、宇都宮頼綱、上野の御家人小四郎隆義、武蔵の住人弥太郎親盛、園田成家、津戸三郎為盛。

また、ことに女性性の檀徒はというと、今までの旧教の經典は、とかく女人を悪魔視していたが、念仏門には、女人のためにも、差別なく、救いの扉をひらかれたものとして、鎌倉の將軍家実朝の母の政子が、遙かに、信仰をよせている他、越前三位の妻小宰相、資賢の娘玉琴、信実の伯母人、三条の小川侍従の姫、花園准后の侍女三河の局、伊豆の走り湯の妙真尼など、ここにも旧教に眺められない特色があった。

六

聖人も俗人も、本来、人間の相というものは一つである。いわんや女人、いわんや悪人、なんの差別がある。むしろ、そういう人々こそ、念仏門は、よろこんで迎え入れ、求法の悩みに答えたい。いかにせば、よくこの先を、人生を、よく往いて生き得るか——共に考えよう、念じよう。

悪人もこい、女人も参り給え。

また、在家の方々よ。従来の聖道自力の僧は、やたらに自分にも行いがたい禁慾を強いる。いたずらに、物絶ちをもつて、清浄とし、形式にばかり囚われて、実はかえって、裏には大きな矛盾を秘しているようなこと

になる。

浄土門の易行道では、そういう似非聖の真似をもっとも嫌う。ありの相のままを清浄とする。

肉もよし、酒もよし。女人を男性が持つ、女人が男性を持つ。これも自然の人間の相のままを尊ぶ。おのずからそこには男女の道というものがある。道を外さぬほどならばよい。

在家の方々よ。それでよろしいのだ。

職業も、他の生活も、そのありのままで、お身たちは立派に「往生」することができ。菩提にいたることができる、聖たることができる。

むずかしいことではないのだ。それには、ただ念仏を仰っしゃればよい。それも、勤めを苦にして称えることはない。思い出したらいうがよい。一日に一遍でも、また、申したくなったら千遍でも、なお万遍でも。

烏帽子打ちが職業であつたら烏帽子を打ちながらいつでもよい、弓師であつたら弓を張りながらいつでもよい、眠りの前にふといいたくなつたら一声でも胸のうちでいつでもよい、茶碗を持つ時、何かおのずから称えなくなつたら箸を持ちつつ胸のうちでつぶやくのも立派な行である。

新しい教門の祖師法然はこういふのであつた。従来の教えとは較べものにならないほど平民主義だ。また、実社会というものを尊重している、人間の生活というものを本義にしている。

法然の教義では、決して、信仰のために、個々の生活

を変更させたり、ゆがめたりはしない。宗教のための社会のようには存在しないで、むしろ、社会のための宗教、社会機能のうちの宗教として、立場を、今までの叡山や他の旧教団体の尊傲な君臨のしかたとはまるで地位をかえて、民衆のうちの僧侶として、門は開かれているのである。

果然。

（これこそは、ほんとの宗教というものだ）

民衆が支持するし、知識階級もうごいてくる。

当然な、新勢力となってきたのである。法然が作ったわけではない。また、法然門人の人々がこしらえた勢力でもない。時代が生んだものである。だが、新しいものが興ることはそれだけずつ、古いものの勢力が侵蝕されることだった。

（仏敵が現れたぞ）と、叡山では見ている。

叡山は、その大きな権力と、自尊心から、度々、これを問題に取りあげて、いわゆる「山門の僉議」をひらいて、

（まず、態度のあいまいな、慈円僧正から先に座主を退いてもらおう）と決議文を作って、挑戦の氣勢としたらしい。

時の叡山の座主は、慈円僧正であった、僧正と月輪禅閣とは肉親である。

その月輪公は、吉水の檀徒のうちでも、最も熱心な念佛の帰依者であるばかりでなく、その息女の玉日姫は元範宴少僧都——今では善信といっている青年僧と結婚

して——大きな社会的問題の波紋を投げている者の妻となっている。その善信も、元は叡山に学び、叡山に奉じていた裏切り者である、それが今では吉水へゆき、法然に参じ、月輪公の智となり、座主の僧正とも、縁につながる者となっている。

（売教徒め！）ここにも、彼らの感情や、憤恨があった。

七

「それで、座主は罷められたわけだな」

「もう鎮撫の道がなく——」

「お苦しい立場だった」森の中に集まった吉水の弟子たちは、話してみればみるほど、

叡山と吉水

こう二つの対立が、複雑であることに気づいた。

「つまり、叡山が騒めいているのは、宗教が問題ではなく、権力の争いを売りかけているのだな」

「その裏に、自尊心だの、嫉妬だの、いろんな感情も潜在して」

「こいつは、どうしても、ぶつからずにいまい、吉水の吾々にしても、黙って見ているのも芸はない、売られる喧嘩なら買ってやる、彼らが、座主を山から追い下ろすなら、われらはその慈円僧正を擁して、飽くまで立つし、彼らが、朝廷へ讒訴するなら、われらも、朝廷へ弁解しても、闘ってやる」

「でも、そんなこと、上人がおゆるしあるまい」

「こういう、うるさいこと、上人のお耳には入れとうないが」

「いずれ、他の信徒の口から、お耳に入らずにはいない」

「おれたちは、おれたちとして、黙ってやるのだ。師へ、ご迷惑や心配をかけないように——」

「そして」

「そしてとは」

「さし当って、どうするのか。これから慈円僧正のいらつしやる青蓮院へでも行って、おれたちの熱意をつけ、お計らいを仰ぐか、それとも——」

「会って下さるまい、僧正は」皆、不安な顔色で、

「むずかしいな」とつぶやいた。

今にも、四明^{しめい}ヶ岳^{だけ}の彼方^{かなた}から吉水の一草庵におおいかぶさってくるように陰悪な風雲を感じながら、さて、（どう対立するか）という問題になると、この若い人々だけの間では、なんの策も考えられなかった。

「そうだ、誰か、このうちの一名が——叡山に明るいのならなお都合がよい、山へのぼって、どんな空気が、つぶさに内偵してきてはどうだ」

「む。——その上でもよい、対策は」

「わしが行こう」と、一人の青年僧がすぐいった。それは、つい一昨年^{おとし}ごろまで、叡山にいた者で、実性^{じつしょう}という若い末弟子だった。

「オ、実性ならば、この役は易い^{やす}ことだろう。ひとりでよいか」

「一人のほうがよい」実性は、気を負って、すぐにも行

くように、起ち上がった。ところへ、

「おい、おまえたち、そんな所へ寄って何をしているか」禅房から出てきた先輩の念阿^{ねんあ}が近づいてきて咎^{とが}めた。

一同は、さあらぬ顔で、

「いえ、べつだん何をしているということもございません」

「黄昏^{たそがれ}ではないか」

「はい」

「禅房のお掃除もある」

「やります」素直に、若い弟子たちは、散らかつて行つた。

しかし、実性だけは、念阿の気がつかない間に、森の奥へ走っていた。そして、叡山の肩に低く垂れている夕雲を仰ぎながら、どこともなく姿をかくしてしまった。

一

眼だけを出して、頭から顔はぐるぐると袈裟で包んでいる。

誰やら分りようもない。手には「入道杖」とよぶ四尺ほどの杖をつき、破れ法衣に高足駄を穿き、

「満山の衆」手で鼻を抑え、声まで変らせて、西塔、東塔、叡山の峰、谷々にある僧院の前へ行つては、厄払いのように、唸鳴つてあるくのであった。

「こよい、山門へ立ち廻られよ。こよい立ち廻られよ」とすると、僧房のうちで、

「もっとももっとも」と答える声がある。

そう聞くと法師はまた、ほかの寺院の前へ行つて、

「——満山の衆、こよい、山門へ立ち廻られよ」と呼ぶ。

（承知）という返事の代りらしい。

「もっとももっとも」と、ここでも同じ答えがする。

これが、叡山名物の、いわゆる「山門の僉議」の布令なのである。

その布令が、きょうも夕方の方のうす暗いところに廻った、四明ヶ岳の雪もすっかり落ちて、春の夜のぬるい夜霧が草むらや笹叢から湯気のように湧いている晩である。

——やがて初更の鐘が合図。

暈をかぶった月が淡くかかっている、月は円くなかった。

「おうい——」

「ほーい」互いに、影を見て呼び合いながら、谷から、沢から、峰の中腹から、思い思いに頂の根本中堂をさして上つてゆく法師たちの影が、まるで猿のように見出される。

集まる場所は、いつでも大講堂の広場ときまっているのだ。

「ほーい」

「おうい」梟のような鼻声を交わしながら、途中から、めいめい、手ごろな石を担いでそこへ群れてくる。そして芝地の露へ、

どすん、どすん、石を抛る。

それが座席である、彼らは、その石のうえに腰を下ろし、入道杖を前に立てて、うんうんと眼を光らし、口をむすんで、燈火もない大講堂の階段を中心ににらまえているのだった。

いつのまにか、そこは、黒、朽葉、鼠色の人影で埋まってしまう。三塔の衆三千がこうして集まると、元は、院の御政治すらうごかしたものである、武力のあった平氏も源氏も、叡山だけは意のままにならなかった。——時勢は刻々と移ってはいくが、しかしまだ、彼らには、そうした自尊心は衰えていない、座主も、この大衆の支持がなくては、その地位を保つことができないのは勿論

であった。

「しーっ」闇の中から、誰かが、やがてこういつて、杖を宙へあげると、大衆は一斉に、皆、左の手で自分の両眼を塞いでいた。

次に、二度めの声がかかると、その手を払った。

見ると、大講堂の階段の上に——広縁の一端に、誰か、一人の法師がのぼっている。頭巾の上から、さらに口も鼻も縛っているので、常々、顔をあわせている者でも、まったく誰であるか見当はつかないのである。

「山門の僉議」の目的は、自分たちの包まない意見も感情もぶちまけて討議するところにあるので、口が禍いになって、後難を恐れては行われない。

——で、こういう作法のもとに、討議が初まるのは、以前からの例であり、問題のなんであるにかかわらず一つの儀式になっていた。

二

「建議」と、大講堂の縁に立った法師は、こうすばらしい豪壮をこめて呶鳴った。

開会の宣言である。

大衆は、石のようにうずくまったまま、人間の河原を作っていた。

「まず——吾々の第一の目的は貫徹した。座主の交送は行われた」壇上の法師は、拳をふり上げて熱弁をふるう。

「心に邪教念仏を信じ、肉親に、多くの念仏帰依者を持

ち、そして、自分はこの叡山の首座にあつて、天台の法燈に、欺瞞の襟をかさねていた慈円僧正は、われわれの輿論に追われていたたまれず、尾を巻いて山を逃げ降りた。——次にわれらの座主として真性僧正を迎えたことを、まずここに祝そう」その語句がきれると、大衆は、海嘯が応えるように、おうつといった。

「だが」と、熱弁の法師は一息こめ、

「——それだけが、先ごろから幾度かひらいたこの山門の僉議の目的ではない。吾々の目ざすものは、吉水の禅房にある、あの邪教の徒を一掃しなければやむものではない」大衆のうちから、

「もつとも、もつとも」無数の声が飛ぶ。

「ふた股者の座主を追つても、吉水の禅門が、相変らず、他宗を誹り、流行り病の念仏をふり撒いて、社会を害することは、すこしも変りがあるまい。——いや、抛っておけば、あの法然房以下、善信、聖覚法印、そのほかの裏切者や、売教徒どもが、いよいよなにをしでかすかわからぬ。かくては、宗祖大師の遺業も、叡山の権威もどこにあるか、世人は疑うだろう、三塔三千の大衆は、木偶かと。いやすでに、そういわれても余儀ないことになっている。——すでに当山の座主たる者までが念仏門にひざまずき、また、当山を捨てて吉水へ走った卑劣な背徳漢も数えあげたら限りがない」壇にある法師は、憑き物でもしたように、時折、拳で空を搏って、

「この現状を、一山の大衆はなんと見らるるか。この趨勢のまま、抛っておいてよいものか。しからずんば一山皆

吉水へ降^{くだ}って、袈裟^{けさ}を脱^だぐか」こう反問的に煽動すると、
「だまれっ」

「いわれなしッ」

「その条^{じょう}、いわれなしッ」ごうごうと大衆は沸いて、

「引^ひっこめ」

「下壇^{げだん}、下壇」と後をもう聞こうとしない。

すると、その法師と入れ代って、また一人の法師が、
ひらりと壇に起った。

「静肅にせられい」老声である、声から察するに、この
法師は叡山でもかなりの長老らしい。

「いたずらに騒いでは、幾度^{いくたび}、会集を催しても、ただ鬱
憤を吐くに過ぎん。益のないことだ。われらは、熟慮し
なければならぬ秋^{とき}にぶつかっているのじゃ」

「わかりきっている」

「——売僧^{まいそう}法然^{ほうねん}ひとりに対して、叡山三塔の者が、かく
ものものしく騒いだとあっては、大人げない。叡山は、
吉水の一団に対して、私憤をもって起ったのではない、
社会の清浄化、社会を毒す悪僧どもを敵として起つので
なければならぬ。社会のために、戦うのでなければいか
ん」

「もつとももつとも」

「肉^{にく}食^{じき}はする、酒はのむ、あまつさえ弟子善信には、妻
帯^{なかつだ}の媒立ちまでしたという売僧^{まいそう}法然^{ほうねん}、口^{くち}賢^{さか}く、女人教化^{きやうけ}
などと申しおるが、その実いかやら、まさしく仏教の
賊、末法の悪魔」

「いかなぞするっ、その法賊を！」一人がさけぶと、大

衆は波のように揺るぎだして、

「売教徒^{ばいきやうと}の僧団を叩きつぶせ！」

「吉水を焼き払え」と、怒号を揚げた。

三

ことばの上の論議や、憤^{いきどお}りをやるだけでは、もう大
衆は納まらない心理になっていた。

「やれやれッ」と、誰かいいだす。

「黒谷^{くろだに}へ襲^よせて行け」

「吉水を葬^{ほうむ}れ」

「売教徒の巢を焼き払え」大講堂の縁には、さらに二人
立ち、三人立ち、七、八名の煽動者^{せんどうしや}がおどり上がって、
激越な口吻^{こうふん}で、

「念仏退治へ」と、指さした。

「待てっ」するとまた、そこへ四、五名が上がって大手
をひろげていう。

「暴力妄動^{もうどう}はよろしくない。かえって、山門の威厳を失
墜することになる。よろしく、合法的に、邪教のうえ
に天譴^{てんけん}をくだすべきであらう」大衆は、波を打って、

「いかなぞする！ 策は」

「いかなぞする！ 手段は」と、吠^ほえたけぶ。
しわがれ声をしばって、老齢らしい弱法師^{よろぼうし}が懸命にい
った。

「上訴^{じようそ}上訴。——われらのうち数名のものが、まず政庁
に赴いて、念仏停止^{ちやうじ}の願文^{がんもん}をさし出し、朝廷へ訴え奉る

が何よりの策じゃ」

論議は、ふた派にわかれ、壇上に立った者が、互いに譲らないで、舌戦を交わし初めたが、それが熱してくると、ついには、一方が一方の者を壇から突き落す、這いあがって行った者はまた、その相手の胸を突く、そして撲る、撲り返す、騒ぎは帰するところがない。

すると、混乱している大衆のうちから、
「こいつ、念仏の廻し者じゃ。吉水の探り者じゃ。逃がすなっ」と、大声でわめき出した者がある。見るとその者は、一人の法師の襟がみをつかんで捻じつけていた。捕われた法師は、三塔の大衆と同じように頭へ袈裟巻をし、入道杖を持っていたが、なにか挙動のうえで見咎められてしまったのであろう、吉水の弟子僧たちと相談して、叡山の動向を見にきていた例の実性という若者であつた。

「おお、こやつは、元叡山におつて、今では吉水の門下で実性とか呼ばれている売僧じゃ」

「さては、法然にいいふくめられわれらの動静を間諜しにうせたな」

「いうまでもない、隠密じゃ」

「どうしてくれよう」

「懲らしめのため、ぶち殺せ」この殺気の中で見つかったのであるから堪らうはずはない。実性は、悲鳴をあげて、逃げかけたが、無数の杖の下に乱打されて、そこへ仆れてしまった。

手を取り足を取り、彼のからだは山門の外へ担ぎ出さ

れた。

首を刎ねて、その首を麓に晒してやろうとする者もあつたが、それではかえって、見せしめにも懲らしめにもならない、よろしく耳を削いで追い返すがよいと多くがいう。大衆はすぐ、実性の両耳を、鋭利な刃物で切り取って笑った。そのうえ、

「それ、好きな念仏でも吠ざけ」と、杖や足蹴に弄んで、彼のからだを血泥にまろばせて抛り出した。

沙門の妻

—

藹やかな五つ衣にくるまれて、前の関白家の深窓に育った新妻も、女の覚悟というものか、嫁いだから後は、いつか草ぶかい岡崎の草庵にも住み馴れていた。

「もうお帰りのころであらうに」玉日は、黄昏れになると、草庵の廂から夕雲をながめて、旅にある良人の上へ、うつとりと心を走せた。

摂津から大和路を巡ってくる——そういったまま飄然と旅に出た良人のことを。

もとより沙門の人に嫁したからには、町家の人や在家の武士や公卿の家庭のような夜ごとのまどいや朝夕のむつまじい日ばかりを彼女も予期してはいなかった。けれど——

「ここにおいで遊ばしたら……」と、燈火をともしにつけ、夕餉の膳に向うにつけ、女らしい哀愁は、当然にうごく。

月輪の実家方からついてきた、たった一人の侍女と、牛車の世話をする牛飼と、弟子の性善坊と覚明と——このせまい草庵にもおよそ七、八名の家族はいるのであるが、夜に入ると、それらの人はめいめいの部屋にこもってしまって、暗い松風の音が海鳴りを思わせるばかり

り淋しかった。

「しっ、盗っ人め！」勝手口の水屋の外でこう大きく召使の誰かが呟鳴った。

馴れぬうちは、そんな声にも、たましいを脅かされた玉日であったが、近ごろは、人里を離れたこの岡崎の住居にも馴れたので、また、裏の松ばやしに棲む狐の類が、納屋の穀物や、流し元の野菜屑を漁りにきたのであらうと思うだけで、かくべつ驚きもしなくなつた。

嫁いで後、新たに建て増した持仏堂と二つのせまい部屋とに、宵の燈火を入れると、彼女はささやかな調度と机のある辺りに坐つて、やはり良人のことを考えているのであつた。

——どこに？

こよいの灯を、良人はどこに見ているのか。そして良人は、自分のことを思うていてくれるかしら、自分がこうして良人を思慕しているように。

「いや」ふと、彼女の寂寥は、落莫と青春の葉をふるい落した林のように悲しみを奏でてくるのであつた。

「良人は、わたしのことなど、わたしの万分の一も思うてはいらっしゃるまい。……ただ念仏を、ただ御仏を、そしてまっしぐらに念々と求めていらっしゃるのは、どうしたら、仏と一体になれるか、それしかないに違いはない。——こんどの旅の思い立ちも、その御修行であるからには」玉日は、女として悲しかった。たえられぬさびしさに身を蝕われる気がする。

よよと、声を打ちあげて泣き伏したい気もしてくるの

である。

だが——その良人をえらび、この運命を作ったのは、誰でもない、自分自身であった。しかも、あらゆる周囲の反対や世間のごうごうと非難するものと闘って、ついに克ち得た恋の冠^{かんむり}ではないか。

ああこの恋の冠。それは、七宝^{しっぽう}の珠玉や金銀のかがやかしいものではなかった、氷柱^{つらら}の簪^{かんざし}と棘^{いばら}の環^わにひとしいものである。

さびしさに嘆く時、かなしむ時、その氷柱や棘は、心を刺す。彼女は、これは自分の心がいたらないために仏が傷^{いた}みを与えるのだと思つた。自分の心のもちようでは、恋の冠は、七宝^{ばんた}万朶の花となつて誇り樂しめる榮耀^{えいよう}でなければならぬはずだと考えた。

「——そうだ、良人が仏と一体な心になるなら、自分も仏と一体にならなければならぬ。良人が偉^{おほ}きくなつてゆくのに、自分が取り残されてはならない」持仏堂の御燈火^{みあかし}の油を見まわつて、彼女は、氷の花のように、美しく冷たくそこへ坐つた。そして、静かに口のうちで念仏をとなえていた。

二

念仏——ただ念仏を。

父は、自分の幼い時から、なにかにつけそう教えた。師の法然もまたいった。良人も、常にそれをいう。

（ただ念仏を）彼女の教養と婦^{おんな}の道は、したがって、

まだ処女^{おとめ}のころから信仰がその根本になつていた。掌^てをあわせ、心を静寂^{しじま}の底に澄ませると、どんな時でも、清々^{すがすが}と、真如^{しんにょ}の月を胸に宿すことができた。

夜が更けてゆくらしい。

この草庵は、玉日と善信と二人の愛の巢であり、また新世帯であると共に、生活は、厳格な寺となんの変りもなかった、朝夕の勤行^{ごんぎょう}はいうまでもなく、夜は学び、朝は早い習慣なのである。

弟子僧たちは、宵のうちは、それぞれ貧しい灯をかかげて、書を読み、経^{きやう}を写し、ひそやかな話し声が洩れていたが、やがて、定めの特時刻がくると、彼女の坐っている持仏堂の外の縁まで来て、

「おやすみなされまし」

「先にやすませて戴きます」と、次々にあいさつをいつて、ほどなく、しいんと、寝しずまつてしまった様子であつた。

——その後は、近くに人家とてはないこの岡崎の一草庵は、ただ松をふく暗い風の声があるばかりで、人々が寝^{しん}についてからは、よけいに寂^{せき}として、かなり離れている白河の水音までが、涼々^{そうそう}と松風にまじつて聞こえてくる。

だが——その松風や水音が、玉日の耳に聞こえる時は、玉日は、口に念仏をとえながら、心はいつのまにか、良人を考えているのであつた。はっと気がついて、（これではならない——）と思つて、一念になろうと努めるのであつたが、努めようとする気持は、かえって、

心をみだしてきて、父のいうような、また師の教えるような、ただ念仏の三昧さんまいにはかえって遠くなってしまう。

（女というものは、どうしてこんなに、情痴じょうちなのであるう）玉日は、自分の心をふかく掘り下げてみて、そこにわれながら浅慮あさはかなさまざまな邪推やらひがみが根を張っているのに気がついた。

口に念仏をとなえていても、その奥底の心からは、（もしや良人は、自分がいやになったので、このまま、帰らないつもりではないかしら）とか、

（旅の先で、誰かまた、お目にうつる女性にょしやうでもあるのではないかしら）とか、それはおよそ、教養のある女性などが持つ邪推ではないと、自分でもいやしめられるような想像までが、頭のすみにのぼって、念仏をみだすのであった。

あさましい。こんなことに悩み、こんな程度の寂しさに堪えられないくらいなら、なぜ自分は、沙門の妻になつたかと、自身を自身で叱ってみても無駄だった。

生命を賭としても——一族の者はおろか、社会の全部に反そむかれても——とあれほどな意志のもとに恋してかかったころの強い自分を今、呼びかえしてみても、なんのこともなかった。

「ああ、お会いしたい」思慕は、身を焦やいてくる。くるしい冷寂れいじゃくな中にある炎の身が彼女であった。

すると——風でもない、狐狸こりとも思えない。誰か、草庵あしおとの外で、蹙音あしおとがする。そして、しきりと戸をたたく者があった。

三

「あつ……」すぐ彼女の胸には、良人が帰ってきたのではないかという狂喜に似たものが走った。しかし、しばらく耳をすましていると、戸をたたく者のことばは、良人の声とは似もつかぬものであった。

それは、なにかに後ろから追われているようなあわただしさで——

「房ぼうのお方！ 房のお方！ わたくしは吉水の者です、上人のお弟子の端につらなる実性じつしやうと申す者です。はやくここをお開けください、お救いください。わたくしは今、殺されかけております」ことばに連れて、戸を打つ音も激しくなった。

性善坊か、覚明が、すぐ起きて行って、そこを開けてやったらしい。がたがたと、なにか表のほうに物音がつづいて、急に草庵のうちに一度消された灯あかりがまた点ともっていた。

「裏方さま」性善坊の声である。

玉日は、声のするほうへ、眼をみはって、

「はい」といった。

「まだ御寝ぎよしなさいませぬか」

「ええ、起きておりました」

「おそれ入りますが、私と覚明とでは、計らいかねるところが起りましたので、ちよっと、お立ち出でを願われますまいか」

「なにが起りましたか」玉日が、持仏堂を立てて行った縁には、性善坊が、紙燭しそくを持って、かがまっているのである。

「今——なにやら表のほうで、物音がしましたが？」

「されば、困った者が、救うてくれと行って、血みどろになって、転げこんできたのでございます」

「えっ、血みどろの人が？」

「おそらく、裏方さまには、ご承知もない者でございますしょうが、吉水の端におる者で、実性と申しますが……」

「それがどうしましたか？」

「叡山へ、隠密に行ったものでござります、物ずきにも」

「なにをさぐりに」

「近ごろ、南都、高雄たかお、そのほか叡山なども、主しゅとなつて、吉水を敵視し、上人以下の念仏門の人々を、どうかして、墮おとし入いれてやろうという企くわだてがあることは、専ら世上の風説にもあるところでございます。——それを案じて、吉水の学僧たちの若い人たちが実性に命じて、叡山の様子を密偵みつていしにやったとみえまする」

「ま……」玉日は、動悸どうきをおぼえたように、そっと胸を抱えた。

「で——実性は忠実に、幾日かを、叡山にかくれておるうち、ちょうど今宵、大講堂の山門の僉議せんぎがひらかれたので、山法師の群れにまぎれ込み、その評定ひょうじょうの様子を見聞きしていたところ、誰からともなく、あれは吉水の人間だと看破されたために気のあらう法師たちに取り囲まれ、半死半生の目に遭って、足腰も立たないほどにさ

れた身を、からくも、ここまで逃げのびてきたのだと申すのです。——すぐ吉水へ帰るにも、今申したとおり、ひどい怪我けがをしておるので、歩めもせず、上人のお目にふれれば、必ずお叱りをうけるにちがいないというて、その辺りにまごついていっているうちに、また山法師の目にかかったら、今度は命も危ないゆえ、体の癒いえるまで、どうかこの草庵の物置のうちでもよいから匿かくまつてくれい——と、かようにいうのでございまするが」

草庵には今、師の善信ぜんしんが留守ではあるし、そういう複雑な事情の者を入れることは、自分たちだけの考えではできないので、どうしたものかと、性善坊は裏方へ計るのであった。けれど、玉月にも、

「さあ……」と考えたきり、にわかに、その処置をこうせいといいつけることも迷わせられた。

四

迷ってはいたものの、

（人の一命）と考えると、玉日は、捨てておかない気がして、

「どこにおりますか、その者は」

「血にまみれておりますゆえ、輦くるま小舎こやへ入れました」

「行ってみましょう」

「ええご自身で？」性善坊は、それまでには及ばないという顔を示したが、彼女はもう先へ歩いていった。

牛部屋の隣である、そこには糸毛輦いとげのくるまが雨にかからな

いように困いのうちへ入れてあった。

近づいて行くと、呻きが聞こえた、怪我人の実性は、むしろの上に横たわって、苦悶しているらしかった。

「ああ裏方さま」側に黙然と付いていた覚明が、彼女のすがたを見てこうつぶやいた。

性善坊のかざす紙燭の下に、実性の傷の程度を眺めて、彼女は眉をひそめた。

（助かるかしら）すぐそう思われるほどの重傷なのである。片脚の足首は柘榴のように割れているし、顔の半分は樽みたいに腫れあがっているのだった。

「神酒を持ってきてください。それから、薬、布——」

彼女は、そういうと、もう事情とか、この草庵の立場とか、そんな前後のことなど考えていられなかった。覚明は、ためらって、

「さ、酒はあるか」と性善坊へ計っている。

「あろうも知れぬが……」

「いそいで下さい」玉日に急かれて、

「はい」と納屋へ駈けて行った。

やがて、それらの品が来ると、彼女は、性善坊や覚明さえ手の下しかねるほどな不気味な傷口を洗ってやった、足や腕や、数カ所の繃帯をも、懇ろに巻いて与えた。

そして、夜具を運ばせ、

「薬湯を煎じてやったがよい。朝になったら、粥なりと与えて」

と、細々、手当をいいつけて出て行った。

やや人心地のついた実性は、それが、裏方の君であったと後で聞かされて、

「勿体ない」と、わら蒲団のうちで、合掌していた。

気が落着くと、彼は一時、その輦小舎のうでスヤスヤ眠ったらしいが、夜が明けてから覚明が粥を持って行ってやると、充血した眼をにぶく開いて、

「粥？ ……粥ですか……いりません、食べられません」顔を振っていい張るのである、それでも無理に食べさせようとすると、彼は、大熱のあるらしい乾いた唇からさけんだ。

「……駄目です、いただいても無駄です、私はもう助からない、死がそこに見えている」うわ言のようにいって、かたく眼を閉じたと思うと、その眼から一しずく涙のようなもの流して、

「——この草庵の主、善信御房はまだ旅からお帰りになりませんか。わたしは、善信御房にお会いして、告げなければならぬことがあるんです。……おう、おう、吉水禅房はどうなりましょう……。このままに、手をこまねいていたら、叡山や南都の法敵のために、上人のお身も気づかわれます。せっかく、築きあげてきた浄土門の寂土は、あいつらのために、踏みあらされてしまうに決まっている……。私は、善信御房にひと目会って、私がさぐってきた叡山の様子をお告げしたい……。それから死にたいのです……。善信御房は、まだお帰りになりませんか」

五

一人の侍女は、勝手元で朝餉の後の水仕事をしている。

玉日は、持仏堂や、居室の掃除を、日課としている。

また、良人のものの濯衣なども、すべて馴れないながら自分の手することに努めていた。

ゆうべ、実性の傷口の手当をしてやった折に、彼女は朝になって、自分の小袖が血しおでよれてゐるのに気づいた。それを脱ぎかえて、草庵の裏の川へ、洗い物をしに出たのである。

吉田の岡から白河へ落ちてゆくその流れも、冬のうちは氷が張りつめていて、なにをするにも、手の切れるような冷たさであったが、もう水も温んで、春の樹洩れ陽は衣を洗う彼女の白い手に傷々しくなくこぼれている。

小袖についていた血の汚染は、はやい瀬の水に淡い脂をひろげてすぐ消えて行った。

「今朝は、どんな容態であろうか」彼女は、今も、怪我人の生命がふと気がかりになっていた。——それと共に、社会の浄土化を願う以外に使命のないはずである僧門の同士が、こういう生々しい鮮血をながして、争わなければならぬ理由がわからなかった。

僧門のうちだけは、すくなくとも、鬭争や陥穽の実社会とはちがって、淨く、氣高く、和氣藹々として生活の楽しめる世界であらう——と彼女は善信に嫁ぐ日まで信

じていたのである。

嫁いだ翌日から、その想像は裏切られ、僧門の世界も社会の一部でしかないことを、彼女は、事ごとに見せつけられてきた。それを悲しんでいれば、毎日が悲しみでなければならぬほどに——

だが、つらつら考えてみると、自分自身ですら、決して、新妻でありまた菩薩であることはできにくいことであつた。嫉妬——ひがみ——情痴——さまざまものを持った世間なみの妻でしかあり得ないのである。

「どうして、人間というものは、こういう悩み争いに、この楽しめる世を楽しまずに、血みどろに暮さねばならないのか」そんなことを考えながら、流れに濯いだ衣をしぼっていると、その向う側の道を誰か歩いてくるらしい跽音なのである。

「女」そう呼ばれて、彼女は初めて、顔を上げた。

明らかに、それは叡山の法師たちに違ひないのである、特徴のある法衣の裾を短かに着、手に薙刀をかかえている、二人づれで、川の向う側に突っ立っているのだ。

「なんぞ、御用事か」玉日が答えると、二人の法師は、彼女のそういった言葉や身ごなしに、ただならぬ氣品を感じたものであらう、ちよつと、口をつぐんで、じつとこつちを見直している。

「……………」二人はなにか囁いていた。

おそらく、玉日の面ざしから、広い京都にも稀れな美を射られて、惑ったり、考え直したりしているものと見える、ぶしつけに、いきなり「女」と呼んだことを狼狽

しているふうにも取れる。

しばらくして、法師の一方が、
「あいや」といい直した。

「失礼でござるが、おんもとは、九条家から善信御房へ嫁がれた玉日姫でおわすか」

「はい……」やはりそうだった、というように法師二人はまた、顔を見あわせてなにか笑っていた。

六

いやしい声が向うでひびく。笑っている前歯が唇から飛び出し、その法師が何を語っているかが、川のこなたにいる彼女にもわかる気がする。

それきり言葉をかけられないのを幸いに、玉日も川向うを見なかった。洗い物はもうすんでいた。絞ってはやく草庵へもどらう。

丸木橋はずっと下流でなければならぬのに、どこを越えてきたらうか、しかもいつの間にかと思うような速さで、その法師二人は、大薙刀に陽の光を刎ね返して、小脇に持ち、

「裏方——」こんどは彼女のすぐ背後へ来ていうのだった。

「ゆうべ……いや明け方かも知れんな。この附近、傷を負った学僧が一名、歩み迷ってはいなかったか。——まだ生若い末輩じゃよ。ご存じないかの」

「ぞんじませぬ」

「知らん？」鼻を鳴らすように一人はつぶやいて、
「じゃあ、執拗くはうかがうまい、そのかわり、あれなる草庵へちよつと案内を頼む」

「どうなされますか」

「そこの納屋、床下など、ちよつと探させてもらうのじゃ」

「折悪しゅう、ただ今、主人の御房は旅に出て不在でござりますし、さような若僧も見かけませぬゆえ、どうぞ御無用になされませ」

「裏方、そう仰っしゃられると、吾らはよけいに邪推をまわしたくなる。主人の御房が留守であろうと、在そうと、それはおのずから別問題じゃ。実をいえば、その附近へ逃げこんだに違いないその傷負いというのは、裏方とはご縁の浅くない吉水禅房の末輩で、法然房が叡山へ謀者に放った人間なのじゃ」

「……」玉日が、歩みかけると、喋舌っていたその法師は、先へ廻って、薙刀の柄をわざと横に構え、
「お手間はとらせまい」と、いった。

玉日は、貴族的な高い気位を知らぬ間に眉にも態度にもあらわしていた。下司を見くだす眸でじっと二人を凝視した。

「ははは、お怒りか」黄色い歯がまた飛出す。だが、法師の一人は絶えずうさんくさそうに草庵の方を見るのである。玉日は、是非の判断なくいいきってしまった言葉のてまえ、その狡智な眼が怖くもあり、なんとしても防がなければならぬ気持ちに駆られた。

「半分実をいって、半分いわずにおいては、なにやら胸つかえがしてならん。事のついでになにもかも吐いてお聞かせするがの、裏方」

顔を近づけてきて唾まじりにいうではないか。玉日は、忌わしさに、体がふるえた。息までが臭い気のする作法知らずの山法師である。

「その傷負いの男、名は実性というのじゃ。山門の僉議を盗み聞きしている折を看破する者あつて、半死半生にしてくれたが、後で、一山の大衆がいうには、あのまま逃がしたるこそ残念、生け擒っておいたなら、朝廷へ上訴の折には、よい生き証拠であるものと——後から出た智恵じゃ、それから手分けとなつて、谷間谷間麓から白河のあたり、隈なくたずねて来たのでござるよ。

——すると、仏神のおみちびきといおうか、誰か、川の下流へうっすら血のような物を洗いながした者がある。来てみると、おんもとがここにおられた。……はは、まさか血しおを洗われたのではあるまい。したが、一応は吾らにその謎を明白にしてもらわにやらん。さもなくば、足もつかれたところ、草庵のご縁先で白湯なりと一服いただこうか——」

七

朝の清掃が済むと、性善坊は六条まで行く用事があるといつて、後をたのんで出ていった。

輦小屋の中の実性は、まだすやすやと昏睡に墜ちてい

る。

その隣の牛小舎は空で、陽がいっぱい射しこみ、牛は遠いほうで草を喰んでいた。

（——牛のかわりに、この中へ入っていたら、暢気であろうな。おれのように、なかなか雑念も煩惱も捨てられない奴は、それがいちばん解脱の近道かも知れないぞ）

太夫房覚明は、牛小屋の外に積んである干し草のうえに坐りこんで寝足らない顔を陽なたに曝していた。

いつの間にか後ろへ寄りかかって、覚明は、居眠っていた。まるで子どものように他愛ないのである。

この男も、善信（親鸞）を師と仰いであら、もう年久しい。善信自身が、ここに落着きを得るまでは、ほとんど席の暖まる間はなかったし、他からの迫害に迫られなければ、自身の悩みと求道のため、波瀾から波瀾へ年月を送ってきたので、弟子たちとこうして静かな草庵の陽を守ることきょうまでなかったといつてよい。

でも、行きはぐれても、離れても、いつのまにか、性善坊と、この覚明のふたりだけは、善信のそばへ戻ってきていた。——もっとも今は、その善信は旅に出ていて留守ではあるが。

牛が、のどかに啼く——覚明は、ゆうべの思わぬ怪我人の世話をやいて、ろくに眠られなかったせいであらう、唇から涎をこぼしている、いかにも、快げに居眠っているのだ。

壮年時代には、進士覚明といわれて、その学才は都に聞こえ渡っていたし、木曾殿が兵を挙げた時には、一方

の侍大将として、平家の武者を心から寒からしめたほど豪勇な人物であったが、こうして見ていると、まるでその当時の猛々しさなどは、影にも見えない。

自分ではいつまでも、

（まだいかん、まだ脱けきらん）と、しきりに常々いつているが、この居眠り顔は、いかにも生ける羅漢であった、菩提の光がうしろに映しているかのようだった。

ばたばたと跫音がしたので彼は眼をあげた、洩そうにその眼を横に向け、なんとはなく驚いて立ち上がったのである。

「覚明さん、はやく来てください」誰か呼ぶ——そして跫音はまた、小屋の蔭へあわただしく消えてゆく。

「なんじゃ」覚明は、駈けて行つた。

すぐその眼に映つたのは、草庵の裏にある川べりで、二人の大法師が、薙刀をかかえ込み、裏方の玉日を取り巻いて、なにか穏やかならぬ暴言を吐いている様子。

覚明の大きな体が、あんなにも軽捷なるかと思われるほど、その行動は迅かった。

「——あ痛っ」法師の一人は、撲られた横顔をかかえ、よろめきつつ、

「何をするかっ」いうまに、覚明の手は、もう一人の襟がみへ伸び、

「こうする」ひき寄せて、腰帶をつかむと共に、ぶんと振廻して大地へたたきつけた。

輦を焼く

—

三月初旬の朝である。

京都六角堂の精舎から、かがやかしい顔いろを持って、春かぜの吹く巷へ出てきた旅の沙門がある。

「ああ」太陽を仰いで、いかにも自己の生命を抱きしめるように、足を止め、やがて礼拝していた。

善信（親鸞）であった。

冬から春まで、旅のあいだを、着どおしに汚れている僧衣——うすい法衣——旅づつみ——誰が知ろう、この人が、嫉視と羨望の的になって世を騒がせた月輪の九条殿の法師聲であらうとは。

そして、まだ結婚して間のない新妻の玉日を、独り草庵の孤閨に残して、旅に出ている人であらうとは。

——で、巷の往来の者は、彼とすれちがっても、（や、昔の範宴少納言が）とも、

（吉水の緋空が行く）とも気のつく者はない。

善信もまた、わき見もしないで歩いてゆく。さすがに、彼も、この京都の地を踏んでは、岡崎の家がなつかしいのであろう、新妻の笑顔にも早く接したいのであろう、加茂川にそって、白河のほうへ行くのである。

しかし、この京都へ戻ってきて彼がすぐ訪れたのは、

その草庵でも、新妻のそばでもなかった。

ゆうべ、おととい、先おととい。——こう三日三晩を彼が送っている所は、六角堂の精舎であつた。

河内の磯長の里の叡福寺にある聖徳太子の御廟へ参ることに、この六角堂へ籠つて、心ゆくまで、感謝と、礼念をささげ、また、過去の追想からしずかに将来を考えてみたいということが、そもそも、こんどの旅の目的であつたから——。

太子廟は、聖徳太子が、かつて自分の惨憺たる迷いと苦悩のある時代に、

——汝の命根まさに十余歳。という夢中の告示をうけた青春の遺跡であつた。

あの時、あの転機がなかったなら、きょうの自分はなにものであつた。どうして、今のこの輝かしい生命があるろう。

また、京都の六角堂は、その精舎へ、叡山から百夜のあいだ、求道に燃え、死ぬか生きるかの悲壮なちかいを立てて通つた床である。

ここにも、如意輪観世音の有縁の恩が浅くない、さまざまな思い出が多い——

そうした半生の闇から彼は今ぬけ出した心地である。聖道門から易行門へ。そして、恋は成つて玉日との結婚へ。

「ああ」善信は、思わず胸がふくらむ。——自分ほど今、祝福されている人間があるだろうか。

だが——ひとみを拭つて、都の巷を見てゆくと、な

んと、ここには皆、暗い顔や、迷いのある影や、屈託の多い俯向き顔や、せかせかと物に追われているすがたや——およそ貧相な人間ばかりが多いことだろう。

物に富んでいても、心の貧しい——いわゆる貧相な人々のことである。善信は、自分の幸福をかえりみて、「そうだ、自分の満足だけに酔つてはいられない。——自分の幸福は、頒けなければならぬものだ。そして、世間の人がみな自分のような幸福を感じた時に、初めて自分も真から幸福になつたといえるのだ。それまでは、小さな自己満足でしかない。——そんな小我の満足をきようまで求めてきたのではなかった」

白河を過ぎると、いつか、右手の丘に岡崎の松ばやしが見えていた。善信は、久しぶりに帰る家と妻を見るまえに、自分の心をきびしく叱っていた。

二

「あつ、お師さまが」

「師の御房がお帰りなされた」草庵のうちにこの声が起ると、なぜかこの春の日を寂として沈んでいた空気が、いちどに爛漫と明るくなった。

わけでも、その中で誰よりも、深刻なよろこびを、無表情に似た表情のうちにつつんでいる人が、裏方の玉日であることはいうまでもない。

旅すがたのまま、いちど持仏堂へ入り、やがて、静かに出てきた善信は、自分のまえに額ずいて、無事な帰り

を祝う法弟たちに向つて、

「留守中、御仏のおまもり、忝けなく思います」といった。

なにか、ずきんと胸の傷むように顔いろが、皆の面を横ぎつた。

しかし、誰も口を切る者はなかった。——師の善信の旅の垢によれた姿を仰いでも、そういう気持になれなかった。

その旅の衣をぬぎ、やがて善信はひさしぶりに自分の一室に落着いた。

「よう、お寢れもなく」玉日は、この良人を、どうして慰めようか、自分の女としての真心をあらわすのに苦しんだ。

「そうかの」善信は、自分の頬を手でそつと撫でて、和やかに笑つた。

「もう、この頬には、どんな苦難が襲つてきても、病のほかは、寢れさすことはできなからう。そういう自信が近ごろできてきた」

「うれしいことでございます」

「そなたは」

「さ……」玉日は自分の心に問うてみて、留守中の自分にそんな信念がなかったことに気がついた。この先もまだ、なかなか危ない気がするのである。

「わたくしは、瘦せたでしょうか」

「そうのう」

「瘦せたかもわかりません、ほんの少し……」善信は笑

つた。

さすがに、新妻のすがた——やわらかい姿態——女のおいというようなものが、善信の旅にすがれた眸を、しみじみ、見入らせるのであった。

——この女なくば、自分は。と、ひそかに思う。

（どうなったか）と回顧するのである。

青年時代の何ものをも烈々と焼くか突き貫さずにはおかない情熱と、その時代を久しくつつんでいた真つ黒な懷疑と、当然、それから行きはぐれてしまふ所だった青春と求道のわかれ道に——もしこの女が心になかったら——あるいはついに、

（虚無）の二字を宙に書いて、人生の絶望か、人生への絶縁かに、一気に墜ちて行つたかも知からない。

打つても、打つても、血の出るほど叩いても、ついに開かれなかった過去の聖道門から、一転、法然上人の易行の道へ行つたあの機縁も、

（もし、この女がなくば）と思わずにいられないことが彼にはある。

なにもかもが、明朗に、こうして今の一つの生活のうちに解けて、生に法悦を感じられる功力は、あの六角堂の参籠や、安居院の聖覚法印のみちびきのほかに、まさしくこの女の功力もある。

「自分にとって、妻こそは、如意輪観世音菩薩である」——そう善信は、心のうちでつぶやきをもらしていた。

と。何かその時、草庵の外に、騒がしい跽音がし、下等な悪たれが聞えた。

「会わせろつ」と、戸外おもての声は吠えているのである。

「——いいや、そんなお座なりの応対に、欺瞞ぎまんされて立ち帰るような吾々ではない。こう見えても叡山えいざんの大衆だいしゆを代表して出向いておるのだぞ。善信をこれに出せつ」それに対して、

「ただ今、師の御房は、旅先にあつてこの草庵にはおりませぬ」と、ひたすら陳弁ちんべんに努めているのは、性善坊であるらしい。

しかし、戸口かどぐちに騒さわめいている四、五人の荒法師たちは、頑然がんぜんと肩をいからせて、

「だまれつ、なんど同じことをくりかえさせるのだ。そんな甘手あまてにのつて戻るような使者つかいか使者でないか、よう眼で見ろつ。貴様の云い訳は、きのうまでは通用したが、きようはもうその手では吾々を追い返せぬぞ」一人の怒号がやむと、また一人が、

「たしかに善信は今朝あたり立ち帰つておるはずだ。白河ですがたを見たという者がある」

「出せつ、どうしても顔を出さぬとあれば、踏み込んで会うがどうじゃ」いちいちその声は手にとるように奥へ響いてくる。

妻が、はつとしたように、眸をすくめているのを見て、善信は訊たずねた。

「あの訪れは、誰か」玉日は、自分の罪でもあるよう

に、

「——おゆるし下さいませ。お留守中の不行届ふゆきとどきから、あのように叡山の衆を怒らせたのでございます」

「どうして？」

「実は、かようでございます」怪我人けがにんの実性じつしやうを匿かくつてやったことから、その翌る日、彼を捕えにきた叡山の者を、太夫房覚明がひどく懲らして追い返したために、山門の荒法師たちが、それ以来毎日のようにああして狼藉ろうぜきに来るのですと、彼女は良人の前に詫びて話した。

「実性」と、善信は口のうちでいって、

「——その実性とは、あの吉水の上人のもとに仕えている若い学生がくしやうかの」

「はい、そのようでございます」

「今はどこにおる」

「亡くなりました」

「え。——この草庵で」

「皆の者が、手をつくしてやったかいものう、二日ほどの大熱に、昏々こんこんと、うわ言をいいながら」善信が沈黙して、ふと眉を曇らせたのは、その無意味な犠牲者に対して、心を傷いためたばかりでなく、師上人しやうにんの身に、やがての禍わざわいがなんとなく予感されていたからであった。

叡山や、高雄や、南都の反念はんねん仏宗ぶつしやうのものが、こぞつて法然を誹謗ひぼうし、吉水の瓦解を工作し、打倒念仏の呪詛じゆそが、一日ごとに昂あがつていっているという取り沙汰は、善信も旅のあいだに、眼にも見、耳にも聞いていたことであった。だが、そういう反動は、いつか来るものと、これは自

分よりも師の上人がよう知っておられる。

元より善信も、あえて、巷の風評に、にわかな驚きはしなかった。——けれど、今、戸外に唼鳴っている法師たちの悪罵あくばには、時こそよけれど、いい機会をつかまえて襲よせてきたらしい気色けしきが濃厚である。

(……困ったことを) 誰のことよりも先に、彼は、師の上人への禍いを気づかうのであった。

静かに立ち上って、

「わしが会おう」歩み出してゆく良人を見て、玉日は顔いろを失った。覚明に懲こらされて復讐ふしうに來た山門の法師たちのいかに獐どう猛もうであるかを知っているからである。

四

「あっ……覚明」彼女は思わず、彼方かなたの部屋へむかつていった。

「——覚明っ、お止めしてください。お師さまが」太夫房覚明は、この事件を大事にした発頭ほつとう人と皆から叱しかられていたのである。そのために、彼は、叡山しんから報復しかえしに來る者があっても、一切顔を出すなといわれ、一間ひとまのうちに、恐縮して首をすくめていたのだ。

——きょうもその相手が來た。

さっきからがangan唼鳴おもてっている戸外おもての声を、彼もそこで聞いていたのである。腕がうずくくらいなものだ。彼としては、飛び出して行って、自己の鉄腕ですっぱり解決してしまいたいことは山々だったが、これ以上争い

に油をかけることは、裏方の心を傷いためるだけでもよくないと感じと我慢していたところなのだ。

そこへ——

「覚明、お止めして」と、玉日の声が聞えたので、「あっ」何かと驚きながら板縁を駈け出してゆくと、師の善信が、出あいがしらに、奥の一室を出てきたのであった。

「しばらく」覚明はひざまずいて、善信のたもとをとらえた。

「——私が追ひ返します、大事なおからだをもって、あのような乱暴一てん張りの荒法師に、お会い遊ばすことは要いりませぬ」玉日も、おののきながら、良人の足もとへ來て止めた。

「どうぞ、性善坊と覚明のふたりに、おまかせおきくださいませ……。もしお怪我けがでもなされては」しかし、静かに、善信は微笑した。

「おことらこそ、さわがしい。わしが会うのは、相手の知識や人物を計ってではない、ただ、いささかのゆき違いがあっても、お師の上人にかかわること。人まかせには致し難い。——案じるな」踏みしめてゆく跽音は荒くないが、背には信念と、つよい性格が見えるのである。止めて止まる人でないことを覚明は知っているので、そのまま、不安そうな眼を光らして板縁に坐りこんでいた。

——すでにその時は、応対に出ている性善坊も持てあましていた時だった。五、六名の荒法師は、例の大難刀おとなぎなたを搔かい込んだのや、大太刀を横たえたのが、ごうごうと

唳鳴るだけでは足りないで、性善坊の腕くびをつかみ、一人は今にも、草庵の板の間へ、土足を踏みかけて中へ躍ろうとしていたところ。

「お。……これは」と、落着きはらった主人の姿をその咄嗟に見たので、

「やっ、出てうせたか」法師たちは、一応身を退き、その殺伐を好む眼ざしを一斉に彼へあつめて、

「嘘つきめ」

「いるではないかつ」

「なぜはやく面を見せんかつ」いわしておいて、善信はその間に円座をとり寄せ、入口のわきの広床へ、客の敷物もめいめいに配らせて、

「上がられい」と、慇懃であり、あくまで物静かである。

そういう作法や鄭重は、暴客たちにはかえって苦手である。赤いまばら髻の中から、熊鷹のような眼をひからせている大法師が、拳を振って、善信の冷静を打ち碎いた。

「馬鹿っ、ふざけるなつ。さような悠長な話で来た吾々ではない、事は、山門の体面にかかわるほど重大なのだ。おぬしの首をもらうかも知らない。ここで、罪状を申し聞かすから答弁してみい」

五

暴客の暴言を浴びながら、善信はその前に神妙に坐っていた。

「耳のない顔するなつ」荒法師たちは、あまりに反射のない彼の態度に、こう鬼面をもって脅しつけながら、
「——よいか善信。これから申すことに一々答弁が立たん時は、この小屋をぶっ潰し、汝の首を薙刀の先に梟けて、山門のみやげに持ち帰るぞつ」

「………」微笑を見せて、善信はうなずくのであった。
「第一には——」と、荒法師のひとり、山麓できたえ、た声に底力をこめて云いだした。

「わが聖域たる叡山のうちへ、密偵を入れこみたる理由はいかん」

「………」

「第二には——その密偵、実性なる下司、山門の僉議を盗み聞き、世上へ怪しからぬ風説を流布いたしたる罪状はいかん」

「………」

「第三には、山門法師の者、それについて、この草庵へかけあいに関与したるを、門輩の暴僧を出して、腕力をもつて打擲したる理由はいかん」

「………」

「以上三つ、なんとあるかつ、善信房」

「………」

「無言でおるは、一言の申しひらきもないという表示か。しからば、約束どおり、この小屋を踏みつぶし、そちの素首をたたき落して持ち帰るぞ」すでに一人は土足を板縁にかけ、一人は善信の腕くびをつかんで、外へ引きずり出そうとする。

「何をするツ——」うしろへ来て、猛虎のように師のからだを警戒していた覚明は、たまらなくなつて、突つ立つた。

「——控えいっ」善信の声は、その覚明へ向つて投げられたのである。

「今、仰せ承^{うけたまわ}る三つのこと。すべて、善信としていい開きもない落度です。いかようと召さるがよい。：誰も、手出しの儀はなりませぬぞ」

「おう、よくいっつた」引き下ろされて、善信のからだは、草庵の外へ転んで落ちた。

顔いろも失わない善信であつた。

すぐ大地へ坐り直して、彼らの兇暴な腕力の下に体を与えてなんの惜しみもおののきもない容子^{ようす}なのである。

「どうしてくれよう」今となつて、多少のためらいを感じているもののように、一人がつぶやくと、

「——斬れっ、勿論、斬るのだッ」一人が、薙刀の柄^えを持ち直して、鐔^{つば}を鳴らした。

「いや、斬らせんっ」覚明は、師の善信が叱咤^{しっただ}することばに耳をかさないで、板縁から飛び降りた。そして彼らと善信のあいだに、諸手^{もろて}をひろげて、

「悪僧どもっ、三つの答えは、おれがしてやる。さあ来いっ」善信はうしろに在つて、その態^{てい}を悲しむように、覚明を叱りつけた。しかし、覚明は肯^きかないのである。

「——地獄にも堕^だちろ、師の破門も忌^{いと}わぬ。このために数珠^{ずず}を断^たつて、外道^{げどう}へ落ちるともやむを得ん。魔^まに対しては、降魔^{ごうま}の剣、邪^{よこしま}に対しては破邪^{こがし}の拳、まごまごす

ると、おのれらの素っ首から先に申しうけるぞっ」

六

薪^{まき}に油である、覚明の投げたことばは、山法師たちの顔を、すべて火にさせた。

「吐^ほざいたな、広言^{こうげん}を」

「いつぞや、山門の者を、手痛い目にあわせた下手人^{げしゅにん}も、こいつであろう」

「こやつから先に成敗^{せいばい}してしまえっ」吠^ほえ合うと、一人が、

「かくのごとく」と、いきなり薙刀^{なぎなた}を舞わせ、覚明の頭蓋骨^{ずがいこつ}を横に狙^あつて、ぶんと払^はつてきた。

「児戯^{じぎ}。何するものぞっ」覚明は身を沈め、宙を切つて行く薙刀の柄をのぞんで手をのばした。ぐっとつかんで自分の脇の下へかかえ込むと、

「ウヌ」彼の二つの眼は、そのむかし木曾軍の猛将と呼ばれたころのものにかえつて、顔から飛び出すような光を發した。

はっ——と相手が竦^{すく}んだせつなに、薙刀はもう覚明の手に持ち直されていたのである。覚明は、それを斜めに振りかむると、敵のことばを真似^{まね}て、

「かくのごとくにかっ」と、呶^な鳴った。善信が、

「待てっ」と、止めた声も、相手の山法師たちが、「あっ」と怯^{ひる}んで後ろへ退^ひがった行動も、弦^{つる}にかけられた覚明の勢いには効^きき目がなかつた。

——異様なものがギャツという音と共に破裂した、赤い泥をぶつけたような脳漿の血しぶきだった。

——同時に一箇の胴体は地ひびきを打って仆れていった。

「や、やりおったなッ」

「おう、阿修羅が今、地獄を現じて見せてやる。地獄もまた、わいらのような似非法師の性を懲らすためには、この世に現じる必要がある」三振り。四振り。彼の渾身からは湧きあがる憤りをこめて薙刀を舞わすと、山法師たちは、それに当り難いことを自覚したのか、それとも、最初からとても手出しはしまいと見縊って来たのが案外な反撃を食って、急に怯みだしたのか、

「忘れるなよ」

「その広言を」

「後日来るぞ——。それまで、その死骸は、あずけておくぞ」こう云い捨てて、わらわら、後も見ずに逃げ去った。

「卑怯っ」覚明は、満足しない。

「返せつ、この死骸、持って失せろっ」呼びかけながら、一町ほど追いかけて行った。

しかし、逃げ足の早い敵を、遠く見失うと、彼もまた、一時の激発から醒めて立ちどまった。そして、血しおのついている薙刀——手——法衣の袂を——急に浅ましい顔をしてながめた。

「あ……たいへんなことをしてしまった」

覚明は、自分の行為に、戦慄をおぼえた。いや、この

結果として自分のうける罪の裁きよりは——師の善信にかかる禍いを考えて、

（しまった……）と、心で叫ばないではいられなかった。

そう気がつくのと、一時も、手にしていられない気持ちで、彼は血によれた薙刀を、草むらへ抛り捨てた。そして、草庵のほうへ戻りかけたが、急に、何か戻るのが怖ろしくなると、少年のように、樹蔭にかくれて、しばらく彼方の様子を窺っていた。

七

覚明はその時、叱られる子が、怖い親の姿を見たように、はつと、眸をすくめた。

「……なんといいってお詫びしよう」頭がそれでいっぱいになっていた。

——彼方から師の善信はこっちへ歩んでくるのだった。いつになく恐い顔を持って。

「……」覚明は樹蔭に息をころしていたが、師のすがたが、立ちどまって、怒っている濃い眉毛に、一抹の憂いをたたえ、その眼を、あなたこなたへやりながら、いかにも心配らしく、自分の姿を探しているらしい様子なのをながめると、堪らなくなると、

「師の御房……不埒者の覚明はここにおりました」走り出て、その前へ、ぺたっと両手をつかえた。善信は、眼を落して、

「むむ……」なんともいいようのない感情をその顔に燃

やした。

憎んでいいのか、いたわっていいのか、善信は自分もまた余りにこの覚明と近い感情の持主であるがゆえになんともいう言葉がなかった。

——だが、自分たち師弟は、一に仏の僕であつて、どういふ場合の裁きも、小さな我見であつてはならない、御仏の旨をもつて、自分も裁き、人も裁くのでなければならぬ。

閉じていた善信の眸は、やがて、静かにみひらいた。

「覚明……。お身は二十年の精進と徳行とを一瞬に無に歸してしまわれたの。千日刈った萱を、一時の憤懣に焼いてしまわれた——」

「お師様つ。この愚鈍な男を、どうぞ、打って下さい。踏みにじつて、お怒りをおなだめ下さいまし」

「打ちすえてくれと？」

「はい……。さもなくば、ここの樹に私を荒縄で縛り付けて、叡山の狼どもに、この体を与えて下さい」

「……もう遅い」善信は、自分の胸が痛むように、熱い息をついていった。

「なぜ一瞬間に、それへ気づいてくれなかったか。今となって、おことの肉体を縛って贅となそうとも、わしが足蹴にかけて叱ろうと、それが叡山へ対してなんの効いがあるう、吉水の上人に向つてなんのおわびとなろう。……ただわしという者と、お身という者との感情を一時しのぎになだめてみるに過ぎないことだ」

「……」覚明はその逞しい肩を大地へ埋め込むよう

に、顔を俯伏せたまま、声をあげて哭いた。

「——さらばじゃ」師の声に、彼は、泣き濡れた顔をふりあげて、

「あつ、では……。ではこのまま、再びお側には」善信は答えなかった。

破門——師のうしろ姿は、無言の宣言をいいわたしてゐるかに見える。

その破門をうけようと、地獄へ墜ちようと、覚悟のうでで敢てしたことであつたが、覚明は悲しまずにはいられなかった。

「……そうだ」われにかえると、彼は、こうして自分が師の草庵の近くにゐることは、よけいに師を苦しませるものだと思つた。——悄然と、覚明の姿は、やがて岡崎の松林を去つて、いずこへともなく落ちて行つた。

八

「——弟子の未熟はいうまでもなく師の未熟。覚明の犯した大殺の科は、申すまでもなくこの善信の犯せる罪に相違ないのです。……なんの貌あつて、弥陀本尊のまえに、私は安坐しておられましょう」善信は、その持仏堂を閉じこめて、自身へ責めをうけていた。

「——思うに、まだ私の生活や私の行が仏のみこころに莞爾として受け容れていただくほどになつていないためと存じます、今日の出来事も、妻を娶り、法悦に甘えて、懈怠を生じた私の心へ、答をお与え下さつたもの

と考えます」あたりが暗くなっても、彼はそこを出なかつた。彼の心が今、暗澹と責められているように、壇にも燈明が点っていない。

「おゆるし下さい。覚明の罪をいや私の科を。——同時に吉水の上人のおん身にこの禍いの暴風雨がつかく当りませぬよう。——吹かばこの身へ、降らばこの身へ、何事もこの善信へ、百難百苦を降させたまえ」——祈るうちに、その暴風雨というほどではないが、かなり強い風が、草庵の廂を翔けていた。

起つて——善信は消えていた燈明へ灯を点じた。どこからともなく吹き入る風に揺れて、小さな火の舌は焼くものを求めるように白く狂つた。

その灯を見つめて、善信はふと、自身の身のまわりに、いつの間にか、自分の生命を生かす必要以上なものが蓄えられているのに気づいた。

自分の若い生命は、たしかに、異性というものに結びついて、一つの安定を得てはいるが、その形が、これらの生活に、複雑を生み、贅に安んじ、懶惰になつてゆき易いことを、彼はひそかに怖れていた。

現在の安定が、もしそういう人間の墮ち入り易い病弊の産褥のようなものであつたら、安定は、やがて次の苦悩の芽をかくしている苗床に他ならない。——善信は、慄然とした。

覚明や、その他の弟子たちの気持も、いつのまにか、自分のこういう生活の形に影響されて、変つてゐるのじやないか。ひとつの逆境時代——苦難時代というものを

通り越して、ほんと、陽なたの春を楽しむような人間の気持のたるみというものは、誰にもある、自分にすらある。

「そうだ」黙つて、善信は外へ出た。

風はあるが、星月夜だった。彼は、牛小屋の隣に眠っている小者をよび起して、

「彼方へ、輦を曳け」といいつけた。

牛方の小者は、ふいに、善信がどこへ外出するのかと驚きの目をみはつた。いわるるままに、輦を遠くへ曳き出し、次に、牛を解こうとすると、

「牛をつけるには及ばぬ」善信は、持仏堂の御燈明から紙燭へ灯をうつして再び出てきた。そして、その灯を、絢爛な糸毛輦のすだれの裾へ置いた。

この輦は、昨年の秋、彼と玉日とが婚儀をあげるについで、月輪の九条家が新調した華美を極めたものである。——ある日は、新郎新婦が、その裡に乗つて、岡崎から吉水までの大路を牛飼に曳かせ、都の人々から嫉妬の石を雨のようにぶつけられたその輦でもあつた。

「……あつ。師の房様が、輦をッ、輦を焼かしやる」牛飼の者は、彼方の小さい火が、やがて、真つ赤な一団の炎となつたのを見て、草庵の中へ向つて、大声でわめいていた。

九

みな驚いて戸外へ出てきた。

昼の事件が、誰の頭にもあったので、すぐ、「すわっ」と感じたのは、叡山の者が復讐に來たということであつた。

ところが、牛飼の者は、

「師の房様が、氣でも狂わしやうか、輦くるまを、ご自分の手で、あのように焼いておしまいなされた」と、舌をふるわせていうのである。

まことに、誰が見ても、怪しむほかない善信の姿だつた。彼が放つた火は、もう消すにも消しようのない大きな焰ほのおのかたまりとなつて、炎々と、妖あやしい火の粉を星月夜へ噴きあげている。

黙然もくねんと、その火を、善信はすこし離れた所に立つて見惚みとれているのだ。——照らされている白い顔が、微笑すらうかべているように見える。

「なんで」

「どうなされましたか」

「師の御房——」口々にいいながら、性善坊やその他の人たちが、彼のそばへ、驚きの顔をあつめてきた。そして、焰と、師の顔いろを、肅然と見くらべた。

「芥あぐたを焼いているだけのことじゃ」善信のことばは、一丈もある焰のかたまりに対して、水のように冷静だつた。

「——こういう物に、ふたたび乗る善信でないゆえに。また、この草庵に無用な雑物は、念仏の邪さまたげとなるゆえに。——なお、きょうの出来事すべて、この身の落度と思うにつけ、自戒のためにも、こうするのじゃ」人々

は、首を垂れていた。

すると、その人たちのあいだから、侍女かしずきに手つたわせて、見事な衣裳や女の道具を、惜し気もなく、焰のうちへ投げ込む者があつた。

見ると、裏方の玉日なのである。その調度の品々は、みな彼女が、生家の九条家からほんの手廻りの物として運んできた婚礼道具であつた。

「……むむ」善信の唇は、それを眺めて、なんともいえないうれしさを綻ほころばした。

——それでこそわが妻。と、心のうちでいつているように、また、この焰こそ、夫婦の心を、一つに熔とかす真実の鉢こうろ炉であると見入るように、さばさばとした顔をあくまで紅蓮ぐれんに向けていた。

輦くるまを焼いたので、牛は牛小屋から解かれ、牛飼と共に、翌る日、九条家へ歸された。玉日は、たった一人の侍女かしずきもそれにつけて、実家さと方かたへもどした。

さて、その他の弟子たちへも、善信は、思う仔細があればといつて、暇いとまを出した。絶縁というわけではないので、性善坊も、師の氣持を察して、旅に出た。——めいめいも、行く先を求めて、岡崎を離れた。

草庵は、二人だけになった。——急に無住のようなさびしさにつつまれた。

「こうして待とう」善信は、妻へいった。玉日もうなずいた。

待つとは——いうまでもなく、叡山の者の報復しかえしである。あのまま黙っている山門の大衆だいしゅではない。あれから数日、

音沙汰のないのは、むしろ大挙して襲ってくる陰悪な雲の相を思わせるものがある。

（襲たらば？ ——）というようなことも、その時の覚悟なども、善信は一切、妻にいつていなかった。けれど、玉日の容子を見るに、朝な朝な、身ぎれいに、いつでも死ねる支度は心に行っているらしくあった。

風やまず

—

不気味なほど、比叡の一山は、このところ静かな沈黙を守っている。

どんな形をもつて、再度の報復に出てくるかと思つたが、岡崎の草庵へも、あれなりなんの行動も起してこないのである。

——だが、それをもつて、叡山が、山門の僉議の決議を変更し、対念仏門の考え方を好転したかと見るのは早計で、事実はかえつて、いっそう陰悪の度を加えていたのだつた。

山にも、智者がいる。

「岡崎のごときは、法敵の中核ではない。敵の中樞は、吉水ではないか。吉水こそ、念仏門の本城なのだ。したがって、吉水さえ打つ仆してしまえば、後は、岡崎の善信だろうが、何だろうが、みな支離滅裂となつて、社会へ何の力も持たなくなるのは知れきっている」こう、智者は説いて——

「それを、一草庵の岡崎へなど、度々出向いて、争うなどとは、愚の骨頂だ。聞けば、善信夫婦は、あの後、草庵の法弟にみな暇を出し、自分たちの什器から輦まで焼いて、吾々の成敗の手を心静かに待っておるらしい様

子とか——そういう覚悟の者へ、物々しい返報は、かえて、こちらが大人げなく、世上のわらい草となり、念仏打倒の輿論を邪げることとなろう。ただ、吉水を仆せばよいのだ。吉水を仆せば、岡崎などは、そのついでに自滅する。もうくだらぬ暇つぶしはやめて、目的へ邁進することこそ肝要である」

「善哉——」この説は、山の者を風靡した。そこで彼らは、

「下山ろうぞ」と、日を謀し合った。下山ろう——とは彼らの仲間にだけつかわれる合言葉であつて、

(やろうぞ)という示威運動の掛声にも通じる。

座主にも、それを止めるほどの、力はなかった。

彼らは、すぐ、日吉山王三社の神輿を出して磨き立てた。

一山三千の大列のまえに、三社の神輿をかついで、京へ下りる時には、どんな者でも、その前を遮らせなかった。山法師の強訴といえ、弓矢も道を避けたものである。

準備はできた。朝廷へ捧げるための——「念仏停止奏請」の訴文も認めて、いよいよ明日は大衆が山を練り出そうと息まいてる日であつた。「おいっ、中堂から布令だ」と、呶鳴って廻る者があつた。

「集まれ」と、誰いうとなく、山上の根本中堂へ人々は駈けて行く。

大講堂には、もう、人が蟬集していた。明日、担いで

下山するばかりに用意のできている三社の神輿は飾られてあつた。

「吉水は、降伏してきたぞ。うわさを聞いて、縮みあがつたのだらう、かくの通り、法然上人以下、門弟百九十余名、連名をもつて、叡山へ謝罪文を送ってきた。今、それを読みあげるから、静かにして聞かれい」

一人の山法師は、大講堂の縁に立って、吉水から法然上人以下百九十余名の名をもつて送ってきたという誓文を、朗々と、高声で読み初めた。

二

近ごろは健康もすぐれず、吉水禅房の一室に閉じこもつて、めつたに庭先の土も踏まない法然であつたが、彼にはなにもかも分つていた。

(捨てておけない)と感じたのが、つい二、三日前のことであつた。

「信空、筆を執つて賜も」高弟の法蓮房信空が、

「はっ、何事を」

「わしの申すままを」と、法然はしばらく眼を閉じていたが、やがて——

敬ッテ当寺住持三寶

護法前神ノ宝前二投ズ

と低い声で、口述し初めた。

信空は、上人の唇から、糸を吐くように出る文言をそのまま筆写して行つた。かなり長文であつた。

「……しばらく」と、信空は、上人の息もつかせない口述を待ってもらって、そつと懷紙を出して、涙を拭いた。写してゆくうちに涙が出て、ともすると、紙の上へ落涙しそうになるのだった。咏^{こよ}えても、咏^{こよ}えても、泣かずにいられない言葉なのであった。

それは、上人が、叡山の大衆に対して、誤解をとくために送ろうとするものであった。言々、血涙の声だった。ひたすらに、自己を責め、自己の不徳のいたすところであると上人はいつている。同時に、念仏門の真意は決して、とかくに臆測され、疑われ、邪視されているようなものではなく、浄土の行^{ぎやう}のほかには何らの他意のないことも縷々として述べている。

なお、他に、七箇条の起請文^{きしようもん}を書かせて、翌る日、「火急のことあり、禅房までお越し候え」と、門下のすべての者へ、使いをやつて、告げた。

「何事」と、朝から、続々と、禅房の門には人々が集まつてきた。

上人は、前の日、認め^{したた}めさせた起請文を一同へ示して、「法然と同心の者は、これへ、連判^{れんぱん}なされたい」といった。ある者は、一読して、

「これは叡山に対する降伏状にひとしいものではないか」と蔭へ来て、無念そうな唇を噛んだ。ある者は、また、「あまりなご謙讓だ」と、壁の隅へ来て、落涙するものもあった。

七箇条の誓文と、叡山へ送る一文には、法敵を責めている論争は一つもない。ただもう自己の謹慎^{きんしん}を述べて、

彼の疑いを一掃しようとするものであった。人々が、残念がるのもむりはなかった。けれど、それも上人の氣持とあればぜびがない、順々に、門弟たちは署名して行った。

そして、三日のあいだに、百九十名がそれに書かれたのである。岡崎の草庵から駈けつけた善信も、もちろん、そのうちに連判していた。

それが叡山に届けられ、大講堂で今日読み上げられたのである。

山門の大衆は（われ勝てり）と凱歌をあげ、「ざまを見ろ」と、降伏者を見下すように、誇りきった。

三

激昂^{げいこう}していた大衆は、すっかり溜飲^{りゅういん}を下げて、

「頭を下げ、手をついて、降伏した者を、この上、踏みにじつてもしかたがあるまい」と、「念仏停止^{ちやうじ}」の奏請運動は、せっかく、山王権現の神輿^{みこし}まで磨いたところであつたが、

（沙汰止み——）ということになってしまった。

その後、安居院^{あごいん}の法印聖覚^{しょうかく}が、個人として、山へのぼってきて、

「一山の人に話したい」と、熱心に、遊説^{ゆうざい}して廻った。

要するに、こういう紛争が起るのも、仏教に対する解釈のまちがいである、認識不足が因^{もと}である。——という法印の考えから、

(聖道門と、浄土門) という演題を引っさげて、仏徒に對して、仏教の初學にひとしいことを、教育しに登ったのである。山の者は、

「あいつも、今では、吉水の高足とかなんとかいわれ、世間は彼のことを、

四海の唱導師

一元の能説

とか称めたたえて、ひどく偉い者あつかいにしているが、いったい、どんなことをいうのか一つ聴いてやろう」と、悪くすれば揶揄するつもりで、法印の立ち寄る寺へぞろぞろと腕ぐみして集まつてきた。

聖覚法印は、吉水と叡山との小さい事件や、感情には触れないで、ただ熱心に、道の真諦を説くだけだった。

「——どなたも、すでにご存じのあるように、生死の惑いをのがれ、仏道の安心立命に至る道に、二つの道があります。その一つの方法を聖道門といい、その一つの方法を浄土門というのでありますが、目的とするところは、いずれも、この娑婆世界にあつて、行を立て、功を積み、今生の証をとろうと励むことにあるのは、二道、方法のちがいはあつても、目ざす所に変りはないのでございます」 嚙んでふくめるように、法印聖覚の話はやさしいのである。

「そこで、浄土門というのは、どういう方法に依つて、往生を願うかというのと、それにも二すじの道が分れていて、一は諸行往生といい、二には念仏往生といっています。諸行往生というのは、あるいは父母につかえ、

あるいは師や主につかえ、菩薩の行をとつて凡身の淨化を念じるものであり、また、念仏往生と申すのは、行は、依つて興るものゆえ、第二義といたして、なによりはただ、念仏をとなえよ、一にも二にも念仏をもつて、仏の本願へ行き迫るべしと、かように教えているものでござる。——かるがゆえに、吉水の上人が説きさとし給うところに従えば、いかなる職業の態にも、貴賤のすがたにけじめなく、ありのままに、いるがままの生活の形にても、仏の御手は、本願へ導き給うぞかしと、仰せられるので、いと易い道であるがゆえに、道俗の男女は、旱天に雨露をうけたように、ここへ息づきを求めてくるのであります」と説き、そして、

「——あえて、私どもは、この教義をもつて、旧教の聖道門へ対立するとか、または、勢力を植えるとか、そんな考えでは毛頭ないのです。大体、私どもの念願は、僧侶に向つて教えたり、僧侶に対して僧侶の勢力を示すとか、そんな目的では少しもなく、私たちの目標は、する物なく、現世を悲観し、虚無に落ちている不愍な民衆に、光を与えてやろうという所にあるのでございます。——ただただあわれな民衆と弥陀の手をつないでやろうとするのが本願なので、どうか、この辺をよくご諒解ねがいたいものだと思ひます、同時に、叡山としても、今の社会に對して、もっと、大きな慈悲の眼をもつて、働きかけていただきたいと、衷心からお願ひ申すわけがあります」

四

聖覚法印の遊説は、効果があつたらしい。

山門は、わりあい、彼の、

(浄土門とはどんな教えか) という講演に、好感をもつたようであった。

先には、七箇条の誓文と、法然の謙讓な文書が来ているし、その後から、法印聖覚が、こうして山を説いてあるいたので、叡山の感情は、非常にやわらいできたように見えた。

すくなくとも、表面だけは。

だが、風は——波は——依然としてやんではない。

果然。吉水の教壇へ向って、巨弾を放ってきた第二の法敵があらわれた。

高雄^{たかおとがのお} 梅尾^{みづのすえ}の明慧上人である。この上人は、そこらにざらにあるいわゆる碩学^{せきがく}とは断じてちがう。満身精神の人だった。学問の深さも並ぶ者がまずあるまいという人物だ。

(梅尾の上人がこういった) といえ、その一言^{いちごん}は、思想界をうごかす力があつた。

しかも、明慧は、めったに言論を弄^{もてあそ}ぶような人ではなかった。自重して、深く晩節を持ち、権力とか、名聞^{みやうもん}とか、そんなことに軽々しくうごく人でも決してない。

ところが——その明慧^{みょうえ}が、奮然^{しゅんぜん}、起ち上って、吉水へ挑戦したのである。その峻猛^{しゅんもう}の意気を世に示したものが、

が、

「摧邪輪^{さいじゃりん}」三卷

「摧邪輪莊嚴記^{さいじゃりんしょうごんき}」一卷

こう二つの著であつた。

「——読んだか、梅尾^{とがのお}の上人の著書を」

「うむ、見た」

「全文、熱烈な念仏批判の文字だ。念仏門の教義も、あれには木ッ葉微塵^{みじん}に説破されてしまった形だ。——空谷^{くうこく}の天^{てん} 颺^{よう}というのは、ああいう文章のことではないか。何しろ、痛烈にやったものだ」

「吉水も、こんどは参つたろう。梅尾の上人の人格と、学識の前には、いやでも念仏の声をひそめてしまわずにはいられない」世評^{ちまた}は、たちまち、これを問題にとりあげて、さらに巷へ拡大した。

あまり評判がたかいので、吉水の学僧たちも、ひそかに「摧邪輪」を手に入れて、かくれて読む者が多かった。そして読んだものは必ず、

「——はてな」と、今まで信念していた念仏門の教義に疑いを抱いて、信仰の根本に、動揺を感じ出した。

それほど、明慧の学説には、確乎とした仏教精神がこもっていたし、また、整然とした理論と、的確な考証をも併せて持っていた。

権力や、伝統や、自己の位置を擁護するために、ただ暴圧的に、吉水を押しつぶそうと試みる叡山などの反撃とは、それはまるで比較にならない真摯^{しんし}な反駁^{はんぱく}であつた。「痛手だ。なんといつても、これは吉水の教団にとって

は、致命的な打撃だろう」と、人々はいい合った。

事実、明慧上人のこの獅子吼があらわれてから、吉水禅房の内部にも、かすかな信仰の揺るぎが萌^{きざ}してきた。その証拠には、法然の講義を聴く学僧たちが、このところ、めっきり数が減ってきたのでもわかるし、また、在家の信徒の訪れは、目立って少なくなってきたことは争えない。

五

たとえまだ吉水へ残っている学僧たちでも、表面は平静を装っているものの、内心では、みな多少の懷疑を持っているらしく、

「一体、^{とがのお}梅尾の明慧の論は、念仏門のどこがいけないというのだろうか」寄るとさわると、それが話の中心になって、やはり氣にかけているふうだった。

「いうまでもなく師の法然上人のお書きになった、^{せんじやくほんがねんぶつしゅう}選択本願念仏集の中にある教理をつかまえて、それを^{はんばく}反駁しているのが、明慧の^{さいじやりん}摧邪輪なのじゃないか」

「それは分っているが、双方の信念のちがう点は」

「それは明慧が、幾カ所も指摘しているが、最もちがうところは、吉水の教理では、念仏をもって往生の第一義としておるが、明慧は^{ほつぱだいしん}発菩提心をもって仏者の要諦^{ようたい}としている」

「つまり、念仏か、菩提か。——という議論だな」
「議論などを明慧はしていないのだ。——^{ほつぱだいしん}発菩提心、往

生安楽国——という見地から、法然上人の^{せんじやく}選択本願念仏集を真つ向から粉碎している口吻^{こうふん}で、念仏門の邪見十六条というものをかぞえあげている」と、その学僧は、眼をつむって、暗記している明慧の著書のうちのことはをそら読みに読みはじめた。

——夫^ソレ、仏日没スト雖^{イェド}モ、余^ヨ輝^キ未ダ隠^{カク}レズ、
法^{ホウ}水^{スイ}乾^{ケン}クト雖^{イェン}モ、遺^イ潤^{ジュン}ナオ存^{ソン}セリ。吾^オ等^{トウ}、之^{コレ}ニヨリ
テ毒^{ドク}醉^{サイ}ヲサマシ、之^{アニ}ニヨリテ覺^{カク}芽^ガヲ萌^{モウ}ス。豈^{アニ}、幸^{サイワイ}
ニアラズヤ。

然^ナリト雖^{イェン}モ、愚^オ子^シ狂^{キヤウ}子^シ、稀^キレニ良^{リヤウ}薬^{ヤク}ヲウケテ嘗^ナメ
ズ、何^{ナニ}ゾソノ拙^{ツタナ}キヤ。爰^コニ近代^{ゲンダイ}、一^{イツ}聖^{セイ}人^{ニン}アリ、一
卷^{ワン}ノ書^{ショ}ヲ作^{サク}リ、名^{ナツ}ケテ、「^{センジヤクホンガンネンブツしゅう}選択本願念仏集」トイ
ウ。経^{キヤウ}論^{ロン}ニ迷^{メイ}惑^{カク}シテ諸^{シヨ}人^{ニン}ヲ欺^キ誑^{キョウ}シ、往^{オウ}生^{シヨウ}ノ行^{キョウ}ヲ以^イ
テ宗^{シュウ}トナスツイエドモ、却^{キョク}ツテ、往^{オウ}生^{シヨウ}ノ行^{キョウ}ヲ妨^{ボウ}碍^{ガイ}
セリ。

^{コウベン}高^{コウ}弁^{ベン}、年^{ネン}来^{ライ}聖^{セイ}人^{ニン}ニ深^{シン}キ信^{シン}仰^{イダ}ヲ懷^キキ、聞^{キコ}ユルトコ
ロノ邪^{ジャ}見^{ケン}ハ、在^{ザイ}家^カノ男^{ナン}女^{ニョ}等^{トウ}、聖^{セイ}人^{ニン}ノ高^{コウ}名^{メイ}ヲカリテ
妄^{モウ}説^{ゼイ}スルトコロト思^{オモ}イ居^イタリ。コノ故^{コノ}ニマダ以^イテ
言^{ゴン}モ聖^{セイ}人^{ニン}ヲ誹^ヒ謗^{ボウ}セズ。然^{シカ}ルニ近^{キン}日^{ニツ}、コノ「^{センジヤクしゅう}選択集」
ヲ披^ヒ閲^{エツ}スルニ、悲^ヒ嘆^{タン}甚^シダ深^{シン}シ。名^{メイ}ヲ聞^{キコ}キシ初^{ハツ}メハ、
聖^{セイ}人^{ニン}ノ妙^{ミョウ}ヲ礼^{レイ}サントヨロコビ、卷^{クワン}ヲ披^ヒクノ今^{イマ}ハ
恨^{ヘン}ム、念^{ネン}仏^{ブツ}ゾ真^{シン}宗^{シュウ}ヲ黷^{ドク}セシコトヲ。

今^{イマ}ツマビラカニ知^チリヌ、在^{ザイ}家^カ、出^{シュツ}家^カ、千^{セン}万^{マン}門^{モン}流^{リウ}ノ
起^キストコロノ種^{シュウ}々^{ゾウ}ノ邪^{ジャ}見^{ケン}ハ、ミナコノ書^{ショ}ヨリ起^キルト
イウ事^{コト}ヲ。

「——こう書き出してあって、総じて、選択集には、十

六の過あやまちがあるといっている。——第一は、菩提心をもって往生極樂きやうらくの行ぎやうとしないこと。第二は、弥陀みだの本願うちの中に菩提心なしということ。第三は、菩提心をもって小利とするの過あやまち——第四は、菩提心は念仏を抑えるという過あやまち——等、等、等」

「むずかしいな」

「どっちがほんとだか、読んでいても、実は、吾々には分らなくなる」

「いったい、菩提心ぼだいしんというのはなんだろう」

「明慧は、こう説わいている——

菩提心トハ何ゾ。

曰ク、向上ノ心即チ是ナリ。菩提、訳シテ覺かくトイウ。仏果一切ノ智々ナリ。コノ智々ノ上ニ起ス衆生ノ希望心ニテアルナリ。コノ故ニ、仏道ヲ修メ、往生ヲ願ウモノ、如何いかんゾコノ心ナクシテ可かナランヤ」

「——なるほど、そう聞くと、人間が安心を得たいために、仏教に耳を傾ける発心のはじめは、やはり菩提心が先だろうな」

「けれど、吾々の教えをうけている法然上人の仰せには、菩提心も仏果の助けにはなるが、頼みにはならぬと仰っしゃるのだ。ただ念仏こそ、真の安心へ導くものだとか々仰っしゃっている」

六

明慧上人の駁論はくろんを読んだ者は、また必ず、もういちど

法然上人の選せん択やくし集しゅうを読んで、両方の教理を比較してみた。その結果、

「これは念仏門に止とどめを刺したな」と、観る者が多かった。

いつの世でも、新しく勃興はつこうするものには、必ずこういう痛撃が出るし、受け身になるものよりは、駁撃はくげきするほうへ痛快がるのが、言論の世界の通有性である。かなりの識者のうちでも、

「やったな」

「愉快だよ」そういうことがよろこばれるものだ。

まして、叡山の大衆、南都の大衆などは、手を打って、「これで、念仏も黙った」と、明慧説を、絶対に支持した。

——なるほど、吉水禅房は、その一時の隆盛ぶりから見ると、表面いちじるしく衰弱したように見える。しかし、そこを訪れた者は当の法然上人を初め、高足たちが、意外に泰然として、しかもすこしも明慧説を陰で誹謗ひぼうするようなこともなく、その信仰にも、毛ほどな揺るぎも見せないことを、むしろ奇異に思うくらいであった。

いや、人出入りや、房の学僧などの数こそ、ひとところよりは減ったが、残った人々のあいだには、外部の迫害に対して、かえって、いっそうその結束と信仰のつよさを固めてきた風さえあった。

念仏か、菩提心か。

そんな問題や、

聖道しょうどうか、易行いぎやうか。

というようなことは、もうこの人々には初学であった。今さら、そんなことに疑義を持っている者は、上人の高足たちの間には、一人もいないといってよい。

もっと、もっと、この人々の研究心は、深い所へ根を下ろしていた。――外部の迫害とか、非難とか、教義の揚足とりなどはよそに、自己のうちに、論敵を求め、自己のうちに真理をつかもうとして、焦心り合っているくらい、それは、すさまじい魂の磨き合いを見せていた。

岡崎の草庵から、善信も、度々そこへ通っていた。そして、いつも火の出るような議論の中へ彼もつかまるのだった。

――ちようどその日は、高足の聖信房湛空だの、勢観房源智だの、念仏房念阿など初め、そのほか多くの人たちが来て集まっていた。

ふと、善信が、そこへ姿を見せたのである。

すると湛空が、

「才才よい折に」と、早速、

「善信御房、あなたならば、はっきりしたお考えをお持ちにちがいないからうかがうが――」と、質問し出すのである。

「実はただ今、これに集まっている人々の間で、いったい、信仰というものは、人に依って変りのあるものか、変りのないものか。つまり信仰は何か異か――という問題が出たのですが、あなたは、どうお考えになられるのか」

「さよう」善信は一同のあいだへ静かに座をとって、よ

ほど激論のあったらしい一同の熱した顔いろの跡をながめていた。湛空は、膝をつめよせ、

「たとえば、吾々は、ひとしく浄土に生きんという理想をもっている。けれど、凡夫の吾々と師の上人とは、信心の誠というものがどうしても異うはずです。――そうしてみると、われらは、いつになつたら師の上人のような心境になつて、真の安心が得られるだろうかと思つたくなる。――生れつきの愚鈍や凡夫では生涯かかつてもないにほんとの往生極楽の味はわからずにしまうのじゃないかと思うのです。……で、議論になつたわけじゃ……：信仰は万人一か異のあるものか。変か不変か……：問題なんです」

七

「いかがです、善信御房」

「されば」善信は、居ずまいを直し、

「私の考えを述べます」はっきり答え出したので、同席の人々は、みな善信の眉へ視線を向けた。善信の眼には、彼のここまで研ぎぬいてきた信心が、こつて眸となつているように耀いていた。

「信心に、二つはありません。唯一なものです。人に依つて、その誠にも変りがあると仰せられるのは、古い考え方です。聖道門の人たちのいった言葉が、まだあなたがたにどこかこびりついているせいでありませんよう」

こう彼が、確信をもつていいきると、一同の顔いろに、

ちよつと白けたものが流れて、唾^わのように、黙り合つた。彼に、問題を提出して、問題の解決に努めていた湛空は、

（これは意外なことを聞く）といったように、ちよつと啞然^{あぜん}としているし、念仏房念阿も、勢観房源智も、その他のほとんどといていい大勢が、

（もつてのほかな説）と、明らかに、反対な眸をして、善信の眉を見つめ合つた。

「では、承るが——」と、湛空はその人たちの意見を代表して、詰問^{きつもん}するように、

「——善信御房は、そういうお考えとすると、御自身の信心も、師の上人の信心も、同じである、一つである、少しも異^{ちがい}はないと仰せられるのか」

「そうです」

「ちと、僭越^{せんえつ}なおことばと存ずるが」

「なぜですか」

「年齢と申し、体験といい、また学問の程度と、あらゆることにおいて、師の上人と、まだ三十歳を出たばかりの御房とは」

「ちがいません」

「はて強情な。——しからば、この湛空の信心と、あなたでは」

「なんの異るところもない。信心は一です」

「どうして」

「今さら申すまでもないことと私は思う。ひとたび、他力信心のおさとしをうけてから、私は、そんな問題に今

日まで迷っていたことはありません。そのいわれは、師の上人の信心も他力によって身に持ち給うもの。また、この善信の信心も、他力によって持つところのもの。

——どこにこの両者にちがいがありましよう。否、師と弟子のみではなく、他力門の信心は、すべて一つであつて、異^{ちがい}があつてはならぬものと思うのです」だが、善信がいっただけでは、皆屈しなかった。やむなく、法然の前へ出て、一同は、この解決を求めた。

すると法然は、こういった。

「人により、信心に異^{ちがい}があると観るのは、自力の信心のことをいうのじゃ。智慧とか、身分とか、男女^{なんによ}の差とか、そういうものを根本^{もと}にして考えるから、信心もまた、智慧、境遇などに依つて、差のあるもののように考えられてくる。——しかし、念仏門の他力の信心というものは、善惡^{ぜんなく}の凡夫、みな等しく、仏のかたより給わる信心であつて、みずからの智慧や境遇の力に依つてつかみとる信心ではないのでござる。——ゆえに、法然が信心も、善信が信心も変りはないはず。信心にvarietyありと考えておわす方々は、この法然が参る浄土へは、手をとりのうても、よも共々参り給うことはかのうまいに……。ようもいちど考えてみられい。いつも一つこと繰り返すようでござるが、もいちどこでも申そう。念仏は絶対他力の教えであるということを」

善信は、その後、独りでこういう問題について考えてみた。

「この間のああいふ論争が起るところを見ても、まだ他力念仏をこれほどお説きになっている上人の真意は、幾人もほんとに理解していないのだ」心細い気持がするのであった。

「叡山三千房が、こぞって迫害の手をのばそうとして折、また、梶尾の明慧上人があのような論駁を世上に投じている場合、ご随身の高足ともあろう人々が、まだあんなことをいつているようでは、浄土門の真理の芽は、せつかく大地を割ったばかりで無碍に踏みにじられてしまふ」そう、彼には、案じられた。

「——一つ師を仰ぎ、一つ真理にすがり、室を共にし、寢食までを同じゅうしても、それが、真の道の友とはいい難い。学問や利を同じゅうして集まっても、その称える念仏には、まだまだ自力の声があり、他力の声があり、迷いの声がまじっている」

今は、聖道門の旧教と、自分たちの新しい宗教との、いわゆる聖浄二教というものが、二つの太い潮流を作つて、日本の思想界において、それが、ひところの対立時代から、さらに迫つて、まさに、正面衝突をしようとしている。

そういう重大な時機なのだ。——だのに吉水の内部に

ある人々のあたまに、まだ、そんな脆弱なものが残っているようではならない。断じて、その質を、もっと強固に、明確に、みんなの信念からして、統一したものにしたいなければならない。

こう善信は痛感した。

そのありのままの意見を、師の法然に述べてみると、「よいところへ思いつかれた」と、その翌る日、すべての門縁の人々へ、集まることをいい触らされた。

その日、法然は、禅房のうちのいちばん広い室へ、席を二つに分けて、人々の集まりを待っていた。

三百名に近い法縁が集まった。——ころを見て、法然は、

「きようは、御覧じあるように、信不退の座と、行不退の座と、二つに席をわけておいた。——おのおのはそのいづれの方の座に着き給うか、法然に、示して給われい」はつ……と人々は顔を見あわせてしまった。誰も、黙っていた。容易に、先へ立つて座を取る者もなかった。「みなご遠慮あるとみえる、ではお先に」と、起ち上がった人を見ると、それは、釈信空であった。

迷うところなく、信空は、信不退の座へすわった。

「わしも……」とつづいて、信不退のほうへ坐ったのは、安居院の法印聖覚であった。

が——それなり、ふたたび、満座には、迷いの眼ばかりが白くうごいていた。

しいんとして、起つ者がない。

すると、禅房の木戸をあけ、庭石に木履の音を高くさ

せて入ってきた大兵の僧がある。

「やあ」と、広座のていを見て、快活な声を外から投げているのだった。

「善信どの。なにか、おん身はそこで執筆役をおひきうけのご様子、いったい、きょうは何事があるのでござるか」

まだ失せない武骨な関東訛りでそういうのだ。これは、熊谷蓮生房であることはいまでもない。善信が、
「あなたへは、ご通知が洩れていましたかの。実は、今日は同門一統の者、ここへ集まって、信不退と行不退の二つに座をわけておるところです」

「オオ、しからば、この蓮生も、法縁に洩れてはならん。やつがれはまず、こちらの座をいただこう」蓮生房は、どかと、これもまた、信不退のほうへと坐った。

九

信か。行か。二つの座のどっちを選ぶか。

(——試されるのだ)

そう思うと数百名の門徒は、よけいに迷っているふうであった。唾をのんで、人の気色にばかり敏覚である。しいんとして、

(吾は——)と進んで、自分の態度を、はっきり示すほどの者がない。

坂東武者上がりの熊谷蓮生房は、なんのためらいもなく、信の座へ着いたが、人々は、

(あれは神経のあらい人だ。先に釈の信空と、聖覚法印が信の座へ着いたので、それで、自分も追従したに過ぎない) こう見ているのであろう、むしろ彼の態度を、軽蔑するように、じろじろ眺めて、そして自分たちの態度は、なお決しかねているのだった。

執筆役の善信は、机のうえに紙をのべ、筆を握って、(これだけの門徒のうち、どれほどの数の者が、真の信仰をもっているか)——を、じっと、恐いような気持と、真摯な興味をもって、眸をすまして、その実証が数に出るのを待っていた。

——だが、誰も咳声もしなかった。無音から無音へ、ときが過ぎてゆく。

「? ……」寂としたきりである。——と、善信の手にある筆が、さらさらと紙の上に微かに走った。

信の座

彼は、自分の名を、その下へ署名したのである。すると、やや間をおいて、

「わしも、信不退の座につらなり申そう。善信、法然房の名を信の座に書かれい」

上人の声であった。

数百名の門徒たちは、はっと思ったように顔いろを革めた。しかしもう遅い気がして、

「わしも、そう思ったのじゃが……」

「いや、自分も、心では」などとにわかに騒めき出す。信不退か、行不退か、の試判はこれで明瞭になった。信の座についた者は、結局、

法印大和尚位聖覺
釈の信空法蓮

熊谷蓮生房

それに――

善信（親鸞）

法然

と、こう五名だけしかなかったのだ。群居する数百名の門徒のうちで、わずかこれだけの人しか真に信仰をつかんでいた人はなかったことが明らかにされたのである。

後は、おそらく、念仏はとなえても、他力の門に籍はおいても、どこかに小さい自力がこびりついていた人々だった。旧教の殻が脱けきれないのか、研鑽が浅いのか、とにかく、肚の底まで、念仏そのものに、澄明になりきれない者たちだった。善信は、心のうちで、

「それでも、今の時代は宗教が旺だといえるだろうか。

旧教の仏徒から、嫉視を受けるほど、勃興していると見られている念仏門が――」と、嘆息していた。だが、法然は、

（そうもあろう）当然なことでもあるように、騒めいている門徒たちの上を、嘆きもせず、欣喜もせず、いつものような眼でながめていた。

十

叡山の大衆は、その後、

（吉水は降伏した）と、例の法然とその門下の名をつらねた七箇条の誓書に、凱歌をあげていたが、（あれは、奴らの戦術だぞ）という者があり、また、（吉水の念仏者たちは、いよいよ結束して、信仰をかためているし、外部の門徒たちも、なお殖えるような勢いにある）と聞くと、

（それは捨ておけぬ）ふたたび持ち前の嫉視を向け、弾圧、迫害、誹謗、あらゆる反動を煽って、とうとう、朝廷へ向って「念仏停止」の訴えを起した。

一方――梶尾の明慧上人が、学理の上から、法然の「選択本願念仏集」やその他の教理を反駁して、大きな輿論を学界によび起しているので、

（今だ）
（この図に乗って、打っ倒せ）と、呼応して出た形もある。

社会の眼もまた、

（いよいよ念仏門の受難が来た）と、吉水禅房の無事を危ぶんで、どうなることかと、不安な予感を抱いて、この大きな二大思潮の正面衝突をながめていた。

事実――吉水のうちの頼もしげな高足たちの間にすら、徐々と、その動揺をうける者があって、

「近ごろは、誰の顔が少しも見えんが」と囁き合っていると、その囁きをなした者が、翌る日は、

「しばらく、郷里へ帰って、故山で信仰と勉強にいそしみたいと思いますか」とか、

「国元の老いたる親どもが、にわかに、病気の由ゆえ」

とか、口実を構えて、吉水を去ってゆく者が、日に幾人かずつ出てくるような有様であった。

ことに、信不退、行不退の二つの座に試みられ、その信仰の浅くて晦いことを曝露された人々のうちには、ひそかに、不快とする者もあって、理由も告げず、だんだんに、足の遠退いた者もある。

そういう状態にある吉水へ、さらにまた、一方から不意な法敵があらわれて、

（邪教をつぶせ）と、波瀾のうえに、波瀾をあげてきた一派がある。

奈良の興福寺の衆徒と、その衆徒が、当代の生き仏と仰いでいる、笠置の解脱上人とであった。

興福寺奏状

という一文を草して、表を朝廷にさし出し、つぶさに、吉水の罪状というものをかぞえ上げたものである。

その罪状は、九箇条になっていて、第一、邪教をいい立つるの罪から筆を起し、

——新像図を私販するの罪（撰取不捨の曼陀羅）

——釈尊を軽んずるの罪

——万善を廃するの罪

——神靈に背くの罪

——国家を壊乱するの罪

等、等、かぞえ立てて、その一箇条ごとに、解脱上人がつぶさな意見を誌し、全文をもって痛烈な念仏撲滅論としたものであった。

吉水は今や、文字どおりな四面楚歌だった。

叡山は、権力の上から。

高雄は、学理の上から。

そして今は、奈良の衆僧が、

念仏門の教化とその手段

というものの上から、難を拾いあげて、徹底的に、吉水へ向って、最後のとどめを刺そうとしてきたのであった。

十一

——だが、しかし。一方に、打倒念仏の猛運動が起れば、一方にもまた、念仏の支持者も社会に少なくはなかった。

「吉水の上人は、何を聞いても、よそごとのように聞き流しておられるが」と、心痛している人々が、意外なところにも多かった。

わけても、朝廷には今、叡山の訴状が出ているし、南都の衆僧からも、念仏悪の罪状をかぞえて、その弾圧を、廟議に建言している際なので、

（この両方の訴えを、取り上げたものか否か）という問題は、毎日のように、堂上の朝臣たちの政議にのぼっていた。

京極摂政師実の孫——大炊御門経宗とか、花山院の

左大臣兼雅とか、京極大夫隆信とか、民部卿範光、

兵部卿基経などという人々は、日ごろから、法然に帰

依している人たちであるしまた政治的にも、

「言論の上ならばともかく、ただ新しい宗教を排斥するための強訴や誹謗は、これを御政治にとりあげて、軽率に、主権の御発動を仰ぐべきでない」という意見を持って、廟議にのぞんでいた。

もちろん、ここにも、叡山に加担する公卿や、南都の云い分や、明慧上人の学説に共鳴する者は少なくないの、二つの思潮は、二つの政治的な分野にもわかれ、いつも、激論に終わってしまった。

こうして、廟議の方針が、にわかに一決しないのを見ると叡山は、

（念仏方の公卿たちの策謀を、まず先に打ち懲せ）と、いつもの手段に出て、近いうちに、日吉、山王の神輿をかついで一山三千が示威運動に出るらしいという警報が都へ入ってきた。

山門の強訴といえ、いつも血を見るか、または、なにか社会的な大事件の口火になるのが例であった。

「すわ」と、堂上にも、そのうわさに、脅かされる色があった。

しかし、念仏支持の公卿は、

「叡山の態度こそ、怪しからぬものである。吉水の法然と、それとを比較すれば、いずれが、仏者として正しいか、瞭かではないか」と、かえって硬化して、廟議は、いっそう激越になり、二派の対抗は、政治から感情へまで尖り合ってきた。

こういう陰悪な成行きをながめて――

「困ったものだ」誰よりも、ひそかに、胸を傷めていた

のは、前の関白月輪禪閣であった。

彼は今はもう、まったく、政界からも、廟堂の権勢からも、身を退いて、ただ法然門下の一帰依者として、しずかに余生を送っている人であったが、現在、自分の息女の一人は、善信の妻として嫁いでいるし、弟の慈円僧正は、叡山の座主であったが、その座主にもいたたまれないで下山しているのだ。

「なんとか、和解の途はないものだろうか」禪閣は、自分の力で、この大きな対立の調停ができるものなら、どんな骨を折ってもよい、老い先のない身を終わっても慰まないと考えていた。

で――高雄の明慧上人へ、ぜひ一度、個人的に会って談合したいが――と使いをもって申し送ると、明慧からも、承諾の旨をいつてきた。

「かの上人ならば」と、禪閣は、一縷の望みを抱いて、今の大きな危機を、自分の信念と誠意をもって、未然に、打開できれば、それはただ吉水の門派や一箇の法然の幸いであるばかりでなく、社会不安の一掃であり、また、一般の法燈のためにもよろこぶことだと信じていた。

ところが――意外な大事件が、誰も考えていないところから突発した。――まったく、吉水でも、その法敵でも、夢想もしていなかった社会の裏面から、それは燃えひろがった魔火であった。

悪人篇

松虫と鈴虫

一

暦こよみの上ではもう秋といわねばならぬが、気象は夏型のままだった。久しく雨を忘れているような空に、きょうもうごかぬ雲を見せ、宇宙は大きな倦怠けんたい状じょうそのものだった。

この倦怠と無変化を、残暑とよんで、人の生態も、ふしだらや無気力が自然とされ、東山の高さから洛内らくないをながめても、炎天のうちは、大路大橋おおじおおはしを往く人影もなく、乾かわきぬいた町家の屋根は反りかえり、加茂川の水は涸かれほそって、堤とての柳も埃ほこりに白くうなだれた列としか見えな

い。月見も近い八月の中旬なかばというのに今年はこれである。

——変化が欲しい。何かな、変化を求めてやまないような意欲が、息ぐるしげな木々の葉にも、道の辺みちべに這う露草の花の頸うなじにさえあった。

「なんという暑さでしょう」

「山を歩くと、汗が出て」

「ま……せっかくのお美しい化粧けしょうが、だいなしに汚れましたこと」

「あなたも」

「ホホホ。——でも、御所の局つばねのうちに、じつと装束しょうぞくを着て、かしこまっているよりは」

「それはもう、較くらべものにならないほど、きょうは楽しくうございました」

「この大空を、伸々と、見ているだけでも——」

東山のあちこちを、そぞろ歩きしている二人の若い女性にょしやうがあった。

籠かごから放たれた小鳥のように、この女性たちは、他愛なく、嬉々ききとしていた。清水しみずへも行った、祇園ぎおんへも詣もつでた。——そして今、黒谷くろだにのほうへ降りてきたのである。

「松虫様」と一人は、一人のほうを呼んでいたし、松虫は、連れの者を、

「鈴虫さま」と呼んでいた。

どっちも、似たような身装みなりをしているが、面ざしは、違っていた。松虫は、すこし年上で、十九ぐらいと見えるし、鈴虫は、十七歳ほどに見える。

すらりと、上背丈うわぜいがあって、面長おもながのほうが、その年上の松虫だった。愛くるしい——何かにつけて、表情に富んでいて、深い笑えくぼが、絶えず明るい顔にただよっている——どっちかといえ、時世的な容貌を鈴虫のほう

は持っていた。

「あら」と、その鈴虫が、とある門前へ来て、かるくさ

「松虫さま、どうしたんでしよう、牛車くるまが見えませんか」

「ま。——ほんとに」

「あの、暢気のんきもの者の牛飼は、いったい、どこへ行ってしまったんでしよう」

「すこし耳が遠いようですから、私たちが、ここへ来て待つようにといったことばを、聞き違えて、飛んでもない所へ行つて、悠々と、昼寝でもして、待っているのじやないでしょうか」

「そうかもしれない」ちよつと、麗うるわしい眉をひそめて

「どうなさいます」

「歩きましょう」

「まだ疲れませんか？」

「ええ、ちつとも」二人はまた、木蔭の日陰をたどって、歩きました。

町家の娘ではなかった。といって、武家の息女とも見えない。——どこかに、絶えずこの明るい外気がいきを楽しんだり、往来のさまや、空の青さを、心から珍しがっている様子から見るに、よほど、ふだんは外に出ない境遇にある人だということとはわかる。

町の女のように賤いやしくなくて、そういう生活にある者といえ、さしずめ、このふたりは、御所の裡うちに仕えている女官にちがいあるまい。——松虫といい、鈴虫という名も、局名つばねなとすれば、うなずける。

「——鈴虫様、これからどこへ行きますか」

「さ？ ……どこでも」

「御所へ帰るのは、まだ早いし……」と、焦こげるような空の陽ひを仰いで、

「なんだか、少しの刻ときでも、惜おしい気がしますものね」

二

「せっかく、きょう一日、お暇いとまをいただいたのですから、日いっぱい、歩けるだけ、歩いてみようではありませんか」年下の鈴虫は、そういつて、羅うすものの被衣かぎに、埃ほこりまじりの風をなぶらせながら、子供っぽく、走ってたり、道みちばたの清水を、手で掬すくってみたり、

「おお冷たい！」そして——

「飲めないかしら？」と、愛くるしい首をかしげて、友を見た。

「ホホホホ。誰も見ていないから、どんなこととして飲んでも、笑う人はありませんよ」松虫がいうと、
「じゃあ」と、鈴虫は、手でそれを掬すくって、唇から顔を、雫しずくで濡らし、その顔を、被衣はしの端で拭いた。

そんなことが、二人には、わけもなく楽しかった。御所の日常が——禁裡きんりの後宮生活こうきゆうというものが——まったく儀式化され、粉飾ふんしよく化され、そこに生きるものは、ただ、美しくて作法のよい人形のようにでしかなかったのだ、二人は、野の土へ、解放された羊のような欣よろこびを、感じるのだった。

「……おや、松虫さま、嘘ばかりおっしゃって」

「どうして」

「誰も通らないといったくせに、あんなに、ぞろぞろと、どこかへ人が行くではありませんか」

「この辻へ来てからでしょう。ごらん遊ばせ、みな同じ横から曲がってくる」

「どこへ行く人達でしょう」

「鹿ヶ谷の方」

「何があるのかしら？」

「問うてみましょう」二人は、樹蔭に陽をよけて、佇

みながら、往来をながめていた。

奴袴をはいた男たちや、烏帽子を汗によごしてゆく町の者や、子どもや、老人や、髪をつかねた女や——中には太刀を厳かに横たえた武士とか、良家の女房らしい姿も、まじってみえた。

如意ヶ岳のふもとの方へ近づいてゆくにつれて、並木から、細い小路から、辻へ出るごとに、その人数は増していた。そして、蟻のように、同じ方角の道へ、つづいて行くのだった。

「もし」と、松虫が、これも汗ばんで行く一人の女へ、そっと訊ねてみた。

「——あの、今日は、皆さまの行く方に、何かあるのをございますか」女は、髪が生え際の汗を、袂で拭いて、松虫と鈴虫のすがたを、じっと見ていた。

「——あなた方は、御所のお方でございますね」

「え」と、松虫は、なんだか、生々とした生活力の中にある同性の眼にながめられるのが、肩身のせまいように覺えて、小さい声で答えた。

「……じゃあ、ご存じないのも無理はない。きょうは、鹿ヶ谷へ、わざわざ吉水のお上人様が出向いて、私たちのために、有難いお勤めをして下さるのです」

「あ……吉水の」

「ご存じですか」

「御所のうちでも、おうわさはよく聞いておりますが」それで、こうしてみんな、鹿ヶ谷へ行くのですよ」遅れては——と心の急ぐらしい足つきで、女は、そういうともうふたりの先を歩いていった。

三

なるほど——そう知ってから、道をゆく人々の口から洩れる言葉に耳をとめていると、

「えらい人出じやの」

「何せい、お上人様のおすがたは、この春から、初めて拝むのじゃ、冬ごろから、久しく、お病氣であつたからの」

「もう、すっかり、お健康になつたかの」

「さ……お年がお年じゃで、すっかりとはゆくまいが」衆生のためには、わが身もない、病氣もいとわぬと、こういう意気の法然様じゃによって、押して、お出ましになるのじやろう」

「この暑さに——」

「もったいないことよ」

「でもきょうの専修念仏に、このように、多くの人が、

お上人様の徳を慕うて集まるのを御覧じたら、さだめし、ご本望じやあるまいか」

「そねむのは、叡山の衆や、南都の坊さまたちじゃ」

「これ……。うかつなことをいいなさんな、法師のすがたも見える」

「何といおうが、わしらは、念仏宗じゃ、念仏宗に変わってから、この身も心も、軽うなった気がする——」

「わしなどは、女房が先で、女房に説かれて、初めて、吉水のお話を聞き初めたのじゃが、今となってみると、もし、吉水のお上人様の声というものが、この身の耳に触れなかったら、相変わらず、ばくちはする、酒は飲む、稼業は打ツちゃらかし、どうなるものかと、太く短く、女房子を不幸にして暮していたかも知れんのじゃ」そういう人々があるかと思うと——また、

「きょうの別時念仏には、住蓮様や、安樂房様も、何か、お話をするのでしょうか」

「え、あのお二方は、いつも、鹿ヶ谷にいらっしゃるのですから、きつと、きょうもお見えになりましょう」

「私は、安樂房様のお話を聞いていると、何かしら、嬰兒のように、心がやわらいで、それから幾日かは、心が清々となります」

「幾日だけではいけないではございませんか」

「でもまだ、念仏に入りまして、日が浅いのですから為方ありません」などと、歓びを語り合ってゆく若い女たちの群れもあった。

松虫は、そういう人たちの輝いている顔を見ると、

（——羨ましい）と、心から思った。

御所へ帰る時刻ばかり気にして、陽脚の短さを、生命のちぢむように惧れている自分たちに較べて——

（みんな生々している）と思うのであった。

（あの人たちの張りきった生活と、御所の奥のあの暗い壁絵のような動きのない自分たちの日常と——）

こう比較して、考えずにいられなかった。

ふたりは、若かった。うずうずと、今日はその若い血や、夢や、さまざまな青春が、日常のいましめから解かれて、皮膚の外へ出ていた。

「鈴虫さま。行ってみましょうか」

「ええ」二人は、往来をながれてゆく白い埃と、群集の足について、うかうかと歩いていった。

鹿ヶ谷のふもとに來ると、そこは、夏木立と涼しい蝉時雨につつまれていたが、人の数は、一すじの山路に、錐を立てる隙もないほどだった。

一

鹿ヶ谷しかがや——この夏草を踏み、夏木立の梢こずえを仰ぐと、都の人は、すぐ治承じしやうのむかし——もう二十幾年か前になつたころの悲痛な社会事件を、思い出さずにはいられなかった。

この峰の中腹には、その当時、住蓮山安楽寺じゆうれんざんといつて——以前は法勝寺ほつしやうじともいった一院があつて、そこを山荘として住んでいたのが、例の、俊寛僧都しゆんかんそうずであつたのだ。

平家一族のあの当時の栄華というものは、いまだに、語り草になつているように、

——この世をば

わが世とぞ思うもち月の

かけたるくまも無しと思えば

と歌つた藤原道長の世盛りもおろかなほどであつた。
俊寛しゆんかんは、多感な人だつた。

平家の横暴なふるまいを、この人は、あたりまえだとしていられたかつた。

新大納言成親なりちかとか、平判官康頼へいはんかんよりとかいう反動分子を語らつて、法皇を擁ようし奉り、幾たびも、この山荘に集まつて、

(平家を討たん)という策謀をめぐらしたものである。

不幸にも、それは、まだ旭あさひのような勢いにあつた平氏の者に、事を挙げるまゑに嗅かぎつけられる所となつて、この山荘に出入りしていた者のほとんど全部が、極罪に処せられたり、遠流おんるになつた。

俊寛もまた、縛ばくをうけて、洛内らくないを引きまわされ、あらゆる恥かしめと、平氏の者の唾つばを浴びせられて、鬼界ヶ島へ流されてしまつた——

以来。

この忌わしい歴史のある山には、住む者がなかつた。二十余年のあいだ、雨や風に、法勝寺の山荘も荒るるにまかせてあり、その当時の司権者であつた平氏の一族が亡んでもまだ、ここには、一穗いっすいの法燈も点つかずにあつた。

それがふと、数年前から、この鹿ヶ谷しかがやにも、人の足が通い初めて、都の人が、

(おや?)と、不審いふかるほど、いつの間にか、夜になつても、真つ暗な洛東の空に、ポチと灯あかりが見えるようになっていた。

(——誰だろ?)と、当然、うわさにのぼつた。

閑人ひまじんが、詮索せんさくしてみると、近ごろ、二人の若僧にやくそうがそこに住んでいるのだと知れた。

荒れ果てた法勝寺の床ゆかをつくり、屋根の茅かやを葺ふいて、そのわきに、べつに粗末な一庵を建てて、やがて、朝夕ちやうせきの勤行ごんぎやうの鐘も聞えだした。

(若いのに、奇特な)と、供物くもつを贈る者や、花や御灯みあかしを捧げてゆく者もふえ、日と共に、法勝寺の宝前は二十余

年の元のすがたに返って、

（鹿ヶ谷の住蓮様）

（お若い安樂房様）といえば、もう誰も知らない者はな
いようになっていた。

その奇特な——若い僧という者の素姓を洗ってみる
と、二人とも、以前は北面の侍で、一人は前身を清原
次郎左衛門といい、もう一人は、安部次郎盛久と名乗っ
ていた者であるという。

そして、何かの機縁で、この二人は、法然上人の新教
義にふかく帰依して、その門に入ると共に、太刀をすて
て、一沙門になり、同時に、

「この教えのためには」と、身をも打ち捨てるほどの熱
心さをもって、その布教に当たってきたのであった。そし
て鹿ヶ谷の廃寺を興したのも、この社会に、一燈でも多
く念仏の火をかかげたいと願う二人の真摯な若者の情熱
から出た仕事にほかならないのであった。

二

布教の前線に立つ人々は、いつも、実社会や反対派の
法敵に素面で触れているだけに、

「叡山が何だ」

「奈良、高雄、みな旧教の蒙をかぶって、象牙の塔に籠
っている過去の人間どもばかりではないか」

住蓮も、安樂も、気がつよかった。迫害があればある
ほど、むしろ、強くなり得るのだった。

従って、民衆は、飽くまで対象としているが、旧教の
反対などは、てんで眼中にないといっている。

「社会は、うごいているのだ。百年でも、千年でも、黙
っていれば、どこまでも眠っている人間どもに、この生
きている実社会に、何の発言権があるか」と、一方がい
えば、

「そうだとも、おれたちこそ、今の民衆の唯一な希望の
対象にあるのだ。あんなものは、無視して、俺たちはた
だ、新しい民衆の希望の地を開拓してゆけばいい」と一
方も、眉を上げた。

そういう気概の二人だった。それに寄ってくる民衆が、
彼らの行と智に心服して、慕えば慕うほど若い開拓者
は、

「この事実を見ろ」という気持で、精進に励んだ。

——民衆のよろこびを自己のよろこびとして、まったく、
こここそ、浄土そのもののように、社会人の実生活と、
仏弟子の法業とが、渾然と、一つものになって、一韻の鐘
の音にも、人間のよろこびが満ちあふれているように洛
内の上を流れていた。

「——下から見たよりは、思いのほか高い」

松虫は、ほの紅くなった顔に、白珠のような汗をなが
して、道の笹の根につかまった。

「でも、これくらい」と鈴虫は、喘ぎながら、強いこと
をいって、自分でも、おかしくなったとみえ、

「ホホホホ」

被衣で、汗をふいた。

後から登ってくる者が、どんどん先へ追い越してゆく。そのたびに、ふたりは、自分たちの足の弱さや、日蔭

と同じような後宮生活の不自然さを、自身の皮膚や心臓かえりに省みて、

（毎日、こんな山や、空や、自由な風のふく所で汗をながして働いていたら、どんなにいいだろう、生きがいのあることだろう）と、思うのであった。

「あれ、鐘が鳴っています。——松虫さま」

「ほんに。……もう別時念仏の法筵ほうえんが始まったのでしよう」

「行きましょう」汗の飲びだった。足のつかれも欣びだった。

ふだん絹につつまれて、帳とばりの奥に、弱々しい生活をしている皮膚が、たまたま、ほんとの生活力を起して爽快そうかいな山の風に触れたのである。自然の大きに吹かれたのである。——ふたりは、鹿ヶ谷へゆく道が、どれほど高くても、難路であっても、苦痛などということとはまるで考えないような様子であった。

「才才……」法勝寺の前へゆくと、もうそこは、いっぱいの人であった。堂の上も、堂の下も、また廻廊の隅まで。すると、鈴虫が、

「おや、あそこに——」と誰のすがたを見つけたのか、松虫へ顔をよせて、微笑ほほえみながら指さした。

三

「ね……あの御堂みどうの端に。……来ているでしょう」

「どなたが」

「坊門の局つぼねが」

「あ……ほんとに」

「局つぼねのわきに、まだ三、四人ほど局の女房たちがいるようです」

「え……」

「あの方たちは、いつでも、ここへ来ていると見えますね。御僧たちと、何か、親しそうに話していますもの」二人が、外にたたずんで、こう囁ささやき合っていると、やがて、御堂のうちの群集は、だんだん席をつめ合って、そのうちから親切な者が、

「さ、外に立っているお人は、順々に、お入りなさい。」

——坐れますよ」鈴虫は、松虫の顔を見て、

「どうします？」

「上がってみましょうか」

「え、え」二人は、大勢の人いきれに、何かしら含羞はにかみと、恐こわさを抱いだきながら、そっと、隅の柱の下へ、坐っていた。まばゆそうに正面を見る——

そこには、戸外おもての大地を焦やいている大夏たいかの太陽にも劣りのない旺さかんな仏灯みあかしが赫々かつかくと燃えていた。

ふたりは、内陣や宝前の整いには、何も驚きを感じなかったが、その灯の色と、ここにぎっしり詰め合っている

る庶民たちの熱心な眼に驚いた。

（こんなにも、世間の人は、法然上人の話を聞きたがっているのかしら？）と、ふしぎな疑いさえ抱いていた。

そして、軽い気まぐれに、遊山ゆざんの足のついたで、こうして、紛れこんでいるような自分たちが、悪いような、済まないような、気咎きとがめを、ひそかに感じた。

「ああ、涼しい」ふと、鈴虫がつぶやいたので、松虫も、そういえば自分の肌の汗もいつかひいて——と気がついた。

（何という涼しさでしょう）しみじみと、眼を細めて、彼女もそうつぶやいた。

濤なみの音に似ている樹々の風が、ここへはいっぱいに吹きこんでくる。松の青々としたにおいが鼻にも感じられる。そして、宝前にゆらぐ星のような無数の灯のまたたきまでが、すずしげに見える。

十名ほどの僧が出て、背をならべて、誦經ずきょうしていた。磬けいの音が、谷までひびいて行った。そして、谷間からも、経きようの声と、磬の音が、飮こだまになって返ってきた。

——いつとはなく。

——また、誰からともなく。

念仏の唱和が起っている。

な、む、あ、み、だ、ぶつ。——と六音のうちに、何百何千の人間のたましいが一声ごとに洗われてゆくように、そして、無碍むげ、無我——から無心にまで澄んでゆくように、樹波きなみの声のうちに、くりかえされているのだった。

「……………」鈴虫は、ぽかんとしていた。

そして、松虫の顔をそつとのぞいて、

（帰りましょうか）というような眼を向けたが、松虫が、どこかを、じっと、見つめているので、こらえているかっこうだった。

（念仏宗というものは、こういうものか？）

と、松虫のほうは、ちよつと、好奇に囚とらわれて、初めのうちは、それを傍観者のように見ていたのであるが、気がつく、自分のすぐ側にいる若い女房も、老婆も、また、町の男たちも、等しく、胸に掌てをあわせて、一念に称しょうみ名なしているの、自分だけが、この広い御堂のうちで、空虚を作っているように思われて、何だか、取り残されたような心地であった。

四

「……ね、松虫様」

「え？」

「つまらない。帰りましょう」

「でも、せっかく来たのに」その席を立ちたくもあるし、立ちたくない気持もする。

「法然様のお話だけでも聞いて行こうではありませんか」
「そうね……」気のすすまない顔つきで、鈴虫は、それだけを、待っていた。

（早くやめないかしら）と思っている念仏の唱和は、それからも、足のしびれるほど永くつづいた。初めのうち

は、彼女たちは、軽い悔いばかり考えて、

（来なければよかった）と思っていたが、そのうちに、前の人も、後ろの人も、また隣の者も、およそこの御堂にいる人々のすべてが、ほとんど一つ人格になりきって、なむあみだぶつの称えをくりかえしているのです、鈴虫もいつの間にか、

（な、む、あ、み、だ、ぶつ）そう口のうちに、少し、きまりの悪いような怯みを抱きながらつぶやいていると、松虫も、それを真似て、

「な、む、あ、み……」と、いいかけて、俯向いて、ちよつと笑った。

——でも、たとえ、戯れにでも——何か口につぶやいていないと、まわりの人々に対して、異分子のように自分たちの存在が感じられるので、

（笑ってはだめ）と、叱りあうような眼をそつと交わしながら——

「南、無、阿、弥、陀、仏」

「南、無、阿、弥、陀、仏……」と、となえていた。

初めは、何となく、舌にもつれて、不自然にしか出なかった称名が、いつのまにか、鈴虫も松虫も、自然にくりかえされていた。

そればかりではない——ふつと、水の面に、月の影が浮かび出たように、ふたりのすこし澄んできた胸のうちに、自分でも知らなかった自分のたましいが、うっすら、感じられてきた。

念仏は、彼女たちの唇がいつているのではなかった。

——初めのうちは、その唇だけのものだったが、いつのまにか、唇の声は失せて、その胸の奥所にあるたましいが、称えているのだった。

正しい人間のすがた。——今の自分のすがたが、それに近いものになっていることを、松虫も鈴虫も、うすうす感じてきた。

（自分にも、こんな素直な自分があったのかしら？）と、自分を見直すほどに。

理窟や小智恵は、その間、働かなかった。わけもなく人間らしいよろこびと強さが体にわいてくる。

まわりの人々が、われなく、他人なく、称名しているすがたを、初めは、おかしく見ていたが、その安心しぬいている生命の光が、次には、尊く見えてきた。

「——お上人様が」

「お上人様のおはなしじゃ」

あたりの者が、もう、念仏をやめて、正面に身のびをしなげら、こう少し騒めき合っても、松虫は、まだ掌を胸につけて、俯向いたまま、称名していた。

「松虫さま。御法話です」鈴虫にそつと注意されて、彼女は初めて、気がついたらしく、顔を上げたが、その睫毛には、涙のようなものが光っていた。

あの灯・この灯

一

もう暑い夏の陽ざしは、山ふところの樹々にうすずいていた。

蟬の音は、ひぐらしの啼く声にかわっていた。

ひろい御堂の内は、いっぱいの人間のすがたで暗かった——が、それほどな人がいようとも見えないほど、静かであった。

壇に坐して、法然上人は、先刻からおよそ一刻半も法話をつづけている——。その声だけが、しいんとしている衆生のうえに、強く、低く、流るるように、また、訥々として、際限のない底力をもって迫っているのが聞こえているだけであった。

（お弱そうだ、近ごろは——）

（あのお体で、よく、あんな声がな——）と、人々は、話のとぎれるごとに、ほっと息をつきながら、法然のすがたを見入るのであった。

もう彼は七十四歳であった。

誰にも気づくほど、近ごろは、痩せが見えているが、ただ、あの茶いろをした眸だけが、炯々として、相変わらず光っている。そのうえに、繭を植えたような白雪の眉がある。

身には、麻のうす茶の袈裟をかけておられた。——初め、そこに坐って、

「きょうは、出家功德経の一部を話しましょう」と、くだけた優しいことばで話にかかり出した時、左右から、二人の弟子が、大きな団扇をもって、師の袂をおおぎかけたが、

「いらぬ……」軽く首を振られたので、

「は」と、恐縮して退がった。

それから、清水で巾をしぼって、そっと、側へすすめたり、煎り麦のさまし湯を上げたりしたが、長話のうち、一度も手にしなかった。

聴く人々の眼が、貪るように熱心なので、上人も、自分の体力とか、健康とかを、まったく忘れてしまっているらしいのである。弟子たちは、蔭で、（ご無理ではないか）はらはらしていたが、止めようもないのであった。

出家功德経のはなしは今、釈尊が、毘舍離国に入つて、弟子の阿難と共に、その国の王子の生活ぶりをながめて、嘆いている——という例話に入っていた。

「ちようど、食事の時刻でした。毘舍離国の城へ参つて、仏は、食を乞われました。城中には、一王子があつて、名を勇軍と呼ぶ者です。」

——仏が来たと。あの有名な釈迦が来たのか。

勇軍は、仏に食を乞われたのは、わが家の誇りだと思つたのでしょうか。こういうと、みずから出迎えて、

——どうぞ。と、豪奢をこらした城内の一室へ迎え入

れたのです。多くの、後宮の女には、粉黛^{ふんたい}をさせ、珠をかざらせ、楽^{がく}を奏^{そう}し、盤^{ばん}には、山海の珍味を盛^もって。

仏は、たのしまない顔つきでした。食物も多くは摂^とりません。さらに、夜に入ると、王子勇軍^{ゆうぐん}は、不夜の楼殿に百石^{ひやくこく}の油を燈^{とも}して、歡樂、暁を知らないありさまで、彼と、彼をめぐる後宮^{こうきゅう}の女性^{にょしょう}たちの生活をながめて、仏は、翌日、弟子の阿難^{あなん}を招いて、こう告げたのであります」

「……………」松虫と鈴虫の二人は、自分のことでも話されてるように、じつと、上人のほうへ眸^めを向けていた。もちろん、上人の眸は、彼女たちがそこにあるとも無いとも知ろうはずはない。——ただここに集まっている衆生^{しゆじやう}とひろい実社会の現状だけが、彼の対象であった。

二

やさしい、わかりよい、そして自分たちの生活に近い話なので、松虫と鈴虫の二人だけに限らず聴法の人々は、聞き入っていた。

「——阿難に向って仏は、

阿難、おまえは、この城の人間たちをどう見るか。

こう問われたことでした。

——浅ましいと思います。

阿難の答えに、仏はまだ、不満であつたのでしょうか。こう仰せられたのです。

ワレ知ル、五慾ノ樂シミヲ貪^{ムサボ}ルモノハ、必ズ、久

シカラズシテ命^{メイ}終ルコトヲ。

コノ人（王子勇軍）日夜閣上ニ後宮ノ美嬪^{ビヒン}ヲ擁^{ヨウ}シ、色慾ニ耽^{タン}湎^{メン}スルコト極^{キワ}リナシ。

ワレ云ウ。

コノ人必ズ七日ノ後、マサニ是^{カク}ノ如キ快樂^{ケラク}ト眷族^{ケンゾク}ヲステ、決定^{ケツジヨウ}必ズ死ニイタルベシ。

こう予言されたのです。そして、

阿難ヨ、カクノ如キ人モシ慾惑^{ヨウガク}ヲステズ、マタ出家セズンバ、必ズ地獄ニ墮^ダセン。

阿難は、仏のおことばを聞くと、これは彼を救わなければならぬと、その利益^{リヤク}を胸にもって、ふたたび王子のもとへ訪れました。

王子は、彼がまたもどってきたのを見ると、

好友来ル

ワレニ仏ノ教エヲ説ケ。

しかし、阿難は、ここに彼へ大利益^{だいりやく}を与えたいと思うので、黙したまま、何事も答えない。王子は再三、阿難に向って説法をせがみましたが、阿難が、なお啞^{おし}のごとく口をむすんでいるので、ついには、悄然^{しょうぜん}として、

大仙、仏法蔵ヲ持^ジシテ一切衆生^{しゆじやう}ヲ利益^{リヤク}ス。何ノ怨恨^{リヤク}カアツテ、独リワレノミニ法ヲ説カザル。

すると、阿難は初めて口をひらいて、さて、慘然^{さんぜん}と告げるには、

汝ヨク聴ケ

七日ノ後、汝マサニ死スベシ。

仏のおことばを、そのまま告げて去つたのでした。王

子は、わらいました。次には、何か、怏々^{おうおう}として楽しまない気持ちになってきたのです。——けれど、そうかといって、仏所をたたいて教えを乞う気にもなれない。悶々^{もんもん}、七日目の日は来しました。

仏ヨ。ワレヲ助ケテ。

王子は、仏の膝へ走ってきて号泣しました。仏は、一日一夜、これに説き、これに教え、浄戒^{じようかい}をさずけたのです。——果たして、王子勇軍の醜い骸^{むら}は七日めに死んだのであります。そして、新しく生れたものは、仏、阿難^{あなん}と共に、この世の、真の光に浴することのできる身をもった、素直な一箇の生命であつたのでござる……」

「さて——」と、話を、現在の実社会の世相へもってゆくのであつた。

今の民衆のうちにも、こういう可惜^{あたら}、空しい人生に蝕^{むしば}まれている人はないだろうか。

いや——他人^{ひと}を見ずにまず自己^{おのれ}を見よう。

ひさしい戦乱も、いつのまにか、遠い過去になり、平氏が興り、平氏が亡び、人は、人生の無常を感じると共に、刹那的な快樂^{けらく}を趁^おい、そして虚無観にとらわれ、その風潮は、今日の民力を、どんなに弱めているか知れない。

これは、国家の病^{やまい}となるのみでなく、個々の人間のかなしい相^{すがた}だ。人間とは、そんなあさましいはかない夢を短くみて、それで人間として完全な「生れてきた欣喜^{よろこ}び——」を尽したものでいえようか。同時に、生れてき

た使命を、勤めを、生きがいを、果たしたものといえるだろうか。

三

快樂^{けらく}、娛樂、きりのない人間の慾心。

わけて色慾や虚栄や、そういうものが、人間にとって、どんなに、人間の真実と、生命の充実^{むじば}を蝕^{むしば}むか。

そして、くだらないか。

また、はかない刹那刹那か。

法然は、若人のように、頼に紅潮をもつて、出家功德経のうえから、切々と、話すのだった。

無慮^{ふたとき}二刻に余る時間を——大なり小なり、快樂、五慾をもたない人間はない。また、その五慾の度を、みずからほどよく——生命の薬ぐらいに——生活に入れている人はすくない。聞き入っていた人々が、

「ああ」ほんと、自責から顔をあげてみると、もう、御堂のうちは、まったく暗くなって、上人のすがたは綿のようにつかれたらしく、弟子たちに、抱えられて休息の間へ入っていた。

鐘、磬^{けい}の音——そして、明々^{あかあか}と、つぎ直された灯^{あか}しに、蓮華が、ひらひらと、撒^まかれていた。

そろそろと、御堂のうちは、空席がひろがって行く。そこらにいた人々が、帰ってゆくのである。人の起った後には、青い夕空のいろがほのかにながれていた。「……………」ひぐらしの啼く音が、雨のようであつた。

松虫と鈴虫の二人は、起つのをわすれていた。

「……………」ふたりとも、先刻から、じっと、うつ向いたまま、にわかに抱き切れないような大きなものを、その胸にかかえて、さんぜん、涙ばかりが先に流れてしまふ。

（人にこの顔を見られては——）そう思うので、顔も上げ得なかつたし、また、いつまでも、ここを去りたくない気がした。

大きな衝動をうけたのである。法然の一語一語が、肺腑をつきさすようだった。——さながら、きょうの仏陀と阿難とそして王子との話は、自分たちの住んでいる城——いやあの御所のうちに似ている。

快樂、虚栄、又アラル欲望ニ惑溺シテサメザルモノハ、必ズ、命七日ニ終ラン——

ほんとうに仏陀はそう仰っしゃったのかしら？——

いやあの上人のことばではない、それは経にあることだ、仏陀の声そのもののものだ。

（仏陀の声を——）松虫は、何か、飛び上がりたような歓喜をおぼえた。何千年のむかしの聖者の声を、今まざまざとこの耳で聞くことのできた機縁に、感謝の涙があふれてきた。

（何という自分だったろう）この鹿ヶ谷へ登ってくる前の、自分と——ここへ坐った後の自分とをくらべて見て、そう思った。

——と急に、御所のあの生活へもどるのが嫌になった。たそがれの灯を見るにつけ、そこにある幾多の醜いもの

が睨にういてきて、

（だが、帰らなければならぬ）と思うと、よけいに足がすすまないのであつた。

鈴虫も、同じような気持らしかった。あのよく笑つてばかりいる、はしゃぎやの彼女が、じっと、深い眼をして、階段を下り、自分の穿物をさがし、そして暗い大地へ、黙り合つて足を運びだしたのである。

——すると、廻廊の簾を巻いていた若い僧が、「お……」と、声をかけた。

四

「松虫様ではありませんか」先では、こういつて、馴々しくほほ笑みかけながら近づいてきたのであつたが、「どなた？」松虫には、思い出せなかつた。鈴虫にも考へつかない若僧であつた。

若僧は、側へ来て、いんぎんに礼儀をして、

「安樂房でございます」といった。

それでもまだふたりが不審な顔をしているので、

「私は今、法友の住蓮と二人して、この鹿ヶ谷に住み、今日もかように吉水の師の房を迎えて、幸いに、盛な法筵を営みましたが、ずっと以前、師の君に隨身して、仙洞御所へうかがつたことがございます。その折、あなた様にも、鈴虫様にも、お目にかかつておりました」

「お……そう仰っしゃれば」やっと解けたらしく、

「思い出しました」松虫は、何とはなく、羞恥に顔を染

めた。

「住蓮をお紹介ひきあわせましょう」安樂房は、ちよつと戻つて行つて、すぐ友の住蓮を伴つれてきた。武士として鍛きたえた体に、聡明な知識を持ったこの二人の若くて逞しい男性のすがたは、すぐふたりの氣持をつよく囚とらえてしまつた。

間もなく、ふたりは山を降りていたが、ふたりとも妙に無口になつていた。加茂の岸に立つて振向くと、山にはまだポチと二つの灯が残つていた。——住蓮と安樂房の眸ひとみがそこで呼んでいるように。

同時に、松虫も鈴虫も、これから歸つて行かなければならない御所の奥の生活と、その灯の色を想像してよいに心が暗くなつた。

「もう何刻なんどきでしょう、松虫様」

「さあ……」

「すっかり遅くなつてしまいました。何と、云い訳をしたらよいでしょうね」鈴虫は、もうその心配に、胸をいためていゝらしかつた。

御所の規律のやかましいことはいふまでもない。まして、後宮は、貞操の檻わりである。松虫も、同じように、局つばねの老女や役人の猜疑さいぎな眼や針のような言葉が、歸らぬうちから頭を刺して、さっきから足がすすまないのであつた。

ちよつと出るにも、歸るにも、こんな憂いが離れない内裏だいりの生活を思うと、彼女たちは、

（なぜ御所へなど上がったのか）と、悔くいの嘆息ためいきが出る

のだった。

町家にいたころは、御所の内裏といえ、どんなに典雅てんがで平和で女性にょしょうの幸福を集めていゝところかと、あこがれていたものである。——そして、その多くの女性のうちでも最も羨望せんぼうされる寵妃ちやうひとなつて、上皇の愛を賜うほどの身になつた今日になつてみれば、昔の憧憬あこがれは、まことに幼稚な少女の夢にすぎなかつた。

なるほど、身にだけは、珠をかざり、綾を着て、和歌や絵にある生活のままな姿はしているが、上皇は、御政治のことさえ、今帝きんていにおまかせしきれないほど、御氣質の烈しいお方であるので、後宮の彼女たちには、口にも出せない氣苦労がある。

その上に、寵妃たちを取り巻く、典侍とか、女官たちのあいだには、閥はつの争いだの、意地わるい嫉視しつしだのがある。日蔭で冷ややかに歪ひねくれた眼と眼が、絶えず、行儀作法の正しいなかで、根強い呪のろいと闘いを交わしているのが、ほとんど、明けても暮れてものことなのである。「ああ……」松虫がこうつぶやくと、鈴虫も俯向うつむいたまま、重い吐息をついて歩いた。

その年の十一月であつた。

仙洞の後鳥羽院は、熊野詣でを仰せ出されて、紀伊路へ行幸された。

降るか降らないかのような時雨が道を濡らしていたが、鳳輦が御所を出るころには、冬陽が射し、虹の立ちそうな美しい鹿島立ちになった。

洛内は、行幸を拝む人々で、どこもかしこも人の列であつた。

若い娘、若い男たちは、「一日でも、あんな鳳輦に侍いてみたら」と、雲上の生活に、あこがれと諦めをもって、自分たち庶民の宿命を、その後でさびしく眺め合つた。

上皇が、お留守になると仙洞御所は、大きな空虚を抱いて、

「ああ、これで」ほっとしたり、「御用なしで、明日から、何をしたものか」と、女官たちは四、五日すると退屈と淋しさを持てあました。

投扇興、すごろく、和歌合せ、といったような遊戯にも、すぐ飽いてしまうし、誰や彼の、垣間見の男性た

ちのうわさも、ままにならない身がかえって苦しくなるだけで、恋をするには、盗賊以上の勇気がいる。

それでも、深夜になると、局のどこかに、男性のにおいがするのだつた。越えられそうもない高い堀の下に、男の脊が落ちてゐる朝もある。

はなはだしいことには、上皇のお留守を見込んであらうが、どこの公達どもか、四、五人ほど党を組んで来て、局のうちから、眉目のよい女官を攫って逃げ去つたという椿事まであつた。

けれど、不可思議なことには、攫われてゆく女性の方が、そういう場合に、決して、悲鳴をあげたり、大声で救いを呼ぼうともしないのである。そして、いつのまにかまた、元の局にもどつて、取り澄まして、その怖ろしさをも人に語ろうとはしない。

衛府の小者たちは、そんな例を毎晩のように見かけるけれど、これも、大して異ともしない顔つきで、多くは見のがしていることが当り前になつていた。

「鈴虫様……。何を泣いていらっしゃるんですの」独りがさびしくなると、松虫はきつと仲のよい鈴虫の局を訪ねるし、鈴虫が何か思いあまることがあると、松虫の局へ行つて、姉のように、何事も打明けていた。

「……………」今、ふとそこを訪ねると、鈴虫がただひとりで、燈火の下に俯伏しているの、

「また、あの御老女に、何かきびしいことでもいわれたのですか」顔をさし覗くと、
「いいえ」

「そうでしょう、きつと、そうに違いない。ふだんの御寵愛がふかいだけに、こういう折こそと、事ごとに、辛く当たられる私たちです。私も、何度も、唇を噛んでいるのです。わけて、あなたはおとなしいから」

「もう、そんなことなど、忍びもしますが、今日は、余りにひどいことを、皆して、つけつけというばかりか、誰やら、戯れ和歌にまで詠んで人を謗るので、口惜しくなってしまうのです」

「どうした理です、それは」

「わたくしが、花山院の少将様と恋をしているというのではございませんか。誰の悪戯か、私の笄や小扇を、御所の塙の外へ捨てて、それが証拠だなどといい、少将様の恋文とやらを、御老女がひろったなどと……」

「まあ、人の悪い」

「今もさんざん、皆の前で」

「罵られたのですか」

「それなら、云い訳もしますが、ただ針のようにちくちくいっては、私を笑い者にして弄るのです」

二

めずらしいことではない、鈴虫が身をわななかせて訴えるようなことは、松虫も幾たびか経験していることなのである。

しかし、鈴虫は、今日のその口惜しさを悲しんだり泣いたりするのではなかった。そういう陰險な悪戯や

邪視の中に、毎日を暮していなければならぬ自分の青春を傷むのであった。

「こんな中に幾年もいるうちには、今に、自分も、あの意地わるな御老女のようなねじけた人間になるんですよ。そして、自分でもそれを不思議にしないようになるでしょう。私は、怖ろしいと思います」膝にすがって、そう泣きふるえていう鈴虫のことばは、松虫にも、深刻に考えさせられることだった。

何も、感激のない生活——それだけでも人間は苦しいのに。

この後宮を見まわして、どこに、真実の人間らしい生活が少しでもあるか。飢えや、寒さや、汗を流すことを知らない世界には、また、人情の発露もない、同情の涙もない、物に対する喜びもない。

すべてがカサカサなのだ。有り余るものは、腐えたる脂粉のおいである。紃や錦や綾にくるまれた棘である。珠に飾られた嫉視や、陥穽である。肉慾ばかり考えたがる彼女らの有閑である。

「もう、泣かないで……」松虫は、そのくせ自分も共に、泣いているのだった。抱き合って、

「もう、泣きますまい。泣いたとて、この運命が、どうなりましょう」

「阿難を伴れた釈尊が、ふいに、この御所へ来てくれないものでしょうか」

「ほんに、いつか鹿ヶ谷で聴いた法話を思い出しますね」「ここに、釈尊がお出であそばしたら、何というでしょ

うか」

「眉をひそめるでしょう」

「印度インドの何とかいう王子のお城の中で仰っしゃったように、私たちの生活に面おもてを反けるに違いありません。：

ああどうにかならないでしょうか」

「どうにかとは」

「生きることです」

「でも、生きてだけはいるではありませんか」

「いいえ、これは、人間の生きているすがたではありません。私たちは息をしている空骸なかがらです。これも、鹿ヶ谷のご説法でうかがったように、往生おうじよう——往ゆきて生いきん——という道まで行かなければ、ほんとの生命いのちは呼吸いきをして参りません」

「あなたは、そんなことを考えますか」

「考えます。——寝てもさめても」

「鈴虫さま」ひとと抱きしめて、その耳へ、松虫は熱い息でささやいた。

「ほんとに」

「え。ほんとに」

「逃げましょうか」

「……」塗りぼねの妻戸の外に、さらさらと衣きぬずれの音が通った。後宮の夜を見まわる恐い老女官であろう。二人は、息がとまったように、じっと、眼をすくめていた。

「……誰にも覺さとられてはいけませんよ。隙を見て」

「え……」

「だから、泣かないで」ふっと、その灯りが消えると、松虫は蹙あしおと音を忍ばせて、自分の部屋へ帰って眠った。

三

上皇が熊野へ行幸みゆきのあいだは、御所のお留守の者ばかりなので、参内する公卿くけもなかったし、公用もほとんどなかった。

「かかる折こそ」とばかり、舍人とねりたちは、宵の早くから酒を持ち込んでいるし、上達部かんだちへたちは、宴楽に耽ふけつているし、衛府えふの小者などは、御門が閉まると、交かわる交わる町へ出ては、遊んで帰った。

今も、一人の衛府の者が、酒のにおいを隠して、どこからか戻ってきたが、彼が、衛府の溜りたまへ入りかけると行きがちがいに、小門の外へ、すうっと出て行った人影がある。

「おや？ ……」と、振向いて、彼はそれを見ていたのである。

人影は二人であった。被衣かぎぎをふかくかぶっていた。

ちようどその夜は二日月の研とがれた影が薙刀なぎなたのように大樹の梢こずえに懸かかっていた。青い月明りに、何か夢の中の人間みたいにその被衣は光っていた。

——ひらっと、蛾がのように、御所の外へ二つの影が消えてから、衛府の男は、独り言につぶやいたのである。

「局つぼねの女房たちも、こんな晩は、男が恋しいとみえる。

……だが、忍びでもすることか、御門を大びらに恋の通

い路にされちゃあ困る。何ぼなんでも、俺たちがお役目として困るじゃないか」

それから、衛府の番小屋に入って、ほかの同役の者たちと笑いさざめいていると、大宿直の公卿から下役の吏員が駈けてきて、

「これ、衛府の者」と、外で喚く。

「はっ」小舎を開けると、吏員は、何か狼狽した顔つきで、息を昂めていうのだった。

「——今し方、誰か、御門の外へ出た者を見なかったか」

「さ？ ……誰か、御門を通ったろうか。おれは知らぬが」一人がいうと、

「おれも知らん」

「わしも」恍ぼけた顔を見合せた。

「はてな、小門のほうは」

「小門は、宵のうちは開けておりますが」

「では、誰が外出してもわかるまいが」

「そのために、私どもが視ておりますので、出入りに不審があれば咎めます」さつき、外から戻ってきた男は、すれちがいに見かけた二人の被衣の女房を胸のうちで思い泛かべたが、

（下手なことを云い出しては）と、口をつぐんで黙っていた。大宿直の吏員は、

「では、裏門の方かも知れん」つぶやいて駈け去った。

「何じやろう」——しばらくすると、その騒ぎは、波紋のようにひろがって、衛府や大宿直の室に止まらず、上達部や舍人たちも、総出になって、仙洞御所のうちの

大きな事件となってあらわれた。

いや、それは御所の表方ばかりではない。後宮の局々でも躁ぎ立った。

「松虫のお局がいなくなったそうです」

「いいえ。松虫のお局ばかりでなく、鈴虫様も一緒に見えなくなっただすって」

「えっ、二人とも」

「どうしたのでしょうか」

「上達部は、逃げたのだと申しています」

「ま！ 大胆な」無事に飽いているこの女性たちにとっては、自分たちの身に関わらない限り、それは眼をみはるに足る驚異であり、興味であった。

一

五^いツ衣^{ぎぬ}の裳^{すそ}をたかく紐^{ひも}でくくり上げて、白い素足^{すそ}を露^{あら}わにしていた。

十一月の大地は凍^いてきつていた。夜霜はその珠^{たま}のような足を刺す。しかし、ふたりはその痛さも冷たさも覚えなないもの^{もの}のようであつた。

「あつ……松虫さま」

「どうしました？」

「何か踏^ふんで……」

「え、踏^ふんで？」

「芒^{すすき}の根^{すね}です」

「まあ、血^ちが——」と松虫は、鈴虫の足もとへ身をかがめて、布を裂いた。

自分の肩にすがらせて、彼女は年下の鈴虫の足^{あし}を布で縛^{むす}ってやる、布は血ですぐに紅^{べに}くなった。

「すみません」鈴虫は、涙ぐんで、

「——勿^な体^{てい}ない」と何度もいった。

「なんの、お互^{たがひ}い^{ただ}です」跛^{びこ}行^{ぎやう}をひいて歩く鈴虫の腕^{かひな}を抱^{かか}えて、二人は糺^{ただ}の森^{もり}をいそいだ。

樹^{こかげ}蔭^{かげ}に入ると、真暗^{まゐ}だった。いつもなら、松明^{たいまつ}にかこまれても怖^{こわ}くて通れそうもない道である。それが、少し

も意識^{いしき}にならないばかりか、大きな光明^{くわんめい}が彼方^{かなた}に見える気持^{きもち}すらするのである。

友^{とも}の腕^{かひな}を授^{たず}けてやつたり、凍^いてた大地^{だいち}に血^ちをこぼして歩くだけでも、二人は、何かしら充^みち足^{たり}りてくる生命^{せいめい}のよろこびを感じるのだった。急激^{きうげき}に生^なきている身であることを全身で知^しつてくるのだった。

森を出ると、狐色^{こきしき}の枯^かれすすきに、細^こい月影^{げつえい}が一すじの小道^{せうだう}を見せている。道はだんだん登^{のぼ}りになる。やがて、鹿^{しか}ヶ谷^{たに}は近いのであつた。

「——誰も追^おつてきませんね」

「よいあんばいに」

「ああ、ほっとしました」

「もうそこが」

「ええ、鹿ヶ谷^{しかがたに}です」顔を見あわせて、ほほ笑^{わら}みを見あわせた。

彼女^{かのじよ}たちはこの山を、半年のあいだどんなにあこがれていたか知^しれない。この夏の専修念仏会^{せんしゆねんぶつえ}の日からである。「とうとう、来^きてしましました。……けれど、これでほんとの人間^{にんげん}に生^いき甦^{かえ}った気がします」

よくぞ思^{おも}ひ切^きつて脱^{のが}れてきたと、自分で自分の勇気^{ゆうき}を宥^{いた}わるのであつた。しいんと、冬の夜は冴^さえ返^{かへ}っている。眼^めを閉^しじて、捨^すててきた過去の生活^{せいかつ}を考えると、よくも、そこに長^{なが}々^々といいたものかなと今さらに思^{おも}うのであつた。

あの嫉^{しつ}視^しと邪智^{じあ}の泥沼^{でいしや}に。嘘^{うそ}と見栄^{みえ}だけにつつまれた臙^{えん}脂^じ地獄^{じごく}に。

「も少しです、ご庵室^{あんしつ}は」

「いそぎましょう」

「住蓮様は、おりましたようか」

鈴虫は、よく住蓮の名を口にする。――松虫はまた、若い安樂房のすがたが、なぜか忘れ得なかった。

彼女たちは女である、彼らはまた、若い男性なのだ。

こうして、生命がけで、御所をすてて逃げてきたのは、ただ仏陀だけが魅力だったとは思われない。やはり、恋にちがいないのだ。鈴虫は住蓮を、松虫は安樂房をあつた専修念仏会の夕べから忘れ得なくなっていることは否めないことであつた。――けれどそれは、醜い生活の殻から真実の生活へ出ようとする真剣な願望に、仏陀を力とし、法の礼讃を明りとしてきたので、二人の胸には、恋しつつ、恋とは自覺していかないかもしれぬ。さればいつて、まだ信仰というほどの開悟もないふたりであることは、いうまでもなからう。

二

法勝寺の山荘は閉まっていた。昼は、信徒の参詣や、山と町との往来もあるが、夜は、この鹿ヶ谷一帯が、一点の灯もない闇であつた、海のようなうなりが樹々をゆすっている谷や峰つづきであつた。

「住蓮、もう眠ろうか」安樂房は、ちやうど衰えかけた火を見つめていった。

その櫓の明りで、住蓮は書物を読んでいたが、根気をつめた背骨を伸ばして、

「む……更けたらしいな」

「しんしんと、寒うなつた」

「もすこし焚こうか」薪を加えると、炉はまた、赫々と炎をあげた。煤で黒くなつた天井が赤く映る。

「はやいものだな、この無住の山荘へ来てから、もう数年」

「その数年の間に、とにかく微力ながら、念仏門の一道場を、社会に加えたのだ、一枚の田を、開墾したのだ。それを思うと、おたがいに愉快だな」

「ウム、御仏も、おれたちの奉仕を嘉してくださいさるだろう。――同時に、おれたちの生活も、今は、感謝と輝きに充ちきつたものだ」

「こういう、憂いなき、安らかな感謝の一日一日を、どうかして、今の昏迷な埃の中にある実社会の人々たちへも、知らしめたい、頒けてやりたい。――おれはそればかりを思う」

「吉水の上人が、あの老軀をひっさげて、自身のご病氣もわすれてなお、法のために、一日一日をおやみもなく遊ばしていらつしやるお氣持も、その願望にほかならない」

「上人のことを思えば、われわれはまだ安閑としていすぎるかも知れぬ」

「櫓に暖まっているのも何か勿体ない氣がするのう」

「励もう」

「ム。人を救うには、まずみずからをだ。――もすこしおれは勉強する」住蓮が、また、書物を取り初めたので、

安樂房も立って、暗い壇のまゑに坐って、念仏の三昧に入った。

パチパチと、炉の火がハゼる音だけが聞えた。時折、雨戸のふくらむような峰の風がぶつかってくるが、その過ぎた一瞬は、死界のような静寂に返ってしまう。ふと住蓮は眼をあげ、

「――安樂房」と、呼んだ。

「お。何か？」

「御本堂のほうの戸を誰かたたいておりはせぬか」

「そうか」耳を澄ましていたが、やがて笑って、

「あれは鹿だよ、それ、いつかこの峰で、捕まえた白毛の鹿が、廻廊へあがって、何かいたずらしておるのじゃ」

「そうかしら」しかし、またしばらくすると、こんどは二人のいる庵室のすぐ外に登音がして、そこを叩く者があつた。

「もしもし……初めて、二人は、

「や？ どなたじゃ」

「ここをお開けくださいまし。お願いがあつて来た者でござりまする」女性にょしょうの声なので、いよいよ怪しみながら、

「どちらから？」ためらって、こう訊くと、

「お目にかかつてからお話いたします。私たちは、

御所のうちから来た者でございますが」

「え。――御所から？」住蓮は、あわてて、その戸を開けた。

三

二尺ほど開けた戸の隙から、霰あられを持って山風がふきこんで、庵室のうちは、炉の赤い炎に、大きく明滅を描いた。

「あつ？ ……」鮮やかに二つの白い顔が見えた。あまりにも、この冬の夜や、世を離れた庵室に、ふさわしくない女性たちである。

（閉めようか）住蓮は、ふと、一瞬にそう惑った。――何か怖ろしい悪魔でも見うけたように慄おのきが背を走つた。

「どなたじゃ？ ……あなたがたは」そういう声までが、われ知らず、尖とがっていた。

「おわすれでございましたか――」と、松虫がいう。

「私たちは、この夏ごろ、法勝寺のお広間で、専修念仏をあそばされた時、お目にかかりました、あの松虫の局つぼねと鈴虫の局の二人でございますが」

「才」住蓮は、外をじつと見て、

「ちがいない。あの折のお二方じゃな。……したが、時ならぬこの夜中、しかも、御所にお仕えするあなた方が、何で、かような山路を辿たどってござったか」

「それを聞いていただきたいばかりに、鈴虫様と、一心をこめて、ここへ参りました。くわしいことは、上がってお話し申しますから、ご縁の端にでも、座をおゆるし下さいませ」

住蓮は、振向いて、

「安樂房、どうしたものであろう？ ……」

「どうと云って、まさか」

「そうじゃの、この寒い夜を越されて来たものを、追いつ返すことも」

「仏の御心であるまい」

「うむ」何か、囁き合っていたが、やがて躊躇いを払って、

「どうぞ」改めて、礼儀をし直した。

被衣を脱ぐ二人の上、藤めいたしなやかな手から霰がこぼれた。——住蓮も安樂も、その匂わしい麗姿に眼をそむけた。見ているには、あまりに美し過ぎるからである。

「霰が、こぼれ出したと見えますの。——さぞ、お寒かったであらうに」

「おそれ入りますが、井水はどこにございましょうか」

「水？ ……水を何に遊ばすのか」

「足を洗うのでございます」

「えっ。……では裸足で？」

「はい」

「裸足でここまで……」住蓮も安樂も、顔を見あわせてしまったのである。

何かの仔細で、たとえ夜を冒して来たにしても、供の者や輦を待たせてあるのであらうと想像していたのに、裸足で来たとは？——しかも——内裏の奥ふかくに住む上、藤が。

（これは、ただ事ではないぞ）住蓮は、友へ、眼をもつていったが、もう遅かった。上がれとゆるしてしまったものを、急に、戸を閉めるわけにもゆかない。

やむなく、ふたりを導いて、裏の竈で足を洗わせ、そして炉のそばへ誘うと、凍えきった鈴虫は、恥かしさも、遠慮もわすれて、炎のそばへ、迂り寄った。

松虫も、おののく手を、櫓の火にくべるようにかざした。紅玉を透かして見るように、その指の一つ一つが、美麗だった。安樂房は、何かすばらしい名工の細工物でも見るようにその手に見惚れていた。

住蓮は、黙っていた。ふたりもしばらくは言葉も出ないのであった。

四

松虫と、鈴虫——

ことばは慄えがちだし、胸にいったいな今の気持も、充分にいいあらわせないのであったが、ふたりは、こもごもに、御所を逃げてきたわけを話し出した。

その動機と。また、半年あまりの苦しい迷いだの悩みだのを。

そして、自分たちの、虚偽な生活を、住蓮と安樂房の前に、残りなく懺悔して、

「どうぞ、この草庵に置いて、私たちを御弟子にしてくださいませ」いい終ると、ふたりとも、そこへ艶やかな黒髪を投げ伏して、さめざめと泣くばかりだった。

「……………」住蓮も安樂房も、それを聞いて茫然としていた。

御所の女性——しかも上皇の寵妃である局が、人目をしのんで、この山庵へ来たということだけでも、重大な問題だ、事件である。

（こんなことなら、上へあがるでなかったに——）という悔いの色は、住蓮にも安樂房の顔にも、同じようにうごいていたが、彼女たちの命がけな熱意を聞いてみると、（さもあるう）と、同情の念がうごき、やがては、ふたりの泣き入るすがたに、

（これほどまでに、自己の生活の非を悔いて、真実の生命に甦えろうとしている者を、どうして、すげなく振り捨てられよう）と、共々、涙がにじんでしまうのであった。

しかし——おそろしいことだ、とも思うのであった。眼前の事実には戦慄をせずにはいられなかった。

もし、ふたりの乞いを容れて、このまま草庵に匿しておいたらどうなるか？——である。たいへんな結果になることは分りきっている。

「？ ……」腕をこまぬいたまま、二人の若い沙門は、ただため息をつきあうだけであった。二人が、自分たちの生命がけな願いを容れてくれそうもないと見ると、松虫も鈴虫も、

「二度と、御所へは帰れぬ身です。もし、ここにも私たちはいることができないとすれば、死ぬほかはございませぬ」もう泣いていなかった。

彼女たちは、あらかじめ死を賭しているのである。死をうしろにしている強さが眸の底にあった。むしろ狼狽しているのは安樂房であり住蓮のほうであった。

「……弱ったのう」

「む……む……」果てしのない困惑が、いつまでも重苦しい吐息をつかせていたが、

「では、御所へは、どうあっても、お帰りなさらぬ覚悟ですか」

「帰りませぬ」

「しかし……」懇々と、諭しかけると、

「いいえ、私たちの願いの無謀なことは分っておりますが、こうなることを、よく知っても、こうせずにいられない気持で御所を出たのですから……」教養も常識もあるこの女性たちである、何を今になって、常識めいたことを受け容れよう。諭しかけた住蓮は、かえって自分が恥かしくなった。

「……安樂房。ちよっと、あちらへ行って、相談しよう」「うむ」

「では、しばらくお待ちください。中座して失礼ですが、篤と、別室へ参って、相談したうえで答えいたしますから——」と、二人はそこを立った。

五

真つ暗な縁を、住蓮は先に立って行く。

「どこへ」安樂房が、ふと疑って、こう訊くと、

「御仏の前へ」

「そうか」二人は、縁づたいに、法勝寺の本堂まで行った。

そこには、明りもない、火の気もない。

暗黒の中を、二人は、足さぐりで、弥陀の聖壇の前に、黙然と坐った。

「こういう時には、御仏のまえで、弥陀のお心にたずねて事を決めるにかぎる」

「よう気づかれた」

「さて……どうするか？」

「それだ……」ここでも、ふたたび重い嘆息が先にくりかえされる。

住蓮の考えとしては、もう一応、ふたりをよく説得してみ、それでどうしても御所へ帰らぬならば、やむを得ない手段ではあるが、これからそつと自分が御所の吏員へ訴えに行き、ふたりの身を穩便のうちに内裏へ歸してもらうように頼もう——というのであった。

「さ？……」安樂房は、彼の考えを、欣ばない顔つきでいった。

「それは、どうかと思う。——死を賭しているあのふたりを、それでは、むざむざと、殺してしまうことにはなりはせぬか」

「では、そのもとの考えは」

「わしは、助けたい」

「助けたいのは、この住蓮も同じだが、その方法があるまい」

「わしは、とても、ああまで縊^{すが}つてきた者たちを、山莊から突き出すには忍びない」

「では、望みを容れてやろうというのか」

「ウム……」

「もつてのほかだ」住蓮は、声を励まして、

「わしも若い、そのもとも若い。しかも清^{しょうじょう}淨を尊ぶこの山莊に、あんな麗人を二人留め置いたら、世間は、何と見る？」

「御弟子にしてくれというているのだから、二人は、麗^{うらわ}しい黒髪も剃^そってしまう覚悟じゃないか」

「それにしても」と、住蓮は、闇の中でつよく顔を振った。

「女と、男ではないか。——しかもお互いが若いのに」「ちがう、ちがう！」安樂房も、友のことばにつれて、ひとりでに声が激して行った。

「そういうおん身の考え方は、浄土門でもっとも忌^いみ嫌^なう聖道門的考えかただ。師の上人のお教えでは、男女の差はないはずだ、そういうけじめを捨てよという所に念仏門の新味もある、狭い旧教とちがった意義もあるのだ」

「わかつている。——だが、世間は」

「おん身は、この処置を、世間へ訊くのか、御仏の心に訊くのか」

「ウム」と、住蓮は声をつまらせて、

「そういわれると困るが」

「おれたちは、信仰の子ではないか。御仏の心をもって信念とするからには、世俗の思わくなどを考えていては、

何もできやしない」

安楽房の情熱的なことは、諄々^{じゆんじゆん}と、友の意見を圧してゆく。彼は彼女たちを救うために、多少の難儀はかかって、何とか、あのふたりの喘^{あえ}いでいる地獄の淵^{ふち}へ、手をさしのべてやりたいという。

「どんな者にでも、弥陀^{みだ}の慈悲はひとしくなければなるまい。——場合や事情に惑^{まよ}っている人は、人はおろか、自分すら救うことはできない。あの女性^{にょしやう}たちは、そこに目醒めて、死を賭して、脱け出してきたのだ。どうして救わずにいられるものか」彼のそういう眼には、涙が光っていた。

葉隠^{はかく}れの花^{はな}

—

その後。御所の大宿直^{おおとこのい}の公卿^{くけい}たちや、上達部^{かんだちべ}の吏員^{りいん}などは、

「どうしたものだろう？」茫然と、事件の裡^{うち}に自失して、その処置も方針もつかず、幾日かを、ただ困惑と空^{むな}しい搜索に暮^くれていた。

「——仙洞^{せんとう}のご帰還^{きげん}までに」と、最初のうちは、躍起^{えつき}になつて、焦心^{あせ}つたのである。

だが、松虫の局^{つばね}と鈴虫の局の行方は、あの晩かぎり、杳^{よう}としてわからない。

「深草の辺に、あやしげな女房が二人して住んでいるそうな」そういう報^しらせに、

「それ」と、すぐさま衛府^{ゑふ}の侍を走らせてみると、それは、郷住^{さとす}まいになつたさる武家の姉妹^{きょうまい}であった。

「志賀から北国路への道を、被衣^{かすき}した若い女がふたり、駅伝の駒を雇^かつて行った」と、その方面の役人から飛札^{ひさつ}が来ると、

「きつと、それだぞ」と、ばかり、大宿直^{おおとこのい}の公達^{きんだち}は、侍をつれて、騎馬で追って行った。

吉報^{きちほう}いかに？——と、御所では鳴りをしずめて待っていたが、やがて、四日も過ぎて、へとへとに帰つてき

た公達輩の話では、

「追いついてみれば、何の事じゃ、越前の庄司が娘と、その腰元ではないか」告げるほうも、がっかりであったが、聞くほうも落胆した。——この上はと、今までの秘密の裡に事件をつくろってしまおうとした方針を変えて、中務省捕吏の手も借りて、洛内から近畿にいたるまで触れを出した。

辻には、高札を立て、松虫の局と鈴虫の局の年ごろや面貌を書きそえ、院の衛府まで、そのありかを告げてきた者には、恩賞をとらせるであろうと告示した。

しかし、それを見て、衛府へやってくる民衆の密告が、一つとして、あたっていたものはなかった。

「なんのことじゃ、これでは、よけいに繁雑になるばかりではないか」院の吏員たちは、よけいに、方針の混乱をきたして、悲鳴をあげた。

とこうする間に、その月も越えて、十二月の下旬、後鳥羽上皇は、すでに熊野からお帰りになった。

逆鱗は申すまでもない。お留守をあずかっていた公卿輩はもちろんのこと、行幸に従いてもどった人々も、その御気色に慍伏して、

「必ずとも詮議して、日を経ぬうちに、ふたりを捕えて御所へ引き連れますれば——」と、お答えするほかなかった。

先に、告示された布令は、さらに広く諸国へまでわたった。そして恩賞にも、金銀ならば幾額、莊園なれば田何枚と、書き加えられた。

大津口の並木の辻にも、その高札をとりまいて、黒山のように人が立っていた、その中に、黙然と腕をくんでいる牢人ていの男があった。

「——おい、何を見ている？」ひとりの山伏が、その後ろから肩をたたいた。牢人ていの男は、かぶっていた笠をくると振向けて、

「や、播磨房」笠の下に、笑う歯が見えた。

二

「しばらくじゃないか」牢人ていの男は、天城四郎であった。呼びかけられた山伏の播磨房弁円に、肩を寄り添えて歩み出しながら、

「どうした、その後は？」

「どうもこうもないさ。相かわらず飄々たる行者の道をさまよっている」

「犬は？」と、弁円のうしろを見て、

「あの黒犬は連れていないのか」

「ウム」

「死んだのか、かわいそうに」

「いや、斬ってしまった」

「誰が」

「元よりおれがだ」

「飼主が飼犬を斬った、むごいことをする男だ」

「四郎、おまえでも、酷いということを知っているのか」

「人間は、勝手放題な真似をしたあげくだから、殺され

た奴でも、そう酷いという気はしない。——だが、犬なんぞは、ろくな思いもしていないし」

「はははは。おかしいな感情を持っている男だ」

「なぜ斬ったのだ」

「忌々しいことがあったからだ。聞いてくれ、こうだ」

堤の上に、腰をおろした。すすきや秋葉の枯れたのが、根に霜を持っているのか、腰の下でばりばりと折れる。

「この春先だ。まだひどく寒かったよ。おまえと別れてから間もなく、おれは、例の善信の奴が、岡崎の草庵を出て、難波から河内のほうへ旅に出たのを知ったから尾けて行つた。そして、磯長の太子廟に夜籠りをしたのを知ったから、こよいこそと、忍び寄つて、善信めを斬ろうと計つたところが、あの連れている犬のやつが、縛つておいた縄を噛みきつて、大事な刹那に、堂の中へ飛び込んできたろうじゃないか」

「フーム、ありそうなことだな。——そして？」

「わずかな隙に、犬が、吠えたので、善信の奴は、逸早く、おれの刃の先から逃げてしまった」

「追いついて、一太刀と行かなかつたのか」

「それへも、犬のやつが、足や袖にからみついて邪魔するため、とうとう、逸してしまつたのだ。——何とも

残念でしようがない。そこで、忌々しい余りに、狂い犬を、斬つて捨てたというわけだが、しかし、それからはお快々として胸が晴れない。聞けば、善信は、あれから間もなく、またこの都へ帰っているそうだな」

「いるとも。——岡崎の草庵で、妻の玉日と、人も羨

む生活をしている」

「まあいい」弁円は慰めるように、

「そのうちに、またよい機もあるうて。——ところで四郎、あの松原の高札を読んだか」

「読んだ」

「おぬしなどは、この洛中洛外はおろか、およそひろい世間のことは闇の裏まで知っている職業だから、あんなことは、造作もなく分っているのだろうな」

「松虫と鈴虫の行方のことか」

「そうだ」

「いくら闇夜を働いている盗賊でも、そんなことはわからねえよ。分っていれば、すぐ院の衛府へ駆けつけて、褒美の黄金にありつこうというもんじゃねえか。……ところが近ごろは、この四郎も、見たとおり尾羽打ち枯らしての不景気だ。何と弁円、知っているなら、松虫と鈴虫のありかでもおれに教えてくれねえか」

「はははは、そいつあ、あべこべだ。おれのほうこそ、訊きたいところだ」

三

「弁円、山伏のおめえにも、やはり慾はあるんだな」

「ばかをいえ」

「でも、松虫と鈴虫のありかを知りたがっているのは、いわずとも知れている、恩賞の金にありつこうというのだらう」天城四郎は、そういうことを愉快がる男だった。

自分の悪魔主義を肯定してよろこぶのである。

「ちがう」弁円は、首を振って、

「おれは、知行だの金だの、そんな物は要らん」

「じゃあ何のために——」

「善信の奴に、痛い目を見せてやるためだ、復讐の一つとなるためだ」

「はてね？」解せない顔をして、四郎は、きのうあたり剃ったばかりらしい青い頬から腮をなでた。

「はてなあ……」

「わからぬか」

「分らぬよ」

「おれの想像だが……しかしこの想像は外れていないつもりだ。——松虫と鈴虫のふたりは、きつと、吉水の法然上人の所にかくれていると思うのだ」

「えっ、吉水に」

「さればよ」

「どうして」

「——いや、確証はない。けれども、そういう気がしてならないのだ。なぜならば、今、女性のあいだで、最も持て囃されている教義は何だと思う」

「法華経かな？」

「法華経も、上流の女性のあいだにはひとところ行われたというが、それは極めて小乗的にだ。もっと、はつきりと、今の社会の女の気持をつかんでいる教義があるじゃないか」

「あ。念仏門だ」

「そうれみろ。庶民から上層の女まで、念仏に皈依した女性というものはたいへんな数だ。内裏の女官のうちにも、公卿の家庭にも」

「ムーなるほど」

「おれはそこでふと思いついたのだが、上皇の寵妃が、二人までも、御所を脱け出すなどというのは、容易にできることじゃあない。世間では、当然、恋愛だといっているが、色恋の沙汰なら、二人づれでは走るまい」

「そうもいえる」

「第一、男があつて、そこへ走ったものなら、その男の周囲からすぐ知れる。また、死ぬ気なら別だが、さもなければ、御所を脱け出したからとて、満足に添いとげて行かれるものではなし、いくら恋は熱病でも、ありえないことだとおれは考える」

「いや、そうでもないぞ。若い女のことでは」

「まあ、それも疑問があるとしておいてもだ、衛府の役人や、捕吏が、教門のほうへは少しも手を廻していない様子ではないか、それはどうだろう」

「まさか——と知っているからさ」

「それが手落ちだ」

「手落ちかなあ」

「お上も、世間の者も少しも眼をつけないその方面を探るとしたら、叡山でもない、高雄でもない、奈良でもない、やはり吉水がいちばん臭いという結論になるのだ。」

——どうだ四郎、ひとつおぬしの自由自在に暗闇を見る眼と足で、そいつを一つ突きとめてみないか」

「ム、やってもよいが」

「恩賞の金はそっちで取るがいい。その代り、お上へ密告するほうのことは、おれにまかせてもらいたいのだ」

四

「おもしろい」四郎はいった。弁円がこの事件をもって、自己の復讐に利用しようとする肚だくみ以上に、天城四郎は、そういう社会的な秘密を暴露（ばくろ）して見ることに、悪魔的な興味を多分におぼえるのだった。

「では、俺がひとつ、腕によりをかけて、探ってみよう。そこで、松虫と鈴虫のありかは、やがて近いうちに、きつと俺が突き止めるにちがいないが、そうしたら、どこへ知らせるか」

「すぐ、おれの所まで」

「——といって、宿所が分らなくちゃ、知らせるにも、知らせようがないじゃねえか」

「たいがい、毎日こうして歩いてるが、京にいた間は、聖護院の西の坊を宿にしているから、そこまで、やって来てくれまいか」

「よし、待っている、吉報は近いうちだ」

そう約束して、二人は、加茂堤（つつま）を北と南へわかれた。翌晩、四郎は身軽ないでたちに黒い布（ぬの）を頭から顔へ巻いて、吉水禅房の外をうろついていた。

何気ない風（ふう）を装（よそお）って、禅房の門の前を通りながら、奥をのぞくと、まだ燈火（ともしび）が見えた。

客が話し込んでいるらしいのである。四郎は、樹蔭に立っていた。しばらくすると、一人の武士と二人の法師が、禅房を辞去して、門の外へ出てきた。

その訪客が出てゆくと入れちがいに、四郎はツイと門の中へ入った。——彼が入り込んだのを気づかない禅房の者は、その後で、門の扉を閉め、やがて、奥の燈火（ともしび）も消されて、静かな闇の底に眠りについた。

四郎は、易々（やすやす）と、塙（かき）の内（うち）へ入って、そこらの建物を見まわした。

講堂、房、書院、厨（くりや）、寐屋（ねや）などの棟が、かなり奥の林まで曲がりくねって建ててある。初めは、上人（しやうにん）とその弟子の少数だけが住むに足るだけの、ほんの一草庵に過ぎなかったものが、いつのまにか、必要に迫られて、次々に建増して行ったので、屋根と棟に統制のないのが目につく。

「? ……」のそりのそり、四郎は腕ぐみしながら、その戸の外を忍び足に歩いた。時折、雨戸のふし穴へ眼をつけたたり、じっと、耳を寄せたりしながら、彼らしい神経（しんけい）を研ぎすまして、視覚、聴覚、嗅覚（きゆうかく）、あらゆる官能を働かせていた。

——すると。一棟の戸のうちから嬰兒（あかご）の声がもれてきた。乳でも欲しがるように泣きぬくのであった。彼はハッとして立ち竦（すく）んでいる。

「この棟だな、女のいるのは」と床下へしゃがみ込んだ。

誰か、その声で起きたらしい。しきりと、夜啼（よなな）きする嬰兒（あかご）をあやしているようであったが、やがて、雨戸を開

け、
「オオ、泣くな、泣くな……」縁の上から、嬰兒に尿を
させ初めた。
霜の立っている土の上に、無心な嬰兒の尿が湯みたい
にそそがれた。四郎は狼狽して、
「あ……」奥へ身を退いたが、その弾みに、床下の横
木に頭をぶつけ、眼から火が出たような痛さを、顔をし
かめて泳がせていた。

五

「ひどい奴だ」頭の上の戸が閉まったので、彼は床下で
ほっとしながらつぶやいた。
「……坊主め」そんな些細な——偶然なことにも——彼
の眼は遺恨をふくむのだった。

「——見ていやがれ、間もなく、この吉水の禅房も、ペ
しゃんこにしてくれるから」

嬰兒の泣き声ができるようでは、この一棟の房にこそ、
女人在るに違いないと、彼は、根気よく、耳をすまし
ていたが、時おり、床下へ洩れてくる人声や足音は男の
ものであって、女のいるらしい気配はなかった。

「では、他の室かな？……。そうだ、あんな大事件を
惹き起した内裏の女だ。うかつな所へ起き臥しさせてお
く気づかいはない。もっと、誰にも気づかれないような
密室だろう」

真冬の暗い風がふき抜けるので、床下は、身が硬ばる

ほど寒かった。古い鉋屑が水気をふくんで溜っていた。
天城四郎は、墓のように四つ這いになって、奥へ奥へと
這いすすんで行きながら、
「わずかな恩賞の金では、割に合わねえ仕事だぞ」と、
思った。

だが、その恩賞の金よりも、彼には、露悪的な興味が
あり、この念仏門という大きな勢力の崩壊を、他人の火
事のように傍らから見る楽しみのほうが大きかった。
「あ……。誰か、起きているな」ふと、縁の隙間から洩
れている針ほどな細い灯影を見つけた。四郎は用心ぶか
く、それを見つめて、しばらくは、近づかなかった。

——と、どこかで、

な、む、あ、み、だ、仏

な、ま、み、だ、仏

な、ま、み、だ

なまみだ

念仏の声が地底から湧くように起ってきた。

非常に大勢の声のように思えたが、それはただ一人の
唱名であった。

「誰だ、今ごろ」四郎は、いぶかった。

「金にもならねえものを、この寒い真夜半に、何で、ぶ
つぶつあんな文句を称えていやがるのか……。世の中に
やあ、酔狂な野郎もある」奥へすすむには、どうしても、
その唱名の声のする下を這って行かなければならなかつ
た。

四郎は、念仏がやむのを待っていた。すぐやめてしま

うだろうと思っていたのである。——だが、深々と、更ければ更けるほど、その唱名には、熱と、無我の信力が加わって、やがて夜が白みかけても、容易にやみそうな様子も見えなかった。

（何も、待っていることはねえのに！）と、彼は自分でも思うのであったが、何となく、その音声には、天井でも床下でも、十方の暗闇を見破っている人間の五韻が感じられて、その人間のいるすぐ下を通ることが、危険に思われてならないのであった。

「ばかな！」と、彼は、自分のそうした観念を、時によつて生じた理由のない気怏れと自嘲して、ずかずかと、這い出した。

そこはまた、一段、床が低くなっているので這いにくかった。何か、竹の竿みたいな物に、膝をかけたのであろう、ばりつと、細竹の折れるような音がした。

「？ ……」

すると、頭の上の念仏の音が、ぴたと止んだ。

六

唱名の声がしている間は、その唱名の声に威圧され、今また、その声が糸の切れたようにぷつと止むと天城四郎は、

「？ ……」ハツと身を竦ませた。

「気どられたかな？」彼は、いつもの不敵なたましいを失って、疑心暗鬼の眼を、床下から上げた。

すると——案のじようである。廊下のうえをギシギシと誰か踏む音がした。そして、戸の開く音がしたと思うと、

「たわけ者っ」外へ向って一喝した者がある。錆のある太い坂東声だ。

四郎は、ぎよつとして、息を嚥んだ。僧房とはいえ、吉水の門下には、熊谷蓮生房とよぶ関東武者の果てや、その他、源平の役で働いた名だたる侍の末が幾人も剃髪しているとはかねて聞き及ぶ所である。

（——そんな奴に捕つては）首をすくめて、（駄目だ）ついに、気を挫いてしまった。

それから二日ほど経った白昼である。冬も、昼中は暖かかった。上人はまた、病中の由で、きょうはお顔が拝まれまいと噂していたが、吉水の法筵に、老幼にもわかるようなやさしい法話の会があると聞いて、ぞろぞろと、在家の人々が集まった。

つい四、五年前までは、そういう法話を催しても、百人か二百人がせいぜいしか寄らなかつたが、近ごろでは、吉水に幾日の日にと、分りさえすれば、洛外の遠い土地から、百姓たちまでが、話を聞きに来るので、講堂や僧房の全部をあげて、その日は、民衆たちへ開放することになっていた。

「ほう？ ……」銭が要らぬことと思って……閑人がよく寄って来やがる」四郎は、一般の聴衆の中にまじって、大あぐらをかいていた。

——それでも、多少は気がひけるとみえ、なるべく、

他人の背中を楯たてにして、講壇のほうから直接自分の顔が見えないように注意していた。

元より、説教を聞こうなどという意志は少しもない。

彼は、眼ばかりうごかしていた。足がしびれると、すぐ立って、縁へ出て、

「う、あ、ワあ……」と、欠伸あくびをする。

また、用ありげに、僧房の中を、うろうろ歩き廻った。わざと、道をまちがえた振りをして、台所のほうへまで、歩いて行った。

「いねえな。どう嗅かいでも、ここには女のおいがしねえわい。やはり、吉水には匿かくまわれていねえとみえる」

彼は、弁円のことだが、腹立たしくなって、

「あの野郎、とんだ無駄骨をさせやがった……」と、恨んだ。

見限りをつけて帰ろうと思ったが、禅房の門まで人がいっぱいなのである。それに、何となく気け懶だるくもあったので、彼はまた、人混みの中に坐り込んで、ケロリとした顔をしていた。

法然ほうねん門の人々が出て、代る代るに、念仏門の教えを説いている。聴者は、咳声せわぶきもしないで熱心に聞き入っていた。四郎は、そういう人々を見まわして、

「何がいったい面白くて？——」と、不思議な顔をした。

そのうちに、彼は眠くなってしまった。南縁の猫のように、眼を細め、涎よだれをながして、こくりこくり居眠り始めた。

七

時々、はっと、自分の居眠りに気づいて、四郎は赤い眼をあいた。そして、さすがに少し間のわるい顔をしながら、まわりの聴衆を見まわした。

だが、聴衆は、水を打ったように静かな空気を守りつけ、眼も、耳も、全身をもって、法話の壇のほうへ向けていた。一人として、そこに居眠っている四郎の様子などに気を散らしている者はない。

「ホ？……」仏教の話などには、何の感興も持たないはずの四郎が、その時、やや眸めをあらためて、前の者の肩越しに、壇のほうへ、大きな眼をみはった。

「善信だ……」思わずつぶやいたので、そばの者が、ふと彼の顔を見た。

四郎は、下を向いた。てれ隠しに顔を撫でる。

——聞くともなく、善信の声が耳へ流れこんでくる。覚えのある声だ。

（しばらくぶりだな）と、思う。

壇の上に立って、岡崎の善信は今、低い音吐おんとのうちに何か力強いものを打ちこめて、諄じゆん々と、人々と、人々のたましいへ自己のたましいから言葉を吐いているのだった。

めっきり体が弱くなって、法然上人が人々へ顔を見せることができない日でも、（オオ、善信様が）と、彼のすがたを仰ぐと、聴衆はそ

れだけでも満足するのだった。随喜して、もう口のうちの念仏に素直な心を示すのだった。

その善信が、かなり長い時間にわたって、庭面の暮れるのもわすれて、自己の信念を説き聞かせていると、人々は、いつか、涙をながして、

（おれは間違っていた）

（生き直ろう）

（もつとよく生きよう）懺悔の気持をいっぱいにとって、耳にも口にも眼にも、念仏の光のほか何ものもなく聞き入っているさまであった。

四郎は、腮へ手をやって、

「笑わせやがる」と、肚のそこで嘲んだ。

「——裏と表が見えねえから坊主は有難がられるのかと思っていたら、善信などは、坊主のくせに、女房を持ち、岡崎の庵室で、あの玉日というきれいな女と、破戒の生活を大びらにやっているのに、それでもまだ、愚民どもは、有難がっていやがる。度し難い奴らだ」

彼は、むかむかしてきて、そこに坐っていられない気がした。ひとつ、ここから起ち上がって、

（みんな！ 眼をさませ）と、呶鳴ってやろうか。そして善信が、いかに、破戒の墮落僧であるかを、おれが一席并じ立ててやろうか。

そう思ったが、考えてみると、自分もあまり人中で大びらに顔を晒すことのできる人間ではない。誰か、気がついて、

（天城四郎だ）

（大盗の四郎だ）

指さされたら、大変なことになる、さっそく、自分から先に逃げ出さなければならぬ。

「ちいッ……いつまで同じことをいつてるんだ」彼は、うるさい意見でも聞くように、口のうで舌打ちを鳴らし、「わ、わ、あ——」と、大きな欠伸をかみこころした。

八

悪人——といったような声がふと耳に入った。四郎はぎよつとして首をもたげた。

（俺のことを何か知っているんじゃないやねえか？）猜疑の眼を光らして見まわすのであった。

善信の法話の言葉のうちにである。幾度も、悪人という語が用いられた。悪人という語が出るたびに、四郎はぎくりとして、

（俺へ面当てをいつてやがる）と思った。

だが、周囲に充ちている聴衆は、相変らず熱心に、善信の法話に耳をすましていただけであって、四郎のほうを見る者などは一人もないのである。

しかし四郎は、多くの人々が、自分に無関心であることに拘わらず、悪人という言葉が癢にさわった。こんど何か自分の面当てがましいことをいったら、躍り立って、壇にいる善信の襟がみを引っ掴んでやろうと心に企んでいくらしく、じつと、聞き耳を欹てて、善信のことばを聞いていた。

——すると、その耳へ諄々^{じゆんじゆん}と入ってきたのは、善信の説いている真実な人間のさけびであった。他力の教えであった。念仏の功力^{くりき}だった。——また、どんな人間でも、心をそこに発した日から、過去の暗黒を捨てて、往いて生きる——往生^{おうじやう}の道につけるものだという導きであつた。

それが、実証として、善信は今、こうもいつているのであつた。

善人でさえなお往生がとげられる。

なんで！ 悪人が往生できないということがあろうか。

聴いている人々は、最初は何か間違いをいつているのではないかと思つたが、だんだんと善信が説いてゆくのを聞いて、

（なるほど）と皆、深くうなずいた。

単に、悪いことをしないという善人よりは、むしろ、悪いことはしても、人間の本質に強い者のほうが、はるかに、菩提^{ぼだい}の縁に近いものだということもわかつてきたし、また、そういう悪人がひとたび悔悟して、善に立ち直った時は、その感激と本質が加わるので、いわゆる善人の善性よりも、悪人の善性のほうが、かえつてはやく御仏^{みほとけ}の心へ近づくこともできる——

ひとたび悪業の闇に踏みこむと、無間の地獄に墮ちるように、聖道門^{しょうどうもん}のほうではいうが、われわれ他力本願の念仏行者は、決して悪人といえども、それがために、憎むこともできない、避ける必要も持たない。ただ、ど

うかして、その悪性が善性となる転機に恵まれることを願ひもし、信じもするものである。

こう善信は話した。

およそ人間の中に真の悪人などはいない。善人の心にも悪があり、悪人の心にも善はある。悪人と呼ばれるものは、社会からそういうけじめをつけられて、自身も、悪を嘆美^{たんび}したり、悪人がつたり、悪を最善のものと思つたりしているが、その実、彼も人間の子であるからには、常々、風の音にも臆^{おく}したり、末のはかなさを考えたりして、必ず、われわれのような生きがいを感じることでできないでいるのだ。世の中に、不愍^{ふびん}な人間という者がかぞえれば、路傍の物乞いより、明日^{あす}の知れない瀕死の病人より、そういう日常坐臥に、人間のくせに、人間に対して負け目^めをもっている悪人である。

善信の話は、それから先も尽きなかった。人々は、まったく、水の底のようにひっそりして、皆顔をうなだれて聞き入っていた。——すると、誰ともなく、聴衆の真ん中で、不意にオイオイと声をあげて泣き出した者があらう。

「おや？ ……」初めて、人々は、眼をそこにあつめた。見ると、天下の大盗といわれる天城四郎ではないか。四郎は、子供のように泣きやまなかつた。

九

人々は驚き怪しんだ。

その無数の眼につつまれて、四郎は、手放して泣きじゃくった。

「なんじゃ」

「どうしたのか」そのうちに、誰ともなく、

「あれは、天城四郎とよぶ、強賊だそうな」

「えっ、賊？」

——法話はすでに終わっている。暮色につつまれた禅房のむしろは、その混雑と、不審な男のあらわれに、いつまでもがやがやしていたが、やがて一人の法師が来て、泣きじゃくっている四郎の手を取り、宥めながらどこかへ連れて行った。

今までとはまるで違って、しいんとした一室に、短檠の灯だけが、ボツと橙色の小さな光を立てていた。

「ここで、お待ちなされませ」法師がいうと、

「はい」四郎は、顔も上げ得ないで、まだ何か嘆いている。

ほど経て、静かな登音がしてきた。四郎はうしろの戸があくと、怖じるように隅へ身を退いた。

「オウ、久しぶりのう」先ほど、法話の壇にすがたを見せていた善信であった。

四郎は打ちのめされたように平伏していた。善信はすり寄って、

「お汝、きょうはよう話を聞きにござられたな。……したが、何でそう泣かれるのか、解せぬが」

「善信どの」しがみつくように四郎は訴えた。

「——怖ろしくなった。おれは、おそろしくなった」

「はて、何が？」わざと訊ねると、

「こうしている身の果てが」

「うむ。……それだけでござるかの」

「いや、何もかもだ。……今日まで盲滅法に生きてきたが、過去も怖ろしい、現在の悪業もおそろしい。しかもその悪業から抜けることができない宿命かと吐息をついていると、お身様の話には、善人ですらなお救われる、いわんや悪人をやと仰っしゃった、これが、泣かずにいられるだろうか。——仏の弘大な慈悲というものが初めて身に沁みてわかった気がする。……するともう、何だか、泣くよりほかはなくなってしまった」

「オ、四郎。お汝は心の眼がさめたの。何という倅せな男ぞ」

「え、おれが倅せ？」

「見よ、善信をはじめ、この禅房の誰も彼も、御仏の胸にしっかりと抱かるるまでには、みな切磋琢磨、幾十年の苦しみや迷いをしてここに至るものを、そちは、わずか一日のうちに、御仏の手から生れ変わった嬰兒のように誕生したではないか。世にもまれな倅せ者ではある」

「じゃあ、おれのように、あらゆる悪業をし、五体の爪の先まで、悪念悪心に充ちているような人間でも」

「即菩提心。もうお汝は悪人でもなんでもない」

「過去現在のあらゆることもゆるして下さるうか」

「善信——いや仏は嘘を仰っしゃらぬ」

「あ……ありがたい」ふたたび泣きふす手を取って、善信は膝を立てた。

「さ。——師の上人におひきあわせ申そう」

十

導かれて行く縁を踏んで、四郎はその縁の下に忍び込んだ夜の念仏の声を思い出した。

「しばらくそこに……」と、彼を次の部屋に待たせておいて、善信だけが奥の間へ入った。ややしばらくのあいだ、四郎はじつとそこに坐りこんでいた。と、やがて、「入るがよい」と、隔ての襖が開いて善信の半身が見える。

「はい」

四郎は、容易にそこへ入り得なかった。何か怖ろしい重圧をうける感じだった。また、自分のすがたが——いや心がいかにも見窺らしく思えて負け目を感じるらしいのである。

「遠慮のう」これは善信と向い合っている眉雪の老僧のことばだった。はっと四郎は頭を下げてしまった。うつかりしていたがそれが法然上人であると気づいたからだった。

「ここで。はい、ここでもう充分結構でございます」

「寒風が洩る——」と、善信がいつて、

「上人は、ちとお風邪のきみでいらっしゃるのだ。おことばに甘えて」

「でも、同座にはあまりに」

すると上人は、叱るように、

「そんな心はそちの習性じゃぞ、直さねばいかぬ、何のけじめを」と、いった。

「は……」すすんで後を閉て切ると、上人のまわりをつつんでいる暖かな部屋の空気が、やがて、四郎の凍えている心をもつつんだ。

「善信から今、そちのこと、つぶさに聞いて、近ごろのうれしいことの一つに思っているのじゃ。弥陀超世の悲願というのは、たとえ十悪の凡夫でも、五逆の大罪を犯した者でも、ひとしく慈悲をもって見、飽くまで救ってとらそうという御誓願を申したのじゃ。それゆえ、どんな悪逆無道の者とても、如来の悲願を信じて、一念に称名念仏すれば、必ず、生れかわることができ」四郎は、眼をうるませながら、思わず身をのり出して、

「——生れかわる。……才私でも、生れ変ることができましようか」

「見よ」上人の強いことばだった。そして指を、そういう四郎の胸にさし向けていった。

「そちはもうすでに生れかわっているではないか。邪智、妄念の鬼になって、この縁下に、寸前の闇を、猜疑の眼にさぐりながら、息をころしていた時の自分と、こうして、明らかに、安らかに、われらと語り合っている自分と、思い較べてみたら分るであろうが」

「ああ。上人様」四郎は、合掌したまま、頭をすりつけてさげんだ。

「おゆるし下さいませ。何もかも、今までのことは。……善信様にも」こんな弱い男であつたらうかと疑いたい

ほど、四郎は、変ってしまった。木賊四郎、天城四郎と、その悪名を洛内はおろか、近国に鳴らしていた男とは受けとれないほどな姿だった。

四郎は、過去のこと——犯した罪業——あらゆる事どもを喋舌しゃべつてしまいたかった。五臓の毒物を吐くように、彼は懺悔ざんげしては泣きぬれた。そしてこれからは、それを償あがなうだけの善根をしなければならぬと嘆いた。

また、彼は、禅房の床下へ忍んだり、法話を聴く信徒の中に交まじってきたりした目的も、一切、上人と善信に告げた。そして、この教門を倒そうとする策謀が行われていることも注意したが、元より善信もそれは感知していることだし、上人はなおさら戸を打つ冬の風とも心にかけない風なのであった。

十一

（あいつ、どうしたのか？）播磨坊弁円は、こう舌打ちをならして、人通りもない辺りへ向って、人でもいるように罵ののした。

「いい加減な法螺ほらをふきおつて——。口ほどもない奴だ、もう今日で十日以上にもなるではないか。……だのにあれきり音沙汰もない」

いつぞや天城四郎と立ち話でかたい約束をして別れた加茂川の堤だった。そこへ彼はおとといも来てみた。きのうも来てみた、そしてまた今日も、（もしや？）と思って来たのである。

しかるに天城四郎は影もかたちも見せないではないか。聖護院しょうごいんのほうへやって来るかと心待ちにして、毎日、帰るとすぐ宿房の下男に聞いてみるが、手紙も来なければ、使いも見えない。

（まあ、見ていろ。近いうちにおれが吉報を持ってゆくから——）と、さも無造作にいつて、松虫と鈴虫の局つぼねのありかを突きとめてくるように広言して行つたくせに、十日以上も沙汰なしとは、いくら盗賊の通癖とはいってもあまりにずばら過ぎる。

「あいつが広言を吐いてひきうけるようなことをいわなければ、おれが自身で探したものを——」弁円は、腹が立って、たまらなかった。しかし、その文句をいう相手がいないので、彼はつい、独り言に、そうつぶやいて、河原の方を見たり、堤の上を眺めたり、ややしばらくを、意味なくそこで立ち迷っていることしかする術すべはないのであった。

彼がしきりと焦心あせしているのも、実は無理でないものであって、仙洞御所の命はいよいよきびしく、中務省なかつかさしょうの吏員りいんはやっきになって、二人の局つぼねの詮議せんぎに今は白熱しているかたちなのである。

それに、市中まちなかへ立てた官の高札は、たちまち効き目きめがあつて、それに掲示された恩賞を利得しようとする洛内の雑人ぞうにんたちが、密偵みつていになりきったように、寄るとさわると、松虫の局つぼねと鈴虫の局つぼねのありかについて、目鼻をするどくし合っているのだ。弁円が悠々と待っていられない気持はそこにあった。まごまごしていれば何人なんびとかがき

つと探し当てて官へ密訴して出るにちがいない。虻蜂と
らずの目を見てしまふに違ひない。

「ええ、ばかな」彼は、自分の迂愚を罵って、

「——あんな男をあてにして、のんべんだらりと待つて
いる奴が間抜けというものだ。よし、もう当てにすまい。
自分の力で突きとめてみせる」弁円は、杖を持ち直して
歩き出した。——といっても、彼にもすぐ的があるわけ
ではないが。

（吉水）と、思ったが、さすがに彼には、そこへ近づく
気になれない。こっちの探らぬうちに、先に疑われてし
まうだろうと思った。

——どこか、吉水の浄土門に關係のあるほうから探つ
てやろう。外廓から手繰つてゆくのも案外おもしろいか
も知れない。

そんなことを考えながら、三条のほうへ、並木にそつ
て、半町ほど歩みかけると、誰か、後ろで自分と呼ぶ声
がする——

振向いてみると、今、自分が立っていた堤の上に、一
つの人影が見え、手をあげて招いているのだった。

「ア。……四郎か？」と思ったが、それにしては姿がち
がつている。どうやら自分と呼んでいるその男は、黒い
法衣を着た僧らしいのである。

十二

——誰だろう？ 弁円がいぶかりながら元の道へ足を

もどして行くと、遠くから呼びとめた僧体の男も、彼方
から歩み出して、お互いに距離をちぢめた。

そして、双方の顔がわかる程度まで近づくと、

「あつ？」弁円は大げさに叫んだ。

いや、驚くのが当りまえで、彼があつといったのも、
あながち誇張ではない。

「——四郎じゃないか」駈け出して、その僧体の男の
前に立ち、もちど、呆れ返ったように眼をみはった。

天城四郎はきれいに頭を剃っていた。見るからに剽悍
なあ野武士ていの姿はどこにもない。この寒空にうす
い墨の法衣一枚なのだ。そして、惨忍にかがやいていた
眼も、酷悪に尖っていた鼻ばしらや顎骨も、どこことなく
和んでしまつて、つい先ごろここで、

（よしつ、待っている）と、悪業へ勇み立って行ったあ
の大盗らしい面影もないのである。弁円はあまりのこと
に、

「うむむ……」ややしばらく唸っているばかりであつた
が、

「おいっ」いきなり四郎の肩へ手をかけ、揺すぶるよう
にしていた。

「ど、どうしたんだ一体、その姿は。——毎日、どれほ
どこでおれは待っていたか知れないぞ。してまた、頼
んだことは、突きとめたか」四郎は、にやりと笑つて、

「弁円……」

「なんだ」

「おれはもう、神通力を失ってしまった。その代りに、

この通り、仏果の功力というものを授かった」

「待てオイ。——貴様はいつたい正気か」

「正気だ」

「そんな姿に変わったのは、あの事件の秘密を探るために、吉水禅房の奴らをあざむくための手段にやったのではないのか」

「たれが、嘘や手段に、頭を剃るか。——わしはついきのう、上人のおゆるしを賜わって、岡崎の善信どのの手で得度していただいたのだ」

「得度を」

「おれは初めて、明るいこの世を見た。うれしくて、欣しくて、堪らないのだ。このさわやかな心持を誰に話そう？　……。考えてみると、おれの母も父も、おれを生れぞこないの悪鬼だとばかり嘆いていた。その両親もどうしているやら。……。ああ誰かにこの欣びを告げたいがと——そこで貴様のことを思い出してやって来たのだ」

「——えつ、そんなことで、この弁円を思い出したのか。じゃ松虫鈴虫の行方を突きとめてくれと頼んだことは」

「もうよせ」

「な、なんだと」

「つまらぬ邪念に躍起となって、おのれも苦しみ、人も苦しめてどうするか」

「待て、ば、ばっか。——おれは貴様から意見を聞こうなどと思わぬ」

「悪いことはいわぬから、人を呪詛することはやめにしろ。善いことはしなくとも、それだけでもよほど自分が

楽になるから」

「さては、てめえは吉水へ忍び込んで行って、あべこべに吉水禅房の法然や善信に騙かられたな」

「勿体ない、おれを生れ甦らせてくれた師に対して、悪口をたたくと承知せぬぞ」

「何をいうかつ」弁円は杖をふりあげて、四郎の横顔へ、ぴゅっとそれを振り下ろした。

十三

四郎は、身をひねって、弁円の打ち込んできた杖を小脇へ抱きこんだ。

「何をするツ、弁円」

「知れたことだ。よくも約束を裏切ったな。貴様は、念仏門の魔術にかかったのだ。察するところ、吉水の法然や善信に、こっちの策略を喋舌ったであろうが」

「元より、何も——かも懺悔した。して悪いか」

「うぬつ、見損なった。もう、生かしてはおけん！」

「うろたえるな、髪は剃り落しても、まだ、天城四郎の腕の力は抜けていねえぞ」

「おもしろい」弁円は、足をあげて、四郎の腰骨を蹴とばした。そしてふたたび、杖を持ち直して、りゅうりゅうと暴れまわってくる。

四郎は、跳びさがって、

「心得た」と、法衣の袖をたくしあげ、拳をかためて罵った。

「よしっ、こんどは汝^{てめえ}を得度してやる。眼を醒^さませ」
「しゃら臭い^{くさい}」二人は、ついに、四つになって取っ組んだ。背に笈^{おし}を負っているのが弁円の体は自由を欠いていた。あっ——と声を横に流して並木の根がたへ彼は顔と肩をぶつけていた。

「ざまあ見ろ」四郎は、そういつて、思わず凱歌をあげたが、ふと、自分はもうすでに元の天城四郎ではない念仏門の一弟子であることを思い出して、
(しまった)と思った。

得度をうける時に、かたかくたく戒^{いまし}められていたのである。我^がを出すな——我を出すときには必ず元の四郎が出るぞ——御仏をもってそれを抑えろ——それには何事にふれても念仏を怠るな、ここと思う時には念仏をとねえかかれ、そしてそれを、寝る間も、醒^さめても、不断のものにせよ、おのれのものにせよ——と。

したたかに投げつけられて、額^{ひたい}の血と泥とをこすつて、無念な顔をしている弁円のすがたを見て、四郎はすぐそれを思い出した。——彼は、子供が覚えたてのいろはを口誦^{くちず}さむようにあわてて、

「な、む、あ、み、だ、仏」そういつて、

「痛かったか弁円」と、抱き起した。

「ち……」弁円は、眼に流れこんだ血を、手でこすつて、彼に支えられながら、よろりと立ち上がった。

「おいっ、勘弁しろ。おれはもう元の天城四郎じゃなかった、仏弟子^{ぶつでし}だ、このとおり謝^{あやま}る——」

と、頭を下げるとたんに、弁円は起き上がる時につか

んでいた杖を真つ向にかむつて、

「野郎っ！」天^{てん} 颯^{びよう}から振り落すような力で撲^{なぐ}りつけた。
「ウーム……」さしもの四郎も、二つ三つ、足をよろめかせたまま、ばたつと、そこへ昏倒してしまった。

その背を、弁円は、また、二つ三つ撲りつけた。それでもなお腹の癒^いえない様子であったが、ちょうど、河原から堤へ上がってきた人影があったので、見つかつては面倒と思ったのであろう、

「馬鹿野郎、思い知ったか」そう捨てぜりふを吐き捨てると八ツ乳^{やちち}の草鞋^{わらじ}に砂を蹴^けって、まっしぐらにどこともなく逃げ去った。

火と火

一

鹿ヶ谷しかがやの法勝寺ほっしょうじは、月に幾日かは、必ず法話や専修念仏しんしゆえんぶつの衆しゆ会かいが催されるのに、この十一月しがつから師走しわすになつてからは、

（住蓮が病氣のために）といつて、一回もそれがなかつた。

誰も、それを怪しみはしなかつた。むしろ常々ここへ詣もうでる人々は、

（こういう薬は）とか、

（手製てづくりの甘い物を）とかいって、何か見舞たずさを携えてきて、病人に上げてくれと置いて行つた。その度に、

「住蓮……」

「安樂房……」

二人は、顔を見あわせて、自責にたえない眉を見合つた。

「ああいう善良な人たちを、わしとお身は、あざむいているのだ。——仮病けびょうとは知らない信者たちは、見えていると、一刻もはやく御病氣が癒いえますようにと、御本堂で祈念をこめて帰って行きなさる。——あれを見ていると、たまらないほど苦しい」安樂房は、重い息をついて、山莊の奥でうつ向いた。

沈黙していると、二人の胸には、今さら、悔いがのぼつてきた。——あの松虫の局つぼねと鈴虫の局さへさえここに匿かくまわなければと。

だが、一日ましに、事情が苦しくなるほど、一日ましに、二人は、あの匿かくまい人ひとをふり捨てる氣になれなかつた。

「おれたちは、邪道に落ちているぞ——」と、ある時は、住蓮が告白した。

「なぜ」

「よく自分の胸に手を当てて考えてみることだ、いつの間にか、お身のことは知らないが、わしは鈴虫の局つぼねに恋をしているらしい。……鈴虫の局の眼がものをいう。すると、自分にあらぬ血が奏かなで初めるのだ」

「それは、おぬしばかりじゃない。……実をいえば、わしもだ。わしも何か、そういう自分の氣持に気づいていないことはないが」

「やはり、女人にょにんをここへ入れたのは、わしらの誤りだつた。御仏の旨にちがつていた」

「いや、御仏がではない——つまり自分たちの修行が未熟なためだ。女人を魔視ましし、女人を避けることを教えているのは、旧教だ、聖道門しょうどうもんだ、それではならぬと法然上人も仰せられたことだし、善信御房のごときは、身をもつて、あの通り示されている。——しかも、善信御房の信心は、誰が見ても、玉日さまを妻となされてからの方が、確固として、頼もしげに見えていてはいないか」

「だから吾々も、女人に對して、もっと近づいていいと

仰せられるか」

「だめだ、こんな心では」自分の未熟を無念がるように、安樂房はそういつてもだえた。

「おれなどは、とても善信御房のように、そこからすぐ安心をつかむことはできそうもない」

「では、どうしたものじゃ。……このままあのお二人をここに置けば、自分の信仰がくずれてしまうか、そうならぬ間に、厳しい詮議の者の眼に見つかってしまふのは知れたことだが……」

「お気の毒だが、出てもらおう、この山莊を」

「えっ、追い出すのか」

「そうではない、どこか他のまったく人の気づかぬ所へ、そっと、夜陰にでも、移っていただくのだ」

二

希望の光明に燃えて、御所を脱けだした鈴虫の局であつた、また松虫の局であつた。

——だが、二人がじつと半月も住んでいた狭い部屋は、明りも入らない冷たい部屋だつた。

「どうか、髪を剃してくださいませ。髪を剃してしまえば、もう御所へもどれといつても、戻ることはできませんぬ」二人は、住蓮と安樂房に、何度もせがむのであつた。だが、さすがに、一方はそういう決心もつきかねていた。

「何か、ご用事を、いいつけて下さい。——働きたいのです、どんな辛い水仕事でもしたいのです」これも、彼

女たちが、幾度も願うところだつたが、

「滅相もない」と、安樂房がいい、

「——もうしばらくは、ここにじつと隠れておらねば」と、住蓮もたしなめた。しかし、日が経つほど、世間はうわさを忘れても、その筋の探索はきびしくなるばかりである。

「いつになったら」と、闇の小鳥のような眼をして鈴虫と松虫は、そこにすくみ合つていた。

「もし……」閉めてある妻戸の境で、人の跣音がとまつた。住蓮の声である。安樂房の影もうしろに見えた。

ふたりは、何事かと、小さな胸を躍らせた。もう、夜が更けているのである。日が暮れてから、男性の二人が、女ふたりのこの密室を訪うことはなかった例である。

「——すぐ、お支度をなされませ。吾々が、ご案内する」

「え？ ……。どこへ」

「もう、この法勝寺では、危険になりました。何となく、世間が知つてきたようです。で……相談したのですが、これからずっと山伝いに奥へ入ると、私たちが、仮に住んでいたことのある小屋があります。そこまで行つてください。——それからのことは、後でまた、よくご相談いたしましょう」あわただしい気持が、ふたりを駆りたてた。何かもう足もとから火がついたように落着かなかつた。

被衣して、裾をからげて、ふたりは住蓮と安樂房に従つて行つた。星あかりもない樹の下を登るのだった。松明が欲しいのであるが、それも危険だと考えられるの

で、まったく手さぐりで歩くのだった。

「あぶのうございますぞ」

「はい……」

「まだ、誰が知ったというわけではないから、ご心配には及びません。いよいよ、この山では、危ないとなったら、遠くへ、お落し申しましょう」

「……え。……ですが、私たちは、このお山に、死んでもいたい気がするのです」鈴虫は、そういった。住蓮は、いつとはなく、彼女の手を引いてやっていた。安樂房は、急な坂にかかる、松虫の局を背に負って這い登った。

——捨てられない。若い住蓮は心のうちでそう思った。おそらく安樂房も同じであろう。どうして、この無力な、そして自分たちを、かくまで信じきっている女性を、このまま振り捨てられよう。

あたりの樹々は、露が凍って、白珠をつらねたように氷が咲いていた。大地は、針の山に似ている沍寒の深夜だった。けれど、四人の若人の息は、血は、さながら火と火のように熱かった。

やがて、二十町も登ると、

「やっと来ました。ここです……」と、住蓮は、戸の閉まっている一軒の小さな空家を指さした。どこかで、滝が鳴っていた。

三

めったに開けたこともないような一軒家である。廂

や戸は朽ちているし、床に敷いてある物も黴のにおいで蒸れていた。ある堂守が住んでいた後に、住蓮と安樂房がしばらくここに生活していたことがあるので、貧しい炊ぎの道具や灯りをともす器具などはあった。

「ここならば、しばらくの間は、世間の眼にもふれずにおられよう」木を拾ってきて、二人は火を焚いた。明日はまた、隙を見て、寝具なども法勝寺の庵から運んで来ようと慰めるのであった。

松虫と鈴虫は、この二人の親切に、ただ涙ながれてならなかった。そして、御所の絢爛な襖やあつい綿を思っても、少しも悔いを感じなかった。

美食や、脂粉や、絹のものや音曲や、そういう雰囲気の生活よりも、ここにある真実こそ人間の生活だと思った。——ただ彼女たちはまだ自分たちの装いが、俗のままにあることがともすると意志を弱めているようでない。もつと、今の感激をつきつめて、髪を剃し、袖も裳も、断ちきって、清楚な尼のすがたになりきってしまった。たい念だけがあった。

「おねがいです」

「どんなお誓いでも立てます……」そこへ来てからも、彼女たちは、掌をあわさないばかりに縋った。

安樂房と、住蓮は、ついにそれを拒みきれなかった。

——というよりも自分たちの若い情熱と信仰に多分な危うさを覚えだしていたので、

(そのほうがいい)と思った。

おそらくまた、鈴虫と松虫のほうにも、同じような怖

い動揺が血の中にあつたであらう。お互いが若いのだ、そして極めて危ない火と火を持ち合っているのだ。もしその薄紙にひとしい一線を越えたがさいご、もうふたたび今の安心と信念はあるわけに行かないのである。それには、彼女たちの黒髪を剃すことは、どっちに取っても、絶対な誓いであり、反省の姿を持つことになる。

「では、明日にも」と、二人はいったん山を降りて法勝寺へ帰った。そして、改めてまた登ってきた。

麗わしい尼が二人できた。

安樂房は、松虫の黒髪を。——住蓮は鈴虫の黒髪を、ひとりずつ、剃刀をとって、得度をさずけた。

「ああ……」住蓮は、裏へ飛び出して、ややしばらく入つて来なかつた。安樂房も、この麗わしい若尼のすがたを正視しているにたえなかつた。しかも、相抱いて、寒々と、うれし泣きに泣いているふたりのすがたを見ては、——それをもううれしいほどな彼女たちの過去の生活であつたかと思つた。

「御仏の道に生きまする」

「信仰に生きまする」そういつて、彼女たちはもう、次の日から、柴を拾つて、貧しい炊ぎをしていた。いつ行つても、ただ一体の仏陀を壇において、その前で、念仏をとんでいた。

住蓮と、安樂房とは、交る交るそこへ彼女たちの不便な物を運んでやっていた。——すると、何時とはなく、こう二人の者の行動を知つて、

（はてな？ どこへ行くのか……）と、眼をつけていた

者がある。

吉水禅房や、岡崎を初め、あらゆる念仏門系の法壇のある所を、所きらわず歩きまわつて、狩犬のような鼻を働かせていた播磨房弁円であつた。

四

あれほど、月々の法会や、念仏の唱導を、活潑にやっていた鹿ヶ谷の法勝寺が、近ごろ、はたと戸をとざしている。住蓮か安樂房かが、病氣のためだとは称しているが、弁円は、そのうわさを麓で聞くと、すぐ、

（こいつはおかしい）と直感した。

（病氣なら、吉水から、誰か代る者をよんできても、説法日の法筵ぐらひは開かれる。それに、住蓮も安樂も、少しも麓に姿を見せないというから、何か、べつな理由があるにちがいない）弁円が、鹿ヶ谷へ目をつけたしたのは、そんな動機からであつた。彼は、山伏のすがたではまずいと考えた。笈や杖や服装をすっかり解いて、木樵か農夫かと思われるように身装を代えた。

山刀を一本さして、弁円は毎日山をあるいていた。法勝寺と山荘のまわりをうろついて、裏へ迷いこんだり、夜は床下へ這つてみたり、種々に探つてみたが、

（はてな？）と、思われるだけだった。

もう鈴虫も松虫もいなかったのである。何の怪しいふしも発見できなかった。だが、弁円は、干飯を噛みながらも、そこを去らなかつた。

なぜならば、一人が病氣のためと触れているのに、住蓮も安樂も健在でそこにいることを確かめたからだった。

「臭い。どうもここよりほかにない。見ておれ、今にあればいてやるから」彼の執着心というものは幼少からの持ち前といていい。思いこんだことにはどんな蹉跌（さつてつ）があらうと屈しないのだ。それは彼が寿童丸（じゆうどうまる）とよばれた昔から持っている善信（ぜんしん）（親鸞）への呪詛（じゆそ）と報復（ほうふ）とを、今になつても金輪際（こんりんざい）捨てていない異常な粘り方（ねばりかた）と根氣（ねき）を見てもわかるのである。

「おや……誰か出てゆくぞ……こんな深夜に」四日目の晩（ばん）だった。法勝寺の裏にひそんでいた弁円（べんえん）は、星明りの下に一つの人影（ひとかげ）を見つけた。頭（かぶ）から衣（きぬ）をかぶってよくわからないが住蓮らしい背（せ）かつこうである。

尾行（おつけ）てゆくと、麓（ふもと）へではなく、住蓮は鹿ヶ谷（かがや）からなお上の山路（さんろ）へ一人で登（のぼ）って行くのだった。手になにやら包（ふく）みを提（さ）げている。非常にあたりを憚（はば）かのような挙動（きやうどう）なのだ。

（しめた！）という気持（きもち）が弁円（べんえん）の胸（むね）をいっぱい（いっぱい）に躍（う）らせていた。勿論（もちろん）、住蓮（じゆれん）はそういう犬（いぬ）がついて来（き）るとは知るよしもなかった。彼は、もう上の尼（に）たちが、食糧（しきりやう）がなくなるころなので、深夜（しやんや）をはかつて、それをそつと運（は）びに行くのだった。

この上には人家（にやが）もないはずだと弁円（べんえん）は考えていたが、肌の汗（あせ）ばむような嶮（けわ）しい道（みち）をのぼりつめてゆくと、ポチと、灯（あかり）が見えたのである。――朽（く）ちた板戸（いたど）の破（や）れ目（め）から。

「あつ……」意外（いがい）とせざるを得（え）なかった。住蓮（じゆれん）が立つと、そこが開（あ）いたのだ。そして、炉（ろ）の火（ひ）をうしろにして、美しい尼（に）が二人（ふたり）、何か囁（ささや）き合（あ）って、彼（かれ）を中（な）へ導（み）いた。すぐ閉（し）められた戸（こ）の外（そと）へ走り寄（よ）って、弁円（べんえん）は、板戸（いたど）の穴（あな）へ顔（か）を押しつ（し）けた。息（いき）をころして覗（のぞ）くのだった。

「……ウウム」思（おも）わず大きな息（いき）をつく。

風（かぜ）は満山（まんざん）に轟（ごう）々と鳴（な）って、どこかですさまじい滝（たき）水のひびきがする。星（ほし）は研（と）げて、一つ一つが魔（ま）の目（め）みたいに光（ひかり）っていた。猿（さる）がしきりと暗（くろ）い谷間（やま）で叫（こゑ）びぬく。

樵夫きこりのような男が、ぶらりと叡山えいざんの根本中堂の前に立った。座主ざすの執事らしい僧が、

「うろんな奴、あれを糺ただせ」と、院務を執っている一人へ囁ささやくと、

「これっ」ばらばらと、二人ほど、駈けてきて、男の腕をつかまえた。逃げもしなかった。

「はいっ」と、明哲めいせきに――

「なんですか」

「おまえは何者だ」

「私は、十数年前、当山にいて仲間僧ちゅうげんそうを勤めていたところのある朱王房しゅおうぼうといっていた者です。もっとも只今では、聖護院の印可いんかをうけ、名も播磨房はりまぼう弁円とかえて、山伏となっておりすが」

「なに、山伏じゃ」と、異様な彼のふうていを見直して

「山伏たる者が、何でさような姿をし、山刀など差して、お山をうろついているか」

「ゆうべの夜中から、鹿ヶ谷しかがやの奥峰おくほうから山づたいに参ったので、麓にある山伏の行衣ぎようえを取り寄せて身にまとう違いさまもなかったのをござる。それゆえに――」

「待て、いちいちいうことが不審である」

「そのご不審は、座主にお目にかかってお話する。座主がお会いできなければ、それに代わるお方でもよろしい」傲岸ごうがんな態度である。

しかし、狂人ではないらしい。僧たちは、執事までありのままに取り次いだ。――鹿ヶ谷からと聞いて首をかしげたが、とにかく会ってみようという。

それから、弁円は、足を洗って、一室へ入った。人を遠ざけての密談で、なにか長い時間そこを出なかった。それのみか、中堂からは、にわかに使いが走り、主なる長老や叡山の中堅が二十名も集まってくる。

――何事が起るのか、末輩には分らなかったが、やがてその日の夕方には、弁円は一人麓に降りて、かねて預けておいた所から笈おしや服装をとりよせて、元の山伏にかえり、京の町を大股に急いでいた。

「ここだな」仙洞御所せんどうごしょの前に立って、弁円は杖をとめた。御門垣から少し離れた所には、例の松虫、鈴虫の詮議せんぎに関する厳達が高く掲示されており、その板も、もう雨露うろろに墨がながれていた。

「おねがい仕る」衛府の門に入って、弁円は高らかにいった。

「おそれながら、松虫の局と鈴虫の局のありかを、まさしく見届けて参った者でござる。御上申のほど願わしゅう存ずる」

「なに」と、衛府のうちでは色めき立って、すぐ、彼は評定所ひやうじょうしよのほうへ廻された。

問注所の役人がいならぶ。

弁円は、雄弁に、自身で探りあててきた次第を述べた
てた——勿論、鹿ヶ谷の安楽房と住蓮のことは、極力そ
れを誇張して。

「よしっ」いちいち書きとめて、

「確と相違ないな」

「神仏につかえる身、何として」

「拇印を」と、彼の証を取って、

「追ってお沙汰があるう」と帰した。

弁円は、問注所から衛府を通じて、御門の外へ出た。
門の外には、叡山の法師たちが、頭巾の裡から眼をひか
らして待っていた。

二

「弁円どの。どうだった」法師たちの影は、彼を囲んだ。

弁円は、小聲で、

「上々の首尾さ。——確と、中堂の執事と、叡山の大衆
へ、この由、触れておいてくれ」

「心得た」

「——では、後を楽しもう」

「応」弁円とわかれて、法師たちは山へ走った。

彼らがもどってくることを、もう中腹の寺々では待つ
ていた。

一人が聞くと、先へ走って行って、一人へ伝える。そ
の者がまた、次の者へ伝える。わずかなうちに、このこ

とは、一山のうちに知れていた。

「いよいよ念仏門の滅亡の日も近づいた」

と、人々は暗黙のうちに、叡山天台の独り誇り得る時
代が来ることを祝福して、法敵吉水へやがて襲うであろ
うところの暗風黒雨を想像し、

「こんどは、ちと烈しいぞ。いくら強情な法然でも、善
信でも、致命的な悲鳴をあげるにちがいない」いかに吉
水禅房の人々がそれに処すか——見ものであるうなどと
いう言葉は、かなり長老といわれ碩学といわれている者
の口からも洩れた。

「好機。ここを外すな」叡山はまた、鳴動しだした。

そういう裏面のことなどは元よりおくびにも出すので
はない。例の打倒念仏の理論をにかけて、洛中へあふれ
出した。

南都も、それを伝え聞いて起った。彼らは、朝廷へ向

って、再び、
「念仏停止願文」

をさし出すと共に、辻に立ち、寺に立ち、檄を貼り、
声をからして、念仏門を誂謗した、批判という中正は元
々欠いているのだ、ただ、念仏を仆せ、法然を追え、善
信を葬れ——とさけぶ。

だが、民衆は、まだ耳をかさなかった。笛ふけど踊ら
ず、民衆の批判のほうで、遙かにもう進んでいたのだあ
る。

今——眠ろうとしていたところであった。破れんばかりに戸を叩いて、

「お二人っ！ 起きていますか。——住蓮と安樂です。すぐ、すぐに！ 逃げる支度をしてください、逃げる支度を」まるで、山海嘯やまつなみのような、不意であった。

松虫と鈴虫は、

「アッ……」と全身を凍こらせた。だが、松虫はさすがに年上であった。

「あわててはいけません」わざと静かに、こうなだめて、咄嗟とつさに身仕度をし、足ごしらえまでして戸を開けた。

その時のほうが、彼女はぎょつとした。いつも暗澹あんたんと樹々の風ばかりしている山裾のほうが、真っ赤なのである。そこらの樹木の一本一本がかぞえられて、葉や幹の下草までが、赤い火光にかがやいているではないか。

「火事ですか」

住蓮と安樂は、小屋のうしろで突く這っていた。岩清水へ口をつけて吸っているのである。濡れた顔のまま、

「さ！ 逃げるんです」と、いった。

「あの火事は、法勝寺ですか」

「火事だけなら、こんなにあわてはしません。衛府えふの者がやって来たのです。とうとうやって来た！ 何十人という捕吏を連れて——」

住蓮は、ことばを続けて、

「この峰づたいに——どこまでもどこまでも——人里を避けて、西のほうへお逃げなさい。他宗の者や、田舎いなかの役人などに気をつけて」おののいて、足も地につかないでいる松虫と鈴虫とへ、

「こうしている間に、捕吏が登ってくると、もう最期になります。私たちが、付いて行ってあげたいが、私たちは、これからなお、吉水の上人に、事の由を申しあげて、この禍いが他へ及ばさぬようにしなければなりません」安樂房も、急せき立てて、

「さ、早くなされい。……なあに人界は追われても、到る所に、仏界はあります、浄土はあります」

「では……」と、転ぶようにふたりは細い杣道そまみちを攀よじてゆく。

「気をつけて——」

「はい」

「……気をつけておいでなされよ。……松虫どの、鈴虫どの」

「住蓮様——安樂房様」

「おさらば」法勝寺を焼いている炎は、遠い眼の下に見えるが、吠えくるう風の音と火のハゼる音がそこまで聞えてきた。

峰の背へ——ふたりの影を見送って、

「住蓮」安樂房は、友の肩をつかんで、嗚咽しながら、
「法勝寺が焼ける」

「ム……ム……自分で放^つけてきた火だ。焼けたほうが
潔い」

「みんなおれたちの火悪^{ひいたずら}戯^ごだった。世を救う力もない者が世を救おうとし、人を救う力もない者が人を救おうとした結果だ、仏陀^{ぶつだ}の見せしめだ……」

「だが、安樂房、あんな物は焼けても、また、焼け土の下から若い草は萌^もえるよ、見ろ、念仏門の胚子^{たね}が、あんなに火になって、空へ舞うじゃないか」

「殉教者となるのは、元より覚悟のことだ。ただこれによって、念仏者の精神が、社会へ大きく映^{うつ}ってくれればいいが」

「自分に力のないまでも、魂をもって哀れを訴えてくる者には、ここまで、身をもって、救おうとした自分らの犠牲——いやそういつてはいけない——真心だけは世間にもわかってもらえるさ。……それで満足じゃないか」
「どうだか、心もとないことだ」

「分らなければ、自分だけが、正しくあったということだけでも、おれはみずから安らぐ。——ただ案じられるのは、おれたちの行為が、吉水の上人の御迷惑にならなければよいがという点だが」

「上人はなにも御存じないことだ。上人ばかりでなく、吉水の誰も関^かわりないことだ」

「でも、一応は、お詫^わびもし、またあらかじめ事情をお話し申しておこう」

「元より、それは必要だ。……どう参ろうか」

「二人では、かえて人目につく。——こうしよう、おれは山づたいに、吉水の上人の所へゆくから、そことは、岡崎のほうへ走って善信御房に、この仔細を伝えてくれ」

「よしっ……」と、走りかけて、

「では安樂房、お互いにこれ限りいつまた会えるかわからないぞ……。達者に」

「……お身も」

「だが、どこの山野で暮そうとも念仏は捨てまいな」

「捨てない！ ……捨てるものか！ ……オオ、そこへもう捕吏^{ほり}らしい影がのぼって来るぞ。さらば——」

四

法勝寺はまたたく間に焼けた。附近の樹木は黒い人骨のように手足を突^つ張^はったまま立っていた。余燼^{よじん}の煙のかなたから鈍^{にぶ}い朝陽^{あさひ}はのぼった。

安樂房は、五日ほど、山の中に潜^{ひそ}んで草の根を食っていた。

（吉水の上人に——）と、心は焦^{あせ}心^せるし、

（洛中では、どう噂^{うわさ}しているか、同門の人々に、何か迷惑はかかっていないか）と、案^あじぬいて、どうかして、一刻もはやく山を——と降りる道を窺^{うかが}うのであったが、どの道にも、捕吏^{ほり}の影が立っていて、うかつに里へ出て行ったらたちまち捕^{とら}われてしまうことはわかりきっていた

た。

「住蓮は、首尾よく、岡崎の善信御房のところへ行き着いたろうか」そう考えると、彼もじっとしていることは、^{ひきよう}卑怯に思われてきた。

「よしっ、今夜は」死を覚悟して、花頂山の麓^{ふもと}へ降りて行ってみた。わざと道のない崖や谷間を、熊みたいに通って。

真夜中だった。なつかしや吉水禅房の棟^{むね}は黒くもうそこに見える。彼は涙ばかりが先に立った。——どういってお詫びしようかと。

けれど、禅房の前へ立ってみると、夜半^{よなか}といっても、いつでも、一穗^{いっすい}の灯は必ず見える奥の棟にもどこにも、人の気はいはなかった。墓場のようにしんとしているのである。試みに門を打ちたたいてみても、石つぶてを抛^{ほう}ってみても。

「やっ……これは」やがて愕然^{がくぜん}と気づいたのは、常に人々の出入りする表の門に、大きな丸太が二本、斜交^{はすか}いに打ちつけてあり、そこに、何やら官^{かみ}の高札らしいものが掲げてあった。

ぎょっとしながら——安楽房は顔をそれへ近づけたが、その時、

「誰だっ」闇の中で大きな声がひびいた。いや蹙音^{あしおと}も飛ぶように近づいてくる。安楽房ははね飛ばされたように、附近の林へ逃げこんだ。振向いてみると、二、三点の松明^{たいまつ}が方角ちがいを探している。明らかに、捕吏^{ほり}だった。

——彼の目には地獄の火と邏卒^{らそつ}のようにそれが映った。

生きたそらはなかった。絶えず何者かに追われるように——そしてさまざまな疑いと迷いに乱れながら加茂川まで走ってきた。研ぎたての刀を横に置いたように、加茂川の水は青かった。ふり仰ぐと冱寒^{ごかん}の月は冷々と冴^{ひえ}えているのだった、かかる折には望ましい雲もいつか四方にくずれて。

「ああ……」

安楽房は、橋の袂^{たもと}にもたれて、骨に沁み入るような瀬の水音を聞いていた。——お師の上人はどうなされたのか？ 吉水門の人々はどうなったのか？

ふと、その答えが、傍らの橋畔^{きょうはん}に見出された。いかめしい厚札^{あつふだ}の高札に書かれてある官^{かみ}の掲示である。吸いつけられるように、彼はその前に立った。読み下してみると、

此度^{このたび}、南北の議奏、叡聞^{えいぶん}に達し、諸宗の依怙^{えこ}、人心の謀^{はか}りに依る。茲^{ここ}に源空^{げんくう}（法然上人）安元元年より浄土門を起す、老少ことごとく稼業を捨て、あまつさえ法外科五十余、之れに依って、自今、浄土念仏禁止せらる。

猶^{なお}、一声もこれを停止^{ちやうじ}す。

「あっ……あっ……。なお一声もこれを停止^{ちやうじ}す。……では……」

安楽房は、凍^いてた大地へ打ち伏して、わっと男泣きに、泣いてしまった。

安樂房は、血を吐いたように、失神していた。嗚咽をもらすだけで、身も骨も髪の毛も、冬の月と大地に、氷になるのさえ感じないでいた。

「……済みません！ お詫びのいたしようがありません！ わたくしはこれをどうしてお詫びしたらいいでしょうか。上人様以下、念仏門の諸信徒と諸檀家に対して」彼はすぐ、頭のしんで、

（死！）と意識したが、

（死ぬくらいなことで、このお詫びができようか）と、もっと重い苛責を心のうちで求めた。

念仏停止の官命。

一声もこれを許さず——とあるこの峻厳な朝命。

その禍根が、自分と住蓮の二人のことから起ったのはいうまでもない。

「そうだ」彼は、高札の前から、よろよろと立ち上がった。悽愴な決意が、その顔を月より青く見せていた。

「——自分の行為を、明らかに官へ申しあげて、哀情を訴えて、上人の罪をゆるしていただこう。せめて……せめてそれが……」残酷にまで、冬の月が、彼の蹠蹠として行く足もとを照らしていた。

西洞院の西評定所の門には、赤い篝火が消えかけていた。閉まっている門を打ちたくと、

「たれだっ」と、べつな小門から侍が顔を突き出した。

「おねがいあって参りました。鹿ヶ谷に住む安樂房という者です。自分のいたした罪状について自首いたして出ました。御奉行にお会わせ下さい」

「なに、鹿ヶ谷の」わらわらと四、五名の侍たちが彼の両手を扼して、

「おおつ、安樂房っ」意外な獲物に、

「はやく」一人が眼くばせする、一人が評定所の奥へ駆けこむ。奉行の右衛門尉経雅は、

「——会いたいと」

「そう申しまする」

「引つ搦めて、白洲へ曳け」夜半をすぎていたが、松明の火は、諸方に焚かれ、そこばかりが赤く明るかった。

安樂房は、縄目をうけ、白洲に坐ると、すべてを隠さなかった。ありのままにいった。そして、

「師上人は元よりのこと、その他の同門信徒たちには、なにも知らない儀であります。この身は、いかような極刑に処せられましようとも、決して、お恨みはいたしませぬが、あわれ、御仁恕をもって、念仏門閉止のお罰は、ひとえにお寛大を賜わりますよう、わけても師の上人は、ここ年来、病弱、且つ、専念御行状をも慎まれている折でもありまするし」

血を吐かないばかりに、彼の声は、慚愧と哀涙と熱烈な真心をつくして絶るのであった。——だが経雅は、彼のいうところなどは聞こうともしないのである。

「汝と共に、鹿ヶ谷におったはずの住蓮は、いずこへ潜伏したか」と、追求し、また、

「松虫の局つぼねと、鈴虫の局のお二人は、何地いずちへ落とした。それをいえ」安樂房が、それについては、一言も吐かないので、経雅つねまさは、

「こいつ、自分の勝手なことには、饒舌じょうぜつを恣ほしまにし、奉行の糺問きゆうもんには唾おしを装っておる。容易なことでは、泥を吐くまい、拷問ごうもんにかけろ、拷問にかけい！」と叱咤した。

侍たちは、篝火かがりびの中から、炎のついている松明をつかみ出して、安樂房の顔をいぶした。

六

一方、住蓮はどうしたろうか。

彼が友の安樂房とわかれて取った道も、元より荊棘いばらではないはずはない。いや、住蓮のほうは、もっと酷ひどかった。

「岡崎の善信御房へ——」と、彼は短氣にそこを目ざして人里へ降りて行ったので、たちまち、捕吏の眼にとま

って、
「鹿ヶ谷の売僧まいす！」と、まるで悪魔のように追いまわされた。

遠く叡山のふもとの方まで、彼は逃げ走って、山林の中へかくれたが、そこは実に、捕吏の屯たむろ以上に、危険な地域であった。なぜならば、念仏門の敵地だからである。叡山の山僧たちは、この附近へ鹿ヶ谷たにの一名が逃げこんだと聞くと、奮ふるい立って、山狩りに奔命していた。

——その人々の声高こゑたかにいい交かわして通る言葉を聞いて、

住蓮は、叡山の策動や、この虚に乗じて、素志をとげようとしつつある彼らの肚をまざまざと見た。

「この分では、善信御房の岡崎のお住居すまいも、どうあろうか」と、心もとなく思いながら、深夜、山林からそっと出て近づいてみると、果たして、遠く竹や柴で柵さくを作つて、そこへ通う道には、官の見張が立っている。

河原づたいに、彼は、洛中へまぎれ込んだ。そして、様子を聞くと、市中は沸わくような騒ぎなのだ。そして、口々に、

「御停止ごちようじじや」

「念仏は、一言も」

「ああ、南無」

「それ、うかつに口へ出すと」

恟々きようきようと、人心はおののいている。彼らには、なぜ念仏を口にすれば国法にふれるのか、いつてならないのか、分らなかった。——つい幾年前いくとせには、畏かしこきあたりまで召されて、その講義を嘉よみし賜い、堂上や多くの尊敬すべき人たちまでが、かつてはこれこそ人生最高のかがやきと仰ぎ唱えた念仏を、それを、口にしても、国法の犯人になる。——どうしても解かれない疑いだった。

そうして、御所の陽明門のあたりを見ると、制札が、ここにも墨黒々と立っていて、傍らの武者溜だまりには、伊賀判官末貞いがのぼうがんすえさだとか、周防元国すおうのもとくになどという人々が、市中警備の奉行となって、夜もあかあかと松明たいまつや篝火かがりびに冬の月をいぶしているのだった。

ぽつ、ぽつ、と時折その前を通る人影は、槍の光を見

て、遠く足を浮かして歩いて行ったり、また、高札の前に立って、

「えらいこっちゃなあ」と、嘆息と共に読んで去る者もあった。

——と、一人の男が、頭には法衣をかぶって、足には破れた草履を穿ち、じろりと、奉行の武者溜りを横目に見て通りかけたが、突然肩をゆすぶって笑いだした。

「あははは……」。口で唱える念仏の声は禁じて、心のうちで唱える念仏を停められようか。ばかなッ！」と、人も無げに罵って、

「——輪王位高けれど、七宝永くとどまらず。世は末だ！ 澆季澆季」泣くように、月へさけんで、悠々と歩みをつづけて行く。

「やっ、何奴だ」判官末貞は、その声を聞いて、

「捕えろッ」と呶鳴った。
その叱咤を、後ろ耳で聞きながら、先へゆく法師はまだ足も早めず、大きな声に抑揚をつけて慷慨の語気を詩のように呶鳴りつづけていた。

「——天上楽しみ多けれど、五衰早くも現じける。五衰早くも現じける……」そして、腹の底から、二声——

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

「待てッ！」と、武士たちが、槍をおどらして追いかけると、

「わしか」と、法師はくわっと炬のような眼を振り向けた。

七

躍りかかって、有無をいわず縄を打とうとした判官末貞の部下も、振向いた僧の一喝と、その眼光にはつと足をすくめて、

「待ちおろうっ」と、距離をおいて取り囲んだ。僧は、笑って、

「待っているではないか。何用じゃ」

「おのれ、その御高札を見ぬか、いや、辻々の揭示はもちろん、あれほど、厳しゅう官より布令である念仏停止のことを知らぬのか」

「知っておる」

「なに」と、その傍若無人ぶりにあきれて——

「知つていながら、しかも御所の御門の前を、今なんと吠ざいて歩いたか」

「——南無阿弥陀仏！」と

「あっ、またいったな」

「才、南無阿弥陀仏」

「う、うぬ、怖れ気もなく、お上に対して、反抗を示しおるな。——名を申せつ、何者だ」

「念仏を唱えずには一日も生きておられぬ者だ！」

「よしっ、後悔するなっ」さらにまた、その間に、奉行小屋から加勢の人数も加わってきた。今までの物いいぶりから見て、尋常な法師でないと見たからである。

案のじよう、法師は、死にもの狂いになって抵抗した。

——劍、喚き、地ひびき。——そこはたちまち修羅を現出して、一人を縛るために大勢の死傷を出した。

だが、鬼神のように暴れた法師も、ついに、力がつき、折り重なる武者の下に十文字にくくり上げられた。よほど忌々しかったのである。判官の部下たちは、土足をあげて法師の体を鞠のように蹴った。

「畜生——」

そう罵りながら、縄尻を引っ張って、ずるずると評定所の門のうちへ引っ張りこんだ。法師は決して悲鳴をあげなかった、そんなにされても、時折、慨然と元気な声を張って、為政者の処置を罵り、そして手先になつてゐる侍たちを、嘲殺するように笑ったりした。

奉行の伊賀判官末貞は、

「名を申せ、寺籍をいえつ」と、彼を責めた。僧侶は、

大地に坐り直し、

「おれは、鹿ヶ谷の住蓮だ、おれの念仏を停めてみい」といって、それから牢へ打ちこまれても、念仏を唱えていた。

「げつ、住蓮？」捕えてから驚いたことである、奉行は、もろもろへ達して、彼の顔を見知っている者を求めた。その結果、誰のことばも、

「住蓮にちがいがございませぬ」と、証明した。

意外な獲物に、奉行の屯は、凱歌をあげた。一方の安楽房もすでに獄舎にいたので、断獄は、即日が決まった。

——不明なのは、依然として、松虫の局と鈴虫の局

の行方であったが、そのうち、師走も暮れ、新春の松の内も過ぎたので、いよいよこの二人から先に処刑することになった。

——承元の元年、二月の初旬。

六条河原の小石は、まだ氷が張っていた。暖かい日だったので、加茂の水は雪解ににこっていた。

近衛牢から曳きだされた住蓮と安楽房のふたりは、矢来のそばの杭につながれていたが、やがて時刻が来ると、官の命によって刑刀をうけた獄吏たちの手で、仮借なく、刑場の中央にひき出されて、氷石の座に、筵も敷かず据えられた。

八

——鹿ヶ谷の坊様たちが斬られなさる」群衆は、河原へ集まった。矢来の外へもひしめいて来る。

「おお、あれじゃの」刑吏の手でひきすえられた住蓮と安楽房のすがたを遠く見て、思わず、

「な、む、あ、み、だ、ぶつ」口走ると、

「しっ……」と、傍の者が袖をひいて、

「お停止ですぞ」と注意してくれた。

「そうだった」と、民衆は口を抑えた。

「たった一声、唱名をと覚えても、嚴罰というお布令、

あぶない、あぶない」

「弥陀のお力も、お上のご威光には、及ばぬものか」

「時じゃ、時勢じゃ——法然様さえほかのお弟子方と共

に、御蟄居ごちつきよといううわさ。御門の前を通ると吉水の元のおもかげもなく、今日このごろは、いかめしい武士さむらいや刃物の光ばかり……」

「では、もう上人のお姿は」

「才拜さいはいめまいぞ。——この世では」

「何という恐ろしいことを見るものじゃ——ああ、南無阿なむあ」

「これ、気をつけなされ」

「つい、上人様のことを思うと、口から出てしまう。唾つばになるのも、難かしいことじゃ」そのうちに、

「アッ……」人々は足のつま先を立てて矢来へ顔を寄せた。

——見ると、あちらには、住蓮と安樂房の二人の後ろに、刃はものを取った刑吏が廻って、なにか、最後のことをばをかけている。

それだけは、獄吏の情けであつたとみえる。二人とも、法衣ころもだけは着ていた。そして、数珠ずずも持っていた。

（遺言は）と刑吏が聞いてやったのであろう、住蓮も安樂房も、

（……）静かに首を横に振った。

カラカラと矢来の竹の先が寒風にふるえて鳴った、しんと一瞬天地は灰色に凍っていた。すると一声、安樂房の口から、「南無阿弥陀仏！」はっと、刑吏はあわて、刀を斜めに振り落した。住蓮も、念仏をとなえた。しかし、二声という間がなかった。見るまに、二箇の死骸から血しおが蚯蚓みみずのように河原を走って、加茂川へひ

ろがった、草も石もみな赤く染めるかと思うほどひろがって行つた。

群集はわれを忘れて、

「なむあみだ仏……」もうそれは停とめようとしても停まらない声であつた。十人や百人が唱えるのではない、あらゆる民衆の口からついて出るのである。獄吏や役人たちは、苦々しい顔をしたが、どうすることもできなかった。

*

「——たいへんでございます、鹿ヶ谷から四里ほど奥の小屋のうちに、若い尼様あまが二人、自害して死んでおります」獵師の駈け込み訴えに、

「それこそ、松虫と鈴虫の局つぼね」役人はすぐ、如意ヶ岳へ分け入った。想像どおり、彼女たちであつた。形ばかりの位牌いはい二つ——住蓮と安樂房の靈に香華こうげをそなえて、水晶の数珠ずずを手につけたまま美しい死をとげていたのである。

——仙洞御所の逆鱗げきりん！

南都、叡山、その他の諸宗諸国の反念仏派は、この時と、なお輿論ようろんをあげた。そして功を奏した。徹底的に、念仏は地上から一掃され、彼らのいうところの法敵吉水は、潰滅かいめつを予想された。

氷雪篇

花^{はな}紛^{ふん}々^{ぶん}

一

——急転直下である。

承元の元年、二月二十八日。宣^{せん}下^げは吉水へ降^{くだ}った。

罪アリ。

法然房源空ヲ、俗名藤井元彦^{モトヒコ}ノ名ニ帰^キセシメ、土佐ノ国ニ遠流^{オンル}ヲ命ズ。

洛内^{らくない}はこの不安なうわさで、埃^{ほこり}が黄いろく漲^{みなぎ}っていた。諸国の信徒に、不穏な行動でもないかと、官の駅伝は、諸街道へ向けて、国司^{こくし}へ早馬を送っていた。

罪は勿論、法然ひとりに下ったのではない。

吉水門下のうちでは、浄聞^{じょうもん}房、禅光房などの高足八名に対して、備後、伊豆、佐渡、阿波の諸国にわけて、それぞれへ、

(流罪^{るざい}——)という厳達であった。

その他^{ほか}には、性願^{しょうがん}房、善綽^{ぜんしゃく}房という二人は、かねてから鹿ヶ谷^{しかがや}の安楽房や住蓮と親密であり、かたがた、平常のこともあって、これは、

(死罪——)という酷命^{こくめい}であった。

吉水の禅房を中心として、洛内の信徒の家屋敷は、おのおの、暴風雨^{あらし}の中のような様であった。

突然、荒々しい武者どもが来て、

「調べる」と、たった一言^{いちごん}の下^{もと}に、家財を掻き回して、家宅搜索をする、そして、わずかばかりな一片の手紙でも、不審と見れば、

「こやつ、念仏門の亡者と、深い企^{たくら}みがあったな」

有無をいわせないのだ。食事^{あはじ}中の主^{あるじ}を引^ひつ張^はって行ったり、乳のみ児の泣く母親の手を曳^ひいて行ったり、それはもう地獄の図にひとしいありさまだった。

わけても、今度の事変で、法然上人以上に、一身を危機^きに曝^{さら}された者は、岡崎の善信であった。

叡山^{えいざん}からは特に、と、かねてから注目的^{まど}になつていた善信である、念仏門の大提唱は、法然によって興ったとはいえ、その法然の大精神と信念とを体して、自己の永いあいだの研鑽^{けんざん}をあわせて、強固不拔ないわゆる一宗のかたちを完^まからしめてきたのは、より以上、善信その人の力であると、今では人も沙汰するところである。「彼こそ、この際、断じて死刑に処されなければいかん」とは、彼の大を知る反対側の他宗において、勃然^{ぼつぜん}と揚^あっている氣勢であった。

で——法然門下中の逸足^{いっそく}としてこんどの処刑のうちに、真^まっ先にその名が書き上げられてあった。

他宗の希望どおりに「死罪」として。その罪として、——彼は肉食妻帯^{にくじき}をしている。

——彼は公然、しかも白昼、その妻玉日の前と同乗して、洛中を憚りもなく牛車を打たせて歩いた。

——彼はまた、何々。

善信の今日までの苦難力学はみな罪条にかぞえ立てられ、叡山の大衆はひそかに、

（異端者の成れの果てはこうなるのが当然だ、こうして初めて社会も法燈も正大公明ということが出来る）と、いった。

ひとり六角中納言親経は、その罪を決める仁寿殿の議定でそれが公明の政事でないことを駁論した。

中納言のこの日の議論はすさまじかった。太上天皇のおん前ではあったが、面を冒して善信の死罪はいわれのない暴刑であると論じ立てたのである。——しかし彼は吉水の味方でもなく叡山の味方でもなかった。

天皇の臣として。また、この国の文化と精神をつかさどる一員として、極力、反対したのである。その結果、善信は死一等を減じられて、

（越後国、国府へ遠流）と決まったのであった。

二

「この老年になつて——このあるまじき世の態を見ようとは……」月輪公は老いた。一夜のうちに白髪になったかと思うばかりに。

こんどの大事変で——いやそれより前から心配は絶えない立場にあったが——誰よりも悲しみ、そして誰よ

りも肉体へこたえたのは、月輪禪閣であつたにちがいない。

—— 帰依する上人に対して。また、愛しいわが娘の聲——

善信に対して。

「……何たること！」老いの唇を噛みしめ、

「わしの身で代われるものなら」めつたに嘆いたり狼狽えたりしない彼が、

「いても立つてもおられぬ——」とさえ口走って、幾日かを、物狂わしげに悲しまれていたという町の人々のうわさも、決して、誇張ではなかつたろう。

そしていよいよ宣下の日になると、彼は、老いの身を牛車に託して、

「吉水へ」と、命じた。

吉水へ——これが最後の彼の運びであつた。——光明の道、易行往生の信をもつて通つた道を、どうして、暗澹たる悲嘆の泥濘として踏まなければならないか、禪閣は、

「……死にたい、もう、人の世がいやになった」牛車の内で、つぶやいていた。

—— 来てみれば、ああと、禪閣は思わず太い息をもらした。なんたる変りようだろう、これが昔日の念仏の声にみちたあの吉水のお住居だろうか。

「……」禪閣は、しばらく、牛車のすだれを垂れ籠めたまま泣いていた。従僕が、

「着きましてございますが」とうながしても、降りようとしなかつた。

門のあたりは、焚火のあとを蹴散らした燃えさしの薪だの、警固の武士がぬぎすてた切れた草鞋だの、馬の糞だの、狼藉を極めた光景だった。

役人の小者や、あばれ武者が、所かまわず飲食するの
で、野犬がたくさん集まって、禅房の中へまで上がり込んで
いる。垣は破れ、門の扉には、今も依然として、丸太の
十文字が打ちつけてあって、出入りはすべて、警固の者の
槍ぶすまに囲まれている横の小門からすることに
なっている。でも――

「月輪公がお越しだ」

「えっ、禅閤が」こう警固の者にささやきが伝わり、
さすがに、前の関白に対する敬意をよび起され、

「いざ……こちらから」と、丸太の十文字を取外し、静
粛になって、警固の者が案内した。

「上人は、おいでられるのかの」禅閤は、そばの者に
訊ねた。

「おられます。――以来、おらぬような謹慎をされて
います、奥のほうに」と、役人の一人が答えた。

衣食や――お薬や――そういうことなどもどうしてお
られたかと、禅閤は、もう誰もが、土足のまま勝手に踏
み荒らしている禅房のうちへ、やはり常のように、沓を
脱って、静かに上がった。

「オオ」ちらと姿を見た禅房の弟子が、うれしさやら悲
しさやらで、思わずこう叫ぶと、上人の常に起き臥しし
ている奥の一室へ向って、まるぶように駆け込み、
「――月輪殿がお見えなされました。月輪殿が」と、あ

わただしくそこにいる上人に告げた。

三

――どんなに憔悴しておられるだろう、どんなに絶
望的な老後をかなしまれているだろう。そう上人のすが
たを想像していた月輪禅閤は、

「おう」と、上人のほうから、常のとおりな声で、先に
ことばをかけられると、はっと、なにもものに衝たれて、
「……おお」同じように答えたまま、両手をつかえて、
その手をしばらく上げることができなかった。

自分の至らなさを、禅閤はすぐ恥じた。そういう上人
であろうはずはなかったのに、自分の悲嘆から推して、
そうあらうと、上人を凡夫のように想像していたことが
恥かしくなってきたのである。

今度の兇変についても、

「なんと申しあげてよいやら」と、禅閤がいいかけると、
「なにも仰せられな」と上人は微笑すらふくんで、それ
に触れないのだった。

そして、相かわらず、上人の唇から流れる静かなこと
ばは、法の話であった、弥陀光の信念につつまれた和や
かな顔をもって説くところの人間のたましいの話であっ
た。

「――かかる時に持ちくずれるような信仰では、なんの
役にたちましようぞ。こういう折こそ、ご修行のかが
のうてはならぬ、月輪どのはややおやつれに見ゆるが、

さようなことでは、法然が都を去るにも心のこりでござりまするぞ」これはどういう人だろうと、禅閣は今さらに上人を見直すのであった。日ごろの病苦などはかえって膝の下へ組みしいてしまったような法然なのである。しかし、どれほどこの事実が禅閣の信仰を強固にしたか知れなかった。自分が救われると共に、久しぶりでここへ来て心が明るくなった。

——それはそれとして、眼の前にはすでに刻々という問題がさし迫っている。遠流の日はまだ決まらないが、それまでのわずかの日の間でも、禅閣は、上人の身をどこか安らかな所へおいて、心から名残を惜しみたいと考えてここへ来たのであった。

で——そのことについて、上人の内意を聞くと、官のほうさえおゆるしなればという答え。その官のほうのことは、すっかり禅閣が諒解をとげてきてあるので、お案じには及ばぬ由を告げると上人も、

「では、お心に甘え申そう」という。

翌る日——牛車の支度をととのえて、禅閣はふたたび吉水へ出直した。そして、上人の身を一時、阿弥陀ヶ峰のふもと蓮華王院の辰巳にあたる小松谷の草庵に移した。

もちろん蟄居の身のままであるから、ここにも、物具を着けた警固はつく。

けれど、吉水の荒らされた禅房よりも、はるかにくつろぐことができるし、禅閣を初め月輪家の人々も、

「これぞお名残——」と、真心こめて、上人の起き臥し

の世話をすることができた。

そうして上人の身を荆棘の門から抱え出すと、禅閣はまた、一方のわが聳と、いとしい息女とが、事変以来どう暮しているか——それも心がかりでならなかったことなので、

（——明日は）と思いながら、なにかのことに慌ただしく日ばかり暮れて行かれず、

（明日こそは、岡崎へ）と、また今日も心のうちで思うだけで、訪客だの、蟄居中の上人への心づかいだの、官へ対しての哀訴だの、さまざまな忙しなさに暮れてしまふのであった。

母乳の香の庵

一

「裏方様——裏方様」あわただしく、生信房は、こう
いって、草庵の縁から、奥へ告げた。

生信房というのは、つい先ごろ——去年の暮に——この岡崎の草庵へ新しく侍かしずいて、実直に働いている新沙弥であつた。

その実直ぶりや、起居たちいのはよい様子だけを見ては、誰もその新沙弥がついさきの年まで、世の人々から、魔か鬼かのように怖れられていた大盗天城四郎あまぎのがその前身と思いつく者はあるまい。

彼は、吉水の上人に、その前名である天城四郎とか、木賊四郎とくさのしろうとかいう悪名を捧げてしまつて、そのかわりに、信をもつて生れかわる——という意をこめた「生信房」の名をいただいたのである。上人は、その折、

「わしはもう老年であるから、そちに附随を申しつけて、永い先の道を手をとつてやるができない。善信はまだ年も若く、年来、そちとは有縁うえんの間がら、また、師と頼んでわしにもまさる人物であるゆえ、善信について、向後の導きと教えをうけたがよい」といわれた。

それ以来、彼は、岡崎の草庵へ来て、草庵の拭き掃除やら裏方の用やら、夜の番人やら、なにくれとなく忠実

に下僕の勤めをしていたのだった。

（狼が、良犬になつたような——）と、彼の前身を知る者は、奇異な思ひをして見ていた。それほど生信房は、正しく生れかわつていた。

——今度の吉水崩壊の大変を知ると、彼は、齒がみをして、くやしがつた。それが、かねて弁円から聞いていることによつて叡山の卑劣な奸策かんさくが大きな動因となつてゐるのをよく知つてゐるからである。（この身一つを捨てる気で、叡山に火をつけてやろうか）などと口走つたりすることもあつたが、裏方の玉日の前からたしなめられると、

（はい、そんなことは誓つていたさないことに、仏様にも約束いたします）と、素直に服従した。

玉日の前は、もう、前の年から妊娠みごもつていて、彼女の室には、いつのまにか、珠のような嬰兒ややの泣き声がしてゐた。——仏前に詣るまいにも、弟子と話すにも、南縁みなみえんから、三十六峰の雲をながめてゐるにも、その膝には、母乳を恋う良人の分身をのせていた。

このところ、彼女は母乳が出ないので、悩んでゐた。良人はどこへ行つてどうなつてゐるのか。その消息はいっこうにわからない。騷擾そうじょうのうちに、暗殺されたといふうわささえ巷ちまたには飛んでゐる。そんなことがないともいいきれない良人の身辺であり、またその烈しい強い性格を知つてゐるだけに彼女は胸がいたむのであつた。

今——生信房が縁から、
「お師さまが、おかえりですぞ。——たしかにあのおす

がたは、師の善信様にちがいない。はよう、出てごらんなさい」そう呶鳴るので、玉日の前は、胸がずきつと痛むほど大きな衝動をうけた。

「ほんに……」縁へ転び出て彼女は伸び上がった。

白川のほうからこの岡崎の丘の林へのぼって来る小さい人影が分るのだ、飄々として、春のかぜに、黒い法衣のたもとがうごいている。

（良人だ）そうはつきりわかると、彼女は、ふところに抱いているまだなにも知らないわが子へ、ひしと頬ずりして、

「お父さまが……そなたのお父様が……ご無事でおかえりなされたぞや。……うれしいか、うれしいかや」何度もうくりかえして、もう、涙をぬらしているのだった。生信房も、横を向いて、拳でそつと眼をこすった。

二

——生きて在わした。——ご無事で。と玉日もそう思い、生信房もそう思うほど、奇蹟の心地がするのであったが、やがて、草庵の一室へ通った善信は、

「さびしかったであろう」と、妻をいたわって、自分の身のことなどは、なんのこともなかったような容子に見える。

——生きている！ いかにも久しぶりにわが家へ戻ってきた善信は生きている人のすがただった。相かわらず、はちきれるような健康を持ち、皮膚はすこし焦けて浅黒

く、何か、山が崩れてきても動じないよう、いつも濃い眉がよけいに強い意思の象に見えて、悠揚として寛いでいるのだった。

「さだめし、都のうわさ、吉水御一門の凶事、お汝らも、聞いたであろうが」とやがていう。

それも、若い妻の実社会のどんなものかを多く知らない胸に、唐突な驚きをさせまいと気づかうように、静かなことばで——

玉日は、生れてまだ二歳の房丸を、胸に抱いていた。

「はい、存じあげておりました」

「かねて、上人にも、期しておられたことだ。驚くにはあたらぬ」

「心はいつも決めております」

「それでこそ」と善信はにこと笑って、

「——むしろよろこんでいいことだとさえわしは思う」それは少し意外に感じたのであろう、玉日は、解きかねたような眉を上げて、良人の顔を見た。善信は、低くことばを続けて、

「なぜならば、今までは、都会の中の吉水禅房であった、都会人へ多く呼びかけた念仏であった。したがって、われらの説く声——わたしたちの信も——都を中心として思うままには行きわたらなかつたが、このたびの御停止と処罰によって、上人を初め、われらの末弟までが、諸州の山間僻地、流罪に科せらるるにおいては、これよりはいいやでも、念仏信者が日本の全土にわたってその信を植えることになる——」こういうながら、善信は、眼に

何ものかを見ているように頭かしらをすこし下げて、

「これは、まったく、御仏みほとけのお計いじゃ、これを天祐てんゆうといわずして何ぞや。——小さな都の一箇所に、多年、跼蹐かくかくりこんでおったわしたちに、さらに眼界を宇内うだいにひろくし、そして、赴く所に、仏果の樹を植えよ、念仏の華を咲かせよ、浄土をたがやせという御仏のお心でのうてなんとしよう。……されば、善信は上人へも申しあげたことじゃ。——このたびの儀は、こよなきおよろこびでござりましようとな。……すると、上人もほほ笑まれて、善信ようこそ申されたと、お賞めのおことばを戴いたことであつた」

玉日は、乳をすう幼児おきなごの顔をじつと見ていた。自分が一つの母胎ぼたいであると共に、良人が、億万の民衆に愛と安心の乳をそそぐ偉大な母胎ぼたいでなければならないことがよく分つた。

——だが、女としては、まして若い母としては、胸の傷むことであつた。良人の話に、うなずきながらも、睫毛まつげの先には、白い露がかすんでこぼれかけた。

「すこし見ぬ間に……」と、善信は、房丸ふさまるを抱きとって、頬ずりした。

「——重うなつたの、さだめし、そなたは丹精なことであろう。だが、風にもあたれ、雨にも当れ、弥陀みだの子は、きつと育つ」

生信房は次の間の物蔭に手をついていたが、善信のことはが、いちいち腸はらわたに沁みてくるように思った。

三

善信が岡崎へもどつて来たのは、決して罪がゆるされたからではない。

むしろ、その重罪が決定したからである。

越後の国府こくふへ流罪るざいとさだまると、彼は一先ず、評定所の門から出され、その日の来るまでは、岡崎に蟄居ちゅうきょと決まつた。

勿論——上人を訪れることも、官のゆるしがなければできない。同門の友との往来も厳禁されている。

それでも不平はいえないことだつた。遠国へ流されるまでのたとえ幾日でも、こうして、妻と共に、子と共に、起居がゆるされることになつたのは、その裏面に、舅しゅうとの月輪げんこう禅閣のどれほどな運動があつたか知れないのである。あのよき舅御がなかったら、こういう寛大があるどころではない、善信の死刑は、念仏停止ちやうじの宣下せんげがあつた後、三日を待たずに行われていたにちがいない。その禅閣も、やがて、岡崎を訪れ、

「わしはもう嘆かぬ」といった。

善信は、師の法然上人ほうねんの消息を舅から聞いて、

「さもござりましょう」と、安堵あんどの笑みを泛うかべ、

「ただ、このうえの慾には、上人御流罪のまえに——またこの善信が配所に下される前に——たった一目でもお目にかかつてゆきたいことです」禅閣は、もつともであるとうなずいて、それもなんとか、朝廷の人々にすがつ

て、願ってみようといった。また、玉日と房丸のことに
ついては、

「わしが護っておる、必ず、案じぬがよからうぞ」とい
いたした。善信は、何事も、吹く風にまかせて咲いてい
る蘭のように、

「どうぞ」と、いうだけであつた。なんの苦悩らしいも
のもその眉には見あたらない。わが娘の聲ながらさすが
と禅閣は思うのであつた。そして、法然のことばをも思
いあわせ、

「これがなんの悲しみぞ」と過去数カ月の自分の悲嘆が
今ではおかしくさえ思えた。

二月か——と巷でもうわさしていた上人の配流の日
は、その二月には沙汰が下らず、三月に入つた。

都の杉並木の間には、もう彼岸桜の白っぽい花の影が、
雪みたいに見える。春を揺らぐ洛内の寺院の鐘は、一日
一日、物憂げに曇っていた。

若い一人の僧が、急ぎ足に、青蓮院を出て行つた。
善信の弟、尋有である。

兄の善信や、吉水の上人の配所護送の日が、いよいよ
この三月の十六日と師の慈円から聞いたので、

「一目、兄のすがたを」と、或いは警固の役人に追い返
されるであろうかも知れないことを覚悟して、師にもゆ
るしをうけて、出てきたのであつた。案のじよう、白川
のほうから行く道にも、神樂岡から降る道にも、すべて、
岡崎の草庵へかよう道には、鹿垣が囲ってあつて、
「ならぬ！」と、そこにいる武士に、剣もほろろに一喝

されてしまった。

事情を訴えても、大地に手をついても、許されなかつ
た。やむなく尋有は日の暮れるのを待って、道のない崖
道から、岡崎の松林の奥谷へ、生命がけで這い降りて行
つた。

四

風ではない——ほとほと戸を打つ者がある。今ここを
訪れる者は絶対にないはずであるがと思いながら、

「生信房」と、善信は呼んでみた。

もう夜更けであつた。答えがないところを見ると、生
信房も眠っているらしい。玉日も嬰兒を寝かしつけてい
る。

「——どなたでおざるの」善信は自身で立つて行つた。

戸の外では、

「わたくしです」と誰かいう。何気なく、草庵の戸をあ
けて、善信はびっくりした。

「おお弟……」

「兄上……」

「どうして此庵へは……。まあ上がれ」手を取って一室
へ。

坐ると、もう兄弟は、胸がいっぱいだった。

同じ都の、すぐ目と鼻の先にいながら、二人の会う折
は極めて稀れだった。会うごとに、何から話し出してよ
いかと思ひ惑うほどに……

「近いうちに、越後へお立ちなされますそうな」

「む。——十六日というお沙汰じゃ」

「十六日。……ではもう間近に」

「されば、お汝とも、これがお別れじゃ。ひたすら、修行をされい」

「はい」

「お汝の師、慈円僧正は、わしにとつても、幼少からの恩師。思えば、お手をとつて童蒙のお導きをして賜うところから今日まで、憂いご心配のみかけて、その後のご報恩とては何一つしていなかった。……この兄の分も共に尽してたもるようにの」

「きつと、励みまする。そして今のおことば忘れませぬ。

……けれど、遠流の日が、十六日ということでは、兄上には、もう慈円僧正にお会いあそばす折も」

「むずかしかうの。……吉水の上人にも、一目お会い申しとうて、月輪の老公におねがいしてあるが、どうやら官のおゆるしはならぬらしい。……しかし弟、この善信は遠国へ流さるるとても、決して、悲しんでたもるまい。念仏弘世のため、衆生との結縁のため、御仏の告命によって、わしは立つのだ。教化の旅立ちと思うてよい」

「お心のうち、そうあろうかと、尋有も考えておりまする」

「重ねていうが、お汝はまだ若年、都にあつても、くれぐれ勉強してあれよ」

「はい、その儀は、お案じ下しますな。いささか平常

の修行を認められまして、私も、近いうちには、叡山の東谷善法院へ下されて一院を住持する身となりました」

「ほう……叡山の東谷へ移られるか。奇しき縁じゃ。兄は、叡山の大衆より、法魔仏敵のそしりをうけて追われてゆくに」

「善信の血縁の者とあつて、反対もあつたようにござりますが、師の慈円様のお計らいで」

「よいことだ、そういう中にやって、そちの人間を作つてやろうという師の房のお心にちがいない」

「闘います、百難と」

「兄は、他力門の弘通に北国へ。——弟のお身は、自力聖道門の山へ。こう二つの道は、西と東ほど違うようだが、辿り登れば、同じ弥陀の膝なのじゃ。……弥陀のお膝でまた会おうの」奥で——その時、なにをむずかり出したか、嬰兒の房丸が泣きぬいていた。尋有は、ふと、そこから洩れる甘い母乳の香に、自分の幼いころを思いだした。

「——十六日のお時刻は」

「卯の刻に出立する」

「その朝の鐘は、尋有が撞きます。青蓮院の卯の刻の鐘が鳴りましたら、弟が、見えぬ所から見送っていると思つて下さいませ」といつて、尋有はやがて、初更のころ、山づたいに忍んで帰って行った。

ゆうべは、小松谷の小御堂には夜もすがら念仏の音が揚つていた、念仏をおくびにいつても、厳科に処すという禁令が出て以来、官の取締り方も民衆の自戒も、針のような神経質になつてゐる折なのに。

十六日の暁方は、刻々と、小御堂をつつむ暗い樹々の風と、白い星のまたたきに、近づきつつあつた。

法然は、宵のうちに、わずかの間を眠つただけで、まだ初更の鐘も鳴らないうちから起きていた。そして起きているまは、一秒一瞬のあいだも、念仏を怠らないのである。

（今朝はおわかれぞ——）と、庵のうちには、いっばいな人が詰めていた。俗の人、沙門の人、官途にある人、遠国から馳せつけた人々など、雑多に宿直していた。その人たちは、時折、上人の居間から念仏が洩れるので、「垣の外へ聞こえては」と、他聞を惧れて、開いている妻戸やふすまも閉て籠め、

「……もちっと、お低い声音で仰っしゃって下さればよいが」と、ささやいた。

恟々として、官を恐れる気持が、このごろの日常であつた。——たった一声、南無とつぶやいただけで、牢

獄へ打ちこまれたり、河原へひきすえられて、鞭で打ちすえられている老人などを、毎日のように目撃しているのである。

柴垣の外には、それでなくとも、絶えず獄人を見る眼で、牛頭馬頭のように、槍をひっさげている官の小者たちがここを警戒していて、時折、中へずかずか入つてきて覗きこんだり、つまらぬことを取り上げて威張り散らしたりしてゐるのだつた。

「——あまり官を憚らぬようにある。上人が、きょうぞ名残と、一念御唱名なさるお気持はわかるが、つい、禁令をおわすれになつて、お唇から高く出してしまうのであろう。誰か、ちよつと、ご注意申しあげてはどうか」と、いう者があつた。

「さ……」誰も、顔を見あわせて、上人へそれをいいに行く者はなかつた。すると、やはり流罪を命じられて、今朝、上人と共に、配所へ護送される善恵房が、

「では、てまえが」と起つた。

「オオ、善恵房どのからなれば、上人も、お氣にかかれまい。月輪の老公のご奔走で、なにかと、護送のことまでも、ご寛大になつてきたところ——ここでまた、法令にたてつくようなことが官へ聞こえては上人のお不為になるで」

「それとなくご注意申しあげて来ます」善恵房が、上人の前へ出て、畏る畏る一同が案じてゐるよしを述べると、上人は、もつてのほかか機嫌を損じたらしく、厳しく、膝を革めてこういつた。

「たとえこの法然房が舌を抜かれ身を八ツ裂きの刑にせんと御命あつても、わしは念仏勤行を止めることはいたさぬ。よし新羅百済の海の果てへ流さるるも、死を賜うも、大聖釈尊をはじめ無量諸菩薩が、われら凡愚煩惱の大衆生のために、光と、証とを、ここにぞと立て置かれたもうた念仏の一行であるものを。——何ぞや、権力、詐謀、威嚇、さようなものでこれを阻め、その不滅の大御文章を、人類のうちから抹殺することなどできようか。わろうべき人間の天に向つてする唾でしかない。——そちたちも、夢、法然が信をさまたげ給うな」

二

夜はまだ明けない——ほの明るいのは桜並木だ。咲いている花のうえには残月があつた。

「いそいで——」と、月輪の館から、老公をのせて、ぐわらぐわらと曳き出した牛車のうしは、手綱に泡をふいて、小松谷の法勝寺小御堂へ駈けつけてゆく。

「待てっ」

「どこへ行く」小御堂の近くへ来ると、小具足を纏った武者たちが、牛車のまえに立ちふさがつて咎めた。

「——通ること相ならん。官符を持ちおるかっ」老公は牛車の裡から、

「誰の御人数であるか」と、たずねた。武者の一人が、「領送使清原武次が手の者と、奉行周防判官元国が家臣」という。老公は、うなずいて、

「ご両所を、ここへ召されい。儂は、月輪禅閣でおざる」
「や、月輪の御老公におわすか」驚いて、武者が走つてゆく。

法勝寺の別院に屯をしていた領送使の清原武次は、すぐ老公を迎えて、仮屋の一室へ迎えた。

「このたびの役目、ご大儀である」と、老公は、一応の挨拶をした後、

「火急、未明のうちに参つたのは余の儀でもおざらぬ。上人がこのたび下向の命を沙汰された土佐国は、御老軀に對し、あまりにご不便。で——儂が所領する讃岐国小松の庄へお預かり申したいと、実は、先ごろから朝廷へお願いいたしてあつたところ、昨夜おそく、評定所において、願ひの儀ゆるすとの御決定がござつた。——それゆえ今曉の土佐下向は、讃岐へ変更と相成るによつて、篤おふくみくださるように」武次は驚いた。

「はっ、承知仕りました」とはいったものの、
（そういう寛大な変更がどうしてあつたか？）と、疑問を挟まざるを得ない。

老公が、そこを去つて、小御堂のほうへ足を運ばれてゆくのを送つてから、すぐ奉行の周防元国と相談して、（讃岐中郡へ、変更の儀は、実か訛伝か）と、官へ急使をやつて、問いあわせた。

それと入れちがつて、評定所から、騎馬の使者が飛んできた。にわかに、上人の配所先が、変更されたのは事実だった。

うっすらと、そのころ、朝の薄浅黄いろの空が、花の

梢に明るみ初めていて、そこらの篝火は、燃えつきて
いる——

寅の刻。まさに定めの特刻だった。

法然上人は、静かに、法衣を脱いで、俗服の粗末な
直垂衣に着かえていた。十幾歳のころから今日まで、お
よそ六十年のあいだ、一日とて、脱いだことのない法衣
を官へ返上して、名も、今朝からは俗名の藤井元彦と呼
ばれることになったのである。

白い髪が、綿のように伸び、顎にも、伸びた髯が光
つてみえる。それへ、梨子地の烏帽子をかぶり、領送使
のすすめる輿のうえに身をまかせた。輿へ移る前、
「月輪どの」と、法然は、自分を取り囲んで今朝を見送
る人々のうちに、老公のすがたを探していた。

三

「ここに——」と、月輪の老公は、混みあう人々の間か
ら、上人の前へすすんで出た。

「おお」と、さすがに法然もその人のすがたを見ると、
名残が惜しまれて、しばらく、老眼にうるみをたたえ、
「おわかれが参った」と、いった。

「……」老公は、無言だった。いわぬいうにまさ
る悲しみだった。

「永い間、月輪どのには、陰に陽に、念仏門のために、
一方ならぬお力を貸して賜われた。偏に仏陀と衆生の
ためとは申せ、浅からぬご法縁、たとえ法然、遠国に朽

ち果てようと、ご高誼のほどは忘れませぬぞ」と、法
然は、老公の手をとっていった。——そしてまた、

「善信が出立も、卯の刻の由に承る。もう時刻もやがて
に迫っておろう。くれぐれも、身をいとうように仰せ伝
え賜われ。——同時に、法然が身には、仏の御加護あれ
ば、必ず、案じるに及ばぬことをも」

「承りました」

「では」輿は、その言葉の終るのを待って、昇き上げら
れた。

法勝寺の門を出てみると、そこには、多年、上人から
直接に間接に、教えを受けた受学僧俗や、檀徒や、た
だ徳を慕うて群れ集まってきた洛中の男女が、

「才……」思わず、口のうちに唱える念仏が、涙とな
り、声となつて、輿も通れぬほど、立ちふさがる。

「お退き下さい」

「念仏は、おつつしみ下さい」弟子のうちでも、大力の
聞こえある角張成阿随蓮が先に立ち、そのほか十二、三
名の隨身が、群集の涙の中を、頻りに宥めて道を開かせ
ていた。法勝寺から半町もすすむと、

「その輿、われに昇かせ給え」と、弟子たちは、領送使
の輿昇たちから、それを奪うようにして、自分たち、随
身の者ばかりの手で、師の輿を捧げて行った。

——七条を西へ。大宮を下って、鳥羽街道を真っすぐ
に進んでゆくのであった、その途中の辻々や、睨や、
民家の軒や、いたる所に、上人の輿を見送る民衆が雲集
して、

「おいたわしや」
「勿体ない」

「なむあみだ仏——」貴賤のべつなく押し合つて、中には輿の前へ走り寄り、

「あなたのお体は、遠国へながされても、あなたの生命は——念仏は——この日ノ本の大地から失われません」と、絶叫する若者だの、

「これを上人様に——」と、真心こめた餅や、紙や、花などの供物を捧げる老嫗だの、

「せめて、お足の痕の土を」と、輿の通つた後の砂を紙にすくつてゐる女だの、名状し難い哀別のかなしい絵巻が、到るところで描き出された。

「——さらば」と、大地に坐つて伏し拝む人々とまじつて、月輪の老公は、大宮口まで従いてきて、その輿を見送り、すぐ牛車を返して、岡崎のほうへ急いだ。

——もう一刻後の卯の下刻には、上人を見送つてまだ乾く間のない涙の目で、さらに、わが息女^{むすめむこ}の善信を、こんどは、北の雪国へ向つて送らなければならなかった。

日野善信

一

花明りであろう、ほのかに廂の外は白い。音もなく、まだ人声もなく、ただ微かにうごく花の香のうちに、曉は近づいている。

「……吉水の上人には、はや今ごろは」善信は、持仏堂を出て、縁に立った。未明の空を仰ぎながら、ふとつぶやいて、惘然となった。

「……」遠心的に、彼のひとみは、今朝、都を離れてゆく上人の前途をそこから見送つた。——と共に、自分もこれから間もなく、この岡崎の草庵から、雪の越路へ立つて行かなければならない身であることを思う。

乳のみ児の世話や——配所へ送られる良人への心遣りに——妻の玉日の前は、ゆうべは、一睡もしなかったはずである。

だのに——せまい厨のほうでは、もう貧しい燈をともし、彼女が、乳のみ児の房丸が眠りからさめない間にと——朝餉の支度をしているらしい。

陶器ものを洗う音やら、炊ぎの支度する気配が、静かに、そこで聞えた。もうこのごろは、水仕業に馴れているとはいっても、月輪の前関白家に生れて、まったく深窓にそだった彼女が——と思うと、

（不愍な）と、ふと、あたりまえな人間のもたえるような悶えを、善信も感じずにはいられなかった。

——と、草庵の外に、二つの人影が、蹻音をひそめて近づいて来たかと思うと、

「師の房ではござりませぬか」と、声をかけて、縁先の大地に、ひたと両手をつかえた。

見るとそれは、今は東塔の無動寺にいる木幡民部と、性善坊の二人だった。

「おう」善信の顔に、微笑が泛いた。刻々と明るんでくる夜明けの光が、彼の顔からすがたを見ているうちに鮮やかにしてきた。

「久しいのう。……それにしても、勅勘の流人が門出へ、よう参ることができたの」

「月輪の老公が、さまざまなおとりなしによつて」

「では、舅様にも」

「今朝、吉水の上人をお見送り申しあげて後——すぐこちらへお越しあそばされるはずでござります」

ところへまた、太夫房覚明もみえ、そのほか、十名ほどの近親の人々が、それだけと、人数を制限された上で、この草庵へ別離を惜しみに集まつてきた。

室には、妻の玉日が手ずからした名残の膳が、もう整えられてあった。善信を上座にして、近親の人々が、さびしいうちにも、なにか、爽やかな潔い心地にも打たれて、その膳についていながれた。すこしも、不吉らしい、不安らしいものは、人々の胸になかった。——なぜならば、善信は今日の出立を、

（御仏の命のもとに出で向く晴れの聖使——）と、願うでもない幸いと考えているのであるし、裏方の玉日も、（良人は、辺土の北国へ、念仏をひろめ賜うために立つて今朝は教化の旅の門出——）と信じているので、そこに悲惨らしい影や、流人的な傷心みとか悶えなどは、見られないからであつた。

白々と、朝の光はほつとした人々の面に、明るさを加えてくる。

玉日も、髪を櫛けずつて、房丸を抱いて、良人のそばへ、給仕に坐つた。——と、生信房が、

「月輪の老公が、お見え遊ばされました」と、次室から知らせた。

二

そこへ通つてきた老公の顔も、決して暗くなかつた。

「おお」

「おう」見あわせる顔ごとに、言外の感慨が、いっぱい胸へせまつてくる。善信は、あらためて、

「なんのご孝養もせず、今日まで、お舅君には、わずらいのみおかけ申し、その儀ばかりは、玉日とも、申し暮しておりました。その上、かような御命を下されて、越路へ旅立つからには、ふたたび善信が、生命のあるうちに、朝夕の御見も望み得ぬことかと思われます。なにとぞ、老後をいとい遊ばされて、善信がことは、心ひろく、なるがままに、世の波へおまかせ置き下さります

ように。——また、玉日が身と、房丸が身とは、かように勅勘を蒙って流さるる私が、配所へ連れ参ることもかないませぬよって、何ぶんともに、ご不愼をおかけ賜わりませ」

月輪の老公は、黙然と、何度もうなずいて、聞くのであったが、

「玉日や、房丸が身は、わしが手にひきとって、守ろうほかに、必ず、お案じなさらぬがよい」といった。善信は、にっこり笑って、

「それをうかがって、私も、なんの心がかりもありませぬ」

「ただ、おん身こそ、氣候風土の変る越路へ下られて、身を害ねぬように」

「お気づかい下さいますな、幸いにも、善信は、幼少から身を鍛えておりますほどに」

「む。……おん身が歩まれてきた今日までの艱苦の道を思えばの」

「このたびの流難などは、ものの数でもございませぬ」

「玉日」と、善信は妻をかえりみ、

「支度いたそう」といって、奥へ入った。

一室のうちで、善信は法衣を脱いだ。朽葉色の直垂衣に着かえ、頭には、梨子打の烏帽子を冠る——。

玉日は、その腰緒を結んだり、持物をそろえて出した

りしながら、さすがに涙があふれてきてならなかった。こうしている間が、二人だけの別れを惜しむ間であった

が、何も、いえなかった。

「……お健やかに」と、だけいって、良人の足もとへ、泣き伏した。

「房丸をたのむ」

「はい……」

「お舅 君へ、わしに代って、孝養をたのみますぞ」

「はい」

「配所からでは、便りもままにもなるまい。たとえ幾年、便りがのうても、この善信には、御仏の加護がある、必ず案じぬがよい。……憂いのおこる時は、念仏の怠りをおえ。越路の空で善信がいう念仏に、心をあわせて、おもとも、都にあつて念仏を申されよ。毎日を法悦のうちに、楽しんで送られよ。——それが善信にとっては、なによりもおもとへたのんで置くことじゃ」

——遠く、花の神楽岡の空を越えて、その時、鐘がな

った。

「お……卯の刻」善信は思い出した。いつぞやここへ別れに来た時の尋有のことばを。——弟が撞く青蓮院の鐘の音を。

三

鐘は、鳴りつづいていた。その——一撞一韻ごとに、

善信は、青蓮院の鐘楼に立っている弟の尋有の気もちを、胸にうけ取っていた。玉日は、そっと、

「抱いてやって下さいませ」と、房丸を、良人にわたし

た。善信は、子を抱いて、

「オオ」と、無心なその顔に、頼ずりを与えた。

「――すこやかに、よい和子に、育ってゆけよ。父は今朝、遠い国へ旅立つが、心はいつも、そなたの上に、父としてあろう」

その間に、戸外のほうは騒めいていた。室内にあった人々も、すべて戸外へ出ていた。

「時刻つ」と、大きな声が、草庵の門で聞えて――

「時刻でござるつ。疾くお立ちなされ」ふたたび荒々しい声音がひびく。

迎えの武者たちの群れだった。馬蹄の音や、草摺の音が、にわかに、仮借ない厳しさをそこに漲らせ、

「まだかつ」

「なにを猶予」などと、雑言を吐きちらしているのも、手にとるように聞えた。

流人護送の追立役、小槻蔵人行連は、「退けつ」と、駒のまま、馳せつけて、鞍の上から草庵の牆越しに、

「善信つ。――いや今日よりは俗名の日野善信に申し入れる。はや、卯の刻限であるぞ。妻子の別離に暇どるのをのめのめ待ってはおられぬ、はよう、支度いたせつ」

善信は、同時に、

「おう」と答えて、表へあらわれた。門には、罪人の張輿が昇きすえてあり、領送使の右衛門尉兼秋の部下が、「これへ召されい」万一を固めるのか、善信の左右を鉄槍や刀の柄で囲みながら、そういった。

「ご苦労です」善信は、官の人々へ、静かに一礼して、輿のうちへかくれた。

すすり泣く声が、その時、誰からともなく流れた。

――嗚咽する者もあった。肅とした一瞬に、「輿を上げい」と、右衛門尉兼秋がいう。玉日は、われを忘れて、

「もしつ……」房丸を抱いて、輿の下へよろめいた。

「ひと目、もうひと目」

「邪魔だつ」と、官人たちは罵って、

「歩め、歩め」と猶予する輿を急きたてた。

房丸が――母のふところできつまでも泣いていた。

――その声をうしろに、どやどやと人馬の列は草庵を離れて行く。

性善坊や木幡民部や覚明、弟子の人々も、遠くまでは許されないまでも、せめて行ける所まで、師のおん供を――とその後から慕って行った。だが、生信房ひとり、

「裏方さまが」と、後へも、心をひかれて、泣きぬく房丸をあやしなから、自分も共に泣いている玉日の姿を見ると、そこを去りかねていた。

「さ、裏方さま。お嘆きはさることながら、それでは、師の房のお心にもとりまします。内へお入りあそばして、生信房と一緒に、静かに念仏を申しましよう」手をとって、彼は、涙の母と子を、庵のうへへ誘い入れた。

――もう大風の後のように寂として、どの部屋も、空虚を思わせる岡崎の家だった。

四

輿こしには、墨黒々と、

太政官符越後流人

日野善信

と書いた札が打ってある。

善信は、その輿のうちに揺られていた。夏々と、おびたらしい蹄ひづめの音や、草摺くさずりのひびきや、その人馬の足もとから揚るほこりにつつまれながら――

(玉日……)と、心にさけび、さすがに、わが子の声が、まだ後ろに聞える心地がして、幾たびか、岡崎の林を振りかえった。

禁柵きんさくの外へ出ると、そこには、知縁の人々が、百人以上も待っていた。輿に添って来た覚明や性善坊を介して、人々は、わつとむらがり寄って、

「善信御房っ」

「おすこやかに――」

「また来る時節をお待ちなされ」

「おさらば」

「おさらば」

輿を追って、無数の人が、手を振って見せる。善信は、その群れに、目礼していた、その一つ一つの顔に、さまざまな過去の記憶を呼び起されつつ、

(おわかれだ)と、つよく思った。

月輪の老公から特に付けられた伊賀寺貞固いがでらさだかたと、朝倉

主膳しゅぜんの二人は、騎馬で、前駆の万一に備えて、前駆のうちにまじっていた。――万一というのは、叡山えいざんの荒法師や、無頼な僧のうちに、不穏な行動に出ようとする者があるという風聞が、この朝、伝わっていたからである。(流罪るざいは軽い。善信を途中で引きずり下ろせ。そして、ぞんぶんに私刑を与えてから、都から追ん出してやるがよろしい)そういう煽動をしている者があるという専らな風説なのだ。――しかし、官の警士や、領送使の侍や、そのほか、善信の徳をしたう人々が、輿の見えないほど取り囲んで、その上にも、進んでゆくほど、五十人、七十人と途々みちみち人数が増してゆくので、たとえそういう計画があつたにせよ、手の出せる余地はまったくなかった。

岡崎から栗田口あわたぐちへ――そして街道を一すじに登って蹴上けあげの坂にかかるころは、もう、道路のかきも、樹々の間も、人間で埋まっていた。

民衆は黙然もくねんと、眼で輿を見まもっていた。だが、心のうちでは、念仏を思わないものはなかった。声に出せないの、胸のうちでとなえていた。

逢坂山おうさかやまの関へかかると、追立おったての役人たちは、役目をすまして、引返した。都からついて来た多くの人々も、思い思い別れの言葉を残して戻ってゆく。

大津へ着く。――船は帆を寝せて一行を待っていた。性善坊も、民部も、すべての側近者もまた、いよいよここで師を捨てて帰らなければならなかった。

だが、太夫房覚明だけは、どこまでも師の善信に附随してゆきたいと、役人たちへ言い張って、とうとう願

を通してしまった。

「生信房は、どうしたろう」

彼は、初めから、師の給仕人として、お供をゆるされていたはずなのに、その姿が見あたらないので、人々は、いぶかっていた。

領送使の侍たちは、

「帆をあげい」猶予をゆるさなかった。

「さらば——さらば——」呼び交わす船と陸との間は、見るまに波の距離がひろがってゆく。

——すると、笈を背にして旅支度をした生信房が、息をきって後から追いついてきた。彼は、後に残った裏方の玉日をなぐさめていたために、輿の列におくれたのであった。

「待ってくれっ、オオウイ、その船待ってくれっ」生信房は、ザブザブと腰の辺まで水に入って、湖をすべってゆく流人船へ手を振りあげた。

机にふる雪

—

ひゅうっ——と風の翔けてゆくたびに、万樹は、身ぶるいをし、木の葉が、雨のように天地に舞う。

日が暮れると、裏日本の海は、漆のような闇につつまれるが、月のある夜は、物凄い青味をもって、この廂の下から望まれるのであった。

「曇ってきたなあ」弟子のひとり、あまりの淋しさに、声を出してこういった。

庵室の中で、しきりと、さっきから燧打石を摩っていたべつな僧が、舌打ちして、

「だめだ、いくら骨を折って、明りを燈そうとしても、こう風がひどくては、ひとときも灯が持っていやしない」

「やめたがいいだろう」

「でも……闇では」

「そのうちに、月がのぼるよ。——月明りで間に合せておいたほうがいい」

「ところが、あいにくと、今夜は時雨雲だ」

「この庵の北口が、垂れ薦でなく、せめてどんなでもよいから板戸であつたら、風も防げるし、夜もすこしは暖かに眠れるのだからなあ……」

「もう夏のころから、願書を出してあるが、あの依怙地

な代官の萩原年景が、今もって、許すとはいわぬ。——
これでは獄舎ひとやよりもひどい住居すまいじゃ」

「しっ……あまり声高こゑだかに何か申されぬがよい。番人の耳へでも入って代官の年景に告げ口されたら、これ以上、酷ひどい所へ移されようも知れぬ」

松の——皮の付いたままの柱に、粗雑な茅かやを葺ふき、板壁は少部分で、出入口は裏も表も薦こもを垂れているに過ぎない。

雨でも降れば、廂ひさしの下したの竹簀たけすのこ子は元よりのこと、奥の床まで吹きこむので、身の置き所もない庵室あんしつだった。

ここは、越後国の国府こくふで竹内たけのうちという土地だった。都から遠くながされてきた流人るいん善信の師弟は、もう二年の歳月をここに送っていた。

領送使うへもんしのしょうかぬあき右衛門尉兼秋は、善信の一行をここへ送りどけると、国府こくふの代官萩原年景へ、当然、その身がらを渡して、すぐ都へ還ったのである。

（——飛んだ厄介者が来おった）年景は、つぶやいた。

越後の文化は、都と比較にならないほど遅れていた。したがって、人間は粗野であり、学問はうとまれ、ただ、権力だけが、なによりも絶対的な威力をもったものを用う。

代官の萩原年景は、その権力をここで握っている男だった。強慾でわがままで、都の頭官などよりは、はるかに威張っていた。

（なに、あれが噂にきいた、念仏僧の善信なのか。おれは念仏など大っ嫌いだ。——その大嫌いなおれの支配下

へ流されてきたのは、よくよく仏罰のあたった坊主。ずいぶん粗末に扱ってやれ、不愼ふびんなどかけるとゆるさぬぞ）初めからこういう調子の年景であつたから、部下の態度はおよそ推して知ることができる。——情けというよなものは、みじんも今日までかけられなかった。

で——そろそろ青黒い裏日本の冬の風が波立ってきて、彼のゆるしがないために、板戸一枚造ることができないのだった。

「……お寒い。日が暮れると、とたんに陽気が変わる。

——今日は誰が、町へ托鉢たくはつに出られたのか」

「生信房どのと、教順どののお二人じゃ」

「はやく帰ればよいにな。……わるくすると、今夜あたり、時雨しぐれでうて、雪になるかも知れん」人々は、灯あかりのない室へやの中に、風の音を聞いてかたまっていた。

二

その三人の弟子たちは、皆、善信が京都からこの越後へ送られてくる途々みちみちの間に、善信の徳を慕って従したがいてきた新弟子たちであつた。

大町の如道にょどうとか、和田の親性しんしょうとか、松住の円貞えんていなどという人々も、善信と知りあう機縁を得て、みな旧教をすてて念仏門の帰依者きえしやになつた。

彼のあゆむ所には、必ず彼の信仰が、何かの形でこぼれて行つた。それは、無心な風が、花粉を撒まいて、土のある所には必ず次の花となる母胎ぼたいを作つてゆくように、

善信の身に、自然に備わっている力のようにみえる。

越前の新川村へ来た時には、こういうことがあった。

その土地の常願寺村には、慧明院という寺の住持で、おそろしく問答好きな和尚があつて、

（こんど、都の流人で、法然門下の善信という者が、ここを通るそうな）と聞くと、

（そうか、かねて、法然房と善信の名は、聞き及んでいる。ここを通ったら、思い上がった念仏門の鼻ばしらくじいてくれよう）手ぐすね引いて、待ちかまえていたものである。

そして、善信の一行が、百貫橋という所へかかると、立ちあらわれて、種々な問答をしかけた。善信は、彼の稚氣を、おかしく思いながら、彼の過つた信念を、事ごとに説いて聞かせ、凡夫直入の真髓を噛んでふくめるように諭してやると、和尚は、善信の輿の前にひざまずいて、

（世には、かかるお人もあるものか、まだ年ばえもお若いのに）と、衷心から恥じ入ったふうで、そこから越後の国府まで、一行に従いてきてしまったのみか、以来、配所のあばらやに侍いて、ひたすら念仏教に参じていた。

これが——ちやうど今日は、相弟子の生信房といつしよになつて、国府の町へ托鉢に出ている教順房と呼ぶ人物なのである。

彼が元いた越前宮崎の慧明院には、末寺があつて、教順房に学んでいた三名の弟子たちはそこにいたが、師の

教順房が、流人の僧に従いて、そのまま越後へ行つてしまったので、

（狐にでもつままれたのではないか）と、後を追つてきた。

そして国府へ来て、善信につかえている師のありさまを見ると、彼らも、心服して、配所の庵室にとどまつてしまった。

一人は、定相、一人は石念、もう一人は念名房といつた。こうして、ここの配所も、今では、善信をかしらにして、いつのまにか、七人の家族になつていたのである。

「おや」定相は、竹窓へ、顔をよせて——

「とうとう、白いものが落ちてきたぞ、——雪が」

「ほ……」と、ほかの二人も、顔をあつめて、

「ことしの初雪じゃ」

「それにしても、教順房と生信房どのは、なんとなされたことか、いつになく帰りがおそいではないか」案じているところだった。庵室の入口のほうで、物音がした。

そして外から帰ってきたらしい教順房の声が——

「どなたか、急いで、水をください、——洗足ではない、生信房どのが、怪我をなされたので、やっと抱えて戻ってきたのじゃ。——はやく一口、水をあげて下されい」

三

教順房の声なのである。

何事かと驚いて、人々が出てみると、その教順房と共に托鉢に出た生信房が、どうしたのか、両手で顔をおさえたまま、友の脇に抱えられて、よろよろと、縁端へ来て、俯伏した。

「あつ、どうなされたつ、生信房どの」人々が、騒ぎ立てると、

「しつ……静かにしてくれ。……師の房のお耳に入る、……静かに」と、生信房は、血しおで真っ赤になった手を振って、またそこへ俯伏してしまふ。

「水を——」

「生信房どの、水をおあがりなさい」取り囲んでいたわる法の友たちの背へ、粉雪が、さやさやと光って降りそそいでいる。ある者は、薬をさがし、ある者は布を裂いて、彼の額の血しおを拭いてやる。

「ひどい傷だ。——一体これはどうなされたのです」

「な、なに……大したことはありません。戻る途中、滑川の崖で転んで、石で打ったのだ」

生信房は、いぶかる人々へ、こう打ち消して、暗い部屋の中へ、苦しげに這いこんだ。

傷口へ寒風を入れてはいけないと氣遣って、人々は、筵や破れ屏風をもつてきて、そのまわりを囲んだ。

——やや風がやむと共に、雪もすぐやんで、今までの空もようは嘘みだいに霽れてきた。裏日本の海が、松の森と山鼻のあいだに、染め出したように鮮明に見えてきたのは、どこかに、月が出ているからであろう。

「……有難い、やっと、風がやんだらしい」ほっとして、

人々は、燈火を点けるのをわすれて、白い月明りに、夜の静寂を見まもっていた。

——と、奥の師の房の一室で、善信の声がひびいた。

「誰か、いますか」

「はい」

「よい月夜になったらしい。この垂薦を揚げて賜もらぬか」

「はっ……」生信房の枕元に坐っていた石念が立ち上がって、そこへすすんだ。

「これでよろしゅうございますか」

「おお……それでよい。……まことに今宵は、後の月ではないか。都の今ごろとは、大きな相違。……この冴えた月に、もう初雪がこぼれてくるとは」

「なにかにつけ、都におわした日ごろのことが、思い出されましよう」

「なんの——都の秋には都の趣があれば——越路の秋には越路の風物がある。——自然と共に生きんとすれば、人間はおる所に楽しめるものじゃ」

「ご書見でござりましたか」

「む……書を読んでいるうちのたのしさはかくべつ。没我、無我、身なく、古今なく、思わず長い夜も忘れる」

「お燈が持ちませぬので、さだめし、読書にも暗うて、ご難儀でござりましたでしょう」

「いや、この真如の月と、この雪明りとに向えば、盲心も、眼をひらく心地がする」

「夕のお齋をさしあげましょうか」

「そうそう、忘れていた、わしはまだ夕餉をいただいていたの。——生信房や教順はもう托鉢からもどられたかの？」

四

「教順どのと、生信房どの、今し方もどられました、まだ、西仏房どのが、帰られませぬ」と石念が答えた。

西仏房というのは、太夫房覚明が、都を離れる時に改めた名で、そのむかし木曾殿の猛将として三軍を叱咤した彼も、今では、まったく善信の法相をうけて、この配所では、誰よりも彼が高弟であると共に、またいつも同室の者たちを賑わしていた。

「道理で——」善信はうなずいて、
「静かな宵じゃと思うたら、まだ西仏がもどらぬせいよの」

「こよいは、お師さまへ、栗粥をあげたいといって、山へ入ってゆきましたが、あの気軽な御房のことゆえ、先刻のこぼれ雪に遭って、また炭焼き小屋へでも入って、話しこんでしもうたのでございましょう」

「そうかも知れぬ」配所にいても、少しも配所にいるらしい拘束もうけなければ、不平も感じていない西仏の生活ぶりを、善信は心のうちで、

（さすがに）と、微笑まれていた。石念はふと、

「お師さま、お机の端に、雪が積もっております、すこしお立ち遊ばして下さい、掃除いたしましょう」

「机ばかりか、膝までもじゃ。夜半にはもっと降るかも知れぬ、このまま溶けねば、よい燈火になる、そっとして置こう」善信には、机の雪が愛されて、払い捨てるに惜しい気がした。雪を見てみると、叡山の苦学や、法隆寺の苦行や、若年の修学時代が思い出されるのだった。

——今もその心は失ってはいないが、幸いにまた、失うまいとする心がけもあった。

その時、磊落な声が表の軒下で聞えた。——と思う間に足音大きく上がってきたらしい。

「や、西仏どの、お帰りなされませ」と、室内の者がいう。西仏は、

「寒いのが、今夜は」と言って、すぐ思い出したように、「そうだ、町の者に聞いたが、生信房が怪我をしたというではないか。生信房は、どうしてござるの」と、何気なく言った。

「しつ……」と、そこにいた者は、奥の師の耳を憚って、手を振った。

「え？ ……」西仏は、眉をひそめ、

「怪我は、そんなにおもい様子か」困った顔して、
「奥には」と、もちど、手を振って見せた。だが、その声はすぐ、善信の耳へはいつてしまった。

「石念」

「はい」

「生信房が怪我をしたというておるが、真かの」

「は……はい」

「なぜ、わしに黙っているか」

「申しわけございませぬ、ご心配をかけたくないと、当
人が申しますので」

「どんな容子ようすじゃ」

「落着いておられます」

「呼んでおいでなさい——苦痛でなければ」そう告げて、
善信は、皆のいる夕餉ゆうけの部屋へ、自身も出て来た。

愚禿ぐとく

—

師は、

「呼べ」という。かくしていたことが、つい西仏のこと
ばの端からわかったのである。どんなお叱りをうけるか。
弟子たちは、しいんと黙りこんで、にわかにつつもな
い。善信はかさねて、

「呼びなさい」と、いった。

「は」もう否いなまれなかつた。

定相じょうそうが立つて、暗い一間の中へ入って行つた。やが
て、恐縮そうに教順が出てきた。その後から、生信房は、
布ぬので巻いた額ひたいの傷口を抑えながら、悄々しおしおと出てきて、
師のまえに坐つた。

——俯向うつむいている。一同は、気の毒そうにその姿を見、
また、きびしい師の面おもてをそつと仰いだ。

「痛そうな」自然に師の唇から洩れた声であつた。——
そして次にいった。

「深傷ふかか」

「いえ、ほんの浅い傷でございます」いつも元氣な生信
房が、元氣なく答えた。

「どうなされたのじゃ。おもとはまたあれほど、御仏へ
返し参らせてある我心がしんを出して、むかしのような悪業を

したのではないか」

ぎくと、生信房は、顔いろをうごかした。——むかしのという一語ほど彼にとつて痛みを感じるものはなかった。天城四郎という異名で、怪力と大盗の業を誇りにして、世人を怖れしめていたころの自分が——その当時の自分のしたことの怖ろしさ浅ましさ——いまだに頭のすみに絶えず悔いているのであった。

「ちがうか」

「はい」

「では——」と、師のことばは追求する。

「馬に蹴られたのでございまして、べつに」

「馬に？」

「はい」

「うかつな」善信は、なおじつと、俯向いている彼を見つめて、

「それだけではおざるまい」

「それだけです」

「かくされな」

「はっ……」

「およそ、察しはつくが、かくしていては、おもとがかえって苦しもう、いっておしまいなさい」

しばらく、手をつかえていたが、

「——悪うございました、実は今日」と生信房は唇をひらいた。

「かようでござります、あの新川村へ托鉢に廻りますと、いつかお師様がお寄りになられて、御勸化をしておやり

になった、因果つづきでまことに不倖せな三日市の源左衛門夫婦が、私を見かけ、まろぶように、往来へ出て参りました」

「む」

「夫婦の申すには、聖人様に、念仏の道を諭していたからには夫婦の気持もすっかり変り、家は明るく、良人はよく稼ぎ、病人も絶えて、近ごろは、以前のわが家は、夢のようにおぼえ、朝夕、聖人様のお徳を拜んでおります。——かようにうれし涙を流して申しまして、こんな有難い教えを、どうかして、近所の衆、近郷の衆へも知らせてやりたい、どうか、私に今日は善根をさせてやると思ひ召して、説教をしてくれとせがみまするゆえ、かねて、お代官から布教はならぬと禁じられてはおりましたが、あまり熱心に乞われるままに、その家の近くの松の木の下へ、所持の御名号を掛けて、拙ない法話を初めたのでございました」

二

生信房の真面目な話しぶりに、人々も耳をすましていた。

そして、彼の前身を知っているほどの者はみな、心のうちで、

（この御房も、よくここまで変ったもの——）と密かに感じ入っていた。

生信房は、そっと、師の面へ眸を上げ、

「そうして、私が、説教をしておりますと、その説教なかばのことでございます」と、話しつづけてゆく。

「折わるく、もう稲田の検見でもございますまいが、代官の萩原年景が、七、八名の家来をつれて、その並木へさしかかって参りました。——武士たちの装束を見ると、どうやら、狩猟の帰りでもあったかもわかりません」

「む……。そして」と、善信は初めてつよくうなずいた。

「みな騎馬でした。威勢におそれている百姓衆は、みな、説教をよそにして、逃げちります。——するとそれを待たちは鞭を上げて追いかけて、勅勘の流人が布れる説教を聞くやつ輩は同罪に処すぞ！——こう呶鳴りながら、追いまわすのでございました」

「ムム……」人々は、無念そうに眼を光らして、うめき合った。

生信房もまた、そこでしばらくことばを句切つて、拳を膝にかためていたが——

「あれよ——あわれなことを——と私が見ておりますと、私の前にも、ハタと駒のひづめを止めた者がございます。見ると、それがうわさに聞く代官の萩原年景であったとみえます、馬上からはったと私を睨めつけ、——これッ囚僧！——そうです囚僧と呼ぶのでした。聞けよ、

そちは都にて邪教をいいふらし、罪を得てこの北国に流されたものではないか。しかるに、それにもなお懲りず、この地へ来てまでも、なお邪教を道へ撒こうといったすか、代官をおそれぬ致しかたである、かような物など見るも嘔吐が催す——と、そう罵りまして、私が、松の木に

かけておいた御名号を、いきなり鞍のうえから手をのばして、かように、引きむしって……勿体ない……だ、大地へ——いつか自分の話に自分でつり込まれて、生信房の顔には、大粒のなみだがぼろぼろとながれていた。

はっと、気づいて、彼はあわてて法衣のたもとで顔を拭いた。

「——私は、ほかの物とはちがいますので、やおれ待ち給え、と立ち塞がって、その乱暴を止めようとしたのです。——とたんに、蹴仆されていました。アツと、自分の額に手をやった時には、黒い血が、顔を染めていたのでございます。——馬のひづめで、どこかを蹴られた上、鞭で、二つほど打たれたとみえます」

「……」傷ましげに、人々は、生唾をのんだ。しいんと、声もないうちに。と、生信房は、くわっと大きな眼を一方に向け、

「おのれッ！……。わたくしはそう叫びました。以前は天城四郎である私です。むらむらつと起てば、代官の素ッ首ぐらいは、すぐ引捻つてしまったでしょう。

——だが、そのとき、ふと見ると御名号は彼の手に奪られずに、まだ松の幹に、風にヒラヒラしていたのです。

——それをふと見ましたとたんに、私は、はッと思つて眼にながれこむ血も知らず、仰向けに倒れたまま、虚空をにらんで念仏をと覚えておりました」

なんにもいわなかった。善信はただ黙然と聞き終って、「傷口に風を入れてはならぬ。大事にされよ」と、いった。師の房がなにもいわないにしても、その夜の人々は、生信房の話を聞いて、大きな感激につつまれたらしい。みな敬虔な面持ちをたたえて、

「さ、お寝みなされたがよい」と、生信房をいたわった。幾日かたつと、その傷口も癒え、体の熱もさがった。

生信房は、はればれと床を出て、あしたはまた、町へ布教に出たいなどと友と話していた。

「生信房どの、お師さまが、お呼びになつていますぞ」

「え、お部屋で」

「いや、あの岩にお腰をすえられて」

「あ……」と、生信房は、庵室の裏のほうへ眼をやつて笑つた。師の房は、外で、初冬の陽ざしを楽しんでいるのだった。

「およびですか」そこへ行くと、

「お掛け」と、氣がるである、師の房の顔までが、きょうは小春日の太陽のようにかがやかしい。

「もう傷口は」

「すっかり癒りました。ご心配をおかけしてすみません」

「さて、それについてじゃ」——と、善信はことばを改め、

「生信房、おことの身にも、ようよう念仏の光がついて

参られたの。いつぞやの話——善信もありがたく聞きました。よい御修行をなされたことを、わしも共々に欣びましょう。このうえとも、その心を、忘れてくださるな」と、手をとつて、わが子がよいことをした折によるこぶ母のように、善信はよろこぶのであった。

「はい……」生信房は、眼が熱くなった。どうしてこのごろは、こう涙っぽくなったのかと自分でも思う。しかし、その涙は、ただごとの涙とも思われない。

（——随喜）それだ、随喜の涙である。生信房は、涙にまたたきながらそう思った。

「そこで——わしもこの間うちから考えていたが」と、今日はいとも寛いだていで善信は何か述懐しようとするらしい、眼をふさいで、空へ顔を上げていたが、

「——善信。……これはわしの名だが、わしに取つてはなんとこのう実しやかで、あまりに淨い名でもありません。何かこのごろは、わしにはこの名がぴたりしないように思われてきたのじゃ。——やがて年も四十の坂にちかいので、三十九歳となったこの身に、なにやら、心にも変化が起つてきたのかも知れん。——とにかく、善信は、わしをあらわすには、ふさわしい名でないように思う」めずらしいことを話し出される——と生信房は、師の顔を見て、

「そうでしょうか。私などには、すこしもそんな気はいたしませぬが」と、いった。

四

心境に大きな変化が起つていたのである、たえまなく自己を考え、また真理を究^{きゆう}握^{あく}しようとしてやまない善信の内省のうちに、このごろ、ふと、今も生信房にいったような氣持がたしかにわいてきている。

「……おもうてみると、自力聖道の門から他力易行^{いぎよう}の道へかかるまで、そのあいだの幾多のまよい、もだえ、苦行、またよろこびなど、三十九歳の今日となつて、振りかえつてみれば、実にただ愚の一字でつきる。おろかしや——われながら今、その愚かさにおどろかれる」つぶやくように、善信はいうのである。

師のことばに、生信房はおのずと頭^{かしら}が下がった。そして、賢^{さか}しくも、自分などが近ごろ、やや念仏門の眞実がわかつたような顔をしていることが、恥かしくなつた。善信は、なおいふ。

「このごろ、しみじみとわしは自分がわかつてきたような氣がする。——飽くまで凡夫を出でない人間じゃと。

——さきの夜、あの生信房がいうのを聞くにつけて思いあわせられたのじゃ。極悪無道の大盗四郎であつた彼が、たちまち、なんの苦行や迷いや悶えもなく、嬰兒^{あかご}が這つて立つように、素直に念仏を体得している様を見ると、そこに、凡夫直^{じきにゆう}入^いのわが念仏門の眞理が手近にある。

——三十年の懊惱^{おうのう}をみぐるしゅう經てきたわしと、ついきのう念仏に皈依した生信房と——較べてみよ、どれほ

どの差があるうぞ。……わしはむしろ彼に教えられている。

わしも本体の愚のすがたに帰ろうと思ふのじゃ。そして、いっそう眞^{まこと}の念仏を——凡夫直入の手びきしようと存ずる。——名も今日よりは、愚禿^{ぐとく}とかえる。昨夜ふと眞如^{しんによ}の月を仰ぎながら、親鸞^{しんらん}という名もよいと思うたゆえ、その二つをあわせ、愚禿親鸞^{ぐとくしんらん}とあらためた。——愚禿親鸞、なんとふさわしかろうが」

「はい……」生信房もふかい内省にひき込まれていた。それ以上答えができなかつた。善信はその日から、自分を愚禿とよび、名を親鸞と改めた。一同へも、告げた。

冬になる。やがて——春がくる。伸びた黒髪に、網代^{あじろ}の笠をかぶつて、親鸞はよく町へ出て行く。着のみ着のままの破れ法衣^{ころも}——見るからに配所の人らしくいぶせかつた。だが、彼の頬には、いつも誰に對しても、人なつこい親しみぶかい、愚禿^{ぐとく}の微笑^{ほほえ}みがかがやいていた。

国府^{こくふ}を中心にして、新川^{にいかわ}や頸城^{くき}あたりから、ある時は、赤石、小田^{おだ}の浜の地方まで、親鸞は、ひょうひょうと布教にあるいた。

彼のすがたが、道の彼方^{かなた}から来るのを見かけると、

「おお、愚禿^{ぐとく}さまがお出でだ」

「お上人がおいでだぞい」浜の童^{わらべ}も、畑の女たちも、彼を見知っていて、彼をとり巻いた。

「きょうは、なんのお話をしようかの」と、親鸞は、畑にも、砂の丘にも、坐りこんだ。

彼の坐るところには、手をあげて呼ばなくても、人が

集まってくる。いつのまにか、一家族のような丸い輪になるのだ。

「この間の法話も、もういちどお聞かせしてくらっせ」
仏の法話を、漁民も農夫も、聞くのを楽しんだ。なぜならば、親鸞の話は、誰にもよくわかったし、このお上人様は、自分たちへ高僧として臨むのでなく、まるで友達のようになって、親しく、なんでも教えてくれるからであつた。

五

妬もちやきの女房も、極道者の亭主も、彼には服した。飢餓や病魔のお化けにとツつかれて多年不幸の底にあつた因果な家庭も、そこへ、親鸞の明るい顔が訪ねてゆくと、

（このごろ、おめえちの家は、どうしてそんなに皆が機嫌よく働くようになったのけ？）と、隣り近所がいぶかるほど、打って変って、健康で明るい家族たちの住む家となつてしまふのだつた。

ある部落では、親鸞のすがたが三日も見えないと、

（ご病氣ではないのか）

（なんぞ、お慰め申さでは）と、竹内の庵室へ、草餅を持って来たり、そつと野菜を置いて行ったり、親鸞も弟子たちもみな留守だと、

「ここが壊れている」

「垣も荒れている」と、屋根の繕いもしたり、雑草を

むしったり、掃除までして、奉仕することをよろこぶのだった。代官の萩原年景の部下が、配所の見廻りに来て、「こらつ、下民ども、都から流されて来た流人の小屋を、さように、手入れいたしたり、立ち寄つてはならん」と叱って追い払うと、

「それ、鬼の子が来た」と、彼らは争つて逃げるが、もう翌朝にはまた来て、

「これを、お上人様へ上げてください」と、温かい食物など置いて行く。親鸞は、いつも、

「ここはありがたい仏国である。都のうちでは、こういう仏果にめぐりあうことはすくない」といつて、彼らの喜捨に手をあわせたが、極く質素な朝夕の衣食に足るものだけを受けて、後は貧しい家の病人のいる家へ、弟子たちの手でわけてとらせた。代官の萩原年景は、

「売僧めが、愚民をたぶらかしおる」と、意識的に、いよいよ配所の人々を苛酷に取り扱ったが、親鸞も弟子たちも、少しも意にかける様子はなくて、国司の法には何事もよく従うので、憎んではいるものの、危害を加えることはできなかった。

——親鸞は、今日も、国府から四里ほどある漁村を過ぎて、裏日本の青い海ばたを歩いていた。

すると、この辺には見馴れない眉目のよい女房が、磯べを悄んぼり彼方から辿ってくる——摺れちがって、ふと、

「はて、どこかで——」と、親鸞は、小首をかしげながら振り向いた。女は、摺れちがった人も気づかずに、波

打ち際を、俯つ向いて行きすぎた。

「もし……」こう声をかけると、女は初めて驚いたようにこつちを見て、

「あ……」眼をみはった。

親鸞が歩み寄って行くと、どう考えたものか、女は突然、まっしぐらに反対の方へ走り出した。親鸞は手を振りあげた。

折よく、彼方から二、三名の漁師の姿が見えたので、親鸞は、それへ声をかけたのである。

漁師たちは、逃げてくる女をつかまえた。人々にかこまれると、女は砂の上へ打ち伏して、泣きくずれた。

六

「オオ、山吹さまだ」漁師たちは、その女性をよく見知っていた。

驚いた顔つきで、口々に、

「このお方は、お陣屋のお側妻さまだが——お上人様——どうしたわけでございます」

「わしも知らぬが……ふとすれちごうた折に、ぞっと、わしの心に寒いものが触れた。この女子は死に場所をさがして歩いているな——と、こう感じたゆえ、呼びとめると急に走りだした」親鸞は、漁師たちが、好奇な眼をあつめて、泣き伏している彼女をながめているので、

「——だが、それはわしだけの考えたこと、間違っているかも知れぬ。おことたちは、仕事もあろう、どうか退

いてくだされ」彼が頼むようにいうと、

「そうだ、わしらはこれから沖へ出にやらぬ。ではお上人様——」

一人一人が、ていねいに頭を下げた。そして漁船へ乗ると、やがて、後ろの浜辺には、親鸞と——山吹とよぶその女性と、二人きりになった。

「ここは風があたる」親鸞は、山吹を導いて、砂丘の陰へ歩いて行った。

「坐りなされ」といって、自分も坐る。うしろは砂丘にかこまれて、晩春のあたたかい陽に静かに抱かれている。山吹はくずれるように、砂へ坐って、さし俯向いた。

「お坊さま、あなたは竹内の配所へ来ていらっしゃる都の上人様ですか」

「そうです、親鸞といいます」

「元は、善信様と仰っしゃいましたね」

「ご存じか」

「吉水の禅房で、一、二度」

「それで思いあたりました。どこかでお見かけしたように思われたのは、都であったか。それでは、吉水の房へ、聴聞に来られたこともあったのじゃな」

「まだ私が京都にいた折、しきりと、念仏はよいものと、町の衆がうわさしますので、おもしろ半分に——」と、いって、あわてて、

「人に連れられ、見に参ったことがございました。その折、あなた様の御法話をうかがいましたので」

「それで、わしの眼にも残っていたものとみえる。——

あなたは、その折、他人が念仏にゆくので、流行ものでも見るような気持で参られたのであろうが、そういうかりそめの人にさえ、御仏はきょうの慈縁を結んでくださった」

「ほんとに……」と山吹は初めて、沁々と、親鸞のことに耳を傾けた。

「——もしわしが、あの時、おん身を振り向かず、そのまま行き過ぎてしもうたら、あなたは、ふたたび明日の陽を見ない人だったでしょう」

「そうです、仰っしゃるとおり、きょうこそは、死のうと覚悟して、家へ遺書まで残して出てきたのでございしました。——ですが、上人さま、ただ私とすれちごうただけで、どうして私が死ぬ気持でいたことが、あなた様にはわかりましたか」

「わからなくてどうしましょう。おん身のたましいも、わしのたましいも、人間のたましいに二つはありません、ひとつものであるのです、自他無差別、本来無垢、澄みとおって純なるものです。——ただそれが肉体というもの、容貌とか、身装とか、うわべのものにつつまれているので、おん身とわしとが、べつな者に見えたり、敵に思われたり、憎んだり、嫉んだり、あらゆる愛憎の霧がかかってきて、そこに他人という観念が起って参るに過ぎません。自分という我執もそこからわいてくるしの……」

七

山吹は聞き入っていた。あたたかい砂丘の陽なたは、彼女の寒々と硬ばっていた暗い顔を、やや明るくしてき

た。
「……では、上人様、わたくしはあなた様に、どんなことを申しあげても、あなた様は、自分のことのように聞いてくださいますか」すると親鸞はむしろ待っていたように、

「オオ、なんなと話されい」

「ありがとうございます、わたくしには、この胸にいっぱいな苦しみを、話す人さえこの世にないのでございしました。——さびしい世の中、あるのは皆、私を呪う邪智の鬼や、羅刹ばかり……。それゆえ、死のうと思ひ決めたのでした」

「死ぬ……それはいつでもできることじゃ、まあ、その理をいうてみなされ」

「醜い——恥かしい——それはもう上人様のまえで申すも面映ゆいこととござりますが、実は」と、山吹は、坐っている海砂をまさぐりながら――

「わたくしは元、京都の六条で、白拍子をしておりました。そのころこの国府の代官萩原年景によばれ越路へ来ぬか、国府の館へ来れば身の妻として、終生安穩に暮らさせてやろうにと、ことは甘くいわれましたので、後前の考えもなく年景について参りました。——ところ

が来てみると、年景には、妻子もあるばかりか、国府の住居には、幾人もの側女がいて、その人々が、めいめい、年景の寵を争うので、嫉みぶかい女同士の争いが、絶えたこともございませぬ」

「そうか……」親鸞は、領民たちの呪詛の声と、年景の生活のさまを思いうかべて、うなずいた。

「——でも、この遠い国へ来ては、どうする術もございませぬ。幾年かを忍んで参りました。けれど、忍ぶにも忍べない日がついに参りました。年景は、わたしに飽いて、酷くあたります、ほかの側女たちも手をたたいて事毎に告げ口する。あろうことかあるまいことか、年景の召使で、蜘蛛太という侏儒と、わたくしが、不義をしているなどと云いふらすではございませぬか」

「蜘蛛太？」と親鸞は小首をかしげた。

「お上人様など、ご存じある者ではございませぬ。その侏儒の蜘蛛太という者は、わたくしが京の六条にいたころから、よく町をうろついていた者で、主人を失って、路頭に迷っているので年景にたのんで、その越路へ来る折、雇い入れてもらった男なのでございます。——ですから、蜘蛛太は、わたくしには親切にしてくれます、共に泣いたり心配してくれます。それがかえって悪かったので、あらぬ噂を立てられたのでございますが、氣だてこそ、そんな可愛い所のある人でも、顔はおどけているし、背は四尺ぐらいしかない片輪者、なんでわたくしが不義などいたしましたでしょう」

「およそわかった。それで、死のうとなされたのか」

「いッそ！ ……と口惜しまぎれに……」山吹は、砂の上へ、打ち伏して泣いた。

「……かわいそうに、蜘蛛太は、わたしのために、仕置小屋に抛りこまれて、これも、覚えのないことを、責め折檻されているようでございます」

国府の丘の小高いところに、良い庭木や石をあつめて、戦いでもある折は、小さな砦ぐらいな役には立とうと思われる豪華な一構えの屋敷がある。

代官の官衙とその住宅であった。萩原年景は、この中心として、絶対の権力を振舞った。住居も、一廓のうちに、家族たちのいる奥とよぶ所と、彼の愛妾たちを置く、下の棟とよぶところと、ふた所にわかれている。したがって、その一廓のうちで、年景をめぐって、いろいろな媚や、讒訴や、排撃や、嘘や、あらゆる小さな争闘が毎日行われている。

だが、年景は、家庭とその女たちの群れへも、自分の政治的な手腕を信頼していた。

「萩の井さま」と、一人の女がいう。

寝そべっていた女が、

「なあに」甘ったるい返辞をし、敷物から顔をあげた。

窓から、外をながめていた女が、二人の会話にふり向いて、これも話にまじろうとするように、坐り直す。

この下の棟には、五、六人の女たちが、棟つづきに住んでいるのだった。

彼女たちは皆、ひとりの年景に飼われている美しい動

物の境遇であった。年景をめぐって、彼の寵愛を争う時には、おのおのが、爪を研ぎ、毒舌に火をちらすのであったが、無智で節操のない彼女たちは、昼間の長い退屈にわずらうと、いつかこうして一間に寄り集まって冗談をいったり、物を食べ合ったり、奥の悪口をいい合ったりしてその無聊をなぐさめ合いもするのだった。

「きょう、山吹さまは、見えないじゃありませんか」

「……そういえば、ほんに」

「あの人の部屋、見た？」

「いいえ」

「誰か見てこない？」

「でも」

「かまわないよ」一人が長い板縁をわたって姿をかくした。しばらくすると、帰ってきて、

「いない」と、顔をふっている。

「なにも変わったことはない」

「きれいに部屋が掃除してあって、小机のうえに、香が焚いてあっただけ」

「香が焚いてあった。おかしいね。香など焚いたことのない人が」

「行っただんじやない」

「どこへ」

「死出の旅路へ」

「ホ、ホ、ホ」盗むように一人がわらって、

「——そうかも知れない。毎日、泣いてばかりいた様子だから」

「でも、身から出たさび——仕方がないもの」

「ものずきな——あんな侏儒こびとの片輪者を、殿様の目をぬすんで、閨ねへ入れるなんて、気がしれない」

「あれ……ほんとのことなのかしら」

「だって、みながそういうもの、火のない所にけむりは立たないでしょう」

「けれど、誰が先に、そんな煙を立てたのか」

「どうだって、いいじゃありませんか。どうせあの人は、ふだんから、死にたいが口癖だったんだから、本望でしょうに」そういつて、よそごとのように、戯れ口ぐちをきいていたが、それでもどこかに気がかりになるとみえ、

「ほんとに、帰ってこないらしい……」と少し不安な眼をしだした。

二

「もいちど、見に行ってみましょうか」と、一人がいう。女たちは、皆立った。そして、山吹の部屋をのぞいてみると、香のにおいがまだ残っていて、小机の下を見ると、何か、手紙らしいものがあつた。頓とんきよう狂に、一人が、

「あつ、遺書かきおき」と、さげんだ。

「え、遺書ですって」

「ま……」

「おおいやだ」身ぶるいして、そして、にわかにあわてた顔いろを見あわせ、

「どうでしょう」

「どうって……」

「殿様へ、お知らせしておかなければ——」その部屋にいるのが、何か、怖いもののように、女たちは外へ出て、「誰か来てください」と呼び立てた。お下婢はしたが駈けてきた。小侍もそれへ来た。

すぐ、役所のほうへ向って、一人が走って行った。

間もなく、代官の年景が、やや狼狽した顔色を湛たたえて、「なんじゃ、山吹がない？」と、それへ上がってきた。

女たちは一カ所にかたまつて、みな自分のせいではないように黙っていた。年景は、自分にあてた山吹の遺書いしよをひらいていたが、それは呪のろいの文字にみちていた。たちまち、裂いて袂たもとへ丸めこんだが、血相は濁りきつて、何か、憤いきどおろしいものを、そこらへ打ぶつつけたい眼つきをしていた。

「馬鹿っ」それがついに爆発して、突然こう呶鳴りだしたのである。彼の狂暴性を知りぬいている女たちは、びくとしたように、小さな眼をすくませた。

「なぜ、お前たちは、気をつけていないのだ。誰も、知らなかったのか」

「………」

「この間うちから、様子がおかしいから、気をつけておれといったのに、どうもこいつも」と、睨ねめつけて、蹙あしわと音あらく、女たちの前を踏んで通ってみせた。

「これっ、おいっ」

「はい……」側女そばめの一人が答えると、

「おまえなど呼んだのじゃない。源次、源次」と、家来

を縁先へよんで、

「きょうはすこし頭のぐあいがわるい。役所のほうの仕事は、いいつけておいたように、ほかの者と片づけてくれ。いいか、わしはここですこし休んでおるからな」

「はい」と、家来が行きかけると、

「おいおい、奥へはそういうなよ。役所におけるようにいうておけよ」ごろりと、年景は、大きな体を部屋のまん中に横たえた。焦々とした眼を、開いたりふさいだりしているのだった。さすが、愉快ではないらしい、どこかで、自分を責めたり、また惑ったり怒ったりするものが、顔の皮膚をどす黒く濁していた。

「酒を持ってこないか。おいっ……酒を」と、呶鳴って、額へ手をあてた。——奥の棟にいる妻だの子だのが、げらげらどこかで笑っているような声がする。むっくりと、彼は起き上った。

「これ、誰か、山吹をさがしに行っておるのか？」

三

側女たちは顔を見あわせた。誰も黙りこんだまま答えずにいると、年景の額に、青筋が膨れあがった。

「だまっているところを見ると、誰も、彼女の身を案じて、見に行った者はないのだな。——遺書をのこして、出て行った者を、おまえらは、笑って見ているのだな」

「……………」

「どいつも、こいつも、なんという薄情な奴ばかりだ。」

山吹は、もう死んでいるかもしれない「年景は、こううめいて、自悶に耐えられぬように、

「——ああ、彼女は、もう死んでいるかも知れない。おれは心から彼奴が憎いわけじゃなかった。おまえらが

なんのかのと讒訴をするので、おれも疑いの目で見初めたのだ。山吹はおれを恨んで死んだに違いない」また

——ごろりと仰向けになる。そして側女が出した杯を引たくるように取った。こういう場合の年景に、酒が入ることは、炎に油をそそぐようなものであることを、側女たちは常に知っているので、めいめい、眸のそこに、おどおどと戦慄を持っていた。

「つげッ」と、飲みほした杯をつき出すので、ひとりがかわごわ、銚子を近づけると、

「この、おべんちゃら」ついだ酒を、その側女の顔へ、浴びせかけた。

杯はまたすぐ、べつな側女の顔へ、独楽みたいに飛んで行った。

「この毒草め、どいつもこいつも、皆、毒の花だ。みすみす、おまえたちと朝夕ひとつに暮していた山吹が、遺書して出て行ったのに、のめのめ見ごろしにするという法があるか。なぜ手分けして、探しに行くなり、召使たちを走らせて、心配しないか。——気に喰わない奴らだ。薄情者めが、よくもそうじゃあしやあした面ばかりが揃ったものだ」と、年景はまるで、この不愉快な事件が、すべて他人のせいであるように罵って、

「出て行けっ」と、部屋を揺るがすような声でわめいた。

「きよう限り、みんな暇をくれる。誰の彼のといわず、一人残らず出て行けつ。女など、世間に降るほどある。

年景はもう実をいえば、貴さまたちには、あきあきしている所だ。そこへ持ってきて、貴さまたちの醜い冷酷な根性を見せつけられては、なおさら、嫌になつてしまつた」手がつけられない怒り方である。理窟ではない、これが年景の遊びなのだ、何事も意のままになり過ぎて、これくらいな刺戟を起こさないと、年景の気だるい神経はなぐさまないのである。それまた初まつたというように、側女^{そばめ}たちは、隅のほうへ避けて青白いおののきを集めていた。年景は、銚子をつかんで、

「出て行けつ」と、それへ投げつけた。すると、家の外である。廂^{ひまし}を蔽^{おほ}つて、ずつと聳^{そび}えている大きな樹のう

えで、誰か、年景の口真似^{まね}をしたものがある。

「そうだつ、出て行け！」年景が気づかずに、
「出て行かんかつ」と、身を起たせて、足蹴^{あしげ}の形を示すとまた、

「——出て行かんかつ」と、^{こしたま}のうのように、樹のうえから同じ声がした。

「……や、どいつじゃ」縁へ出て、年景がこずえを仰ぐと、老人か子供か、見当のつかない顔した怪異な小男が、葉陰に白い歯を剥^むいてわらつていた。

四

その侏儒^{こびと}は、京都から雇つてきた蜘蛛太^{くもた}とよぶ男で、

庭掃除の小者として使っていたが、側女^{そばめ}の山吹とのあいだに、おかしな噂があつたので、年景が怒つて、先ごろ、牢へ押し籠めてしまつた者である。その蜘蛛太が？

年景は、驚いた。アツと顔を上げたまましばらくは眼を奪われていた。どうして、牢内から出てきたのか。猿みたいに、樹の上にあがつて、こつちを見ているのだ。自分を嘲笑^{あざわら}うように歯を剥いている。

「おのれつ」年景は、縁板を踏み鳴らし、

「化け物つ、降りろッ」——すると蜘蛛太は、

「化け物つ、眼をさませ」と口真似して、

「やい代官」

「な、なんじゃと」

「使われているうちは主人と敬め奉^{あが}っていたが、もうこうなれば、主^{しゅ}でもねえ下僕でもねえ、おれはむかしの天城四郎の手下になつてみせるぞ」

「やつ、おのれは、賊か」

「才、以前は、泥棒を商売にしていたが、自分の頭領が発心して、僧門に入る時、てめえも真人間になれと懇々^{こんこん}いわれたので、それ以来、泥足を洗つて、てめえのような凡^{おろ}くらに、きようまで、おとなしく仕えていたが、もう止めた。真人間になるなんて、こりごりした。いたいこの世の中のどこに真人間なんて者がいるかつてんだ。てめえのような悪代官を見ると、おれたちの昔の友だちのほうかはるかに正直で涙がある」

「よくもいうたな、おのれ、引きずり降ろして、鋸^{のこぎり}引

きの刑にしてくれる」

「わらわすな」と、蜘蛛太は、依然としてそこに落着きこんで――

「おれが逃げようと思えば、こんな田舎の陣屋の牢ぐらい、幾らでも破ってみせる」

「よしっ、その舌の根を」憤然と、年景は、家の内へ走りこんだと思うと、弓と矢を持って、ひらりと、縁先から跳び降りた。酒気のある顔に、血をそそいで、弓に矢をつがえ、キリリと引きしぼって、こずえの空を狙うと、

「やい待てっ。――おれを射る気か」

「……………」ぴゅっと、返辞のかわりに矢は空へ翔けた。

――しかしあわてたので蜘蛛太の体を外れていた。ただ二、三枚の若葉がばらばらと散ってきただけである。

「なんていう下手な弓だ、そんなへ口矢で人を射落そうなどというのは、量見ちがいだぞ。――それよりはヤイ代官、なぜその矢で、自分の胸を射ないか、てめえの胸のうちには、おれより怪異な魔ものが住んでいるじゃねえか。その魔ものの名を、増長というんだ。よくも、この蜘蛛太と山吹さまに汚名を着せやがったな、その返報は、きつとしてやる、覚えていろ」いうことばのうちに、年景は、二の矢をつがえていた。ぷつんと、弦が高く鳴った。矢はたしかに前よりも正しく飛んだ。――けれど、蜘蛛太はとたんに、ほかの梢へ跳び移っていた。

「出合えっ、家来どもっ、破牢者をとらえろッ」

年景の声に、廊内は聲音にみだれ合った。だが、役所の屋根のうえを、一度、勢いよく躍り駆けてゆく姿が

見えただけで、蜘蛛太の影は、どこへ失せたか、それきり幾ら探しても見出すことができなかった。

五

家来や下僕の者を叱咤して、

「蜘蛛めを探せ」と、年景は、庭に出ていた。

屋根へのぼってゆく者がある、床下を竹竿でかき廻している者がある。そこへどこからか、小石が降ってきた。

「――痛いっ」と叫んで、人々はまた、樹の上を仰いだ。鴉の群れがパツと立つ。――しかし、蜘蛛太の影は見あたらない。

「まだ、外へ失せてはいない。どこかに潜んでいるに違いないぞ。探しだして、たたき伏せい」年景は、自分も狂奔していた。そして、いつか、妻子たちの住んでいる奥の棟のほうまで走ってくると、

「あなた」と、針をふくんだような――冷たい甲ばしつた声が――ついその住居から走った。

（妻だな）すぐ年景は、その声の主を、振向かないでも感じていたが、

「なんだ」よいほどに答えると、

「ちよっと、話があるから来てください」と、彼の妻がいった。

彼の妻は、田弓の方といって、七人もの子供を育んでいた。年景は、舌うちして、

「それどころじゃないっ」呶鳴ると、

「何が、それどころでないんですか。妻の私が、たまに話があるというのに、話も聞いて下さらないのですか」
「昼中は、お役目が忙しい。妻の相手になぞなっておれるか」

「ふん……」と、田弓は良人の挙動をながめて笑った。

「公のお役目がせわしいなどとよくいわれたものです。

—— あなたは、側女そばめの山吹がいなくなったので、それで狼狽うろたえているのでしょうか」

「ばッ、ばっ。——何をいうか」

「そうです、そうに違いありません。——今、私のところへ使いに來た浜辺の女房が、ちゃんと告げて行きました。山吹は、浜へ行って身を投げようとしたそうですよ。そこを、親鸞という配所のお坊さんに救われて、泣く泣く町を歩いて行ったそうです。——なんという恥さらしでしょう」

「なに、親鸞が、連れて行ったと……」

「それごらんなさい、それでも、山吹のことではなく、お役目で忙しいのですか」

「うるさいっ」立ち去ろうとすると、田弓が縁から庭へ追ってきた。そして、良人の袂たもとをつかまえて、

「どこへ行らっしゃるんです」

「離せっ」

「いい加減に、あなたも、眼をさましたらどうですか。

—— そんなことで、一国のお代官が勤まりましようか」

「だまれっ、良人に対して、何をいうか。女は良人に従って、子どもに乳さえやっていればいいのだ」

「その子供さえ、もう皆、大きくなっています。父の行状を見て、眉をひそめるほどになっているのです。——なんですか、もう白髪しろがのふえる年配をして」

「ちッ、こ、こんな所で、見苦しいっ」

「見苦しいのは、あなたという人間の行いではありませんか。あんな牝めすの獸けだもののような白粉おしろいの女たちを、五人も六人も飼いちらして」

「まだいうかッ」頬を一つ、ぴしゃつと打つと、

「打ちましたね」と、田弓も負けずに、良人の胸へむしやぶりついた。

六

こういう家庭の常として、田弓ももちろん、貞淑な妻ではあり得なかった。多分に、女に多い女のやまいを持っていた。

「ええ、この牝めすの獸けだものめ」と、年景が、こんどは平手を拳こぶしにして、もう一つ、頬へ加えると、

「口惜しいっ」田弓は、盲目になって、

「さ、殺しなさい。……さ、もっと、お打ちなさいっ」と、身を押しつけて行った。年景は、もてあまして、

「気がいいっ」と、罵ののしった。

「気がいいに、誰がしたんですか、五人も、六人も、眼の前に側女そばめを飼われておいて、気のちがわれない妻がありましようか。それで、一国の代官といわれるんですか。——領民たちは、あなたを怨んでいますっ」

「な、なんでわしを」

「いいえ、多くの女に贅沢をさせるために、百姓たちの膏血^{こうけつ}をしぼることは、隣国の国司^{こくし}にまで聞えています。

——今にごらんない、隣国の兵が攻めてきますから、その時には、自分の領民だと思っっている百姓や町人が、皆、あなたに叛旗^{はんき}をひるがえして、この館^{やかた}へ襲^よせかけてくるでしょう」

「こいつめが！ いわしておけば存分な囁言^{ささやごと}を」

「でも、それが、悪因悪果というものです、妻や、子の呪^{のろ}いだけでも」

「おのれは、良人がそうなる日を待っているのかっ」

「そうになったら眼がさめるでしょうから」

「出て行けッ」蹴とばすと、ひいっと、田弓は泣き仆^{たお}れた。——と同時に、彼女は眼をつり上げて、わが子の寝ている部屋へ走りこんだ。

「——あっ」と、年景は、後を追って行った。なぜならば、もういつもの半狂乱のていになった田弓は、そこに仲よく遊んでいる頑^{がん}是^ぜはない二人の幼児^{おさなご}を、縊^しめ殺^{ころ}しかねない血相で抱きしめ、手に、懐剣を抜いているからだった。——飛び込んで行って、

「な、なにをする」年景が、懐剣を引ッたくって庭のかなかへ遠く抛^{ほう}ると、その樹陰にたたずんでいた一人の僧が、

「……あぶない」と、静かにいって、飛んできた懐剣の光から、そっと身を交^かわした。破^やれ笠^{がさ}をかむって、竹の杖をついていた。——年景が、ぎよっとして、その僧を睨^ね

めつけた。

「……ご主人でござりますか」僧は、いんぎんに、笠のまま頭を下げた。

「誰だっ……何者だっ、そのほうは」年景は、見も知らぬ他人に、見られたくない所を見られて、腹立たしかった。縁へ突っ立って、傲然^{ごうぜん}と叱りつけたのである。

「——なんで、無断でこんな所へ入ってきたかっ。どこ

の乞食じゃ」
「わしは、配所の親鸞でござる……。お裏口にて、先ほ

どから、しきりと訪^{おも}いでしたが、どなたも出てお越し

がない。それによつて」
「なに、親鸞？」と、年景は、さっき妻から聞いたことばをふと思い出して、
「その親鸞が、何しにやって来たかっ」と、鬼のような顔を作った。

七

どんな烈しい人間の悪感情に向つても、親鸞は親鸞の気の持ち方に、さざ波ほどの揺るぎもうけなかった。澄んだ湖のように、彼の眸は穏やかなのである。

「托鉢^{たくはつ}に参つてござる」こう彼がその面^{おもて}のような静かなことばでいうと、

「なに、托鉢に」と、年景の声は、よけいに荒々しく棘立^{とげだ}つて、

「ば、ばかなっ。ここはただの民家でない、かりそめに

も、代官萩原年景の役宅と住居すまいのある所、流人僧の出入りなど相成らん」

「ご存じないか、出家には門がないことを。——権門も、富者の門も、貧者の門も、すべて僧には同じものでしかない」

「貴さま、この年景に、理窟をいいに来たのか」

「ちがいます、托鉢のためでござる。そして、わしが布施を受けると共に、おん身にも布施したいものがあつて」

「乞食坊主から、なにを貰おうぞ、無礼者め」

「仰せられな、この親鸞の眼から見れば、おん身は気の毒な貧者でしかない」

「おれが、貧者だと」

「眼に見える物の富の小ささを、年景どの、ご存じないか。なんと、この北国の貧村と、瘦せたる民の膏血こうけつで作った第宅ていたくの見すばらしさよ。京の朱雀すじやく、西洞院にしどういんのあたりの官衙かんがや富豪の邸やしきですら、われらの眼には、ただものあわれを誘う人間の心やすめの砂上の楼閣ろうかくとしか映らぬものを。——いわんや北国貧土の小代官が奢おごり沙汰、片腹いたいというほかはない」

「罪囚！」年景は、大地を蹴って、怒った。

「おのれ、流人の身をもって、代官たるこの身を、罵ののったな」

「あたりまえなことを申しあげたのです。今わからなければ、後になって分りましょう。——そういう折へ、無駄な説法、わしもやめにする。……だが用向きは果たしてもどらねばならぬ。年景どの、お身が養っていた山吹

という女子おなご、海辺から親鸞が連れて参った、どうぞ親鸞がたのみを聞き入れて下さるまいか」

「人を悪あしざまに罵ののって、その上の頼み事、聞き入れる耳はない」

「では、多年、寵愛した女子おなごが、死のうと生きようと、お身はかまわぬというか。親鸞ですらかなしいものを」

「よけいな世話をやくな」

「わしがやくのではない、御仏が世話をやかれるのじゃ。山吹は、わしが庵室へかくれて剃髪はつしたいというが、親鸞は今、かくの通り、流人の身のうえ。——朝命に対して、憚はばりあること。その願いは聞かれぬによって、山吹の縁者たちの住む土地——京へもどって、願いを達したがいといい諭さとして連れてきたのじゃ。おん身の手をもつて、どうぞ、山吹を元の京都へ返してやって欲しい。……どうじゃ、その頼みなら聞いてくださるであろが」

「……置いて行けっ」年景は、噛んで吐き出すようにいった。自分の側女そばめが、彼の手によって届けられたことは、感謝するどころではなく、むしろ忌々いまいまいしくて堪らなかつた。

「頼みもせぬに、山吹を連れてきたか。連れてきたなら仕方がない、その女を置いて、疾とく立ち帰るがよからう。物欲しげに、うろうろいたしておると、承知せぬぞ」でれ隠しである。年景はそういつて、まだ騒いでいる家来たちへ、何か当りちらしながら、住居すまいのうちへ姿を消した。

蜘蛛の笑い

—

石念じやくねんは眠ると歯ぎしりをする癖がある、よく定相じようそうや念名ねんみょうなどに注意されるが癒なおらない。

もう隣の室の西仏さいぶつも教順も眠っていた。奥の師の房の室もしいんとして暗い。生信房ひとり、常に、寝る間もその師のそばを離れないのが彼の勤めであって、師のやすんでいる部屋の垂薦たれごものすぐ外に、ごろりと、薄い衾ふすまをかぶって寝ている——

この配所の一棟は、雨の日は雨こそ洩るが、風の日には風にかそがたがた揺れるが——実に幸福そうな寝息を夜ごとにつつんでいる。

今は、ことに幸福らしかった。

ほのかな月が、破れ廂びさしから映しこんでくる。裏の菜種畑の花から、甘いにおいもののび込む——

「むむむ……」昼間は托鉢たくはつのために、何里となく歩くので、石念じやくねんだの定相じようそうだの、若い者は寝相がわるい。しきりと、あばれるのである。石念はまた、歯ぎしりを噛む。「これ」ふと、そばに寝ていた定相が、石念の肩を突ツついた。

「風邪かぜをひくぞ、夜具の外にまろび出しているじゃないか」

「あ……ありがと」眼をさまして、石念は、間がわるそうに夜具を担かつぎ直したが、

「——おや」首をもたげて、

「定相」

「なんじゃ」

「外がいやに明るいじゃないか」

「月の光だろう。この冬の雪で、すっかり廂ひさしも雨戸も壊れてしまったから、月の夜は、家の中まで明るい」

「まあ、起きてみい。月明りではない、赤いぞ」

「赤い？」定相も、むっくり身を起して、

「……あつ、火事じゃ」

「そうだ」

「どこだろう」二人は出て行つた。ガタガタと建付けのわるい雨戸を繰り開ける音がする。そこから立って見まわすと、ちょうど西のほうに当る空がいちめんに赤く、チラチラと、金の屑くずを噴くように火の粉が夜空にうごいていた。

「ほんに……。町とすれば、いつもわしらの托鉢に行く家が軒並に焼けているのではあるまいか」

「皆も、起そう」師の眠りはさまたげたくないが、西仏さいぶつや教順には告げようと思った。すぐ人々は起きそろって来た。

「懇意の衆が多いから、わしはちょっと見舞ってくる」気のはやいのは、西仏であった。——また、炎を見ると、なにかうずうずと血管が唆そそかされるような眼をしているのは、生信房しょうしんぼうであった。

その二人は、いつのまにか、炎を目あてに、町のほうへ走って行ってしまった。

竹内たけのうちから国府こくふへ通じている丘の道へ来ると、炎は、眼のまえに見えた。

「あつ、代官の館やぐただ」

「えっ、年景の」生信房は、しばらくの間、立ちすくんで火災の美しさに見み惚とれていた。——そして、いつであったか、ずっと以前に、代官の萩原年景のために、鞭で打たれ、馬に蹴られて、御名号を奪われかけたあの時のことをふと思うかべ、（仏罰ぶつばつじゃ）ちよつと、小気味よい気がしたが、生信房は、すぐ自分のその氣持を、自分で蔑さげすんだ。

「そうだ」もう西仏はそばにいなかった。——何を感じたか、彼もまた、まっしぐらに西仏の後から赤い空の下を走って行った。

二

場所が小高い丘であるし、正面海の風をうけるので、国府こくふの代官所と年景の住居すまいをくるめたその一廓は、焰々と、紅蓮ぐれんのほしいままな勢いにまかされていた。

「——魔火まびじゃ」

「どうして、火の気もない、御文書庫ごもんじょくらから？」と、役人や小者たちも、手をこまねいて、猛火のすごい勢いに、気をのまれたかのように、傍観ぼうかんしていた。

火事だ——と誰かさげんだ時は、もう役所の奥の書

類のつまっている一棟が完全に火の中にあつたのである。原因のわからない火だった。

夜なので、役所のほうには、三、四人の小役人が宿直とくのをしていたに過ぎなかった。丘の東の麓ふもとに、代官所の部下がだいぶ住んでいるが、そこへも火がかぶるので、めいめいが、わが家のことや家族の処置にいっぱいいて、誰も、ここへは駆けつけて来ない。

国府こくふの領民も、初めは、

（たいへんだ）と、驚いたが、すぐ、

（なんじゃ、代官所か）と、すぐ冷静になつてしまった。（日ごろ、わしらを、牛か馬のように思うて、苛税かぜいを取り立てた酬むくいじゃ、あの赤い火は、代官所を呪のろうている貧しい百姓たちの思いが燃えるのじゃ、常々、威張りくさつてばかりいる代官の顔を笑うて見てやれ）そういう感情が、領民の誰にもあつた、口という者はなかったが、他国の火事でも見るように、この人々も、そこへ走はせつけて行こうとはしない。

大きな火ばしらは、音をたてて今、一棟を焼き仆たおしていた。廓内の大樹にもみな火がついて、火の葉、火の華はなが、宙ちゆうに咲いた。

——その下に、女たちや、幼子おきなごの悲鳴が聞えた。年景の側女そばめだの、家族たちのいる棟へも、とうに火は移っていたのである。

「おいッ……おいッ……」煙のうちから、泣くようななわめきが響く。それは、年景の声らしかった。

「——小者っ、こっちだっ、こっちへ助けすに来いっ」咽む

せながら、呼んでいる。

だが——奥に仕えている小侍や小者たちも、いったいどこへ行ってしまったのか、半分も影が見えなかった。そのくせ、真っ先に、暴徒のような勇気を奮って、奥の金目な物や、大事な什器などを、争って外へ担ぎ出して、いたのは彼らであつたが、その品物も見あたらなければ、奉公人たちも見えないのである。年景はようやく気づいて、

「ふッ、不埒者めッ。主人の難儀を幸いに、あの奴らはみな、家財を盗んで逃亡しおつたな。……ど、どうするか、後で見ておれ」

地だんだ踏んで、煙の中で、ただ二、三の召使と、必死になつて、右往左往していた。

彼は、役目上、役宅のうちから、領土の検見張だの、京都との往復の文書だの、政治上の大事な書類などを、死んでも担ぎ出さなければならなかつた。

——だが、火の手はもう、逃げ口をふさいでいた。自分の狼狽よりも、彼は、煙の中から聞えてくる家族たちの悲鳴に、逆上してしまった。抱えている書類の束にも、火がついていた。

「——誰かいないかッ、おれはいいが、妻だの、幼い子たちを、炎の中から出してくれッ。誰かッ……誰かッ……」絶叫すると、どこかで、

「代官、代官。——泣き代官」と、笑い声がした。

三

「やつ」仰ぐと——その声のする空もいちめんの煙であつたが、そこに、まだ火をうけていない大きな櫓の木があつた。

「おい、泣き代官、今にみろといったおれのことだが、今夜は思い知つたろう」声は、その梢からするのであつた。——じつと見ると、猿のような人影が葉がくれに登っている。

「アッ、おのれ」萩原年景は、樹の下へ駆け寄つて、

「蜘蛛太だなッ」

「そうだ、おれは蜘蛛太だ」

「こよいの火放けは、おのれの仕業か」

「いうまでもあるめえ。人われに辛ければ、われまた人に辛し。——火はおれが放けたんだが、今夜の憂き目は、てめえの自業自得というものだ」

「ムムッ……悪魔め」

「悪魔とは、てめえのことじゃねえか」

「残念だ」年景は、部下を呼んだ、召使の名をさげんだ。しかし、答えもない、聞えるものは、ただごうごうと炎のすさまじい音が、いよいよ風に猛っているだけだつた。

「ざまを見ろ。——あれを見ろ、親の因果は、子にまで祟るといふが、火の中で、てめえの子や妻が、悲鳴をあげて、逃げ口をさがしている。……アア綺麗な火だなあ」

「悪魔っ、外道っ」

「なんとでもいえ、おれの眼には、この火事が綺麗に見えてこたえられねえ。酒があれば、肴さかなにして、一杯飲みてえくらいなものだ」

ぴゅっ——と年景の手から白い光が梢こずえへ走って行った。彼の帯びていた短剣だった。それが外それると、太刀のほうも抜いて投げた。

キキキキと、猿のような笑い声がして宙の木の葉が騒いだ。

石、瓦、木片、手当り次第にひろって、年景は宙へ投げたが、みな自分の頭上へ返ってくるだけだった。蜘蛛太は、どう逃げたのか、もうその樹にいなかった。

——すると、もういちめんの焰えきになっている館の囲いを躍りこえてきた勇猛な一つの人影があった。

彼の家来でも、役所の者でもなかった。真っ赤な火光ひかりの中を走ってくる影を見ると、明らかに、それは僧形そうぎようの人だった。

「おうっ……」年景は、振りかえって、ぎょっとした。

——それは忘れもしない——かつて領下の田を、狩獵りように出た歸り途かえみちに見廻みまわってくる途中で、松並木に、念仏の名号をかけて、村民たちに説教をしていた配所の流人僧るにんそうである。——その時、自分は大の念仏ざらいであるし、自分の通過も怖れず、突っ立っているその僧を憎い奴と思つて、馬上から名号の掛物を引きやぶつてやろうとすると、それを拒んで、自分の馬蹄ばていの下に倒れ、顔かどここに怪我けがをしたあの僧である。後に聞けば、それは親鸞の

弟子僧のうちでも、最も、前身にすごい経歴を持っている人物で、以前は天城四郎といていた強悪の賊であったが、今では、念仏の行者になって、名も生信房しょうしんぼうと改めている男だと聞いている——

その生信房が、今、忽然こつぜんとこの炎のなかへ駈けつけてきたのである。年景は、ぶるぶると体がふるえてしまった。——刹那せつなに、彼の頭を突き抜くように走ったのは、（復讐しかえしに來たな）という恐怖だった。

四

すでにその前から、憤怒、滅失、狼狽、あらゆる感情のみだれに、われというものすら失っている萩原年景である。

（いつかの流人僧だな）と、眼のまえに生信房のすがたを見ると、彼は蒼白になり、体はふるえ、口は渴かわききつて、恐怖のさけびも出なかった。

（——今こそおれは、復讐されるのだ、存分に、苦悶を味わわせられて、ここで人間の終りを告げるのだ）と思つと、生への未練やら、なんとか生きたいと思つてもだえやら、悔悟やら、またさまざま人間の弱さがこぐらかつてきて、醜い眼を、うつつにキョロキョロうごかし、隙を見たら、逃げそうな挙動をした。

「年景どのか」と駈け寄ってくるなり生信房は喘あえいだ息でいった。それすら、年景の耳には、うつつなのであった。

「……………」

「代官の萩原殿ではないか。——オオそうだ、あなたは年景殿にちがいない」

「……………」

「なにを茫然としているのだ」生信房は、叱咤するようについて、彼の肩をたたいた。

「官衙^{かんが}のうちの、大事な書類はすっかり持ち出されたか。……やつ……焰^{えん}のかなたには、女子供の悲鳴が聞えるが、あれはご家族ではないか」

「……そ、そうじゃ」危害を加える様子がないので、年景はやつとこううなずいた。生信房は、愕然^{がくぜん}として、

「ええ家族の者も、まだ救い出されずにいるのか。……ええつ、ぐずぐずしては焼死^{しょうし}でしまいわ、あなたは一体、何をしているのだッ、あの悲鳴は、あなたの子ではないか、妻ではないか」

「——じゃが、まだ、役宅^{やくたく}のうちに、大事な書類があるし、あちらへも救いに行けず、これも炎」

「炎がなんだッ。信念をもって行くところには炎も避けるわ。——そうだ、わしは奥の棟へ行って、おぬしの子や妻たちを抱え出して進めるほどに、おん身は代官として、公^{おおやけ}の文書や、印鑑、絵図など、政^{まつり}に要^いる大事なものを火の裡から持ち出されい」いいすてると、生信房は奥の館へ向って、煙をくぐって行った。

役所と、奥の棟とよぶ住居^{すまい}のあいだに、板塀^{いたべい}があった。そこには門もあるはずだが煙で見つからない。恐らく中で悲鳴をあげている女子供らも、うろたえて、その木

戸が見つからずに、右往左往しているのではあるまいか。そう考えたので、生信房は、その辺りにあった太い栗丸太を横にかかえて、板塀を突き破った。二カ所も三カ所も、同じ手段でたたき壊した。仆れた塀のうえには、わつと、多勢の女たちが、煙に追われてなだれてきた。仆れる者の上へ、仆れる者が重なった。

「——年景どのの奥方ッ」生信房は、さがし廻った。逃げまどってくる者は、みな召使の下婢^{したは}や側女^{そばめ}たちばかりで、子を抱えているはずの年景の妻は見あたらなかった。すると、煙の裡に、泣きさけぶ嬰兒^{あかこ}の声が聞えた。見ると、年景の妻が、幼子^{おさなこ}の手をひいて、発狂したように、炎へ向って、なにかさけんでいるのだった。

五

生信房のすがたを見ると、

「——助けてくださいっ」年景の妻は、しがみついた。ふところの乳のみ子が泣く、手をつないでいる数名の子たちも泣く。

「……あれっ、あの棟の奥の部屋に、まだ一人、逃げおくれた和子^{わこ}が、母の名を呼んでいます。あれ、影が見えるっ……。どうしようぞ……和子がようっ……和子よう……」半狂乱^{はんきやうらん}になっている彼女なのである、乳ぶさの子も、袂^{たもと}にしがみついている子たちも、みな振りすてて一人の子を救うために、紅蓮^{ぐれん}のうちへ駈けこみそうにも見える血相^{けしあひ}だった。

「だいじょうぶです」生信房は、彼女の肩をつかまえていった。

「あの棟にはまだ、火がまわっていないらしい。私が、抱いてきてあげる」ことばと共に、生信房は、焰のうちへすすんで行った。年景の妻は、

「おおっ、御仏みほとけっ」泣いてさけんだ、焰へ向っても狂わしいほど感謝した。まったく、赫光かつこうの大紅蓮だいぐれんのうちに見える生信房の男おお々しい働きは、生ける御仏としか見えなかった。

やがて、生信房は、法衣ころものすそも袂たもとも焦こがされた姿で、三歳みつっばかりの幼子おきなこを引つ抱えて駈け戻ってきた。その上に彼はまた、ほかの七歳ななつばかりの子を背中に負い、

「さっ、早く」と、以前の大樹の下までのがれてきた。

年景の妻は、
「忘れませぬ、忘れませぬ、死んでもこのご恩は——」
と、手をあわせた。子たちは、まだ泣いていた。

「父様ととさまあ」

「父ととは……父ととは……」いじらしいほど、小さい瞳に真剣をもって探しまわる。そこへまた、西仏さいぶつのすがたが見えた。西仏に聞けば、萩原年景は、生信房が奥の家族を救いに行ったのを見ると、敢然と、燃えさかっている役所のうちへ駈けこみ、火達磨ひだるまのようになって、今や内部の重要な書類を廓外かくがいへ持ち出しているという。

「そうか、じゃあわしも」と、生信房が、助けに駈け行こうとすると、

「いや、お身はこの女子おなごどもを、もっと安全な所まで連

れて行ってくれい。年景どのへは、わしが手伝っているから」と、西仏はあちらへ駈け去ってしまった。

そのうちに、風はいよいよ烈しくなつて、乾ききった地上を、板のような火の粉が、ぐわらぐわらとところがり廻る。子は泣きさけぶ。年景の妻の髪の毛にまで、火が落ちて、燃えかかる。

生信房は、彼自身さえ、ともすると煙に巻かれそうになつたが必死になつて、その一人一人を、曲輪くるわの外へ、かかえ出した。

そして、熱風をうしろに、火から遠い野原まで逃げ走つてきながら、万おおぜい一多勢の子どものうちの一人でも、途中で迷はくらせてはと、時々、振りかえつて、頭数を読んで

——すると、後から従ついてくる子たちの中に、背の短い、眼のぎょろりとした侏儒こびとが一人まじっていて、足弱な女の子のうちの一人を、その侏儒が背に負つて駈けつづいてくるのであつた。

六

多くの召使もあるうちで、続いて来る者といつてはその侏儒こびとしかなかった。生信房は、

（奇特的な男）と思つていたが、やがてだいぶ火の手からも遠ざかり、この辺りならばと思われたので、とある辻堂に人々をやすめさせ、

「これ、その男、負うている和子わこを、御堂みどうの縁へ下ろ

したがよい」と、ことばをかけた。

「はい」と、侏儒は素直に背に負っている子どもを下ろし、そして、生信房の前へつかつかと歩いてきて、

「お頭領、しばらくでございました」と、あいさつした。

「えっ」愕然と、生信房は、とたんに自分の過去をも思い出した。

「蜘蛛太か」

「へい」

「ど、どうして、こんな所へ……」蜘蛛太は、自分が以前からここに来ていた境遇を話して、こよいの火は、自分が悪代官の年景へ向ってなした復讐だと、これも昂然と、憚かる色もなくいった。

おどろきと——悲しみの深い吐息のうちに——生信房は聞き終って、やがて、ほろりと涙を流した。

「蜘蛛太……おまえはまだ、そんな怖ろしい心を持っているのか。あれほどわしがいったのに、まだ、悪行をやめてくれないのか」

「頭領——いや生信房様、あつしはあなたが坊さんになる時の意見を、決して忘れていやしません。……だけど、あまりといえは憎い奴——悪い代官——それにおれが恩人とも思っている山吹さまを、酷い目にあわすので、つい復讐をしてやる気になったんです、悪いことは重々知っておりますが」

「ああ、怖ろしいことをしたものの。……今となっては追いつかぬが」

「……」

「だが蜘蛛太、それほどなおまえが、なにゆえに、自分で火を放っておきながら年景どのの家族について、和子を負ってここへ逃げてきたのか、解せぬ仕業ではないか」

「あなた様が、あの炎のうちに入って、子どもを救ったり、また、西仏という坊さんが、年景を助けて、共に役所の大事な物を持ち出しているのを見て、なんだか、急に自分が済まなくなっただんです。……そしてつくづく考えたのは、やはり火を放って人の難儀を見ているおもしろさより、火の中へ自分を捨てて人を助けることのほうが、ずっと、おもしろいというのもおかしいが、いい氣持がするってことが、初めて分った氣がするんです」

「そこへ氣がついてくれたか。——だが、遅かった……もう少し早くそこに氣がつけば」といったが、生信房はすぐ、自分があれほどの罪業をなした身ですら、一滴の悔悟のなみだの後には、法然上人と師の親鸞から、そのままのすがたですぐ往生仏果が得られるものだと言われたあの時のことばを思い出して——

「いや、遅くない、蜘蛛太、さきほどの心があるならば、おぬしはすぐ引返して、年景どのの手にかかって、ご処罰をうけたがよい」

「望むところですよ」蜘蛛太はいさぎよくいって、再びあなたの炎の下へ向って駆け去った。そのすがたにはもう仏の光があった。——生信房は掌をあわせて、彼の行く先に御仏の慈悲あれと心から祈った。

一

農家の女房らしい女が、

「お上人様」と、縁から奥をさしのぞいて、

「きょうは、死んだ嬰兒の日でござりますで、供養に餅をすこしばかり拵こしらえしましたで、召し上がってくださいませや」

「おう、鷺さぎの森もりのご家内か」奥で親鸞の声――

「かたじけない、おそれ入るが、親鸞は後で頂戴するほどに、仏前へお供えください」

その女房が、仏前に餅をささげて、ちいん――と小さい鉦かねをついていると、

「上人様、あまり草が伸びたで少しばかり、草を採らせてもらいますと断つて、村の男たちが三、四人来て、配所の家のまわりの夏草を刈り初めた。」

一人はまた、いつ見ておいたのか、上人の居室の窓に西陽にしやうがあたるので、そこへ高い垣を結ゆって、糸瓜へちまの苗を植えようかなどと話している。

親鸞は、縁へ出てきた。一同のほうへ向って、彼は仏陀に礼拝するのと同じように、おごそかな礼儀を施して、

「みなの人衆、ちと待ってください、お心のほどは辱かたじけけないが、親鸞は勅勘ちよっかんの流人るにん、この家は罪を慎む配所で

ござる。されば、冬は寒がよく、夏は暑くてこそ、流人の糾明きうめいになります。人なみに夏草を刈って、すずやかに朝夕を楽しんではなりません。――朝命あさのみことに反そむきます、どうぞ、さようなことはせずにおいてください」

「なんの、お上人様は、あまりにご遠慮ぶかい、草ぐらい刈ったとて」

「いや、そうでない、よしお上かみでお咎とがめなくとも、親鸞の心が苦しみます。――また、そもそも人間は、家の中に棲むものか、心のうちに棲むものか、それを思うて御覧ごらんぜられい。親鸞は常に心のうちに住んでおるゆえ、心のうちの雑草は刈ろうと思うが、家のまわりの草などはどうでもよいのじゃ」

「ほはおもしろいことを仰っしゃる。心のうちに住むとは、どういふものでございますな」

「今もろうた餅がござる、皆して、おやつにあれを食べ、ここで一休みしたがよい。わしも食べながらそれを語ろう」

もうこの国も青葉の六月だった。梅雨つゆを越えると急に暑くなつて、草も木も一日に何寸ずつ伸びるのかと思われる。

春――魔火まがわの禍わざわいにかかった国府こくふの役所は、もう前の丘に、新しい壁と建物とを見せている。再建築は、意外に早かった。うわさに聞けば代官の萩原年景は、あれ以来、帯も解かず焼け跡に立って、大工や左官たちを督励し、またたくうちに先に役所のほうを建て直し、焼け失った書類を再調したり、領内の政治一新に心がけて、

（すこし、あのお代官、このごろ変だぞ）といわれるほど、以前とはまるで態度がちがってきたということであった。

「上人様、今日は、皆さま一人のこらず、托鉢たくはつでござりますか」

「そうと見える。皆いないようじゃ」

「さだめし、ご不自由でございましょうな、お一人では」「なんの……不自由と考えたこともない。親鸞の心はいつも、自由無碍むげでござるゆえな」

「そうじゃ、今の、人間は家のうちに住むのでなく、心のうちに住むものだというお話をうかがわせてくださいませ」

「おお、みんな寄れ」と、彼が縁先へ人々をさし招いて、語り出そうとすると、一人がふいに逃げ腰になって、

「あつ、代官が来よつた」と、おどおどした眼で告げた。

二

代官が来たと聞くと、百姓たちは、垣の間や裏の方から、われ勝ちに逃げ散ってしまつて、縁には、親鸞ただ一人取り残されていた。

表のほうで、その時、

「上人はご在宅か」と、訪れが聞えていた。

供も連れていなかった、馬も曳いてきた様子がない、

代官萩原年景は、藁草履わらぞうり一つの粗朴そぼくな身装みなりで、

「上人ご在宅なれば、お目にかかりたいと存じてうかが

いました。当所の支配をなす萩原年景にござりまする」と、まだ主あるじの声もすがたも見えないうちから、年景は、荒れ果てた配所の破れ廂びさしへ向つて、いんぎんに頭こうべを下

げている。

「はい」と、親鸞は立った。ずっと出て――

「どなたで在おわすか」

「お忘れにござりまするか、年景です。折入つて、ご拝顔を

得とう存じて、参上いたしました」

「やれ、ようお越された、案内もいらぬ風ふき通すこの住居すまい、ささ、おあがりなされ」

「御免を」と、年景は身を屈かがめたまま屋根の下へ入つた

が、この暑さに腐れている筵むしろや、壁の穴や、屋根から

洩る陽の光を見て、暗然と、そこへ坐つたまま、しばらく

顔も上げ得なかつた。

改めて、親鸞が、

「愚禿ぐとくでござります」あいさつすると、年景は、はつと

後ろへ身を退ひいて、平伏した。

「ここへかく真昼まひるなか中、参上できた面おもてでもござりませぬ

が、きようは改めてのお詫び――また、あわせて年景が

慚愧ざんきを吐いてのお願いの儀あつて推参いたしました。な

にとぞ、宏大なご仁慈を垂れ給つて、お聞き届けを」と、

満身に汗を流しての言葉なのであった。

「なにか知らぬが、身にかなうほどのことなれば承ろう」

親鸞がいうと、

「今も、御覧ごらうぜられたでござりましょう、上人のおすがたを見れば、親のごとく慕い、この年景のすがたを見れ

ば、鬼かのように逃げてゆく領民どもを——。年景は、あれが淋しゅうなりました」

「ウム」親鸞は初めて大きくうなずいた、なにか心になう時にする大きな眸^{ひとみ}をぱっと見ひらいて、

「おもとは、この親鸞に、何を求めに來られたか」

「はっ……」年景は、わなわなと肩をふるわせ、双眼からは湯のような涙をこぼしていた。

「……何か？ ……さ、それがなにかは、分りませぬ。

ただ、この身をお救い賜わるおん方は、上人おひとりこそと思いきわめ、この幾十日、日夜懊惱^{おうのう}いたした末、恥をしのんで参ったのです。なにをつつみましよう、私は七名の側女^{そばめ}を置いておりました。それを皆、あの火災の翌^{あつ}る日、それぞれの国元親もとへ歸しました。また、山吹も仰せのように計^ねらいました。妻へは両手をついて、過去を詫^わび、この後^{のち}も誓^{ちか}いあいました。わが子たちへも、多年の父らしからぬ行いを謝^{あやま}りました。領民には、来る年より、年貢^{ねんぐ}を下げるつもりであります。側女の衣装や身のぜいたくに費やす金をもって、召使の功を賞し、貧しい民をうるおしたいと思ひ出しました。——だが、まだ私の心は、それだけでは慰みません。——上人、どうしたら過去の償^{つぐな}いができましようか。それを教えていただきたいのです」

三

親鸞は黙然と眼をふさいで聞いていた。初めのうれし

げな面^{おもて}のかがやきが次第に沈黙に變つてゆく——。明らかに年景のことばが何か胸を重くふさいできたのである。

「ようわかりました」こういうと、またしばらく黙っていた。年景は、悔悟^{かいご}の涙の中に顔をしずめたままであった。

「おん身が、そうした心に責められているらしいことは、あの火災の後よそながら愚禿^{ぐとく}もながめておった。——したが、その悔いに責められるのあまり、善根にいそぐお心はうれしゅうござらぬ。幾つの悔いをなしたゆえ、幾つの善をなして埋めようなどという心は仏心でありませぬ。さような形に囚^{とら}われた振舞いは自分で蔑^{さげす}んだがよい。——悪を浅ましいというが、善根のための善をしようとすると人間の心根はなお浅ましゅうはおざらぬか」

「はっ……はい……」

「流^る人の親鸞を見れば親のように慕う領民が、代官のすがたを見れば鬼のように逃げてゆくが、淋しいと先刻いわれた——あのお心が菩提^{ぼだい}じゃ、それだけでもう御仏^{みほとけ}はおん身の胸に宿られ給うに、なんで事にわかに、石を積むように悩まるるか」

「ただ、慚愧^{ざんき}でござります、悔悟^{かいご}の念でござります。そして一時もはやく、自責の苦悶からのがれたいために——」
「そのためにまた、悩みの中へ入ってゆくを、愚^{おぼ}とは思^{おも}されぬか。心とは、そうしたものでない。発菩提^{はつぼだい}の一瞬から、心は爽^{さわ}かに、眉^{まゆ}すずやかに、寝るも起きるも、この浄土でのうてはならぬ」

「そのようになれましょうか」

「おん身は、生半可な知識があるので、かえって仏の御座の一步まえにこだわって、ずっと、安心の座にお着座ができません。たとえば、この親鸞のおる屋の下へ通られたように、何もものもない気持で、ずばと仏のお膝まですすまれない。——それには、小智、小惑、すべて小人の痴愚を脱つて、裸々たる一個の人間のままでお在せ」

「はい」

「役人である、代官である、父である、そうした雑念も無用じゃ。ただ、こう掌をあわせ、念仏をお称えあるがよい。そのままついとお帰りあつて、妻に会い、子を抱えてごらんぜよ、また、役所にあつて政を見られるがよい——そしてふと思ひ出されるごとに、また、こうして念仏されい。心がけてなされようとすることは仏に對するそれだけの勤めでよいのじゃ」

「分りました。……かえすがえす恥じ入りました。この掌は上人に合せていただいたものです、必ず、こう生涯を仕ります」

「おん身のゆく先には仏光がある。怠られな、それだけを」

「いたします。——ついては、この機縁をもって、私を在家の帰依者の一人と思し召し下さりませ。妻もやがて、ご拝顔を得て、お礼を申しあげたいといひおります」

話しているうちに、西仏も教順も、生信房たちも、托鉢から帰ってきた。

年景は、生信房のまえに、両手をついて、いつかの年、

並木で馬上から御名号へ無礼をした罪をわびた。

「あのお怨みも深かろうと思つていたに、いつぞやの危難の折には、炎の下より、私の家族どもを救ひ出してくだされた……あの時のおん身の姿の神々しさ……有難さ、忘るることのできないものでありました」

「いや、そう、そんなに、礼をいわれては」と、生信房は恐縮して、年景のあまりに大きな感激に對して、彼はかえつて羞恥ましげな顔さえした。

四

年景はまた、西仏にも先ごろの礼をいって、

「おかげで、大事な書類も、大半は炎のうちから救ひ出し、役向きのことも、そのため、滞りなく運び直しております」と告げた。

——そのうちに、貧しい灯りが燈る。一日の托鉢からもどつて、いとも質素な夕飯を楽しみ合っているこの人々の中にあると、年景は帰るのを忘れてしまった。

「そうそう、まだお告げしたいことがある。それはあの蜘蛛太です」思ひ出して、年景がいうと、そのことは、生信房も胸につかえていたとみえ、

「……あの蜘蛛太は、どうしましたか」

「自首して来ました」

「む……自首しましたか」

「役目ですから、私は彼を縛りました、しかし、その縄目をかける時に、私は疑つたのでござる。——いったい

この縄目は蜘蛛太にかけるのがほんとか、この年景にかけるのがほんとかと」

「……」一同は眼をかがやかして、そういう代官の顔を見入っていた。こうも人間は心の一転から、その姿の持つ光までがちがってくるものか——と感じ入りながら。

「——が、やはり私は、代官でござる、縛るのは国法です、蜘蛛太は牢に入れました、所へ折よく佐渡へ渡る僧がござりましたゆえ、その僧に托して彼を流しました、怖らく蜘蛛太も、私以上に、前非を悔いておりますことゆえ、やがて仏弟子となるか、真面目な町人となって、幾年かの後には、訪ねてくる折がござろう」生信房は、ほっとしたように、眉に明るいものをたたえた。

「ありがとうございます」自分のことのように礼をいう。

「では、夜も晩うなりましたゆえ……」と、やがて彼は、上人にも暇を告げて、暗い道を歩いて国府へ帰っていった。——その晩は楽しかった。

「わしらの住む所、みな浄土になる」と人々はいったが、「いや、わしらというのは、誇りがましい、念仏の声のわく所——じゃ」こんなひどい茅屋と食物とに生きながら、夏も一人の病人も出なかった。

盆が来る——草からのぼる夏の月は、夜ごとに配所の人々をなぐさめた。

村々の踊りには、剽軽な西仏もまじって踊り、生信房も、歌をうたった。——その歌にはいつの間に

か、上人のことだの、念仏のよろこびが流れこんで、郷土の人々の血の中にまで、仏の精神が入った。

秋になって、桔梗の芯に朝ごとの露が美しくなると、「どうぞ、小丸山のほうへ、お住居をお移しねがいたい」といって、国府代官所の役人たちが年景の使者として、鄭重に迎えにきた。

誰も知らなかったのである。そこから数里離れた小丸山の明るい土地に、先ごろから、寺のような物が新築されているとは聞いていたが、それが、年景が私財をもって建てて親鸞へ寄進になる住居であろうとは、夢にも考えられていなかった。

親鸞は、勅勘の身と、一度はかたく辞退したが、すでに京都へは年景から文書をもって届け出たとのこと、

「それでは——」と、六、七名の弟子を連れて、竹内の配所から小丸山の新しい木の香のする家に移った。何年目かで、初めて人の住むらしい屋根の下に彼の体と机が置かれたのであった。

冬となると想像もできないような雪となった。あらゆるものが、この北国では、雪の下だった。その万丈の雪の下にも、微かに念仏の声はしていた。

そうした冬を幾めぐりか体験すると、この師弟たちにとつて、冬はむしろ内省的な修練をする好ましい期間でさえあった。貧しさと寒飢にさえ感謝することができた。

（はやく春が来ればいい）とか、（こう寒くてはやりきれぬ）とか、そんな弱い、今日を空しくして先ばかりを空望するような声は、この小丸山の法室ではまったく聞かれなかった。

一日一日が、法悦の日だった。どうしてここが流人の住む配所だろうかと疑われるくらいに。そうして、今年も、また、幾年目かの春は巡ってきた――

「石念、だいぶ採れたな」

「もうよいでしょう」師の御房は、葦が大好きだ。

「冬ごもりの間は、乾物ばかり召しあがっておいでだから、こんな青々した木の芽や菜をさし上げたら、きとおよろこびになるだろう」

まだ溪谷には雪があったが、南へ向っている傾斜の崖

には、朽葉の下から落や若菜がわずかに萌え出していた。「ひと休みしよう」籠に摘んだ葦や落をそばへ置いて、石念と西仏は、崖の中途に腰をおろした。山すその部落は紫いろに煙っているし、木々の芽はほの紅く天地の力を点じている。

「西仏どの」まばゆげな眼をして、陽を仰いでいた石念がふいにいった。

「春は苦しいものですね」

「どうして」

「どうということなしに、春になると、私は苦しい気がします。若い血が暴れ出して」

「そうか……」西仏は年老っていたが、二十六、七歳の石念のそういったことばには、思い当るところがあった。

「その気持はわかるよ。わしなどは、若い時代を、木曾殿の軍に加担して、ぞんぶんに合戦の中で果してしまつたが……」

「僧の生活には、気を吐くとか、腕力を出すとか、汗をながすとかいう生活はありませんから、常人の若い者より、よけいになにか、こう体のうちに鬱屈している元氣とでもいうようなものが、血の底に溜って、それがひどくなると、暗鬱にさえなってくるのじゃないかと思ひます」

「ひとつ、そんな時には、うんとこさと、暴れるんだな」「暴れるつたって、どういうことをしていいか分かりませんし」

「なんでもいいから、汗と鬱気を出してしまふんだ。……」

：「そうだ」と、後ろを仰いだ。里の者が粘土でも採った跡であろう、崖の中腹から上へ真っすぐに二丈ばかり山肌が削ぎ取られてあった。

西仏は指さして、

「あの上まで登って行っては下へ飛び降りるんだな。それを何十遍でもくりかえしてやる。――登るのは行心、飛び降りるのは破心、闘いの生活だと思って、倒れるまでやってごらん。若い暗鬱なんてものは、汗の塩になっ
てしまう」

「なるほど」石念は、よほど深刻に考えていることとみて、真面目になってそれを実行する気らしく、立ち上がった。すると西仏もまた、一緒に腰を上げて、

「おや……誰だろう」麓のほうへ眸をこらしていたが、何か驚いた表情をし、

「石念、あれ見よ」と、指さしていた。

二

「何をです？ ……私には何も見えませんが」

「見えるじやろうが、あれへ来る人影が」

「どこに」

「ふもとの方に。……いやいやそんな方角じゃない。もっと、部落から先の国府へ通う街道のほうに」

「お……」

「わかったらう」

「ほんに」巨きな白樺の幹へ手をかけながら、石念と西

仏は、その崖からじっと遠い麓の街道を見ていた。国府の方からうねうねと山や丘や林や耕地を繞って、この小丸山の山ふところへ続いてくる一すじの道に、ぽちと、小さな人影が二つ辿ってくる。

「はて」西仏はいぶかしげに、

「この辺の風俗とは見えぬ。どこの女性であろう」

「都の女子にちがいありません。笠の緋の房、衣の袂、都の女性にしても、町家の女ではございますまい」

「したが、どこへ行くのであろう。この街道の先には、山家ばかりなのに」

「もしや……裏方様の」石念が、西仏の顔を見ていると、

「わしもそう思うのだ。もしかしたら、師の房のもとへ、都の裏方様からのお便りでもと――」

「そうかも知れませんが……。いやそうだ」石念は、葦や野芹を摘み入れてある籠を抱えた。

西仏はもう崖の下へ向って、雑木にすがりながらずると先へ、迂り降りていた。――と、その山裾までさしかかった二人の旅の女性も、西仏と石念の姿を見つけて、道の辺に、杖を止めて待っていた。

「もし、女御たち」西仏が声をかけつつ近づいてゆくと、

「オオ、あなたは」と、一方の女性は走ってきた。

「西仏さまではございませぬか」

「えっ……オッ、万野どのだったか」

「お久しゅうござりました」

「もう一方は」

「やはり月輪のお召使で、裏方様に侍かしずいておりました
鈴野というお方」

「ああ、やはり都の」

「上人様のお住居は、もうこの辺りでございますか」

「この鳥屋野とやのという里からわざわざばかり。——それあの
山のふところに竹林ちくりんが見えましよう、小丸山の里のお
住居すまいの裏手にあたる竹林です」と、振向いて、

「石念、後からご案内してきてくれ、わしは先に走って、
一刻もはやく、都から見えた裏方のお使いたちのことを、
ご披露しておこう。——師の房にも、さだめしびつくり
なされよう」

いい残して、西仏は先に駈けて行った。彼は自分の欣
びよりも、師の親鸞の欣びを思つて胸がおどるのだった。
この越後へ来てからすでに四年のあいだの別離となる都
の消息を——裏方やお子たちのその後のことどもを——
月輪の老公や、友や、知己の様子もさだめし聞かれるで
あろうし、師の房も、口へは洩ためしされた例ためしもないが、
どんなにお胸のうちではそれを欲しておられるであろう
と思つて——。

三

「生信房しょうしんぼう、おられるか」庵室の前まで来ると、西仏は
奥へ向つて、思わず呶鳴なうめいつた。

ここは以前の竹内たけのうちの配所とちがつて、萩原年景が心
を尽して寄進した建築だけに、貧しいながらも一つの僧

院らしい形はしていた。

「なんじゃ、西仏」庵室の横を走っている細い流れのそ
ばから生信房は歩いてきた。

「オオ、そこにいたのか、今のう、この御庵室へ都から
二人のお使いが見えるによつて、師の房へお告げしてく
れい」

「えっ、ご赦免しやめんのお使いでも？」生信房は早合点して、
体の肉がぶるぶると顫ふるえるような心地がした。

「いや——お使いといつても、公卿くげたちではない。月輪
殿の御内みうちに仕えている局つぼねたちが来られたのだ」

「女か」と、すこし落胆したが、それでもこの配所へは
空谷くうこくの跫音きやうおんだった。

「一刻もはやく」と、西仏にいわれて、生信房はいそい
で師の室へやへ上がつて行った。振りかえると、後に残して
きた石念を案内にして、月輪家の万野まのと鈴野の二人はも
うそこへ姿を見せている——

彼女たちは、ようやく目的地へ辿りついたと思うと、
張りつめていた心が急にゆるんだように、茫然とそこに
杖をとめ、

「ああ……」と、息をついて、顔を見あわせていた。

石念は、そうしている二人のすがたを、物珍らしげに
眺めていた。彼は都を知らない若僧にやくそうだった。この北国
の山や樹や田舎人いなかびとしか見えない眼には、眩まばゆいように二人
のすがたや肌が美しく見えたらしい。——が、はっと気
づいて、

「ここが、上人のおいで遊ばす小丸山の御庵室です、さ、

どうぞ」というと、万野^{までの}は建物の様をしみじみとながめて、

「配所と申せば、どのようなひどいお住居^{すまい}かと思うて来ましたが、思いのほかおおきな」

「いやいやここへ移ったのは後の^{のち}ことで、それまでの竹内のお住居は、物乞いの寝小屋のような物でございました」

「お師さまは、ご在室でいらつしやいましょうか」

「おられます。……さ、こちらで足をお洗^{すす}ぎなさいませ」声を聞いて、親鸞は自分の室^{へや}から縁へ出てきた。二人が流れへ寄つて足を洗っている様子をだまって見ていたのである。

万野は、玉日の前が未婚のころから侍^{かしず}いていた忠実な侍女であつた——親鸞のまだ若い日の事どもを何かとよく知っている女であつた。

「……万野も老^ふけてきたことよ」と、親鸞はふと自分の若い日を胸に忍び浮べた。万野はふと振りかえつて、

「まあ！」と、親鸞のすがたを見あげた。そしてなつかしげに、

「お変りものう」と、走り寄つた。すぐ語尾は涙にかすれてしまふのであつた。親鸞は手を取つて、

「——はるばると、この遠国へ、さてもよう参つたのう。疲れたことであらう、ともあれ、体をやすめたがよい」と何も問わずに、ふたりの労をいたわつた。

四

室は明るかつた。

都から来た二人の女^{によし}性の客をそよそよ吹いて、春のにおいを持つ微風が、静かにそこへ坐つた親鸞との間を通つて、裏の竹林^{ちくりん}をそよがせる。

「——まず何より先に承りたいのは、師の法然御房の御消息、月輪のお館へは、讃岐の上人より折々のおたよりもあらう、その後のご様子はどうぞおざるか……。お変りもおわさぬか」親鸞は訊^{たず}ねた。

埃^{ほこり}にまみれた髪を梳^すき、旅衣^{たびころも}の腰紐を解いて、彼の前^{まへ}に坐つた万野と鈴野の二人は、

（なにかから先にいおう）と、胸がつまつてしまつたように、ややしばらくの間、俯^{ふしめ}目に指をつかえていた。

次の間には、西仏や生信房などの人々が、これも、都の消息を聞きたさに、膝をかたくして控えていた。

「——はい、讃岐の上人様には、お館の御領地、讃岐国塩^{しあく}飽^くの小松の庄とやらいう所に、新たに一寺を建てて生福寺^{しょうふくじ}と申しあげ、お変りもなくご教化^{きやうげ}の由にござりまする」万野の答を聞くと、

「おお、そうか」親鸞は、ほんと深いうなずきをした。その安心が顔いろに現われて明るい眉になった。

「それをうかがつて、まず安堵^{あんど}した。——さて、次には、お舅^{しゅうとこ}君の月輪老公にも、さだめしおすこやかでおられますような」

「……はい、その禅閣様は」万野のことばが濁ったので、親鸞はふと膝をゆるがせて、

「お病氣でもあるか」

「おかくれなさいました」

「なに」はっと胸を上げて、

「老公には、御死去とか。……してまた、それはいつ？」

「去年の——承元四年の四月五日のことでございます。」

その前からのかりそめのお病が因となりまして」

「ああ知らなんだ……」と、親鸞は思わず声を落して

「この身、配所にあるとは申せ、きょうまで、何も知らずにおった。——念仏門の大恩人、讃岐におわす師の法然御房もさだめしお力を落されたことであろう」

「そればかりではございませぬ……。まだまだ、お耳を驚かさねばならぬことが」もうこれ以上の悲しいことを、親鸞へ告げるにたえない気がしてきたのである。万野は、忪えていたものを睨からはふりこぼして、袖口を眼に押し当てた。

「この上にも、親鸞が驚くこととは何か。……はて心ばかりな。万野、まだ誰ぞその上に凶事でもあるか」

「は、はい……」

「親鸞は何事にも驚かぬことを誓う。気づかいなくいうがよい」

「裏方の玉日様が……」

「玉日が？」

「お師さまの御流謫の後には、和子様を護り育てて、

青蓮院の叔父君から名も範意といただき、行く末は、お父君にもまさる名僧になれかしと、ひたすら和子様のお育ちをたのしみながら、また朝夕に、越後の空を恋い慕うておいでなされましたが、月輪様の御逝去やら、何かの憂さが、積もられて、この冬、ふとお風邪をひいたが因となって——」そこまでいうと、万野はわっと、顔に袂をおおって咽び泣いてしまった。

五

……よよと嗚咽に沈んだまま、万野は後のことばを継げないのである。

親鸞の面は、はっと驚きを湛えて白く冴えてしまう。また——次の部屋にひかえて、都の消息はいかにと耳を澄ましていた弟子の人々も、氷室のようにしんとしてしまった。冷たいものがすべての人の姿を撫でた。その中に、万野はなおすすり泣いていた。

「——ちょうど、霜月の二十六日でございます」万野に代って、鈴野が後の話をつづけた。

「看護の方の心づくしも医薬のかいもなく、裏方様には、とうとうお亡くなり遊ばしました。まだご幼少の範意様を残して。——そのお胸のうちを偲びますと、どのようであろうかと私どもまでが」と、鈴野のことばもすぐ涙のうちに乱れてしまう。

その玉日の最期まで、枕元に侍いて、看護をしていたこの二人であった。二人はどうしてもこのことを越路

の親鸞に親しくお告げしなければならぬと思った。

——で、越路の雪の解けるのを待って、裏方の遺物をたずさえ、はるけくも、都を立ててきたのであった。

「……玉日も。……また月輪の老公も。……ムム、そうであつたか」親鸞はつぶやくようにいった。かえりみれば自分の生涯もすでに初老の坂へかかつていた。はつきりと時の流れが眼に見える心地がする。

無言の裡に親鸞の胸へ湧きあがってくるものは、悲愁ではなくて念仏であつた。——念仏がふと胸にやむとき、悲愁の思いが、堤を切つて溢れる水のように、彼を涙に溺らせかけた。

憂いに重い春の一日は暮れた。人々は心を遠く都へ送つて、幾月かを、裏方のために——また、亡き月輪禅閣のために、冥福を祈つて送った。

万野と鈴野のふたりは、幾日かをここに送るうちに、ふたたび都へ帰る氣持を失ってしまった。——帰つても今では仕える人のない都はあまりに鬭争の巷だつた。

「どうぞ、この御庵室の端になど置いてくださいませ。

——お弟子としてお許しなれば、しばらくはお下婢の者としても」ふたりの願いを、親鸞はゆるした。もちろん、代官の萩原年景へ事の仔細をとどけ出た上で。

ほととぎすが啼く。春から夏のはじめにかけて、流人の親鸞の髪は蓬々と伸びていた。——何とはなくこの幾月を、彼は病む日が多かつた。

「ご無理でない」と、西仏も生信房も、そつと涙をうかべてつぶやいた。師のかなしみは弟子の悲しみであつた。

師の心もちを考えると、彼らも胸が痛くなつて、裏の山に鳴く昼時鳥の声にも腸を断たれるような心地がした。

——だが親鸞は、そうした弟子たちの沈んだ顔いろを見ると、それが自分の悲しみの反射だと知つて、心を取り直したものとみえる。彼は、髪伸びた頭へ網代笠をいただいて、また、近郷の教化に歩出した。

その姿は、いよいよ、ただ念仏の道へひた向きに生きようとする尊い光を加えていた。やがて四十になろうとする親鸞のうしろ姿は、はっきりと、この越後へ来る前の親鸞とは違つた高さをその人品にも持つてきた。

教化につかれた夏の夕べを、鈴野と万野のふたりは、畑の野菜を煮て、親鸞や弟子たちの終日の労をなぐさめた。——そんな夕餉時の一瞬には、誰の胸にも、信仰生活の悦びが溢れて、この小丸山の家は、さながら夕顔の花に囲まれた浄土そのものようであつた。

一

「はての？」今気がついたように、定相じょうそうはつぶやき出した。

三人の弟子は、縁先で、榎かやの枯れ木を蚊遣かやりに焚たいたのである。

「なんじゃ、定相」と、教順が不審がる。念ねん名みも共に、「なにを思い出して？」と、笑った。定相は真面目な顔つきで、

「いや何、石念じゃくねんのことだが……石念は夕餉ゆうげのときに、皆と共に、齋ときの膳についていたろうか」

「さ、いたようにも思うし、おらなんだようでもあるが……」

「怪けしい男じゃ」

「どうしての」

「どうしてというて、おのおのには、石念のこのごろの様子ようすが、いぶかしいとは見えぬか」

「そういわれれば、なにやら、妙なふしもあるが」

「あるが——どころじやないわ。あれは近ごろ、どうかしてある、よほどどうかしておる。憑つきものにでも憑つかれたような」

「ふむ……。なんぞ、そうした原因があるのかの」

「それはあろうとも」

「なんじゃ、一体、石念の憑つきものというのは……」

「いや、それはいわれぬ、滅多に口くちにすることじゃない」定相はにがり切きって、蚊遣かやりの煙けむりのうちに、唇くちをむすんでしまった。

暗黙あんもくのうちに、他の二人もうなずいた。やはり口に出せなかった気持なのである。それは、彼らの潔癖けつへきにとつて、最も忌いわしく感じられることなので、それを是認しにんすることは、自分たち法の同胞どうぼうの醜惡しうごを認めるような気がするからだった。

もつとも、石念のそれは、あの都から来たふたりの女性にょせいがここに共に住むようになる前から、本質的に、なにか焦々しうしうしているふうが見えた。

それが、火となつて鈴野への恋となつていることを、こう三人はうすうす知っていた。

恋を——女への仙弟子ぶつでしのそういう態度を、極端に冷蔑れいべつし、むしろ醜しうにさえ考えている三人には、石念のそれからの挙動きやうどうが、ことごとにおかしくて、馬鹿らしくて、そしてこんな男が同房どうぼうのうちにいるということだけでも、何かしら、腹立たしかった。

この教順を初め、三名の弟子は、元々、京都から従したがってきた親鸞しんらんの古い弟子ではなかった。親鸞が北国へ来る途中からの随縁ずいゑんであつた。それだけに、この人々のどこかに旧教の——聖道門しょうどうもんの觀念くわんとに**おい**が強くこびりついていた。

「また、あの竹林の奥へ入って、ぽつねんと考え事に耽ふけ

っているのじゃないか」と、人々は、すずしげな夏の間を見あげた。

月光の下には、深い簾が夜露に重くうなだれていた。

「そうかも知れぬ……」定相は、苦笑した。そして、

「救われぬやつだ」と、嘆くような眼をした。

「見てこようか」

「いや、よしたほうがよい。魔に憑かれていゝうちは、人のことばなど耳に入るものか。いずれそのうちに、師の房からお叱りがあるだろう」

その親鸞の室には、もう灯りが消えていた。三名もまた、あしたの炎天の托鉢を考えて、戸を閉めて、眠りについた。

二

石念はおそくなつてからこっそり帰ってきた。もう同房の者が皆、眠りについてからだった。

（……どこへ行つておつたのか？）定相は気がついて、うす眼をあけて彼が臥床へもぐり込むのを見ていたが、わざと言葉はかけなかった。

「……ああ」それは石念のつぶやきだった。彼は臥床へ横になつてからも、しばらく寝がえりばかり打っていた。ふいと、身を起して、またどこかへ立つて行く様子だった。定相は、

（おやつ？）と怪しんで首をもたげかけたが、厨のほうで石念が水をのんでいる様子なので、また眠りを装つ

ていた。

そのうちに、定相は彼に対する注意も氣懶くなつて、ぐっすり眠りに落ちてしまった。

ほかの教順や、念名などは、その前から高軒を搔いているのだった。……だが石念だけはいつまでも寝つかれないで、悶々と自分を持てあましてゐるかに見えた。

側に熟睡している人々の寢息が、羨ましくもあるしまた、

（動物のような奴だ）と、その單純さを腹立たしげに輕蔑しても見た。けれど結局、自分の眠られないのは、何としても苦しかったし、それに決して、正しい悶えでないことも彼自身知っていた。

（——どうしてだろう、おれはこのままで自分を抑えつけていれば發狂するかもしれない）

かっかつと耳たぶは血で熱くなるばかりだった。——ふいに枕から顔を上げてどこかを見まわす彼のひとみは底光りがしていた。何か夢遊病者のように彼のたましいが彼をあやつっていた。

（……そうだ、もうおれは、どうなつてもいい、地獄へも落ちろ、この今の炎に焦かれて苦しむよりは）何か怖ろしいことに意を決したらしいのである。あたりの者の寢息をうかがつて、彼は這い起きた。

みしりと、棟の梁が軋む。そのかすかな物音にも、彼はギクツと身をすくめるのだった。

（いや……よそう……）われに返つて、彼は醜い自身を恥じるよう、ふたたび寢夜具のうちへ身をひそめた。け

れど、所詮^{しよせん}、それは理性と本能のたたかきを血管のうちでくりかえしているに過ぎなかった。

ずいぶん長い間のそれは苦悶だった。一刻^{いっとき}ほどたつと、彼はまた、そうっと自分の体を起して、やどかりが這い出るように、手さぐりで真っ暗な房のうちからどこかへ忍びかけていた。

「……ム……ウムム……」うしろで、念名がこううめいた。石念は白い盗人^{ぬすびと}のような眼をギョツと振向けたが、何事でもなかったのを知ると、こんどは、全身の勇をふるい起すように——しかし針ほどの物音にも心をくばって、一尺か二尺ほどずつ、手さぐりでその部屋の外へ出た。

彼はついに、寝所の外へ出てしまったのだ。もうそこには常の反省も常の石念もなかった。——柱、戸、壁などを撫でまわしながら、廊下をつたわって、一步一步、足音をぬすんで行った。その突当りの一間^{ひとま}に、鈴野が寝ていた。

三

ふるえていた。がたがたと、熱いような寒いようなふるえが、石念^{じやくねん}の全身を走っていた。

眼をつぶって、石念は、突当りの板戸へ手を触れた。それはもう、鈴野の寝息のかおりを肌に感じさせるに足るものだった、彼の手は、恐ろしいものと、甘い夢みる興奮とに、錯雑^{さくざつ}と逸^{はや}りおののきながら、ついに、板戸の

引手をさぐり当てた。

満身の血が、毒のように頭にだけ逆上^{さか}っていたのである。——彼はそこへ耳をつけた。

寝息が聞える……

黒髪と、やわ肌の、蒸^むれた丁字^{ちやうじ}のような異性のおいがする。

ズ、ズ、ズ……と二、三寸ほど石念の手がそこを開けたのである。——と、その刹那に、白い電^{いなずま}のような光が、彼の眼をさつと射た。

鈴野の寝すがただけあるとのみ思っていた暗い部屋の中に、そんな顕然^{けんぜん}たる光があったのである、仏陀^{ぶつだ}の光のように石念は心を打ちのめされてしまった。

「あッ——」と、思わず眼を抑えたのである。——次にわれ知らず口から走った慚愧^{さんき}のことばは、

「南無阿弥陀仏^{なむあみだぶつ}！」という無意識のさけびだった。物音に、眼をさまして、

「誰です！ 誰ですかッ」鈴野が起きた様子。

あわてて、どどどと、廊下の壁へぶつかりながら逃げてくると、

「なんじゃ」

「なんの音……」同房の友だちも、みな、夜具を刎^はねて、突っ立っていた。

「……あッ、石念」人々は、板敷のうえに雑巾のように平べたくなっている彼のすがたを見つけて、太いため息をつくばかりだった。

「こ、こ、この馬鹿めッ」いちばん年上の教順が、怒り

に引ツつれた顔をふるわせて、思わず拳をかためながら彼の側へせまった。

「呆れ果てた外道。……ウム、外道の夢、醒ましてやる」むずと、襟がみを引き寄せて、打ちすえようとすると、なに思ったか、石念はパツと起って、厨の戸を突き破るようにして外へ逃げ出してしまった。

——その朝は、朝から重い不愉快なものに人々の顔色はつつまれていた。鈴野はなにもいわなかった。けれど、その小さな胸が、不気味な、なんともいえない恐怖と懷疑につつまれていることは、誰の眼にも読めた。

「……申し上げてしまおうか」

「いや、こんなことを、どうして、師の房のお耳に入れられるものか」

「どこへ行ったか、あいつめ」

「抛っておいたがよい」人々は、囁き合っていたが、やがてさり気なく、それぞれ日課としている托鉢へ出て行った。

親鸞は、きょうは奥に籠っていた。べっして、体のわるいようなせいではない——。鈴野はなにかしら秘密を抱いたようで、独りで胸が傷んでならなかった。

——蝉の音が、午の窓へすやかに啼いていた。芭蕉の葉が、時折大きく風に揺れる。

その蔭へ、石念は、いつの間にか来ていて、じつとかがみこんでいた。

四

「——誰じゃ」ふと窓の外へ眼をやった時、親鸞が静かに芭蕉の蔭へ訊ねた。

「石念ではないか」

「は……はい」

「何しておる」

「……私は……お師さま！……御庵室の床に上がれない不浄な人間でございます、外道へ落ちた人間です」

「何をいう」ほほ笑みが親鸞の顔に泛かんだ。他愛ないことでも聞くように、

「お上がりなさい」と、それだけいった。

「……」石念はなおそこにじつとかがまり込んでいたが、やがて思い切ったように、

「よろしゅうございましょうか」おそろおそろ立った。

そしてやがて、縁から科人のような卑屈な眼を俯せて、

親鸞の室へ坐り、自分の頭に下るであろう罪の鉄槌を待っていた。

「……なんじゃ、どうしたのか」親鸞はまだ何も知らないらしいのである。だが、それはかえって石念の苦痛であつた。

何も知らない師の房へ、新しく口を切り出すのが辛かつた。——だが、石念は思い切って、事実を告げた。

「私は幾たびも、自分で自分の心をいやしめ、一心に、念仏をもって、邪心を退けようとして、幾日もたたかい

ました。——けれど、一度、鈴野様の美しさに囚^{とら}われた煩惱^{ぼんのう}は、何としても去らないのでございます」親鸞は眼を閉じていた。——じっと聞き入って、次のことばを静かに待っていた。

「それで——」

「昼間は、炎天を、教化^{きょうげ}して歩いているので、かえって胸の苦しみはわすれました。けれど、夜のすず風に、わが身にかえってくつろぐと、身内の炎は、昼間の炎天どころではありません」

「むム……」

「いけない！ そんなことで、どう修行がなろうぞ！

そう我を叱って、水を浴びたり、竹林の中で、夜もすがら念仏したり、岩に伏したりしましたが、克^かつことができません。——とうとう私は、犯してならない垣を踏み越えてしまいました。——鈴野様の部屋へ忍んで行ったのでございました」

「……」

「その時の心は、自分ではわかりません……われながら、まったく夢中の仕業^{しわざ}でありました」

「石念、待ちなさい」

「はい」

「おことの声に、真実がある、嘘のないその声を、鈴野にも聞かそう」

「え、鈴野どのへ」

「……誰ぞおりませぬか、鈴野をよんで下さい、ここへ」後ろの部屋へ向って、こういうと、誰かが鈴野を呼びに

行ったらしい。——そこに石念と師の房との対坐しているすがたを見ると、鈴野はさっと顔を紅^{あか}めてしまった。

「お師さま、何か御用事でございますか」

「そこへ坐っていて下さい。……石念のいう言葉を聞いておればよい。……わしも聞こう、石念、話しなされ」

「はい」といったが、さすがに、そこに鈴野がいては、穴にも消え入りたい気がするのであろう、石念は硬^{かた}くな

って、しばらく両手を膝についたまま沈黙していた。

五

「——なにもかも懺悔^{ざんげ}いたします」と、こう石念はまた、素直にことばを継ぐと、もう邪^{よこしま}げるもののない氣持で、いおうとすることがすらすらいえた。

「その時の私は、情火の獣でした。もし鈴野どのが私の愛を拒んだら力づくでもという氣持でした。戸に手をかけました。そして二、三寸ばかりそこを開けたのです。すると同時に、ハッと私は眼が眩^{くら}んで両眼を抑えたまま俯伏^{うつぶ}してしまったのです。なぜならば鈴野どこのの部屋に、一道の白い光が、仏光のように映^さして見えたからでした」

沈痛な声である。

「覚^{かけひ}の水の音がどこかでして、鈴野も親鸞も、そこになく、彼一人が独りで口走っているかのように静かであった。

「——後でよく考えて見ますと、その光というのは、鈴野どこのの部屋の窓が隙^すいていたので、夜明けの光が射し

込んでいただけのことだったのです。……けれど夜もすがら、熱病のように悶々としていた私は、夜が明けていたとも考えておりません。真っ暗な部屋の中とばかり思っていた眸を、不意に、怖ろしい光明で射られたので、そのまま、うッ伏してしまうと、思わず、念仏をさけんでしまいました。次には、しまったと思う悔いと涙とでうろたえながら、逃げ出しました。身の置きどころもないように」

「………」

「どうぞ、お師さま、私を今日かぎり、破門して下さいませ、私は、外道に落ちました、改めて修行をし直した上、ふたたびお膝下へお詫びしに参ります」親鸞は瞑目していた眸をうすく開いて、そういう石念のすがたを愛し子のように見入った、彼はまだ道念の至らないこの若僧の悔いに打ちのめされて慚愧している有様を見ると、あだかも二十歳だいのころの自分を見ているような気がするのであった。

「石念」

「は……はい」

「泣かでもよい、さてさておことはまたとない不思議な仏陀の示顯にお会いなされたの」

「えっ、示顯とは」

「おことが、罪の戸に手をかけたとたんに、その眸を射た光こそ、弥陀本体の御光でのうてなとするぞ」

「……？」

「わからぬか、おことはそれをもって窓にさしていた夜

明けの光というたが、おことはそのせつなに念仏をさけんだというではないか。窓の明りではない、それこそ弥陀本体の御光じゃ、尊い弥陀の示顯に試されたのじゃ、その折に出た念仏こそ、真の念仏、生涯忘れまいぞ」

「わかりました、お師さま！」と、石念は合掌して、

「私は、なんたる、果報者でしょう、この眼で御仏を見ました」と、狂喜した。親鸞は、ことばをかさね、

「そなたはまた、この草庵を出て、修行し直すというたが、それにも及ばぬ、他力易行の行者は、ありのままこそ尊い、配所の囚人であれば囚人のままで、在家にあれば在家のままで、ただいとも、本体の弥陀のすがたを、しかと見て、見失わずに——」

慈父のような教えだった。石念の心の傷は洗われた、いや大きな欣びにさえなった。

それからまもなく、石念と鈴野とは、師の媒介で添うことになった。親鸞の寛大と英断に驚く者もあったが、それからの石念の道行はたしかに一步も二歩も進んでいた。同房の法友たちは、彼のために、また念仏門のために、この一組の若い夫婦を心から祝福した。

—

夕餉の煙が露草に這う。万野は、厨の竈に火を焚き、鈴野はもうほの暗い流れで野菜を洗っていた。

もう初秋である。暮れると急に、この山間は陽かげになつて、寒かつた。

「……はての？」里人に道を教えられて、一途にこの小丸山へ来たらしいのであつたが、旅の老武士は、そこに働いている卑しくない女性をながめて、ここが配所であり僧の住居とは考えられないようにいぶかつて佇ずんでいた。

狩衣のすそを旅支度にくくり、襟の下には鎧の小実が煌めいていた、長やかな銀作りの太刀を、革紐で横佩きにし、それでいて烏帽子をいただいた髪は毛は真っ白なのである、年齢はもう六十がらみに達しないのだ、けれど足もとも身体も、壮者のようにがっしりしていた。「ちと、もの承りたいが——」こういつて、鈴野のそばへ老武士は寄って行った。めずらしくその言葉は、上方の語音である。鈴野はハツと思つて、濡れ手のまま立つた。

「はい……何ぞ」

「つかぬことを承るが、親鸞上人のご配所は」

「こちらでございますが」

「オ……やはり」と、老武士は安堵したように、

「上人は、ご在宅かの」

「おいでなされます」

「あれが、お入口か」

「いえ、厨でございます、どうぞこちらへお越しなさいませ」小走りに、鈴野は先へ駈けてゆく。——駈けつつも、

（どなたであろうか）不審でならなかつた。

玄関を教えると、老武士は、裾を解き、塵を払つて、烏帽子のゆがみをも正しながら、

「たのむ」おごそかに訪れた。いあわせた教順房が、

「どなた様でいらっしゃいますか」と、眼をみはつた。

老武士は慇懃な——どこやらに卑しくない教養と世に練れたものごしで、

「突然おたずねして参つて、ご不審に思召そうが、それがしは近江の住人佐々木三郎盛綱とよぶ者——折入つて上人に御意得とう存じて、はるばるこれまで身ひとつで参つた者でござる。——おつとめの折とあらば、他の室にてお待ち申すも苦しゅうござらぬ、お取次だけを」と、行きとどいてゐる会釈。

はっ——と教順は胸に大きなものをぶつけられた気がした。近江の佐々木盛綱といえはこの辺土にも知れ渡っている源家方の豪族である。

あわただしく、奥へ告げに行くと、ちょうど廊下でぶつかった西仏房がそれと聞いて、

「なに、佐々木殿が見えた」とつかつかと彼は玄関へ出てきたのである、そしてほの明るい夕暗の軒端に、その人の影を透かして見て、

「やあ」と、なつかしげにいった。

「三郎盛綱どのか。珍しい珍らしい、元の木曾の幕下太夫房覚明じゃ」

「えっ？」と、盛綱は、意外な旧知を見出して驚きながら、

「木曾の覚明じゃと。……才なるほど、世も変わったが、おぬしがかような所におろうとは、さてさて時の流れは、思いがけないことになるのう」

二

「まず上がれ」と、西仏は遠来の旧友に、昔の武者言葉を出して、

「師の上人もご在室、ゆるりと昔語りもしよう」先に立って、いそいそ奥の室へ案内して行く。三郎盛綱は、太刀の緒を解いて、左手に提げ、

「さらば」と、彼の後に従った。

広くはないが、配所とも見えぬほど閑寂な幾室かがある、短い二間ほどの橋廊架を越えると、そこには何か非凡人のいるものの気配が尊く感じられて、三郎盛綱は、いわれぬうちから、

（ここが上人のお住居であるな——）と感じて、おのずから襟を正しめられて控えていた。

西仏は、妻戸の外にひざまずいて、両手をつかえ、
「師の房様。おさしつかえござりませぬか」くんくんと何かのおうそのこの室の内から、親鸞の声がすぐ答えた。
「どなたか」

「西仏です。——じつは只今、私の旧友で、師の房にもとくご存じでおわしましうが、近江佐々木の庄の住人、佐々木三郎盛綱が、なにか親しくご拝眉を得たうえで、お願いのすじがあると申し、はるばるこれまで訪ねてござりましたので、お会い下さるなれば、有難う存じます
が」

「……」何か黙考しているらしくもあるしまた、机のうえでも片づけているのか、しばらく返辞がなかったが、やがて——

「どうぞ」と、いうのが聞えた。

西仏は振向いて、三郎盛綱のうれしげなうなずきを見た。そして、静かに妻戸を引いてそこを窺うと、朽葉色の法衣のすそがすぐ盛綱の眼に映った。

（ああ多年、会いたいとお慕い申していたおん方、今こそ会えるか）と、盛綱は若者のような胸のときめきを覚えて、屈み腰に、そっと進む。

——すぐ後ろから、鈴野が短檠を持ってきて、主客のあいだへ、静かに明りを配る。——そしてこの老武者が有名な源氏のさむらいであるかと、尊敬と物めずらな眼を客に向けて、退がって行った。

時の流れはあわただしかった。治承、寿永という風雲乱世は、つい昨日のようであったが、今はもう鎌倉幕府

という言葉さえ、民衆には新しいひびきが失くなっている。鎌倉幕府自体にさえ、種々な弊政やら、葛藤やら、同族の相剋やら、醜いものの発生が醸し出されて、そろそろ自壊作用の芽をふきだしていた。

その源氏が、隆々と興って、治承、寿永の世にわたって、平家を剿滅して行ったところには、源平両軍が戟を交えるところに、佐々木三郎盛綱の名が功名帳に輝かないところはなかった。

——だが、そうした武運のめでたい男も、鳥坂城に資盛を討った老後の一戦から、ふツつりと、明けても暮れても血の中の武士生活に無常を感じて、（何がゆえに？）と大きな悩みと迷いを生じ、子のある親を討ち、親のある子を討って、それを兜の八幡座のかがやきと誇る武者のところが忌わしくなり、武具馬具打物などのすべてのそうした血なまぐさい物に囲まれている日常が、耐えられない苦痛になっていた。

三

武者の生涯ほど、一刻一刻が、真剣で血まみれなものはない。

五十余年は夢の間だった。なんであんな血なまぐさい生涯を、獣のように働いてきたか。——人を斬っておのれが生きる道としてきたか。

果たしてそれが、国家のため、民くさのためだったろうか。

主君はそう受け取ってくれたらうか。平家が亡んだ後の源家の政治は、果たして国民の幸福を増してきたらうか。三郎盛綱はもだえた。

（怖ろしい、浅ましい。人は知らず、自分の肚の奥底を割ってみれば、そこには華やかな武者の道があつて、ひたぶるに、君家のおんためという気持もあつたが、何よりも自分を猛く雄々しくさせたものは、領地や位階であつた、出世の欲望だつた）こう考えつくと、彼はたまらなくなつた。そしてついに、

（せめて、老後の一日だけでも、阿鼻叫喚の中からがれて、こころのどかに、人らしく生きてみたいものだが——）そう気づいてから先の三郎盛綱は、往年の烈しい気性を、急角度に向きかえて、ひたぶるにそれを望み出した。——実に、多年のあいだの宿望だつた。

（領地が何か？ 位階が何か。——あさましやおれはこれで釣られて、一生を屠殺で送ってきた）

館も財宝も、もう彼の眼には、芥としか見えなかつた。——だがすでに、彼の身は由々しき所領の大名となつていた、一族門葉も少なくはない、鎌倉との交渉も、簡単には参らない。彼はそれを捨てることに、どんなに長い腐心を費やしたか知れない。

——すると、すでに鎌倉では、彼のそうした憂悶のあらわれを、敏感に知っていた。三郎盛綱は、鎌倉に対して近ごろ不満をいだいているらしいと沙汰する者があつたり、それに尾ひれを付け加えて、彼こそは油断のならぬ男で、今のうちに処置をせねば乱をなす者であらうと

流言する者がある。

突然、鎌倉幕府では、彼が四十年に近いあいだ、幾千の部下の血と、自己や一族の刃の働きで築き上げたところの城地を、何の理由も明示しないで、強制的に没取してしまったのである。元の三郎盛綱なら、（理不尽な致し方）と、激情して、一戦にも及んだであろうが、盛綱は、その権謀術策の人々のすることを、笑って見ていることができた。

（この機に！）彼は、身一つになって、所領、位階、一族妻子、あらゆるものに袂別を告げ、そしてまっしぐらに、多年のあいだよそながら慕っていた親鸞を遠くこの北国まで訪ねてきたのであった。

「この身の発心をあわれみ給うて弥陀がお手びき下されたことと存ずる。何とぞ、お慈悲をもってこの後の安住を老骨へおさずけ下されい」

親鸞の前へ出た三郎盛綱の偽らない物語りはこうだった。——終始、じつと聞いていた親鸞は、

「無自覚の四十年五十年は夢中の一瞬です。おん眼をひらかせ給わば、一年も百年千年の生き心地を覚え給うに相違ない。何日なとご発心はおそくはない。ようこそ来るべきところへ参られた、いでこの上は親鸞が、ご仏縁の仲だちをお授け申しあぐるであらう」

その夜すぐ、親鸞は彼のために剃刀を取った。そして、法善房光実という名を選んで授けた。

四

「どうじゃ盛綱どの……いや光実御房。生れかわった気がするじゃろうが」四、五日たって、西仏は新しくここに加わった佐々木三郎盛綱の光実にこう話しかけた。

「ありがたい、ただありがたいさで、今は胸がいっぱいだ」と、光実は心からいった。

「どうして今までおれは、あんな絆に惑ったり悶えたりしていたのか、ふしぎでならない」

「そこが、俗世間だ、濁流の中に住んでいるうちは、濁流から出る道もわからない」

「そればかりか、上人から聞かされる一語一語が、いままでも、鎌倉の將軍家から貰った武功の恩賞より身に沁みてうれしい。——頼朝がおれに与えたものは、皆自己のわけ前であり、自己のため以外のものではなかった。——然るに上人は何もご自身に求めるのではない、あのお眸に映るすべての者を、ひとしく俸せにしてやろうというほかに、他意はない。——またこの御庵室のなごやかな朝夕を見ても、なぜ今まで、あのように刃と鉄と人馬で困んでも、枕を高くして寝られない所領や城にかじりついて生きてきたのかと、初めて、無明の闇から出てきたように思う」

「おそいぞおそいぞ、今ごろ、さようなことに気づいて、この西仏などは——」と、西仏は自分が発心したことの早さを、快活に自慢したが、

「はははは、それは、おぬしの大将の木曾殿が早く滅び、おぬしも志を武門に得なかったからではないか」と、盛綱に反駁されて、

「や、いかにも、そのせいも幾分があるな。あはははは」と、哄笑した。夜になると、

「馴れぬうちは淋しかろ、田舎酒でも温めようか」と、西仏は飽くまで友に親切であった。炬を囲んで、初秋の夜の静、心をたのしみ、

「——時に、いつか訊こう訊こうと思っていたが、ご舎弟の四郎高綱どのは、近ごろ、どうしているな？」

「さ……久しゅう会いもせぬが、世上の沙汰では、やはりこの兄同様に、怏々として楽しまずに暮しているらしい」

「備前児島の城へ当てて、この春ごろだったか、手紙を出してみたが、何の便りも返ってこぬ」

「あれの一徹にも困る、わるくすると、この兄とは逆に行って、鎌倉どのへ、忿懣の矢を引きかねぬ男でな」

「さ……そういう噂を世間でちらと耳にしたので、万一の事でもあつてはと、昔なじみの誼みで、この西仏が胸を打ち割って存分なこと認めてやったのだが……あの利かぬ気の四郎高綱、手紙を見て立腹し、引き裂いてしまったかも知れんな」

「——いや、烈しい一徹ではあるが、心の底には情誼にふかい所もある弟——というと弟自慢になるが、旧友の気もちが分らぬような男ではない」

「では、何かの都合で、返事を忘れてござるのかな」

「書けんのじゃろう、気持を偽われない質なので。……だが、何事もなくてくれればよいが」わるいことをいい出したと西仏は軽く悔いた。弟思いの光実は、うつ向いて、遠く弟四郎高綱の児島の城を案じているらしい。六十歳になっても、骨肉の情愛はすこしも幼少の時と変わっていなかった。

「……さ、温まったぞ、もう一杯過ぎさぬか」

もう秋くさが秋風の戸を撫でて戸外は雨かのような虫の声だった。

一

南海の潮は鯖の背のようにぎらぎら青かった。——時はまだ夏の初めだった。

備前児島の城の本丸。

城主の佐々木四郎高綱は、兄の盛綱よりも武者としては勇武があった、髪もまだ白くはない、骨ぶしもまだ強弓を引くに耐える、それだけに満ち溢るる覇氣もあった。

その覇氣へ、彼は、大杯で酒をそそいでいるのだった。彼の血潮と酒とは、燃え合うと、多分な危険のあるものだった。それは家臣もはらはらしていることであつたが、主君のことなので、どうにもならないのである。

「聞けつ、玄蕃」語氣に癩癧がほとばしっている。こういう癩癧は、戦いがあれば戦場で散じてしまふだろうが、もう世の中は泰平だった。

「はっ……うかがっております」と、重臣の浅倉玄蕃は、この殿のこころの底を充分に知っているだけに——またその良い性格の半面もわかっているだけに——ただ涙ぐましくて、困惑に暗くなるのだった。

「わしはの……」と高綱は唇の乾きを舐めずりしていう。「……わしはの玄蕃、ただ理由なく欲望を募らせていう

のじゃないぞ。天下の將軍家たるものが、そういう態度であつていいものか——また、武門のことばの誓いというものが、そんな不信なものでいいか、正義のためにいうのだ」

「わかつております。——殿のお気持は、玄蕃めも充分に」

「わかつているなら、なぜ意見などするか。——よう昔を考えてみる、わしのいい条が無理か否か」

「は」

「そもそも——石橋山の合戦だ。あの時わしは、兄三郎盛綱とともに、まだ二十歳にも足らぬ生若い頼朝を助けに馳せ参じた。あの旗挙げの第一戦に、頼朝はさんざんにやぶれ、石橋山から土肥の杉山へと落ちのびた。付き従う郎党とても指折るほどじゃった。この小冠者を大将にかついても、大事は成らぬと見限りをつけ、生命からがら逃げたのが多い。——彼は孤立した。ほとんど自刃するほかなかったのだ。——そこへこの四郎高綱、三郎盛綱、二人の兄弟が千余騎をひきつれてご加勢に駆けつけた時、頼朝は、わしら二人の兄弟に何といったか！」

「……殿、もう仰せられますな、そのことは、天下の誰もよく知っていることでございます、余りにも有名なお話です。殿が仰せなくとも」

「だまれ。わしがいわんで誰がいうか。北条や梶原のおベツか者や、またその権力に怯じ怖れている小心者の大名輩に、どうして、これがいえるか。——あの時の小冠者頼朝が、わしら兄弟の手を取って、加勢を欣んだ

顔つきは、今に眼に見えておるわ。そして頼朝はこういったのだぞ——（もしもこの身が天下を取ったあかつきには日本半国は二つにして、兄弟の者に取らせる）と……玄蕃げんぱ」

「はっ」

「どこにこの誓言せいげんが行われたか。——わしは今もって、この中国七州しか持たぬ」

「しかし……殿」

「口返しするか。——そちは頼朝の肩持ちか。高綱のことは偽りと思うか。弓矢八幡も照覧、北条時政もその他も、確かに側で聞いていたことだ。……だが、頼朝が天下を取ってから、あのおベツか者は、一人として嘔おうにもさようなことはいいい出さぬ。狡獪こうかいな頼朝は口を拭いて、知らぬ顔にこの言葉を葬ほうむろうとしている——。いやそのうちに頼朝めは死んでしもうた。しかし、彼は死んでも、天下の公約は死んでないはずじゃ。——そうではないか、玄蕃」

二

「ごもつともです」

臣下として、玄蕃はそういうほかなかった。

「しかし殿……すでに鎌倉の右府うふもおかれ遊ばした今日、今さら事新しゅう、亡き將軍家のおことばを取り立てて……」

「いうて悪いか」

「怖れながら、潔白な御心事を、天下の俗衆が、誤解すること、玄蕃は怖れまする」

「いうな、わしは、まだ頼朝が在世のうちから、このことは申していたのだ。——（天下を取ったら日本半国二つにして佐々木兄弟に取らせる）と申したあの一言を、旗差物はたさしものへ書いて、鎌倉へ登ろうと幾度いくたびかいつていた、その度ごとに、汝を初め、老臣どもが、とやかく申して遮さへぎったために、千載せんざいの機を逸して、いつまでも高綱の胸中に、鬱々うつづつとこの不快なものを抱かせているのではないか」

「お家のためを存ずればこそでござります。不肖ふしょうも老臣衆も」

「なに、これが」

「殿のご不平は、小者の端にいたるまで、よつく胆きもに銘じてはおりますなれば」

「玄蕃玄蕃。——分った面がまえせずとわしの胸中をよく聞け。わしは今、中国は七州の太守だ、何の不自由もなし、近江源氏おうみの末として恥かしい身分でもない。……だがの、宇治川の晴れ場で、梶原源太の先駈さきけたこの四郎高綱が、武門には長けて、智恵は浅い男よと、末代まで笑ひ者にされては口惜しい。——頼朝めの肚はらをいえば、自分が天下の権を握ったからには、高綱に不平があらうと、約束を反古ほんこにしようとして、手出しはなるまいと、この佐々木家を見縊みくってそらうそぶいたのだ。何と、気色けしきのよくないことか。——たとえ頼朝、実朝さねともの亡い後でも、この名分は明らかにせねばならぬ。大将の嘘うそが、かくのごとく堂々と通っては、戦場においての武士ぶしの信

義は地に墮ちてしまふわ。——武門のためわしは主張するのだ」

「今日まで、お忪え遊ばしたものを、何でまた、俄かにさまで仰せあるか。玄蕃も、この儀には、ほとほと困じ果てました」

「わしばかりではない、命を槍先にかざして働いた多くの大名、武士たちの末路を見ろ！ 泰平の後には皆、片田舎の荒地へ追いやられ、ただ口先の弁巧で、ぬりくりり身を這い上げた諂い者が、廟に立ち、政治を私しているのではないか。——近くは兄の盛綱は何の科があつてか、所領を没取されているではないか。——やがてはその手がわしへ来ることは見え透いておる。こうしているのは自滅を待っているにひとしい」

「さような事のある場合は、殿のおことばを待つまでもなく、われら臣下が、四ツ目の御旗を陣前に押し立て、北条、梶原の輩を一挙に懲らしめてくれますれば」

「それでは遅い、後手だわ」

「では、どう遊ばします」

「こなたから、不意に軍勢をのばすのじゃ、彼奴らの虚を突くのだ」

「かえってそれこそ、鎌倉方の策にのるものです、反逆の軍と呼ばれましょう」

「な、なに」と、四郎高綱は、面に朱をそそいでいった。

「盟約を正す軍を反逆というか！」

「たとえ、君命にござりましてもさような不利な軍は」

「よし、老臣どもの手はからぬ、陣ぶれの状を廻せ！」

「殿っ——」と玄蕃は涙をたたえて、

「泰平をよろこぶ民を憐れみ遊ばせ。——軍は私憤をもってするものではございませぬ。……ご賢慮を」と、袖にすがって諫言しているところへ、小侍が、一個の文笥を捧げてきて、

「御状でございます」と、そこへ差し置いた。ふと見ると——

北越小丸山配所中

沙門西仏

と差出人の名が目についた。

三

「——沙門西仏、沙門西仏、はてのう——どうも覚えのない名じゃが」四郎高綱はつぶやいた。

手にとった書面の名に、醉眼をぼうとみはって、小首をかしげているのであったが、やがて封を切ってみると、中の書状には、太夫房覚明という別名が記してあった。

「なんじゃ、あの覚明か」大きく笑ったのは何か懐かしい者を思い出したものであろう、玄蕃のほうをちらと見てこういった。

「そのむかし木曾殿の手についておった荒法師じゃ。今では西仏と名を変えて北越におるものとみえる。……何て思い出して書面をよこしたか」杯を片手に、気懶い体

を脇息きょうそくにもたせかけながら高綱はそれを読んでいた。

初めは、昔なつかしい戦場の友を偲しのんで、微笑をたたえてこれに向っていたが、ふと、苦いものでも噛みつぶしたように唇をむすんでしまうと、同じ所を何遍なんべんもくりかえしつつ、

「ウーム……」と、心を抉えぐられたように呻うめいているのであった。

さつと酔のひいた眉には、深い苦悶と自省の皺しわが彫り込まれていた。引き裂いて嘲笑あざわらってしまおうとする気持と、そうできない本心の重圧とが、ややしばらく彼の顔いろの中に闘っていた。

残水ざんすいの小魚しょうぎょ

食を貪むさぼって

時に渴かわくを知らず

糞中の穢虫えちゆうちゅう

居を争きよって

外の清きを知らず

達筆にかいてある西仏の手がみの中には、そういう文句などもあった。高綱は幾度いくたびも、その一章をくりかえしては見入っていた。

「——残水の小魚、糞中の穢虫とは——心憎くも喩たとえおつたな。忌々いまいましい奴、北越でもこの高綱のうわさは伝えられているものとみえる」睨にらむように天井を仰いだ。その顔にはもう酒の気はなかった。充血していた眼には涙があふれかけていた。

「……だが、違う！ 西仏に喝破かつぱされたとおり、思

えばこの高綱も糞中の穢虫えちゆうちゅう、世の中にうぐめく蛆うじの中にもがいていたこの身もまた蛆であつた。……ああつまらぬ物に、永いあいだ業ごうを煮やしたもののよ」卒然と彼は身ぶるいした。涙のすじが頬を下って止めどなかった。

「——蛆うじ、蛆うじ、蛆うじ。……ああ外の清きを知らぬ蛆」

ふいと、彼は起ち上がった。——玄蕃や近習が呆あツ氣にとられている間にである。つつつと、奥の一室へかくれてしまった。

そのまま——誰も彼の居室へ近づくことを許されなかった。四郎高綱は、およそ四日ほどの間、ほとんど、そこから出なかった。

めずらしくも、そこには酒杯さかずきを絶った高綱の寂然じやくねんたる瞑想めいそうのすがたがあつたのである。——しかし、六日目の朝には、そのすがたもついに城内には見えなかった。城主の失踪しっそう！ 備前児島の城は、一時、城下城内ともに、覆くつがえるような騒ぎであつた。——四郎高綱の消息はそれきり分らなくなつてしまつたのである。

——だがやがて、一カ月ほど経って、誰からともなくこういう噂が備前をはじめ中国へ伝わってきた。

（さすがは近江源三秀義ひでよしの子四郎高綱ほどあつて、怒りもするが思い切ったあきらめもする。頼朝の不信は責めだが、卒然と何か悟つて、中国七州を弊履へいりのごとく捨ててしまひ、先ごろから高野こうやへ入つて出家しているそうじや……。何といさぎよい、侍らしいやり口ではないか）——と。

四

世間ではそれを、

「心地よいことだ」と噂したが、城主を失った家臣と一族の人々は、

「すわ」と、あわてて、高綱が上ったという高野へさして走せつけた。四郎高綱は、そこにいた。

しかしもう先ごろの高綱ではなかった。剃髪して、高野行人の一人となつてゐる沙門高綱であつた。家来たち、その姿を見て、

「あまりといえ……」と、恨みまじりに嘆き合つと、高綱は、彼らのそうして嘆くことさえ、今ではおかしく見えるように、

「所領も、児島城の財産も、すべて一同でよいように頒けてくれい。——勝手な主人と思うであろうが、わしは再び武門へは帰らぬ。永いあいだを、そちたちには、無駄な奉公させたように思われて、それが何より済まぬと詫びておるぞ。これへ参らぬ旧臣どもへも、ありのままに、今のことを、伝えておくりやれ」——そういったきりであつた。

うごかない決心のほどを見て、何とかもいちど児島城へ帰つてもらおうと考えて来た家臣たちも、断念するほかなかつた。悄然として、佐々木家の人々は、武名天下に聞えた四郎高綱ともある人を、山に捨てて帰らなければならなかつた。

高綱は、一個の新沙弥となつて、当年の高野行人派のひとりとなつて、修行を志した。

糞中の穢虫

居を争つて

外の清きをしらず

彼は、西仏の手がみにあつたその痛烈な一章を忘れなかつた。そして、この高野の大自然と七宝の大伽藍の中につつまれて生き直つた時、

「こここそは、蛆の棲家の外だ——」と思つて、大きな呼吸をついて独り天地に感謝した。

ところが、ここにも彼の想像し得ない世間があつた。

そのころ、この山では行人派の一派と学頭派とよぶ一派とが、事ごとに対立してゐて、学問の上ばかりでなく勢力の抗争が烈しかった。そしてその奉持する宗教では、飽くまで禁慾的な——難行苦行主義な——自力聖道の道を極端にまでやかましくいつていたが、高綱が見たところでは、それは形の上だけにだけ行われていて、僧たちの個人生活には、それと矛盾してゐる無数の醜が隠されてゐた。

隠されて行われているために、それはよけいに人間の醜を感じさせるものになる。——のみならず高綱自身も、その外面的な禁慾主義と難行主義に、迷いと疲れが重るばかりで、真の出家のたましいはここでは得られそうにもない気がした。

「だめだ」彼は山を見まわした。
「ここも糞中の外ではなかつた。——ああどこにそれが

あるのか？」ふと、彼は西仏の居どころを思い出した。

北越——小丸山の草庵。

そこには、高野のような金堂宝塔の美はないが、何か慕わしいものがあるように思われた。その慕わしいものの心根をさぐってみると、高綱もまたいつとはなく世上で耳にしていたところの親鸞という名であった。

「そうだ」彼は高野を下りた。——何の惜し気もなく七堂伽藍の善美や九百余坊の繁昌仏国をすて、北へ北へ、たましいの住み家を求めて、孤影を旅の風にまかせて歩いた。

五

裏日本の風にはもう冬の訪れが肌を刺してくる。越後ざかいの山脈は、すべて銀衣をかむっていた。

薪をかこい、食糧を蓄え、そして雪除け廂の下に、里では冬を籠る支度だった。

「もの申す、もの申す……」たそがれ刻である。小丸山の庵室のまえに、四郎高綱は網代笠を脱いで立っていた。

親鸞——その名を慕って、高野を下り、幾山河の長途をこえて、ようやく今、ここに辿り着いてきた彼だった。

（ああ、ここがお住居か）高綱は、そこはかとなく見まわして、高野の七堂伽藍の金壁と——この粗朴な荒壁だの貧しげな厨だのを心のうちに対照していた。

親鸞という名は、今ではこの国において、いつのまにか大きなものとなっているが——何とその名の大きさに

較べて、その住む家の小さくて粗末なことだろう。しかも高野の金堂宝塔には、すでに真の仏教は失われてしまつて、この石を乗せた茅の屋根と荒壁のうちに、日本の民衆苦をすくう真の弥陀光がつつまれていくかと思うと四郎高綱は、そうして、訪れの答えを門口で待っている間も、なんとなく有難くて——うれしくて勿体なくて——思わずそこへひざまずいてしまった。

そして彼は、奥へ向つて、まず掌をあわせて瞑目した後、ふたたび、こういった。

「——もの申します、これは紀州高野の山よりまかり下りました行人にござりますが、当所の上人に拝顔を得とう存じて参じてござる。お取次の衆より上人まで、よろしゅうお願い仕る」ついさきごろまで、備前児島の城主であった彼である、鎌倉の覇主頼朝に対してすら、ついに頼朝の死ぬまで屈しなかった彼の膝であった。

その高綱が、大地に手をつかえて、こういった。——と、厨のほうから、縁づたいに、紙燭を持って通りかけた石念の妻鈴野が、ふと、門口にうずくまっている人影を見て、

「どなた様ですか」こういふと、高綱は起つて、ふたたび来意を述べ直した。

その声が、奥へ聞えたのであろう、誰か出てくる足音が聞えたと思うと、

「旅のお人」と、ほの暗い家のうちの端に、六十ばかりの僧が佇んで、鈴野のほうへ向いて訊いた。

鈴野の手にある紙燭の小さい灯が、老僧の顔にゆらゆ

らとうごいた。

四郎高綱は、何気なく門口からその人を仰いで、「あっ！」さけぶとともに、身を弾ませて、飛びついてきたのである。

「兄者人っ」

「ええ？」老僧は、愕として、自分の法衣の袂をつか

んでいる旅人をじっとしばらくのあいだ見つめていた。

眸と眸——それはとたんに血縁のつよい情愛をたぎらせあい、眼たたきもせず、しばらくはお互いが呼吸さえもせずにはいたが、やがて四郎高綱の眼からも、三郎盛綱の眼からも、滂沱として、湯のような涙があふれ下ってきた。

「お……おう……四郎か」

「高綱です」

「弟」

「兄者人」ふたつの体は、かたく抱き合った。

六

兄弟は、何年ぶりかで会ったのである。戦場から戦場の生涯に行き迷れたままのように——久しぶりの邂逅だった。しかも、変った姿で。

もう六十になる兄の盛綱と、五十という人生を越えてきた弟の四郎高綱と、二人は、幼少ごろの兄弟の血をそのまま覚えて、いつまでも、抱き合っていた。やがて

「兄者人、どうしてここには？ ……」と、高綱は不審がる。盛綱もまた、

「どうして、おん身こそ、ここへは来たか。……しかも沙門の姿で？」と、これも夢かのように、弟のすがたに見入るのだった。鈴野が告げに行ったのであろう。

——奥のほうから、西仏が、

「なに、佐々木の舎弟が見えられたと。——それは真か」あわただしく出てきて、紛れない四郎高綱の姿を見るなり、

「おお」と、手をのぼした。

「やあ、太夫房覚明か」と、高綱も手をさし出す。

「いや、今では、念仏門の西仏房じゃ」

「そうそう、この御弟子とな。うらやましい」

「高綱どの、ずっと前に、わしから児島の城へさし出した手紙、見てくれたか」

「見たつ」と、強く答えて、四郎高綱は、沈痛にいった。

「——持つべきものは友達だ、あの書状がなかったら、わしはまだ児島の城の業火の中に、みすみす昼夜の苦患にわずらっていたかも知れぬ。……糞中の穢虫も、おぬしの喝破に眼がさめて、やっと、外の清さを知ってここへ来たのじゃ。……兄者人、西仏房、どうかこのことを、上人へお取次をたのむ、残水の小魚を、宏大無辺の慈泉にすくい取らせたまわるよう、二人から、おとりなしの程をたのむ」真実が声にもあふれていた。

盛綱は、そっと、眼をふいていた。もちろん、西仏も、自分のやった一片の手紙が、この仏縁をつくったと思え

ば、うれしくてたまらなかった。

その翌る朝——朝のすがすがしい気持ちをもって、四郎高綱は、渴仰^{かつよう}していた親鸞に会った。もちろん、親鸞は、「ようござった」と、ことばは短いものであったが、高綱の発心に対して、共々、よろこんでくれたし、その日から、弟子のひとりとして彼を許すことに何のためらいもなかった。

釈^{しゃく}了^{りょう}智^ち。それは四郎高綱がこの朝、親鸞から与えられた再生の名であった。

兄の盛綱は、そのまえに、光実^{こうじつ}という名を授けられていた。——光実と了智と——ふたりの名だたる源氏の武将が、今では、よそ目にもうらやましい睦^{むつ}まじさで、親鸞のもとに、法悦の日を送っているのを見ると、この越後や隣国の人々は、さらに親鸞^{しんらん}に帰依^{きえ}の心を厚くした。

そうして、小丸山の庵室は、一夕の法話でもあると、真冬の大雪を冒^{おか}しても、聴聞に寄ってくる人々が、目立って数を増してきた。——万丈の白雪の下から、落^ふの芽^めのように、念仏の声は萌^もえていた。

春は南へ

一

雪に明け、雪に暮るる日ばかりがつづいた。灰色の空には、いつ仰いでも、白いものが霏^ひ々と舞っていた。

小丸山の庵室は、万丈の雪の底に丸く埋^{うず}まっていた、わずかに朝夕炊煙^{ちようせきすいえん}が立つので、そこに人が住んでいることが分る——

しかし。北国特有の月が、ふと、吹雪の空に冴える夜など、ふと、そこから朗々と、無量寿^{むりやうじゆきやう}経の声が聞えることがある。

親鸞が起っているのだ。弟子たちも、それに和して、寒行をしているのだった。

建^{けん}暦^{りやく}元年の十一月——ある日の昼間であった。めずらしく、雪がやんで、青い空が見えていた。

「オオ、麓^{ふもと}から、見馴れぬお方が見える」万野^{まの}と鈴野^{すずの}が、こういいながら佇^{たたず}んでいた。

——と、藁^{わら}沓^{くつ}を穿^はいた三名の武士が、息を喘^{あえ}いで登ってきたのである。萩原年景の家来だった。

「鈴野どの！ 万野^{まの}どの！ 房の方々に、はやくお告げしてあげなされ、吉報がある」と、呶鳴った。

「え……吉報とは」

「お勅使だ。——お勅使が着いて今すぐこれへおいでな

さる」

「えっ、御下向ですか」ふたりは、転び込むように、奥の房へ駆けこんだ。

年景の家来たちは、表へ廻って、庵室のうちへ春を告げるように、大声でいって廻った。

「——皆さま皆さま。お欣喜あれ、勅使岡崎中納言範光卿が御下向なされ、主人の年景が案内してただ今これへ見えられましようぞ」そういって、雪を蹴立てながら、人々はすぐ麓へ引返して行った。伝え聞いて、「さては、御赦免の宣下」と、房の人々は、にわかに色めき立った。

西仏などは、子どものように、雀躍りして、

「御赦免じゃ、御赦免じゃ」と、はしゃぎ廻った。まだ何も知らなかった生信房は、西仏があまりはしゃいでいるので、

「この、おどけ者」と背をどやした。だが、その理を聞くと、

「えっ、御赦免の勅使が？ ……そ、それはほんとか」と、どっかと坐ってしまつて、うれし泣きに、泣き出した。

静かなのは——依然として親鸞のいる——奥の一室であつた。

勅使の一行が通つてきた北国の駅路には、綸旨下向のうわさが、当然、人々の耳目からひろがった。そして、念仏門の栄えが謳歌された。

愚禿親鸞言上

のお請状の一通をおさめて、勅使の岡崎中納言の一行は、その翌日、すぐ帰洛の途についた。

やがて、そのよろこびのうちに、建暦二年の初春は来たのであつた。

——こういう新春を迎えようとは、親鸞をはじめ、誰も予測していない年であつた。

二

赦免の御綸旨をおうけしたからには、いずれ近いうちに都へご帰洛なさることであろう——

弟子の人々は、そう臆測していた、もちろん、親鸞のころにも、慕郷のおもいは燃えていた。

（玉日が生きていたら）彼は、妻に一言、このよろこびを聞かせたかつた。

添う日までは、お互いにあらゆる苦患と闘い、添うての後は、身も心もやすらぐ間もなく流別して、そして、離れたままこの世を去ってしまった薄命なあの妻に——また、次には、

（月輪の舅 御殿にも）と、思った。

かの人はどうして在るか。都の様はいかに。

さて——こういうよろこびに遭えば親鸞も凡夫である。さまざまに、人を想い、郷を想い、年暮の日と共に、心も忙しない。

だが——そういう彼の気ぶりや、弟子たちの支度を見て、慈父を失うように悲しみだしたのは、国司の萩原年

景をはじめ、この国の頑^{がんぜ}はない土民たちであつた。

「上人さまは、お歸りになるそうじゃ」

「ほんまか」

「どうして、この片田舎^{かたいなか}に、御赦免の後まで、お在^いでになろう」彼らは、そう聞くと、日ごとに庵へやって来て、「せめて、もう一年^{ひととせ}」と、拝むばかりに、引き止めるのであつた。

親鸞は、そういう頑^{がんぜ}はない土民には、何とも振り切り難い弱さを持っていた。土着の人々の切ない氣持も無下^{むげ}にできない氣がして、初春^{はる}には、北国を立つつもりでいた予定を云い出しかねていた。

そしてつい、正月は、小丸山の庵室で迎えた。

ここへ来てから四年になる罪の黒髪は、もう肩にかかると伸びていた。今は、晴れてそれを剃り落すことのできる身となつた。その剃刀^{かみそり}の日を、親鸞は、元日に選んだ。

西仏が、剃刀を取つた。弟子たちは、居ながれて、劇的な感激に打たれながら、新しい親鸞のすがたを見出し、いた。今年、親鸞は、四十の年を迎えたのである。孔子のいった——四十にして不惑^{まどわす}の年へ彼もかかったのである。

二日の朝、都にある叡山^{えいざん}の横川^{よかわ}の旧友から、赦免を祝う手紙がとどいた。そのほかの人々からも急に、ここへ届けられる書状が殖^ふえだした。

それらの消息から親鸞は知ることができたのである。——行住坐臥、心のうちで、氣にかけている師の法然^{ほうねん}上

人の安否を。

で——彼が知り得たところによると、師の法然は、去年の十一月下旬には、早くも、恩命に接して、配所の讃岐^{さぬき}を船で立たれ、元の吉水禅房へ歸っておられるというこゝとであつた。

「お目にかかりたい」師を思う時、親鸞は甘える子のように、自分を抑えきれなかつた。

（一刻も早く）と思い、

（越しかたのつもる話を）と、矢もたてもなく、慕わしくて会いたくて、じつとしていられなかつた。

「わしは、都へ立つ。——すぐに立つほどに、支度してくだされ」急に、こういい出したのが、正月の二十五日だつた。雪で里の者も通えなくなつたころである。

三

「えつ、すぐに？」と、人々は疑つたほどだつた。

親鸞の決心は固い。

「そうじゃ、どうしても、師の法然^{ほうねん}御房^{ごぼう}にお会い申したい。雪解^{ゆきど}けを待っていては、三月になろう。同じ雪のあるうちなら、今の間に——」と、いうのであつた。

供には、生信^{しょうしん}房^{ぼう}と西仏^{さいぶつ}と——また、新しく弟子となつた佐々木光実^{ささきみつじつ}、釈^{しゃく}了^{りょう}智^ちの兄弟。

師弟あわせて五人。

小丸山の庵室の留守居としては、教順房をかしらにして、石念^{じゃくねん}夫婦や、そのほかの者をすべて残した。支度

といつても、笠と藁ぐつ。

「この雪では、とても国府の町までも、お歩いはかいませんまい」と、佐々木了智は、侍のたしなみとして、すぐ思いついた駒を曳いてきて親鸞にすすめた。そして、光実と了智の兄弟が、馬の口輪を取ってすすむ。

雪は、この日も、小やみなく降っていた。師弟の影は、すぐ雪の中へ埋みこむように白くかくれてしまう。

「お氣をつけて——」

「お師さま」

「皆様」小丸山に残る人々は窓や門口に集まって、その影が、豆つぶのように小さくなるまで見送っていた。誰とはなく、

「上人様が、都へお立ちなされたそうな——」

と里へも伝えられて行ったとみえて、国府の町へ来ると、もう、彼の駒の前には、雪など物ともしない民衆でいっぱいだった。萩原年景は、雪の中を駈けてきて、「何とて、一夜のお名残も賜わずに」と、恨むばかりに、別れを惜しがった。

「またのご縁もあろうに——親鸞の慕師の情をゆるしたまえ。親鸞は去るとも、仏果の樹は、もうこの土に成長して見えた。後の守りをたのみまするぞ」年景は、そういわれて、涙をふいた。そして二、三の郎党と共に街道を何里となく従ってきたが、

「尽きぬおわかれ……」と、暇を告げて、やっと元の道へもどって行った。

古多の浜からは、路は南へかかる。裏日本を背にして、

次第に信濃路へ入ってゆくのだった。

国境を越える難路のなやみは、とても想像のほかだった。親鸞の手も、弟子たちの手も、凍傷で赤くただれていた。

やっと、善光寺平へ出て、人々はややほっとした。しかし、あれから松本の里へ出て、木曾路の通路をたずねると、今はまだ、獵師さえ通れない雪だというのである。生命がけで行っても福島まで行けるかどうかという者があつた。

（大事なお体に、もしまちがいでもあつては——）と、佐々木兄弟もいうし、木曾路に明るい西仏も、

（引返して、東海道へ出たがよい）という意見なので、一行はまた、むなしく善光寺へもどって、さらに、道をかえて、浅間山のけむりをあてに、碓氷越えを指してすすんだ。

そして、辛くも、峠をこえ、眼の下に、上野領の南の平野をながめた時は、すでに暦は、二月の下旬で、にわかに暖国の風につつまれた五名は、春に酔うような氣持がした。

四

かすみの上に、妙義の山の峨々とした影が、淡むらさきに眺められた。

碓氷川の水にそって、松井田をすぎ、四辻という部落まで来ると、

「おや」摺れちがった一人の旅僧が、踵を回してきて、「もし——」と、声をかけた。親鸞と弟子たちの五名も、その旅僧のすがたが、念仏僧らしかったので、何とはなく、振向いている所だった。

「才才！」眸と眸とを見合すと、旅僧は飛びつくように、親鸞の脚もとへ来て、

「もしや、あなた様は、越後路からご上洛の途中にある親鸞御房ではござりませぬか」といった。

親鸞は、見忘れていたが、西仏は思い出して、

「あつ、そう仰っしゃるは、明智房ではないか」

「おお、西仏御房か。……あやうくお見違え申すところでした」

「久しいのう。これにおいであそばすは師の上人じゃ」

「では、やはり」と、明智房は、あわててそこへ両手をつかえかけた。——が、人々に誘なわれて、傍らの地藏堂の縁へ寄り、思い思いに足をやすめた。親鸞は彼にたずねた。

「おもとは、何ぞ、都のたよりを聞いておられぬか。

何より知りたいのは、師の法然御房の消息じゃが」

「さ……そのことでござります。実は私は、念仏停止のため、都を追ひ払われてから、この先の赤城の麓に草庵をかまえておりましたが、このほど、恩師法然様が讃岐よりご帰洛と聞いて、すぐ都へ馳せ上り、そしてまたも、この地へ帰ってきたばかりの所でございます」

「ホ……恩師ご帰洛のために、都へ上ってお歸りの途中とか。……それは、よい者に会いました。——して法然

様には、都へご安着の後、いずれにお渡りあらせてか。元の吉水にお住いか、それともほかに」親鸞の懐かしむ様子に、

「ちよつとお待ち下さい」と、明智房は、暗い顔して、うつ向いた。

「……その儀につきまして、実は、都において席のあたまる違もなく、あなた様へ、お使いを齎すために、私はすぐ東海道をいそいで下ってきたのでございます。——あなた様のご一行が、木曾路の雪に引返して、碓氷へ出たという善光寺からの便りを手にいたしましたので」

「え？」親鸞は、いぶかしげな眼をみはって、

「——では、おもとが下られたのは、この親鸞へ、お使いのためですか」

「そうです」

「師の法然様から？」

「いえ——」と、明智房は、いよいよいい難そうであったが、

「法然上人からではございませぬ。——安居院の聖覚法印から」といって、あわてて旅包みを解き初めた。そして、取り出した一通を、親鸞の手へ差し出すと、「仔細は、このお文に」と、口をつぐみ、そのまま、後へ退がって、ぱらぱらとこぼれる松の雪を背に浴びていた。

はっ——と白けたものが弟子僧たちの顔いろに走った。何事にもかつてものに動じた例しのない親鸞の眉にすら、

「なに、聖覚法印から……このお文とな？」

不安の影がちらと曇って、やがて読み下してゆくうちに、書状をくりかえしている手がかすかに顫えを見せた。（唯事ではない）と、人々の胸には重いものがのしかかった。

親鸞のまつ毛には、明らかに、涙が光っていたのである。——誰が、この上人の涙ぐんだ睫毛を今まで一遍でも見た者があるであろうか。

「……お哀傷はさることながら、御赦免の天恩を浴み、おなつかしい京都の土をお踏み遊ばしてからおかくなされたことが、せめてものことでござりました」明智房のことばに、

（さては、大祖法然様には）と、弟子僧たちは、初めて、安居院の聖覚法印の書面が、法然の死を報じてきたものであることを知った。明智房は、さらにことばを継いで

「初めて、お病床におつき遊ばしたのは、ちょうど正月二日でございました。ほんの風邪ぐらいな様子であったのが、にわかに、おわるくなって、お年もはや八十のご老体とて、重るままにお息も弱り正月二十五日、眠る

がように、大往生をおとげ遊ばされました」といって、
瞼を抑えた。

「——その、ご書面にも、つぶさに法印からお認めございましょうが、大谷に集まった法弟の人々は、この後の念仏興法の道を、いかにしたものかと、評議もまことに迷っております。今はただ、越後の親鸞が、帰洛の上に、よい策もあらうぞと、人々はひたすらあなた様の都に入る日をお待ち申しておる有様、何とぞ、一刻もはやく、ご帰洛下さいますよう、安居院の法印からも、くれぐれお言伝でございました」化石したように、親鸞は瞼をふさいだ面を空に上げていた。

蕭々と並木の松は鳴っていた。つき上げて胸にせまるものが、容易に心を落着けさせなかった。——同時に、大祖法然という中心の巨星を失った都の念仏者たちのかなしみや失望や彷徨や、あらゆる周囲も彼の眼にはありありと映ってくる。明智房は、膝をすすめ、
「さだめし、ご落胆もあらうぞと、安居院の法印も申されておりました。しかし、ここぞ、念仏門の浮沈、せっかく、御大赦の天恩が下ったと思えばこの悲報に、人々は、暗黒の中に迷う思いをしております。おつかれもござりましょうし、定めし、お力落しでもございましょうが、何とぞ、一刻もはやく京都へお出まし下さいますよう、私からも、お願い申します。どうぞ、皆様にも、ともども師の御房をお励まし下さって、お急ぎ下さいますように」

と、西仏、生信、光実、了智などの人たちへも顔を向

けていった。——が、親鸞は、「いや……」と、かすかに顔を横へ振って、こういった。「小松谷のおわかれに、この法然の舌はたとえ八ツ裂きになるとも、念仏は止めまいと仰せられた——あのお声は、もう二度と聞かれぬことになったのじゃ。——その京都に何たのしみあつて参ろうぞ、この上は、親鸞はもう上洛をいたしませぬ。……ああ、深くて、うすい現世のご縁であつた」

六

大祖の法然上人が亡い後の旧吉水禅房の人々が、これからどうごうか——また、叡山やその他の旧教の徒が、それを機会にどう策動するか。

親鸞は今、かなしさでいっぱいである。さびしさで身も世もない。そういう紛乱の巷のことを、思うてみるだけでも煩らわしかった。

——もう京都へ帰る張合いもない——といったことは、彼の真実であつた。ありのままな気持だつた。

（一刻もはやく）と、親鸞を急ぎ迎えるために、安居院の法印聖覚から、文使てを持って下つて来た明智房は、それでは、自分がまったく意味をなさないものになるし、また、京都で親鸞を待ちかねている人々の失望のほども思いやられて、

「何とか、お考え直し下さいませぬか、大祖法然様を失つて、悲嘆にくれている念仏宗の方々が、今また、あな

た様も、都を見限つてお帰洛にならぬと聞いたたら、もう大谷の法燈は、真ッ暗なものになり終つてしまふでしよう。——どうぞお師法然上人のご遺志を、ふたたび都において、赫々と弘通あそばすというご勇氣をもつて、これより東海道をお上りくださいますように、吉水一門の遺弟を代表いたしまして、私からもおねがい申し上げます」

「いや、それは、親鸞の任ではありませぬ、都において、そういうご遺志をついで賜わるお弟子は他に幾人もおります。——親鸞は、むしろ、これから、文化に恵まれな

い辺土の田舎人のあいだに交じつて、土と共に生きもし、自分の心も、もつと養いたたいと思います。そのほうが、愚禿には性が合つてもおるし……」と、ことばはおだやかであるが、信念はひるがえしそうもないのであつた。

やむなく、明智房はまた、そこから親鸞のことばを伝えるために、京都へ引返してゆくほかなかった。

師弟五人の旅は、にわかに、その日からの失つてしまった。ひょうひょうと風にまかせて流浪をつづける親鸞の心らしいのである。二日も三日も、黙々として、その的のない道を、五名は歩いた。

「もしもし……それへおいであるのは、角間の蔵人殿ではおざらぬか」碓氷川のほとりで、こう声をかけた一群の旅人があつた。三頭の荷駄を曳かせて、四、五人の男を連れた郷士ふうの男だつた。

「角間の？」と、親鸞に付き添うている人々は一様につぶやいて、

（誰のことをいうのか？）と、いぶかった。

駒の上から下りた郷士ていの男は、西仏房のそばへ来て、肩をたたいた。

「ウム、やはりそうじゃった、角間の蔵人うじ、わしらは、穂波村の者だよ、あんたの若いころから知った者だ、まア何年ぶりだか分らねえが」西仏は思い出した。彼の故郷は信州角間村である、そのころは、角間の蔵人と呼ばれていたが、あまり遠い昔のことで、自分の名とも思われなかったのである。

この人々に出会ったのが機縁で、親鸞と西仏と、光実、了智の四名は、ふたたび碓氷を越えて、信州佐久郡へ行くことになった。

そのうち、生信房が一人ぬけたのは、彼もこの機に、久しぶりで郷里へもどって、多年の悪名を洗い、郷土のために、これからの半生を念仏の弘通にささげたいという心願を訴えたので、親鸞もそれをゆるして、碓氷川から北と南へ袂を分ったためであった。

第二の華燭

一

一粒の胚子がこぼれる所、やがて青々と仏果の穂がそよいでゆく。

花はまたおのずから花粉を風に撒き、自然の命によつて自然に行爲する昆虫がまた実をみのらせ胚子を落とし花のかずを地に満たした。

山水の因果、四季の因果、人のあいだの因果も、かわることはない。

ひとりの聖者が、その土に住む力、それは偉大な精神の花の繁殖だった。

親鸞が、北信濃の山村に移ってから、わずか二年とたたないうちがそうであった。角間から佐久郡一帯は、田に野に山に、生きるをたのしむ人の顔がどこにも見られた。人生を生々とたのしむ歌、それが念仏の声になつてながれ、菜畑、麦の色、馬小屋そのものが浄土に見えた。

——親鸞さん。といえ、木樵も、百姓も、市人も、自分たちの慈父のようになつかしみ、彼のすがたは、地

上の太陽のように、行く所にあたたかに、そして親しみと尊敬をもって迎えられた。

その地方の布教に、努力の効を見た親鸞は、暇があると、山をこえて、越後や越中の国々へもよく杖をひいた。

——また、碓氷を越えて、上野や下野の方面へもたびたび出た。

「しばらくでございました」突然、二年ぶりに、こういつて角間の草庵へ顔を見せたのは、故郷の天城へもどつていた生信房であった。

「おう、生信房か、きのうも噂していたところ、よう戻つてこられた」西仏や光実は、いつも変りのない温情で彼を迎えた。

「上人は」と、何よりも先に訊く。

「お変わりもない。いよいよお元気でいらせられる」

「それ聞いて、安心した」と、生信房は落着いて、やがてその後での話だった。

彼は、故郷の天城に、一人の老母をのこしていたが、母の生家が元々、常陸の下妻なので、そこで老後を養いたいというので、母を背に負つて、何十年ぶりかで、常陸へ帰って行った。

下妻の人々は、老母を背に負つて帰ってきた生信房をながめて、誰も彼も驚き顔をした。——なぜならば、この老母のひとり息子というのは、天下に隠れもない兇悪な大盗で、天城四郎といわれている者だという噂を前から聞いていたからである。

（その悪名隠れもない一人息子の四郎が、頭をまるめ、

しおらしい眞似事まねごとして、老母ははの故郷こきょうの者を騙だまそうというつもりであろう。誰が、そのような手にたぶらかされようぞ」と、相手にする者もなかったが、やがて半年経ち、一年経っても、彼の母につくす様子に少しも怠りがみえないのみか、世間の人々に対しても、思いやり深く、老幼にやさしく、身は奢おごらず、人には施ほどこすという風なので、

（はてな？）と、人々の視る眼がようやくがつてきたところへ、その老母が病んで逝去しよきすると、生信房なぶみのなげきは傍目はたはきにも痛々しいほどで、幾日も食を断つて、母の墓掃はかばきに余念なく暮している様子を見、

（いよいよ本ものだ）と、彼の今日こんにちを、世間で認めてきたのであった。そして同時に、

（いったい、あのすごい悪党の頭領が、どうしてあんな人間に生れ変わったのか？）という疑問が人々の胸にのぼりだんだん彼に今日までの経過を糺ただす者があって、その結果、親鸞上人に師事しているということがわかると、（そういえば、近ごろ、信州に草庵をむすんで、時折、下野しもつけの辺りまで布教に来る高德なお上人があると聞いているが、そのお方ではあるまいか）と伝え合う者があって、やがてその評判が、常陸国ひたちくに眞壁まかべの代官小島武弘たけひろの耳へも入った。

二

また常陸ひたちの下妻という土地には、そのほかにも念仏宗

には浅からぬ縁故がある。

それは、親鸞の同門の——法然上人ほうねん随身のひとりである熊谷蓮生房の親友宇都宮頼綱うつのみやよりつなもその地方の豪族であった。——そしてその頼綱はまた、蓮生房のすすめで、早くから念仏一道に帰依して、名も実心房じつしんぼうといっている。

なお、その実心房以外に、稲田九郎頼重いなだくろうよりしげとか、笠間長門守時朝かさまながしのかみときともなどという関東の武門において名のある人々のうちにも、吉水禅房の帰依者が少なくないので、（そのむかしの天城四郎が、今では生信房しやうしんぼうといつて、親鸞門下の有徳者うとくしゃになっている）という評判は、民間みんかんばかりではなく、そうした上級にまで、大きな感動を与えながら伝わった。その結果、

（ぜひとも、親鸞上人を、この常陸ひたちへお迎え申したい）という希望が、声となり、運動となつて、やがてついに実現せずにはいられなくなつたのである。

生信房は、眞壁の代官小島武弘から旨をうけて、「ぜひ、上人をお請しょうじ申しあげてこいと、以上のような縁故から、わたくしがお迎えのため、その使いをいいつけられて来たのでございます……何とぞ東国の衆生しゆじやうのために、常陸へ御布教を賜りますように」と、親鸞に会つて告げた。

親鸞は、その機縁に対して、感謝した。また、そのむかしは郷里からも肉親からも、悪蛇あくだのように指弾しだんされていた生信房に、そういう余徳が身についてきたことを、どんなにかうれしく思った。

「聞けば、よほど宿縁のある地とみえる。ぜひ参らずば

なるまい。——この信濃しなのの教化きやうげも、後は、佐々木光実と釈しやく了りやう智ちの二人に頼んでおけばよからう」親鸞は、快諾した。そして、

「わしはまた、明日あすから、次の新しい荒地こうちを耕やそう。仏みひかりの御光みひかりのとどこかぬ所を、またその法悦ほふえつを知らぬ衆生しゆじやうを導くのが、この愚禿ぐとくにふさわしいお勤めでもある」と、いった。

すぐその翌日だった。何という身軽さであろう、親鸞は、生信房を案内として、西仏、光実、了智の五人づれで、もう角間の草庵を引き払い、みすずかる信濃を後に——浅間の煙のなびく碓氷うすいの南へ——峠を越えているのだった。

もっとも、佐々木光実と了智の兄弟は、碓氷峠のあたりまで見送って、元の地へ引り返した。もちろん、親鸞によって開拓された信濃地方の帰依地をなおつちか培つちかい守るためである。

親鸞と生信房と西仏は、間もなく、常陸の下妻にわらじを解いた。

そしてこの地方の——大利根おとねのながれと、赤城あかぎおろしと、南は荒い海洋に接している下総境しもうさぎかいの——坂東平野をしずかにながめ、ここにまだ、文化のおくれている粗野な人情と、仏縁ぶつえんのあさい飢うえたる心の民衆を見出して、（われここに杖を立てん）と、親鸞はひそかな誓いと覚悟とを抱いた。

下妻に、三月寺という、もう荒れ果てた廃寺があった。彼を請しょうじた第一の檀徒だんとである小島郡司武弘が、さっ

そく、お住居すまいをといつて、住院の結構を心配するのを退けて、親鸞は、「あれに住もう」と、廃寺の三月寺を乞いうけて師弟三人が、雨の漏る茅屋根かややねの下に、生活を初めた。

三

晴れた日は、西仏と生信房が、梯子はしこを架けて屋根へのぼり、何年も手入れをしたことなく腐つてゐる茅屋根へ、新しい茅を葺ふきたして、屋根を修繕した。

また、大工道具を持って本堂の破損している所や、野盗に踏み荒らされている内陣みほとけを繕つくろつて、とにかく住めるだけの屋根の下と、御仏みほとけを置く壇だけを作った。

「野に働く百姓衆——」親鸞は、そこから呼びかけた。「あなた方は、太陽のもとに食し、汗の中に働いている。体はよく肥え、力は逞しい。——けれどもかなしいかな、あなた方の生きている内面をうかがうと、あなた方もまた、人間である。人間と人間とが一つ棟むねに住み、村に営み、一つの社会というものを作って、その中に生活して

いると、必然に起ってくるのは、邪智、嫉視しつし、反感、陷穽かんせい、迷い、悶え、あらゆる人間の持つ——生きとし生けるものの宿命的な悩みというものがやはり何家どこの中うちにもあるだろう。——富める者は富めるがゆえに、貧しき者は貧しきがゆえに、心の悩みは形こそちがえ、誰の胸にも巢をつくるものだ。——心に病のない者でも、肉体に病魔があるとか、骨肉のうちに生活力のない者があるとか、

また、嫁と舅しゅうとの仲、親と子の仲、あによめと兄弟の仲、近所隣り同士の争い、およそ人間とはそうした煩わづらいばかりに罹かかって喘あえぎ悩むのが持ち前なのである。——それがために、あなた方は、よく働き、よく肥えて、いかにも遅しくは見えるが、心のうちというものは皆さびしくて暗い。衣食に貧しい上に、心までが貧乏人である。

——心の富むすべを——心はいつも幸福で無碍むげ自由にこの世を楽しむことができるのが常であるのを——それを知らないあなた方は、それを宿命のように、鈍々と、牛か馬のようにただ喰って働いている。まことにあわれな生活といわなければならぬ。食物は鳥獸てんろうでさえ天禄てんろくというものがあるのに、万物の霊長といわれる人間が、ただ喰うためにのみ働いて、この世を楽しむすべも知らないというのは、情けないことではないか。楽しまずして何の人生ぞや——である。ではこの毎日を、どうしたら楽しんで、この大地と生命に、生きる感謝を持って生きることができるかというならば、お互いのこの世間を、まず浄土にしなければならぬ。この世間を浄土にするには、まずその前に人間であるおのおのが、心の病巢びようそうを取り除かなければその実現はむずかしい。われのみひとり幸福になろうとしても幸福にはなれない。そこに気づいた衆は、妻をも誘い、舅しゅうともさそい、隣の衆も誘い合って、昼間の野良仕事が終わったら、ほんの半刻の暇をさいて、この親鸞の寺へござれ、親鸞はいかなる重い苦患くげんになやむお方とも、御仏みほとけに代って、心の友となろうほどに——」

噛んでふくめるように、平易なことばをもって、親鸞は説く。

彼の声は、野の人々へひびいて行った。

だが、文化もおくれているし、精神的にも、かさかさしているこの民衆の耳には、彼のそうした声もうるさいことにしかひびかなかったとみえ、

「おいおい、このごろ、下妻の三月寺に、変な坊主が来て、寝言みたいなことを云い出したが、聞いたか」

「聞くほどもねえわさ、一文いちもんにも金になるわけじゃなし、念仏さえ唱えていれば、倖せになるっていうなら、歌を唄っても、長者になれそうなんじゃないか」

「そうとも、欠伸あくびをしていても、如来にょらい様になれるわけだ」「念仏いうひまに、縄でもなえば、寝酒の錢ぐらいは溜たまる。そのほうが、ご利益りやくがあらたかだて」野の反響は、そんなふうであった。

四

親鸞は、根気がよかった。偉大な彼の根気は、あらゆる嘲罵ちやうばや、無智の者の無自覚に対しても、叡山えいざんや南都の知識大衆と闘ったような、不屈さを示して、意力を曲げなかった。

機縁があれば、たとえ一人でも二人でも、それに対して、噛んで含めるように、教えて行った。

彼の根本義は、もとより凡夫直入しきにゆうの道だった。「その姿のままでの信心」であった。

だが、由来、この地方にも、聖道門の形式的な仏教が、先入主になっているので、親鸞のいわゆるありのままの仏果を得ている——という易行道の教えは、説いても容易に、人々の理解に受け容れられなかった。

在りのままな姿の信心——在家往生の如実をどうしたらそういう人々に解らせることができるだろうか。

理論ではだめだ。学問や知識のうえからそれを野に働く土民たちに教えることは、かえって、厭われることになるだろう。——親鸞は考えた。

説くよりも、実際の生活をして見せることだ——と。

だが、玉日はすでに世を去っていた。一子の範意は京で育てられている。法衣を着て、孤独の身を寺のうちに寂然と置いていては、口に、在家仏果を説き、在りのままの易行極楽の道を説いても、自身の生活は、やはり旧来の仏家の聖道門の僧と何らの変りなく見えるにちがいない。一般の人たちは、ここに矛盾を見出して、（あの坊主が、何をいうか）と、多分な狐疑を感じているのも無理ではないと思った。

まず、自分の生活から、この百姓たちと、何らの変りがないことを示さなければならぬと気づいて彼は、「妻をもちたい」と、周囲の者にもらした。

西仏と、生信房は、師の房の気持にはよくから共感していたので、さっそく檀徒の小島武弘に話した。武弘は聞くと、

「まことに、そう仰っしゃったのか」と欣んだ。

その前から、武弘のところに、縁談があったのである。

真岡の判官三善為教の息女で朝姫という佳人がその候補者であった。

そういう話が——親鸞の身辺に起りかけていると——すべての人間の運命というものの動いてゆく機微な時節が、いろいろな方から熟してきているように、同時にまた念仏門の帰依者の稲田九郎頼重とか、宇都宮一族などの地方の権門たちが、

「いつまでも、上人のおん身を、あのような廃寺においては、ご健康のためによろしくない。お心を曲げて、ぜひと、もすこし人の住むらしい所へお移し申し上げねばわれらの心が相済まぬ」——そう結束して、下妻の庄からほど近い稲田山の麓——吹雪ヶ谷に新しく一院を建て、そこへ、移住するようにすすめてきたのである。

建保二年の春。菜の花の咲きそめる坂東平野の一角に、力ある大工たちの手斧初めの音から、親鸞が四十二歳の人生のさかりにかかる稲田生活の一步は初まった。

間もなく、庵室はできあがった。木の香のにおう新院へ、三月寺のほうから親鸞師弟は移ってきた。

間もなく、小島郡司武弘の媒介で、嫁御寮は、嫁いできた。真岡の判官兵部大輔三善為教の息女といえ、里方も里方であり、媒人も媒人であるが、親鸞の目的は、身をもって、凡夫直入の生活をして見せるのにあった。在家往生の本願を実践するのにあった。——で、もちろんその華燭の典は、いとも質素に行われた。

一

親鸞にとって、朝姫は、第二の玉日であつた。

嫁かずいてきてからすぐ翌年に、その裏方は、後に、小黒おぐろの女房とよばれた昌姫まさひめを生み、やがてまた、二年おいて、男子おのこの明み信しんを生んだ。

親鸞の望みどおりな、一庶民の生活図がそこに広がって行つた。

嬰女あかこのお襖むつ袴つの乾ほしてある稲田の草庵の軒先からは、いつももうす紫に霞かんでいる筑波かばの山が見えた。窓からは、加波山かばさんの連峰が見え、吾国山わがくにさんの巒ひだが、澄んだ日には、あきらかに手にとるように見える。

裏方は、子を抱いて、よく陽の下に出ていた。そして、彼女のうたう子守唄は、すぐ庭先をながれている吹雪ふぶきヶ谷たにの溪水けいすいに乗って、ひろい沃野よくやへ聞えて行く――

稲田、福原をあわせて何千石という広茫こうぼうな青田をわたって来るすず風が、絶えず、この僧俗一如いちによの家庭を清新に洗っていた。

建保けんぼうの六年六月には、後に善鸞ぜんらんといった男の子が生れた。その翌年の八月には、有房ありふさが生れ、はやくも四十九歳になった親鸞は、京にのこしてある長男の範意をあわせると、ちょうど五人の父となつたわけである。

(いつの間に――)と、自分でも思うことがある。こんな子沢山になろうとは、自分でも予期しなかつたのである。

だが彼は、それらの子たちの生い育つてゆく間に、幾多の新しい学問と生きた教えを見出した。やはり妻をもつてよかつたと思つた。子を持ってありがたいと思つた。そして、その法恩を、弥陀みだに感謝せずにはいられなかつた。

「お父さま、お父さま。……アノおもしろい何日いつもの田植歌をうとうて」

七歳ななつになつた昌姫まさひめは、父の法衣ころものたもとに絡からんでよくこうせがむ。

裏方は、有房ありふさに乳をふくませながら、その他愛ない子と自然の父とを、幸福そうにながめていた。

「ホホホホ。昌姫は、お父様の田植歌が、ほんにお好きじゃの」

すると、男の子らしく、ひとりで悪戯いたづらしていた善鸞も、「お父さま、歌うて、はやく聞かせて」と、一緒になつて、父の肩へ取りついた。

「はははは、ははは……」と、親鸞は、ただもううれしいのだった。どうして、人間というものは、かくも楽しくあるものかと、今の幸福が勿体もったいないほど、ただ笑いが出る。

「離せ。……歌うてはやろうが、あの田植歌は、昌姫やそなたらのお守り歌ではない。……それ、野良にあって、ああして働いておりましようが。……あの百姓衆に聞か

せてやろうためじゃ」

「でも、お父様、お百姓たちは、みんな大人でしょ、子どもじゃないのに、どうしてお父様が歌をうたってあげるの」と、昌姫まさひめはもう、そんな疑いを父にたずねたという。

「なんの」と、親鸞は、この子にも、法の悦よろこびを知る芽が宿れと祈りながら答えた。

「お百姓たちも、この父にとつては、皆、そなたたちと変りないわしの子じゃ。……どれ、きょうも好い日和ひより、わしの可愛い子たちのために外へ出て、田植歌をうたおうか」親鸞が起ちかけると、

「お父さま、昌姫も、連れて行つてくだされ」

「わたしも」と、善鸞と昌姫は、両方から父のたもとにぶら下がった。

二

「そちたちも行くか」と、親鸞は、二人の子に手を引っぱられて、藁草履わらぞうりをはいた。裏方の朝姫も、

「どれ、お父さまのお出まし、お門かどまでお送りしましうかの」乳のみを抱いだいて、裏口へ出た。

親鸞は、草庵の裏へ出て、少し歩むと、井戸のそばに草履をぬいで、跣足はだしになった。そして、法衣ころものすそを高くからげると、毛のふかい脛すねが剥むき出されたので、子どもたちは、父のそうした姿をよろこんで、

「お父さまが、お百姓になった。お父さまが、田植しに

ござる」と、手をたたいた。親鸞は、僧房の窓を振向いて、

「生信房しょうしんぼうはいるか」するとすぐ、生信房は外へ出て、

「おお。……今日もお出かけなされますか」

「大地を素足で踏むと、一日も踏まずにはおられぬような気のするほど、よい心地じゃ。西仏にも、後から来よと告げてくだされ」

「はい」と、生信房が、あわてて支度にもどつてゆくと、その間にもう、親鸞は、檜ひのきの大きな笠をかむつて、すたすたと田の方へ出て行つた。

稲田数千石の田の面おもは、一眸ひとめのうちに入つてくる。植えられた田——まだ植えられない田が——縞しまになつて見えた。あなたこなたには、田植笠が行儀よく幾すじにもなつて並んでいるのである。その笠の列も、空を飛ぶ五位ごい鷲じゆの影も、田水に映つていた。

「お上人さまがいらっしゃったげな」田の者が、彼の姿を見つけて、すぐ伝え合つた。

「おお、ほんとに」

「あんなお姿で来る所を見ると、さっぱりわしらと見分けがつかんわ」

「都にあれば、尊いお身でいられるというのに、なんで、わしらと一緒になつて、この泥田の中へ、好んでお入りになるのじゃろ」

「お上人さまの功德でも、この秋は、ふっさりと穂が実みろうぞや」そういうことばの下から、はや晩の教えを思

い出して、念仏を口にする声もながれた。親鸞は、そこへ来て、

「みな衆」と、にこやかに呼びかけた。

「また、お邪魔に來ましたぞ、手伝いといえは、ていさいはよいがの、お百姓仕事には、親鸞はまだ未熟ゆえ、お邪魔にというたほうがほんとであろう」

「さあさあ、お上人さま、この列へ入って、植えて下され」

「苗をくだされ」親鸞は、深々と、泥田の中へ脛すねを入れていた。

そして、苗束なえたばを持って、四、五本ずつ田へ植え込んでゆきながら、

「だんだん巧みになる。——生信房の植えた苗より、わしのほうが行儀がよいようじゃ」などと戯たわむれた。

生信房は、負けない気になって、

「お師さま、そのかわりに、私はあなた様よりも、ずっと植え方が早うございます」

「はははは、でも秋になって、どちらが稲穂がよけいにつくじゃろか。……生信房も皆の衆も、ただこう苗の根を泥の中へ突っ込んでいるだけらしいが、親鸞のはそうでない、一念一植のころを持っていたしておる。それゆえに、秋になれば、わしの植えた苗は、暴風雨あらしにも倒れず、必ず、稲穂もよけいに実るであろう」と、いった。

三

「はての」生信房にも分らなかった。百姓たちには元より親鸞の今のことは、難かしい。

「お上人様、一念一植とは、いったいどういうことでございますか」

「されば……同じこうして田に苗を植えるにしても、ただばんやりと植えたり、仕事を厭いとうて嫌々植えたりしていては、苗も、確乎かつこと大地に根を張って、お陽ひさまの恵みをいっぱい吸うて育つはずがない。——わしが植えるには、ただ手を動かしているのみでなく、一つまみの苗の根を田へ下ろすごとに、有難ありがたや、この苗のために、わしらは今日飢うえもせず、日々幸福にちにちしあわせに生きている。——

しかのみならず、親鸞を養い、子を育てている。もっと大きくいえば、この日の本の国民くにたみを、この汗とこの苗の功德をもって養うているのじゃ。——思えばかたじけなや苗の恩、何とぞ、わが家族たち丈夫に肥え、この日の本の国民くにたみの糧かてやすらかにあるように、伸びて賜たまもれ、実って賜もれ、たのみ参らすぞ——と心に念じて、一つ植える」と親鸞は田を植えながら、泥によかれた脛すねを、蛭ひるに食われているのも気がつかずに、熱心に話した。

そして、ことばを切って、腰を少し持ち上げると、蛭ひるが脛すねにかみついていたのに気づいて、あわてて泥の手で蛭を取りのけた。

「あはははは」

「はははは」

「さすがに、お上人様は、やはり都人^{みやこびと}でござらっしゃる」と、並んでいる百姓たちは、皆田植笠の下から笑った。

「そのような長い文句を仰っしゃって、一念しては、一植^{ひとうえ}なさってござらっしゃるゆえ、なるほど、それでは田植がおそいはずじゃ——。百姓どもが、そのようなことをしていた日には、飯^{まめ}になりませぬわい」

「いやいや、皆の衆、それは聞きがちがえじゃ。——親鸞とても、一つまみの苗を植えるたびに、胸のうちで、そういうのじゃござらぬ、今申したのは、田の中へ足を入れる時に、心で念じ申すので、苗を植える手を動かすには、もっと短いことばでよいのじゃ」

「もっと短いことばというと、どんなことを念じまするか」

「それ、晩に、わしがいつも話しておるではないか。なむあみだぶつ。——ただそれだけ」

「なむあみだぶつと申せば、今、お上人様の仰っしゃったような長い文句を念じる代りになりまするか」

「なりますとも、なむあみだぶつの六音のうちには、もつと宏大無辺な感謝と真心と希望^{のぞみ}とがこもっておりますのじゃ」

「では易いことじゃ、わしらも、苗^{なえ}を植えながら申しまする」人々は、笠をそろえて、親鸞のいわゆる一念一植^{ぎょうねん}を行念^{ぎやうねん}した。仕事に対する不平不満、生活の懈怠^{けたい}や憂鬱も、すべてその声念のうちに溶かされて、百姓たちは、

心から働くよろこびに浸^{ひた}りきった。

その時、親鸞は、左に苗の束^{たば}を持ち、右の手にそれを少しずつ頒^わけ取っては、田水へ植え下ろしてゆきながら、心のどかに——静かなよい声で、農民のために彼が自分で作った田植歌を歌った。

五劫思惟^{ごこつしゆい}の苗^{なわ}しろに

兆載^{ちやうさい}永田^{えいでん}のしろとして

一念^{きん}歸命^{きみん}の苗^{なわ}を植え

念々^{しんしん}称^{しょう}名^{めい}の水^{みづ}をかけ

往生^{おうじやう}の秋^{あき}になりぬれば

実^{じつ}りを見るこそうれしけれ

四

親鸞の歌う楽しいげな節につり込まれて、百姓たちも、

一念^{きん}歸命^{きみん}の苗^{なわ}を植え

念々^{しんしん}称^{しょう}名^{めい}の水^{みづ}をかけ

往生^{おうじやう}の秋^{あき}になりぬれば

実^{じつ}りを見るこそうれしけれ

歌の通ってゆく後へ後へと、青い田ができて行くのだった。植えられた苗にはすぐ、生々と青いそよ風がうごいていた。

「ああ、自分も教えられるし、人にもこの教化^{きやうげ}は生かされてゆくだろう」

親鸞は、泥田に感謝した。この泥田こそ、どんな莊嚴な教殿にも七宝の伽藍^{がらん}にも勝る教化の道場であるぞと思

った。

——こういう生きた道場があるのに、前人有徳の聖者たちが、誰ひとりあって、土と汗の中で、こういう生きた教化に従事した例があるだろうか。

師法然の計を途上で聞いて、都へ上洛るのを断念して、野へ去った親鸞の本願は、今こそ届いた。

ありのままに——愚のままに——衆と共に——と願った彼の生活にも、今は焦躁もない。

百姓たちは、自分たちの群れの中に、上人を交えているのさえ大きな歓びだったのに、昨日までは、働くことは厭なことであり、辛いことだとばかり考えていたのに、汗というものに対して、

「これで安心して食えるばかりでなく、この汗のために、家族が肥え、世間が富む。働きもせずぐちをいつてるなんて馬鹿なことだ。百姓こそは、国の宝じゃ、百姓は国の大みたからだ。なるほど嘘じゃない。働いて働いて——念々称名していれば、この大安心があるものを……」

農の仕事は、いやしい仕事と、自分で自分の天職を卑下していたものが、彼らのそれは誇りとなってきた。幸福感と張合いにみちてきた。汗は希望となり光となり、一日のあいだ、仕事の嫌悪を、思い出す間がなかった。腰を伸ばして、ふと空を仰ぐと、いつの間にか、夕月があった。

「おお、もう手元が暗い、田から上がって、嬢や子と、晩飯じゃ。飯がすんだら、お上人様のところへお邪魔に寄って、なんぞまた、有難いお話しを聞きたいものよの」

そのうちに一人が、

「お上人様、お上人様」と、呼んだ。

「おい」と、上人は泥によれた足を、畦の流れで洗いながら、百姓ことばで答えた。

「なんじゃの、与茂作どの」

「あれごろうじませや、あちらの田圃の向こうから、裏方様の背におぶさった姫さまが、こちらを見て、可愛いお手々を振ってござらっしゃるではないか」

「ほ、ほ……ほんにの」親鸞も、微笑を送った。

「可愛や、お父さまの姿を見て、はよう田から上がりなされと呼んでござらっしゃるのじゃ、お父様も、手を振っておあげなされ」

「どうか、どうか」親鸞は、いわれるまま、手を振りまわした。

——念々称名の水をかけ
往生の秋になりぬれば

と、百姓たちは、農具を肩にかついで、三々伍々、唄って帰った。——そして、稻田の草庵の前を通る時には、どんな幼い者でも、必ず、
「——なむあみだぶつ」と、御堂の中の阿弥陀如来へ向って、外から礼をして通った。

筑波^{つくば}の山の影が、田水に落ちていた。親鸞は、泥足を洗って、

「アア、今日もよい一日を送らせていただいた」と、腰を伸ばした。草庵へ帰っても、

「愚禿^{ぐとく}の親鸞には、いとも覺つかない大任ですが、今日も御力^{みちから}をもって、よい教化の一日を暮らさせていただきました」弥陀如来の壇に灯^{ともし}を燈して、そう感謝しつつ、念仏していた。その灯影^{ほかげ}をのぞいて、

「お上人さま、有難うございました」

「お上人さま、おやすみなされませ」

帰ってゆく百姓たちも、声をかけ、礼拝して、散々^{ちりちり}に、宵暗^{よいやみ}の中へ消えて行く。と——そこへ。

蓮位^{れんい}という弟子の取次であった。

「柿岡在^{ざい}の者が、折入って、お願いの儀があると申して参りましたが……」というのである。

親鸞は振向いて、

「そちらの涼しい端へ、通してください」親鸞が、そこへ起つと間もなく、柿岡の庄屋と、二、三人の者が恐る恐る庭先へ廻ってきた。

「ずっと、お上がりなされ、なにを遠慮してござる」庄屋たちは、縁の端へうずくまって、

「いえもう、夜になりましたゆえに、ここでお願ひだけをいわせてもらいまする」

「この親鸞に、おそろいで、願ひとは何事な」

「先ごろ、世間のうわさでは、お上人様が、大沢の池に棲んでいる恐ろしい魔主^{まし}を、念仏の功力^{くりき}でお払いくだされたとかで——えらい噂でございます。わしのほうの柿岡でも、念仏でなければ極楽へは行かれぬと、皆がにわかに説教場をこしらえ、そこへぜひお上人様に時折来てもらって、有難い法話^{おほなし}を聞かせていただきたいものじやと申しまするので……いかがでござりましょうな、村の者一同のおねがいでございますが」と、こもごもに頼むのだった。親鸞は、すぐ承知して、

「参りましょう」と答えた。

あまりにかんたん承知してくれたので、使いにきた庄屋たちは、かえって意外な顔をしたが、親鸞は、それは当然自分のするおつとめであつて、頼まれるまでもなく、そういう気持を抱いている人々のいる村なら、どんな都合をくりあわせてもすすんで行くというので、庄屋たちは、

「なるほど、うわさに違^{たが}わぬ上人様じゃ」と、よろこんで日やその他の打合せをして、いそいそ帰った。

と、須弥壇^{しゆみだん}のある一室には、いつものように、上人を囲んで夜語りを聞こうとする百姓たちが、もう八、九名つめかけていたが、柿岡の者が帰ってゆくと、すぐ親鸞を囲んで、

「お上人様、なぜ柿岡へゆくことを、承知してやったのでございますか」

「なんとかいって、後からでも、お断りなされたほうが

ようございます」と、不安に満ちた眼をしていった。

親鸞は、顔を振って、

「なんの、ああいう頼みでは、千里の旅でも、断れぬ。

——あなた方はまた、なんでわしを止めなさるのか」

「でも……」と、口籠っていたが、顔を見あわせた後、
一人が膝をすすめて言った。

「お上人様のお命を狙っている者がござりますでな。……
……ご油断はなりませんぞ」

六

「ほう、わしの生命を」親鸞は、もの珍らしいことでも
聞くように、微笑をうかべて、

「それは何かの間違いでおさろう。この愚禿の頭など
狙ったとて、なんの手柄になるものぞ」

「いえ」と、その時まで、黙っていた蓮位が、今度は、
村の者たちに代って膝をすすめた。

「お師さま、その噂は、真らしゅうございます。私も疾
うから耳にしておりましたが、近ごろは、ご遠方へお出
ましもなく、また御氣色を損じること無益と考えて今
日まで黙っておりましたが……」百姓たちは、蓮位のこ
とばに裏書を得たので、口を揃えていい足した。

「——なんでも、那珂郡の塔の尾とやらに住んでいる山
伏じゃそうな。役の優婆塞の流れを汲む豊前の僧都と自
分から名乗って、あの辺では、信者も多く、偉う権式ぶ
っている修験者だそうでございます」

「ホウ……その修験者が、なんでまた、この親鸞の生命
をうかごうているのですか」

「私の聞きましたところでは——」と蓮位が述べた。

「お師さまに対して、宗門の恨みを抱いているのではな
いかと存じます。——もと、その修験者は、京都の聖護院
の御内にあって、学識も修行も相応にすぐれた先達のよ
うに承っております。——で、那珂領の国主佐竹末賢殿
が、はるばる領下の祈願所へ京都から召し呼ばれ、國中
の山伏の総司として崇め、末派十二坊の支配をさせて
いるのでございます」

「む……なるほどのう」

「そのため、当の修験者は、数年来、諸人の尊敬をあつ
め、飛ぶ鳥も落す勢いにござりましたが——折から、お
師様がこの稻田へお越し遊ばされ、ひたすら念仏弘通の
教化にお尽しなされましたので、それからというもの
一日ごとに、この地方一帯に、念仏者は殖えて行くばか
りですし、修験者の一派は、十二坊ともに、目に見えて
衰微して参りました」

「……」親鸞はかろく顎をひいて苦笑した。さてこ
そ、ここにも小人の嫉視かと、蠅のようなうるささを感
じるだけだった。

——が蓮位も百姓たちも、いつかは上人の耳に入れて、
その対策を講じようとしていたものらしく、
「衰微したと申しても、なにぶん、国主佐竹家の庇護も
あり、末派十二坊の勢力は、なかなか侮り難いもの
由にござります。——のみならず、極く、近ごろのうわ

さによれば、その豊前の僧都をはじめ、十二坊の優婆塞の輩が、かくては安からじと、この稲田の草庵を法敵と見なし、街道や諸郡へは、邪教を調伏せよと、愚民をそそのかし、一方、板敷山には、呪詛の壇をしつらえて、日々夜々、山伏の群れが、念仏滅亡、上人調伏の護摩を焚き、精と根のあらんかぎり、親鸞を呪殺せずばおかぬといっているそうでございます」村の人々も、蓮位のことばの後を継いで、

「何せい、怖ろしい修験者でございますな」

「役の小角の再来じゃと、人もいい、自分もいうておりますげな。一度、呪いの行にかかれれば、大地を打つ槌は外れようと、豊前の僧都が調伏は外れぬとは、前からいうておりますことでの」

「どうぞ、柿岡へお越しあそばすことは、お見あわせ下さいませ」

「その板敷山を越えて、どうして、柿岡へ無事で参れますものか」口々にいって案じる人たちへ、親鸞は、いちいちうなずいて謝しながら、こういった。

「——だが、皆の衆。あなた方が、田に苗を植える時、田に蛇がいるからといって、蛇のいる田を残して行かれるか。今日も話したとおり一念一植、その信業のまえには、何物があろうと恐れることはない。——ご心配なさるな、親鸞は一人で参るものではありません、御仏と二人づれじゃ、ははは……御仏と二人づれでおさるぞよ」

—

「おういつ」岸々と肩をいからしている声だった。すると、木魂のように、

「——おういつ」と、どこかで答える。

ここは板敷山の胸突坂である。

その坂道から、岩の上に向って小手をかざしている男があつた。

柿いろの笹袴に、黒い脛巾を穿いて、頭には兜巾を当て、足には八ツ目の草鞋をきびしく固めている。

いうまでもなく優婆塞の一人である、同じ姿の山伏が、そこから切ツ立てに聳えている岩の上にも一人突ツ立っていた。それは、笈を負い、手に半弓を掻い挟んで、じつと、麓の道をさつきから見すましているのだった。

「小川坊っ、まだ見えないか」下の者がいうと、

「まだ！」と、上の山伏は頭を振る。しばらくしてまた、

「おうウい」

「なんじゃ」

「甲賀坊は、どうしたか」

「あれか、甲賀坊は、万一の場合にと、筑波の野武士を狩り集めに行った。そう、人数はいるまいと思うが、水

も洩らさぬ手配はしておいたほうがいい。……やがてもうその甲賀坊も戻ってこようが」

「そうか、ではその見張りは、しかと頼むぞ」

「峠の者こそ、抜かるなどいってくれ」乾からびた笑い声をながして、下の者は、すたすたと胸突坂を登って行った。すると、不意に、

「常陸坊」と、高き松の樹の上から誰かが呼びとめる。

振り仰ぐと、その樹の上にも、一人の山伏が、蟬のように止まって物見をしていた。

「オオ、なんだ」

「まだ来ぬか——親鸞は」

「物見の役が、人にものを訊くのはおかしい。そこから、^{たにがわみち}溪川道はよく見えるはずだが」

「あまりいつまでも見えないので、もしやほかの裏道へでもかかりはせぬかと気をもんでいるのだ」

「なに、峠の上で、貝が鳴らぬうちは、懸念はない」常陸坊はいいすて、なおも先へ足を早めた。

と——峠の絶巔に、四方へ竹を立て、^{しめなわ}注連縄を結い、^{いしちにち}白木の壇を供えた^{そな}祈禱場が見えた。

先ごろから親鸞調伏の護摩を焚いて、「七日のあいだ、必死の行をしていた那珂の優婆塞院の総司——^{はりまのきみべんえん}播磨公弁円は、銀づくりの戒刀を横たえて、その筵に坐っていた。

京都の聖護院から国守の佐竹家に招請されて下ってきたという豊前の僧都というのは、この弁円であった。彼のまわりには、同じ装いの山伏が、ものものしく居

ながれていた。ざっとそこだけでも、十二、三名はいる。その他、あちらこちらに潜んでいる者をあわせたら、どれほどの人数が、この板敷山の樹や岩かげに息をひそめているものか分らない。

「オオ常陸坊か。——途中の物見や合図は、手ぬかりはあるまいな」

「もう、親鸞の師弟どもが、見えてもよい時刻ですが」「焦心するな、今日あいつが柿岡へ出向くことはたしかなのだ。……七日の^{きとう}祈禱は顯然と効があらわれたものといえる、前祝いに、一杯飲め」

二

素焼の酒瓶と、素焼の盃が、山伏たちの手から手へ移されていた。

「まず、物見の報らせがあるまで、英気を養っておくがいい」と、弁円も、幾杯か傾けて、朱泥のように顔を染めていたし、他の者も、毒がまわったように、酔いしれているのだった。

その酒の気が、言葉となつて、一人がいう。

「思えば、業の煮える奴は、あの親鸞。——越後の片田舎から流れてきて、わずか、八、九年のあいだに、優婆塞の聖壇十六坊の信徒を荒らし、われわれの行法の光をこの近国から奪い去ってしもうた」

「そればかりでない」と、いったのは、総司の弁円だった。

「この播磨公弁円ともあろう者が、親鸞ごとき墮落僧に、行力及ばぬものと噂され、この近国の地盤をかすめられては、何よりも、本山聖護院へ対して、この弁円の顔向けがならぬ。大きくは、日本国中の修験者の恥辱ともいえる。——今日こそは、孔雀明王も照覧あれ、この身が帯びる破邪の戒刀をもって、売僧親鸞の首根を打ち落し、生き血を壇にお供えする」

「一七日のあいだに、一万度の護摩を焚いて、祈りに祈り、呪いに呪った験もなく、なおこの上柿岡へ立ち越えて、愚婦愚男をたぶらかそうとする親鸞も、この板敷山の嶮路へかかるが最期」

「そうよ！ 摂政関白の聲になったことのあるのを鼻にかけて、白昼、都の大路をあるいた気で、この東国は歩かせぬ。——あの折は、この弁円も見のがし、また、次の河内の太子廟でも、むなく彼奴を取り逃がしたが、今日はそうはさせぬ。——あのころは、まだ、弁円一人の私怨であったが、今日となつては、私怨ではない。——修験道と念仏道との争いなのだ。彼の他力と、われの行力と、いずれが勝ち、いずれが敗るるか、分け目となった——やれ在家往生の、念仏なんのと、有難なみだに曇っている痴呆どもに、この板敷山の谷底で、鳥、狼の餌となつて食い荒らさるる親鸞の終りを見せてくれたなら、少しは、念仏の末路と、極楽往生の夢がやぶれて、よい薬になるだろう、これこそ真の衆生済度というものだ」

飽くなき罵詈雑言だった。舌の先からめらめらと紫いろの

毒焰が見えるような——。

折もあれ、遠く——
「やつ……法螺の音」皆、黙った。

麓のほうからかすかに貝の音がながれたのである。
「合図らしいぞ」杖をつかみ、戒刀のつかを握って、山伏たちは一斉にそこを立った。

——だが、それきりで、貝の音はすぐ止んだ。そこから見える松の上の物見は、手を振って、
（まだ、まだ）という意味を示していた。そこへ、稲田の禅房へ、朝から密偵に行っていた一人が、杖を横にかえて、喘ぎ喘ぎ駆け登ってきた。

三

「どうだった様子は」と、面々は急いで訊く。

「見届けてきた。——例によつて、親鸞は、今日も夜明け方に稲田の草庵を出、柿岡の説教に参つて、やがて帰る時刻はいつも陽のあるうちの夕刻ということ。稲田の弟子どもは、首を長くして、待っている様子であった」
「では否おうなく、笠間新治かけて、この剣の関所は通らねばならぬはずだな」

「陽あしの様子——追ッつけ間もあるまい、そろそろ、手わけにかかろうか」

「待て待て、柿岡の説教場へも、こっちの密偵が行っている、何か報らせてくるだろう」と、弁円は、刻一刻と、血相に殺気をたたえてきて、

「甲賀坊、矢頃の所へ逆茂木は」

「抜かりはございませぬ。——しかも逆茂木打った道へは、八重十文字に素縄を張りめぐらし、その上に、墜し穿まで仕掛けてありますれば」

「ウム、入念だな。多年の鬱懷もこの一瞬に晴らすか。

そのせいであの雲、血のように筑波の空をかけて赤い——。オオ、筑波といえ、あれへ来るのは柿岡へやった野武士たちらしい」待ちかまえている所へ、毛皮の胴着に、野刀を佩いた荒くれ男が四、五人、息をせいて、

「弁円殿、ここにか」

「待ちかねていた。柿岡は」

「説教が終つて、もう立った。念のため、途中まで見えがくれに尾行ながら来たのだ。今しも、この先の溪間を、野馬に乗って参るのが親鸞」

「なに、もう下の溪道まで来たと？……して、親鸞の身を守る弟子どもは、五人か、十人か」

「一人」

「えっ、一人？」

「生信房というて、元、京都から中国九州にまでわたつて、悪名をとどろかせた天城四郎が成れの果——今では頭をまるめている弟子坊主が、親鸞の手綱を取つて、毎日、ここを越えて柿岡まで通うている」

「あつ……四郎がか」と、播磨公弁円は、遠い過去の彼を思い、また、最後に四郎とわかれた加茂川堤の時の宿怨を胸に新たにした。

親鸞といい——その四郎の生信房といい——共に弁円

の心頭をあおる毒炎の中の仇敵である。その怨みのふかい人間が、共に、連れ立って来るというのも、何か、今日という鬱懷をはらす日の特異な宿命のように考えられる。

「ウム、そうか」弁円は太くうめいて、もう体を武者ぶるいが走つてならないように、手に持っていた半弓を、ぶん、ぶん、と二、三遍弦鳴りを試みながら、

「一の手は、甲賀坊。——二の手、三の手、みな抜かな」と、下知した。

鹿を狩るように、一同はわらわらと駆け散つて、おのの部署へ身をひそめた。

筑波の野武士たちは、三の手になって、野刀を閃めかせながら、岩蔭や、草むらへ、影をかくした。

——かくて親鸞の来るのを、今か今かと板敷山の草も木もみな息をひそめたかのように、しんとして待ち構えていた。

四

「——すわっ」弁円は、肋骨の下に、どっと血を搏たせた。

彼は、第一の柵、第二の柵、第三の柵とこの峠の通路をかためて潜伏している人々とはべつに、小高い所の岩に乗つて、背よりも高い熊笹をかぶっていた。

そして、鉄弦のような半弓に、毒矢をつがえ、鏃下がりに、峠道を狙いすましているのである。

（今日こそ）心のうちに、孔雀明王くじやくみょうおうの加護を念じて

がさつ……と今、音がしたのである。

曲がり道になつてゐる熊笹の崖と林の間に。

だが、それは、親鸞の来た跢音あしおとではなかった。

虹のように尾を曳いて、笹むらから雉子きじが飛び立って行つたのであつた。

ざ、ざ、ざ……とどこかで土の音が静寂しじまを破る。

（今度こそは）弓をしぼつてゐると、その音は後ろの谷間へいつまでも続いている。自然の土崩れなのであつた。

今か、今か——とそうして心気を緊はりつめてゐるうちに、弁円は、疲れてきた。疲れを感じると、なんとなく

焦躁しょうそうしてきて、根気よく鳴りをしづめてゐる他の者ほかへ、何か、大声で呶鳴なうめいつてみたい気がしたが、もし親鸞にさ

とられてはと、なおも、じつと、疼うずきを抑えつけていた。からかうように、山鳩が、ばたばたと無遠慮につばさを鳴らして、谷へ舞つて行つた。——空しい水音が、ぐ

わうとその谷底を揺ゆすり流れてゐる。すると、「おのれッ」声が揚つた。一喝いっかつ、山に卻こたをさせ、二の

手の柵さくから躍り出した者がある。甲賀坊だった、脱兎のように、一の手のほうへ、戒刀を引っさげて駈け出して行つた。

「来たッ」

「逃がすなッ」先駆した甲賀坊につり込まれて、二の手の者五、六人、皆穂すすきが流れるように太刀をひっさげ、

「——どこだッ」すさまじい旋風つむじをつくつて、われがちに飛ぶ。

「どこだッ」同じような言葉を返して、一の手のものも、どつと、一斉に起ち上がった。そして、走つてきた二の手の者とぶつかつて、混乱しながら、

「どこだどこだ」わめき合つた。

弁円はこなたからその様子を見て、さては、矢にも及ばなかつたかと半弓を投げすてて、そこへ駈けつけた。

だが、怪けしからぬことには、彼がそこまで来る間にも、まだ一の手の者、二の手の者、すべてが一致を欠いて、林の中へ入つたり、崖を登つてみたり、谷間を探したり、ただうろついているに過ぎないのである。

「たわけ者めが、なにを猶予しているのだ。——親鸞は、親鸞は」

「さがして居申す」

「ばかつ。逃がしたのか」

「いや」

「ではどうしたのだ。先に、起ち上がったのは誰だ」

「甲賀坊でござる」

「甲賀坊、親鸞を見たのか」

「見ました」

五

「——見たというても、その親鸞の姿がどこにも見えぬのは何としたものだ」

「いや、たしかに」

「ではどこに——」

「あの組板岩の辺りから———そういえば沢辺のほうへ降りたのかも知れぬ」

弁円と甲賀坊の押し問答を聞きながら、その親鸞の影を、きよろきよろ眼で探しているほかの者たちは、

「不審な」と、つぶやきあつて、

「幻ではないか」迷路の辻に立ち迷っているような気がして、何か自身の錯覚に、背すじを寒いものに襲われた。

——すると、その錯覚感と静寂の不気味な空気をやぶつて、どこかで、馬のいななきが高く聞えた。

明らかに、それは馬のいななきであつたし、また、小石を弾くような蹄の音と共に、

「しいッ……しい」と呶鳴る馬方の濁す声が、はるか谷の下の加茂部へ行く道の辺でひびいた。

そこは、また、石岡へ出る道路でもある。当然、そこへも万一を慮かつて、逆茂木を仕掛けておいたはずであるのに——

「しまった！」と、樹の上から谷街道のほうを見下ろして、一人があわてて叫んだ。

「ばかな奴、あれは石岡へ炭を積んで出る荷駄馬だ。落し穿へ落ちた馬を、大汗掻いて引き出しておるわ。こっちで仕掛けた逆茂木を滅茶滅茶にしてしまいおった」

「忌々しい馬子め」

「血祭を与えろ」

ピュッ——と誰かの手から弦唸りを切つて毒矢が飛ん

だ。けたたましい馬の悲鳴が、ふたたび谷間に飢して、腹に矢を突き立てた馬は溪流の中へ飛びこんで、溪水を真っ赤にした。

馬子は驚いた様子で、盲走りに、向側の絶壁へかじりついた。見ていると、そこにも杣道があるらしく、馬子の姿は、たちまち見えなくなった。弁円は、齒がみをし

て、
「察するところ親鸞と生信房のふたりは、どこか、俺たちの気づかぬ間道を廻つたと見えるぞ。それっ、手わけをして、谷の下、峰の上、八方の細道をさがして引っ捕えろ」

獵人のように、山伏たちは、熊笹や木の中へ飛びこんだ。陽はいつか山の端にかくれて、冷たい気が白々と降りてくる。衣の袖は湿っぽく濡れ、はなればなれになった人数は、おのおの道に迷つて、おおういと仲間を呼んでも、飢のほかの答えはしなかった。

「弁円殿つ。——播磨公殿つ」

声では返事がないので、そうしきりに呼んでいた一人の山伏は、岩の上から法螺貝をふいた。——大きく二度、三度、四度と。

（何事やある）

（さては、親鸞を）と山伏は方々から再び峠の一カ所に群れ集まつた。その中には、眉間に青白い焦躁を刻んでいる弁円の顔もあった。

「なんだ、相模坊」

「残念です」

「どうしたと」

「ただ今、麓^{ふもと}からの報^しらせです。親鸞と生信房のふたりは、もう疾^とくに、稻田の庵室へ立ち帰って、弟子どもや妻子と和^{なご}やかに笑いさざめいているとのこと。……いったいここや谷道の幾重もの柵^{さく}は、何に備えていたのでござるか」

「ゲッ、親鸞は、もう稻田へ帰っていると……そ、それは真^{まこと}か」弁円は、信じられないような顔をしていった。

六

疑っても疑いようなない事実が、麓から弁円の前へ、次々に注進された。

どうして、水も漏らさぬこの備えを潜^{くぐ}り抜けたか、この板敷山の嶮^{けん}を無難に通って行ったか？

弁円を初め、山伏たちには、不審でならなかったが、親鸞がすでに稻田の草庵に帰り着いているという事実はまだ動かせない。

「やはり、あの僧には、ふしぎな靈覚があるのではないか」

「こつちで、法力をもつてすれば、親鸞も法力をもつて覺^{さと}り、こつちで呪殺^{じゆさつ}の縄を張れば、彼も破邪^{じゆ}の呪^{じゆ}を行って、吾々の眼をくらましたに違いない」山伏たちは、今日の失敗を招いたことから、かえって親鸞に対する恐怖と畏敬を高めてしまった。やはり彼は非凡人であったと心から考え出して、そういう有徳^{うとく}の僧に毒矢をつがえた身の

ほどが恐ろしくなってしまう。平常は冷笑してた天譴^{てんけん}とかいうことも、真剣に思い出されて、初めの元気を喪失^{そうしつ}してしまったばかりでなく、寒々と峠^{さき}の笹^{ささ}むらを渡る夕風の中に、ぶるぶるっと心の底からおじけに似た戦慄^{しんりつ}を抱^{いだ}いた。

「——出し抜かれた」独りこう呻^ういて、やり場のない憤怒に、眉をあげているのは弁円であった。

「かくまで、吾々を愚弄^{ぐろう}して、なにおめおめと十六房の主権、播磨公弁円といわれて人に面^{おもて}をあわされよう。

——よしつ、この上は、稻田の売僧^{まいす}小屋を踏み破って、親鸞の首捻^ねじ切^きつてくれる。——見ておれっ」

ガラリと、手の弓を投げ捨てて一散に麓^{ふもと}へ向って駈^{かけ}て行った。

すでに、怯^{おじけ}気に襲^{おそ}われ、最初の氣勢を失ってしまった他の山伏たちは、呆^あっ氣^けにとられて、魔王弁円のすさまじい後ろ姿を、ただ見送^{みおく}っている。

板敷山から三十余丁を、弁円は、一氣に駈^{かけ}けてしまった。火焰のような息をきって、彼方^{かなた}に見えた灯影へ向って近づいて行った。

「——ここだな」

稻田の庵室と見るや否、弁円は、柴の折戸を土足で蹴^{ふみ}って、案内もなく、つかつかと庭の闇へ駈^{かけ}け込んだ。そして、仁王立ちとなつて、

「親鸞はおるかっ」と、呶^{なう}鳴^{めい}った。

こよいは村の者も寄っていなかった、いやもう夜も深いので、それらの者も帰り、禅房の弟子たちも室^{へや}に眠り、

親鸞の妻子も夢の中に入っているのかも知れない。

寂として——庵室のうちは静かなのである——ただ短檠の一穂の灯が、その部簾のうちに夜風に揺れていた。

満顔を汗に濡らし、声は百雷の墜つるように弁円は、全身を怒気に満ちた瘤にして再び呶鳴った。

「親鸞はおらぬかつ、愚禿はどこにおるか。すでにここに立ち帰っておろうが。常陸一国の修験の司、播磨公弁円が、破戒無慙の念仏売僧に、金剛杖の灌頂をさずけに参った。われこそは正しき仏陀の使者、破邪顕正の菩薩、孔雀明王がお旨をうけて参った者。——出てこずば、踏みこんで、愚禿の素首を打ち落すがよいか。——会おう、親鸞つ、出てきませいっ」

横たえている三尺の戒刀に反りを打たせ、大魔の吼えるように、ひっそりした庵室の中の一つ灯へ向っていった。

七

「おう」と、垂れこめた簾を徹して、その時、明らかに親鸞の答えがひびいた。次に——

「誰じゃ」それも親鸞の声であった。

静かに、簾の内の灯のあたりからその人が、起ってくる気配がした。弁円は、

「うぬっ、ここへ出てうせたが最後——」

八ツ目のわらんじをじりじりと縁近くへ踏みすすめ、

手をかけている戒刀の柄は、もう血ぶるいをするかのようにはガタガタとおのき鳴る。

——サラと簾を片手で上へかかげて、親鸞はそこから半身を見せた、そして、朱泥で描いた魔神のような弁円の顔をじろと眺め、その眦に、ニコリと長い笑み皺を刻むと、

「オオ」と、なんのためらいもなく——なつかしい人にも接するようにいって——つかつかと竹縁の端まで踏み出してきたのであった。

「——誰かと思うたら」手をさし伸ばさなればかりな親鸞の様子なのである。弁円は、春風のような彼の姿と——その手の先から、思わず一步退いて、

（そんな欺瞞に）と、呼吸のうちに叱咤し、（そんな甘手にかかるおれではない）と、満身の殺気を眸にあつめて、炬のように睨まえたが、なんとではなく、体の筋を抜かれたように、眸にも、ここへ来るまでの憎悪や兇暴な勢いを断ちきれなくなった。

「……………」

「……………」親鸞は、それなりものをいわないし、弁円も黙ってしまった。——ただ呼吸をしているのみで、じつと、縁の上と下で、対し合っているのだった。——火と水のように。

燃えるだけのものを、弁円は今、五臓から四肢全体に燃やしきっていた。毛の一すじまで、針のごとくさせて汗をふき、内面の毒炎を、湯気のように立てていた。

「ウウム」爪を怒らせて迫った猛虎が、はたと、何か

にためらって、その飛躍を遮られていているように、弁円は、いたずらに自分の威嚇に持ち疲れてきた。

この一瞬、弁円の眼に映っている親鸞は、まったく、常々彼が思い憎んでいた親鸞ではなかったのである。彼の憎悪は、とたんに銚を鈍らせてしまったのである。

板敷山の呪壇に、一七日のあいだ、護摩を焚き、呪念をこらして、眼に描きだしていた怨敵親鸞は、さながら自分を呪う悪鬼とばかり見えていたが——今、眼のまえにある親鸞を仰げば、三十二相円満な如菩薩の笑顔そのままではないか。

弁円は、踏みしめている踵の裏から、だんだんに力の抜けてゆく自分をどうしようもなかった。

彼も、仏者である、聖護院の御内に僧籍のある仏子ではない。菩薩の顔と、邪人の顔と、見わけのつかない人間ではない。——なんで親鸞は前からこんなよい顔を備えていたろうか。このほほ笑みが一体人間のものだろうか。彼の殺意は、だんだんに冷えて行った。

「……ああ……」思わずうめいたものである。——京都の巷で見たころの親鸞の顔には、もっと険しいものがあった、勝ち気があった、世に負けまいとする鋭い眼があった、物いえば烈々と人を圧する唇あり、起てば、群小を睥睨する威風があった。

けれど今のすがたには、そんな烈しい強いものは微塵もない。これは、弁円にして初めて思い出される記憶であった。——今の親鸞の和やかな顔は、十八公磨と呼ばれていたころの幼顔にそっくりである。四十を超えて

からの親鸞は、いつの間にか幼少の顔のほうへ近くなっていたものと見える。

八

「——ああっ、おれは過っていた」ぐわらりと、大地に地ひびきさせて、弁円は坐っていた。両手で顔を蔽うてさげんだ。

「……不覚不覚、一生の不覚だった。何十年のあいだ、おん身を敵と見ていたのは、この弁円の心に棲んでいた魔のしわざ。……ああ返らぬ年月を仇に送った、四十年を空しく迷路にさまよってきた」

憤怒の眼に血ばしっていたものは、潸然と下る涙に変わった。

慈悲温光のなごやかな眸を、じっとそれへ向けていた親鸞は、

「どうなされた弁円どの、おん身が佐竹侯に迎えられ、修験の司としてこの地方へ下られていると聞き、いかは折を得て、ゆるりと話したいと思うていたが、つい機縁ものう打ち過ぎてあった。……だが、ようぞござった、幼顔はお互いに幾歳になつても忘れぬもの、なつかしや……ご無事で在したの」そういう彼の言葉には、少しも策とか上手とかいうものは認められなかった。心からいう言葉だった。弁円のあれほどな意気込みを挫いたものもその親鸞の素裸な態度にほかならない。

弁円は、愚に返った老人のように——また、稚に返っ

た成人のように——両手で顔をかくして泣き入りながら、

「お覚えがあつてか——その昔は成田兵衛の遺子——
寿童丸といわれた者。アア、消え入りたい心地がする。」

——そもそもおん身とおれとは、なんの宿縁か、まだ上人が日野の里で、十八公磨と仰せられていたところからの学びの友でありながら——すでに、あのころから、おれは、おん身が嫌いだった、虫が好かなかった、おん身の学才が小癪にさわっていた、そして事ごとに、おん身を苦しめることのみ考えていた」

「そうだ……もうあれは四十年のむかしになる、しかし、
瞼をふさげばまた、きのうのような心地もする」

「三ツ子のたましいは百までもというが、その後、おれは父を亡い、町にさまよい、叡山を追われ、家はなく、ただ知るのは、世間の人の冷たさのみで……おれの心はひなぐれるばかりだった。——そのころすでにおん身は、範宴少納言といわれ、北嶺の麒麟児の聞えたかく、若くして、聖光院の門跡となつてゆくのを、ねじけ者のおれは、いよいよ、陰に陽に、おん身を呪詛しはじめた」

「……ウム」親鸞はうなずいてみせ、

「わしは、なんとも思うてはいない、むしろおん身のために、励まされたことがあるうとも」
「——いや、その陰は、むしろおれのほうが受けている。それを今、はっきりと気がついた。常におん身を呪詛しつつも常におん身を飯の敵と見、おん身の進んでゆく道を、自分も負けまいという目標にして励んでいた。今思

えば、おん身が他力門の真の聖者であつたればこそ、ねじけ者、怠け者のこの弁円も、とにかく孜々として鈍才に鞭打ち、聖護院の御内から少しは頭角を出して、播磨公弁円といわれるまでになったのだ。……その余のことすべて、今となつては、詫言もない、五十になつて、弁円は初めて、おん身を知り、自分の愚鈍を知り申した。
——迷いの夢がさめたとは、このことでござろう。ゆるされい。親鸞どの、このとおり手をつかえ……弁円が初めて、おん身の足もとにこう手をつかえて、詫び入るのだ。……どうか、今日までの大罪をゆるしてくれ」

大地へ顔を伏せて、弁円は嗚咽していった。

九

親鸞は慰めるに困つたように、縁を下りて、なお慟哭してやまない弁円を、いたわつた。

「なんの……なにを嘆かれることがあろう。——弁円どの、おん身の今のことは、あまりにこの親鸞を高く見過ぎている。親鸞とても、もう四十九になるが、今もつて、真俗二諦のあいだに、多分な迷いを抱いて、一心の帰教する所は、決して定まったとは申されぬ。ともすれば、愛慾の広海に溺れ、ともすればまた、名利の大山に踏み迷っている凡夫なのじゃ、聖者などとは、滅相もない過賞、幼なじみのおん身にいわれては、この愚禿こそ、穴にも入りたい」

「親鸞どの」弁円は、しかと、その人の手をにぎりしめ

て、

「幼少から、これほどのおん身を、友として持ちながら、なぜ弁円は、早くからおん身のその真実と徳に触れることができなかったであろうか。今さらながら口惜しい。

……のみならず、このよい年ごろをしてまで、この稲田の草庵の栄えを嫉み、自己の行法や道門の衰えを、ただおん身あるがためと憎み、板敷山に待ち伏せて、お生命をちぢめんものと、つい今日も、毒矢を研いでいたのであった。……怖ろしい、思えば、怖ろしい自分の心であった」

「だが——親鸞を害めなさろうとしたその心が、真の宿縁となつて、ここにおん身が真実を吐き、わしが真実の手をのぶることとなつたと思えば、その害心に、わしは掌をあわせる。まことをいえば、親鸞は、いつかおん身がこうして訪ねてくる日のあることを信じていた」

「えっ、それまで、この弁円の心が、わかつておいでであつたか」

「何か、通ずるものがあつたとみえる。わしの心には、おん身の心が映つて、ぼんやりそんな気持がしていた。

——その日が来たと思えばよろこばしい」

「おれの果報は、まだ尽きなかった。——そういつて下さるからには、弁円の願いも聞き届けて下さろう。思えば得難い生を同じ時にうけ、得難い明師におれはめぐり会つたのだ。——親鸞どの」と、弁円は大地に膝を改めて、両手をついた。

「今日から、この弁円を、どうか御弟子の端になりと、

加えてくだされまいか。——いやと仰せあつても、おれはすがりつく、しがみつく。……それよりほかに、弁円の生きる道は見あたらない。お願い申しあげる、お聞き下されい」真実の声だった。

親鸞は、かろく、顔を横に振つてみせ、

「いやいや、おことばが違ふ。——若年のころは知らず、近ごろに至つて、親鸞がひそかに思うに、この愚禿が、人に何を教えてか、弟子を持つなどといわれるより、それゆえに親鸞は一人の弟子も持たぬ者と思ひおります。身のそばにいる人々は、みな如来の御弟子、本願の同行」

「オオ」飛び退つて、

「そのおことば……そのおことばこそ……」

弁円は、掌を合せて、いつまでも身を伏していたが、やがて、兜巾や戒刀を身から取り除けて、

「この場を去らず」と、頑固な意志を示して誓つた。

——だが、親鸞は、その手をすくい取つて、

「まあ、部屋へござれ。四方の話、越し方の訪れ、語り明かそうほどのにの——」

そして奥へ向つて、親鸞は、ただの百姓家の翁のよう

に、無造作に呶鳴つた。
「これよ、誰ぞ出てこんか、わしの親しい幼友だちが見えてござる。ここへ洗足を持ってきてくだされ」

そこはつい昨日まで、ぼうぼうと芦の生えていた沼だった。所々の水田も、地味が悪くて、稲は痩せていた。人の数より、はるかに、五位鷺のほうが多かった。灰色の害鳥の群れが、わが物顔に、田を占め、木の実を盗んで、人間は鷺以下の者とししか見えないほど、文化の光がなかったのである。

下野国芳賀郡の大内の庄とよぶ土地だった、その柳島に、一粒の念仏の胚子がこぼれたのは、二、三年前だった。

事はその胚子の結果である。

このころになって、常陸とか下総、上総あたりの念仏の諸弟子が踵をついで、この柳島の地方へ入ってきた、遠くは、陸奥の果てからさえ、聞き伝えた門徒が来て、旅装をここで解いている。

小屋が建った。人々は、そこへかたまつて、炊事の煙を立て初めた。

土工や石工が集まってくる。大規模な土木が興ろうとするものらしい。たちまち、附近の山が削り取られて、赤土の肌が南向きにだんだんに拡がってゆく。

蟻が物を運ぶように、山を切り崩した土は、柳島の芦

の沼地を埋めて行った。原始人の踏んだままにひとしかった茅原や青い沼水が、またたくうちに新しい土で盛り上げられて行った。その地盤の上に十二間四面の伽藍の礎が、さながら地軸のように置かれた、堂塔内陣の墨縄は張りめぐらされ、やがて檜の太柱と、巨大な棟木と、荘重な梁も組まれた。

「人の力は偉いものだのう……いや仏のお力だ。——ついきのうまで、ここが五位鷺の巢であった古沼とは、もう思うてみても、考えられぬ」大内国時はつぶやいた。普請場の新しい大地に床几をすえ、側にいる建立奉行の藤木権之助忠安へ話しかけたのである。

国時は、当国の下野城の城主だった。いつか親鸞の徳に帰依して、そこへ参室していたが、稻田の上人の庵室は、あまりに手狭くもあり、裏方や子たちの生活にも不便が多いので、自分の領地の宮村へ、上人を迎えたほどの彼であった。

けれど大内国時は、それではまだ満足しなかった。近国はおろか、陸奥にまで、すでに上人の徳はあまねく行きたつていているし、念仏宗に対する人々の信仰は、日に月に旺になってきている。そして、その敬礼の中心を求めてやまない勢いにもなっていた。

国時はそこで、自分の手によって、東国念仏門第一の伽藍の建立を発願したのである。——もちろん、親鸞もそれをゆるすところとなつて。

「権之助」

「は」

「この分では、案外、棟上げもまたたくうちだの。すくなくも、竣工しゅんこうには二、三年はかかるうというていたが」

「御意にございます」

「そちの精励せいれきじゃ」

「滅相めさうもない」と、建立奉行ふたぎようの藤木権之助は、恐れるように手を振った。

「畏れながら、かように工事の早く運んだのは、殿のご威光もさることながら、ひとえに上人の徳が人をうなぐすものと思われます。——御覧ごらんじませ、あちらの作事場さくじばを——あのように幼い女子供から、髪かみの白い老人までが、賃銀も求めずに、しかも嬉々ききとして、石を運び、材木の綱を曳ひいております。なお、この近郷の者ばかりでなく、伽藍がらん建立の噂がつつたわると、招かずして、遠国から、無数の信徒が集まってきて、お手伝いをさせて賜われと、これも、慾得なく働いているのでございます。——これには私も、心のうちで、実は驚き入っておりまする」

二

「そうだ……」城主の大内国時はうなずいて、

「わしの国が今、かりに戦いに亡ほろんで、二度ふたたびここに下野城を築こうとしても、武力や財力では、この真心を集めることはできない」

「この工事を奉行いたしてから、私も、心から、念仏に帰依いたしました」

「権之助、おまえも、そう考えてきたか」

「あの真心のもとに打つ手斧てしやうの音——あの信念そのものの姿で働いている法師たちや門徒の者を見ては」

「そちは、そちの胸にも、たましいの伽藍を建てたのだ」

「殿にも近いうちに、ご帰依の上人から、得度をおうけ遊ばせられる由をうかがいました」

「ウム、家督は舍弟国行くにゆきに譲ると決めた。で——この柳島の造営は、わしが武家の生涯をすてて、僧門に入る手はじめの御奉公として、上人へ寄進まいせられたのじゃ」

「や……」権之助は、城主の前につかえていた手を大地から離して、起ち上りながら、

「おうわさをするうちに、あれへ、上人がお見えなされました」

「なるほど……」と、国時も、床几しょうぎを離れて、彼方かなたへ笑顔を送りながら、

「やはり、お楽しみであると見えて、普請場ふしんばへは、度々お運びだの」

「ある時は、大工どもの中にまじって、物をおさげなされたり、左官どもへ、土の手伝いをなされたり、あまりお気軽くなされるので、初めは、職人どももおそれ入っておりましたが、近ごろでは馴れて、上人のおすがたを見ると、普請場は華やいで、老人や子供までが綱曳つなひき唄の声をいちだんと張り上げまする」

「もう五十四というお年ながら、なんとお元気で若うあらせられる……。や、わしの顔にお気づきなされた、笑いながら、こちらへお足を向けられてくる」

国時を初め、家来の人々が、そこを立ち開いていると、

親鸞は、朽葉ふるごころもの古法衣ふるころもに、そこらで付けた鈔屑かんとくずをそのまま、いよいよこの東国の土と人間とを、その姿のうちに渾然こんぜんと一つのものにして無造作に歩いてきた。

「おお、おそろいだの」国時は、礼儀をして、

「上人にも、度々」

「うむ……なんとこのう、来てみたくなるでの」と、後ろをふり向き、

「証信しょうしん」と、呼んだ。

「はい」と、従ついてきた弟子のひとりが、上人の顔をのぞいた。

「……喉のどがかわいた。あの湯のみ場から、白湯さゆを一碗ひとわんもろうてきてくれ」

「お待ちください、すぐ持って参ります」証信は、湯のみ小屋へ向って、駈けて行った。

その後ろ姿を見て、権之助が、

「上人。——今あれへ行ったお弟子は、三、四年前まで、この地方の修験者の司つかさどとして怖ろしい勢力を持っていた播磨公弁円はりまのきみべんえんではございませぬか」

「そうだ、あの弁円じゃよ」

「変りましたなあ」権之助がつぶやくと、城主の国時も、「あれが、元の弁円か」と、彼方かなたの湯呑み小屋から、土瓶どびんの湯と盆をさげてくる証信のすがたを眺めて、感じ入っていた。

三

そこで白湯さゆを一碗のむと、親鸞は、もう八分どおりまで竣工できかけている伽藍がらんの足場の下まで行って、

「見事な棟木むなぎ、結構な欄干、これはちと贅沢ぜいたくじゃの」と、つぶやいたり、

「来るたびに、眼にみえて、作事が進んでいる。これ皆、有縁うえんの方々の尊い汗、贅沢とはいわれまい、信仰の集積、ただ、この伽藍がらんが親鸞ひとりの隠居所となつては、いかい贅沢じゃ、そうならぬように、親鸞はこの棟木を負うた気で住まねばならぬ」そんなことも、独り言のようにいった。

証信房は、側から、

「先ごろ、京都みやこへのぼられた真仏しんぶつ御房が、勅額をいただいて参られるころには、伽藍の普請ふしんも、悉皆しつがい、成就じょうじゆいたしましょう」

「うム……」うなずいて、

「そう、そう」親鸞は、城主の国時をかえりみ、急に思出したようにいった。

「——この親鸞も、近々に、いちど信州路まで出向かねばならんのう。国時どの、しばらく、宮村の庵いおりを、留守にいたしますぞ」

「ホ……それはまた俄にわかかな、急に、ご巡じゆん錫しやくでも思ひ立たれて」

「いやなに、この伽藍に安置して、末世まで、衆生しゆじやうを

導かせたもう本尊仏を請い受けに」

「あ、では善光寺へ」

「お迎えに行つて参る」

「お供の方々は」

「本尊仏のお迎え、親鸞ひとりでもなるまい。これにおける証信房、鹿島かしまの順信房、そのほか二、三名は召し連れましょう」

話の半ばだった。

大工棟梁どうりょうの広瀬大膳だいぜんと、その部下の者が、血まみれになった一人の男を抱え、ばらばらと駈けてきて、

「権之助殿、これにか」と、いった。

奉行ぶぎようの藤木権之助が、その様子を見て、なにか仕事の上の急用かと、

「才オ、何事」

「また、例の——」と、大膳や部下たちは、なにか喋舌しゃべりかけたが、その丸太足場の蔭に、城主や上人のすがたがちらと見えたので、

「あ……殿も、上人もこれに」急に、はばかって、大地へひざまずいてしまった。

国時は、ずかずかとそこへ来て、

「なんじゃ、何事が起つたのか」

「は……」口籠くろうつて——

「お奉行までご相談に参りましたので、殿のお耳みみを煩わづらわすほどの儀ではごさいませぬ」と、恐縮する。

「何か、大工どもの、賃銀のもめごとでもあるのか」

「さようなことではごさいませぬ」

権之助が側から、

「大膳どの、殿のお耳へ入ってしまったこと、お隠し申しては、かえつてよろしゅうない、なんなりと、申し上げられい」

「……実は、これへ連れて参つた屋根葺ふの職人」

「才オ、怪我けがをしているな」

「鋭い鑿のみで、片腕を傷つけられ、それを交わそうとして、只今、あれなる足場から転び落ちたのでございます」

「職人どもの喧嘩けんかか」

「は……」

「下手人は何者じゃ。……不埒ふちな、下手人は誰だ」と国時は激怒していった。

四

大工棟梁どうりょうの広瀬大膳だいぜんは、自分の不取締りを恥じ入るように、平伏して、

「されば——この屋根葺ふは、至つて、おとなしい人間でござりますが、なにか、仕事の上で、ちよつと口返しをしたというのが、相手の癪かんにさわつたらしく、いきなり乱暴をしかけられ、足場から傷てを負つて落ちたものにござります」

「しからば、いよいよもつて、不埒ふちな奴は、その相手の者、下手人はどうした」

「引つ捕えて、ただ今、あちらに縛いしめておきましたが、その処分を、いかがいたしたものと……ただ今、お奉

行まで、ご相談に参ったわけでござります」

「む」と、国時は、峻^{しゅん} 厳^{げん}な面持ちをして――

「その相手も、屋根^{ふき}か」

「大工組の職人で、河和田^{かわわだ}の平次郎という者です」すると、奉行の藤木権之助が、

「あっ、またあの平次めが、そんな乱暴をしおツてか」と、口走った。

国時は、苦りきって、

「しからば、こういうことは、一度ならず、幾度^{いくたび}も、重ねておる奴じゃの」

「は……この先の河和田^{かわわだ}に住んでおる若い職人で、平常^{いづも}、酒ばかり飲んで、喧嘩ばかり仕かけ、村でも仲間でも、手におえぬ厄介者とされておる奴でござります」

「たわけが」と、国時は、棟梁へも、奉行へも、叱りつけるようにいった。

「さような身持ちのわるい無頼な人間と分り切っていないがら、なぜ、伽藍^{がらん}建立^{こんりゅう}の清^{しやうじやう} 浄^{じやう}なお作事に使っておるか、そのほうどもの人事の不行届きでもあるぞ」

「は……その儀は、重々私どもの責任と申うて恐れ入っております。……がしかしその河和田の平次郎という職人の性質は、今も申し上げた通り、酒乱、無頼、凶暴、何一つ取得のないやくざ者にはござりまするが、ただひとつ、鑿^の持たせては、不思議な腕を持っていて、天稟^{てんびん}と申しましょうか、格天井^{ごうてんじやう}の組みとか、欄間^{らんま}細工^{さいいく}などの仕事になると、平次郎でなければほかの大工にはできないというので、仲間の者も、つい、憎みながらそ

れには一目^{いちもく}おいておりますので」

「だまれ」国時は、叱咤^しして、

「たとえ、建立の仕事の上で、どのように必要な職人であらうと、畏れ多くも、勅額を奉じ、衆生のたましいの庭ともなろうこの浄地に、しかも、まだ普請中から、血をもつて汚^{けが}すようなさような無頼の徒を、なぜ、使用しているか。ゆるしておるか。――他の職人どもへの見せしめにも相成らん、きつと、厳罰を申しつけい」

「恐れいました」

「すぐにせい。――そうじゃ、この地域の内では刑罰はならん、あちらの草原へ曳き出して、首を刎^はねい」

「はっ」

「猶予するなっ」

「かしこまりました」城主の命である、奉行の藤木権之助も、大工棟梁の大膳も、色を失って、蒼惶^{そうこう}と立ちかけた。すると、

「あ……お待ちなされ」静かな親鸞のことばであった。人々のあいだへ歩み寄って、

「もいちど、今のお話を、聞かせてもらいたいが――」と、その辺の材木の端へ腰かけた。

五

大膳と権之助のふたりから、平次郎の常々の行状やきょうの出来事を、改めて、もいちど審^つさに話すと、親鸞はいちいちうなずいて聞いていたが、

「どうじゃろ」と、親鸞は、領主の大内国時へ謀った。

「その平次郎とやらいう者、なんとか、このたびだけ、免じてやるわけにはなりませんか」国時は、意外な顔して、

「せっかくながら、今も家来どもの怠慢を、叱っておったほどの者でござる。上人のご広徳をもつてしても、救われがたい無頼の徒、お聞きながしてくだされい」

「だがの……」親鸞は、未練のように、

「招いても、縁のない衆生さえあるに、この伽藍の造営に、柱の穴一つ穿った者でも、わしの眼から見ると、まことに浅からぬ仏縁のある者」

「悪を懲らし、罰を明らかにせねば国守の法も立ちませぬ」

「ごもっともでござる」親鸞は、国時のことばを大きく肯定しながら、すぐにまた、

「しかし、国法のところは、人を罰するをもって、最高なりとはせぬものでござる、罰法は元、それによって、兇悪の徒も真の道に生き直るための罰でなければなりません。——この御堂が、真の生きた、伽藍であるならば、此堂をめぐって、造営に働く人たちも、いつか必ず仏縁のご庇護によって、精神のうちに、弥陀の慈光をうけねばならぬはずと存じます。……宥しておやりなされ、親鸞に免じて、お聞き届け願わしゅうござる」

「……」国時は、考えこんだまま、即答を与えなかった。親鸞は、足を運びかけて、

「では、大内殿。旅の支度もあるで、わしは、今日はこ

れで戻ります」

「お戻りか」国時は、顔を上げて、五、六歩親鸞のあとに尾いて送って行きながら、

「ただ今のおことばによって、今日の罪人は、宥してつかわすことにいたします」といった。親鸞は、自分のことのように、

「かたじけない」と、足を止めて、国時へ向って頭を下げた。

親鸞が戻って行くと、間もなく、城主の国時も館へ帰って行った。

大工棟梁の広瀬大膳と、奉行の藤木権之助は、「命冥加な奴めが」と、捕えておいた河和田の平次郎の側へ来て、懇々と、説諭を加え、

「上人の有難いお旨を、忘れるでないぞ」と、いい聞かせた上、縄を解いて、放してやった。

「へい」平次郎は、神妙そうに、頭を下げて、逃げるように、丸太足場の上へ登って行った。——だが、役人たちの眼から離れると、彼はすぐいつもの兇悪なひねくれ者に返っていた。

「ちえっ、ふざけやがって。誰も生命を助けてくれとはいやあしねえ、おれがいなくっちゃ造営の仕事に困るかから助けて置くんだろう、それを恩着せがましくいやがって笑わせるな」

その日は、ろくに仕事もしなかった。彼を使っている大工頭も、彼にだけは、叱言もいえないで、見ぬ振りをしてるのである。

楊柳かわやなぎのみどりを煙らして、春の陽ひはうすずきかけていた。

広い造営の庭には、傍目わきめもふらずに、多くの者が汗にまみれていた。その雑工の中で働いている者は、たいがい賃銀を求めずに、自分たちの家事や畑仕事の暇を見ては、半刻はんときでもと奉仕の労働に來ている人々だった。

一念きみよう帰命の

苗をうえ

念々しやうみやう称名しやうみやうの水をかけ

雑行ぞうぎやう、雑修ぞうしゆの

草をとり――

親鸞が稲田で作った田植の歌はこの汗の中でも唄われていた。二丈あまりの材木が、その人々の粒りゅうりゅう々とながす汗に引き摺られて、作事場のほうへ曳かれて行くのだった。

巨材こぐちの木口には、かすがいを打って、銚かすがいには、綱がくくり付けられてある。その綱に、三十人余りの老人や女わらべ童がつかまって、

「えいやあ、えいやあ」と、蟻ありのように曳いては、

一念きみよう帰命の

苗をうえ――

汗は、その人たちの顔に、光りがやいていた。

単に、自分たちの、飢えをふさぐためや、酒をのむた

めに流す安価な労働では得られない、何かしら大きな幸福感につつまれて、彼らは、声を張りあげていた。

すると、一人若い女房が、かいがいしく、着物の裾すそを端折はしよって、

「もし、皆さま。どうか私にも、その綱の端など、つかまらせて下さいまし」といいながら駈け寄ってきた。皆は、振向いて、

「やあ、河和田のお吉きちさんか。――また、見つかると思いぞ、止したがいいいぜ」と、遮さへぎった。

年老としよりたちも、皆いった。

「ほんに、お前さんの良い心もちは不慙ふびんじゃが、見つかる、わしらまで、後で怖ろしい目に会わされるの」「そうじゃ、やめなされ、やめなされ」お吉は、拝むように、そういつて拒こばむ人ひとたちへ、なお縋すがった。

「いいえ、今日はもう、洗濯物もすみました。夕餉ゆうけの支度から、うちのお良人ひとのお酒まで買って置いて、なにからなまでに済まして、ほんに用のない体でございます。昼寝などしては勿体ないし……どうぞ後生でございますから、私にも、ご造営のお手つだいなどということ

はできませんが、せめて、その綱の端でも持たせて下さいまし……。この通り、拝みまする、たのみまする」涙さえ浮かめていう。その気持にうごかされて、

「では、なるべく早う、家へ帰っておらっしゃれ」と、人々はいたわりながら、彼女を仲間に入れてまた、材木を曳ひいていた。

「ありがとうございます」と、お吉は、心のそこからう

れしそうだった。そして、奉仕の綱にすがって、懸命に、働いていると、その青白く面癩おもやつれた頬に、若い娘のよいうな紅潮がさしてきて、世帯や痩せの苦勞も何もかも、その間は、忘れていえるように見えた。

七

「この阿女あまっ」不意だった。ぐわんと、鼓膜こまくがやぶれるほど、お吉の横顔を撲りつけて呶鳴なうった者がある。

二十七、八の壮さかんな筋肉を持っている男だった。職人烏帽子えぼしを後ろへ落し、仕事着の片肌を脱いでいて、汗の光っている毛穴には、鋸のこぎり屑くずがたかっていた。お吉の亭主の平次郎なのである。

「あっ——皆さん」お吉は、隼はやぶさに見込まれた小鳥のよう、よろめきながら、綱曳つなひききの仲間の者のかげにかくれ、

「謝ッて下さいっ、皆さん、良人うちのひとへ」と、もう泣き声だった。

「うぬ」と、平次郎は、女房のそばへ寄ってきた。

「性しょうなしめが」と、平次郎の手は、すばやくお吉の襟えりがみをつかんでいた。そして、大地を引きずり廻しながら、

「いっててもいっててもこの阿女あまは、碌ろくでもねえことをしやがって、おれのいいつけを、なんだと思っていやがる」足を上げて、蹴飛ばした。

「すみません、もう決して、ここへは参りません」

「ここばかりじゃねえ、おれの念仏嫌いを承知のくせに、亭主のいやがることを、うぬは、故意にするのだっ。さっ、きょうはもう勘弁できねえからそう思え」腹巻から鑿のみを抜いて、右の手にひらめかせた。

「あれっ、助けてっ——」お吉は逃げ廻った。人々も、うろたえて、

「あぶないっ、平次さん、そ、そんな乱暴なことをしないで」

「何をいやがる」平次郎は、眼をつりあげて、自分を遮さへぎる者を睨ねめまわし、

「おれの女房を、おれが折檻せつかんするのだ、自体、てめえ達が、ばかなお手本を出すからよくねえ」そういつて、

「やいっ」とまた、お吉の方へ、怖ろしい形相ぎようそうを向け直してわめくのだった。

「あれほど、いっても懲こらしても、また家を留守にしやがって、こんな所へ来てよくも粹狂さいきやうな真似をしてやがるな。……はア分ぶんった。この普請場ふしんばにや、和介わすけの野郎が仕事にきているので、てめえは、信心にことよせて、和介の顔を見に来やがるのだらう。……いや、そうだ、そうに違えねえ」

「ま……なにをお前さん」

「いいや、てめえが、和介の奴に、妙な素振すぶりを見せていることは、おらあとうに知っているんだ。——さもなくて、べら棒べらぼうめ、その日暮しの貧乏人が、駄賃も出ねえタダ働きをなんでする」

「……………」

「なぜその閑に、亭主の晩の酒代の足しにでもなるように、魚でも漁るとか、縄でも縛うとか、他人の仕事の縫物でもするとか、小費いの多足になることを考えねえのだ——この浮気者め」鑿を振りかざしたので、お吉は必死にもがいて、平次郎を突きとばした。

「こいつ」一度、よろめいて、腰をつきかけた平次郎は、起ち上がって、女房の帯際を後ろからつかんだ。

八

蹴る、撲る、そして鑿をふりかざして、お吉を追う。

元よりこれは脅しにすぎないと人々は思っていたが、兇暴になると手のつけられない平次郎のことだし、何か、お吉に対して嫉妬らしいものを含んでもいる様子なので、辺りの者は、どうなることかと、色を失っていた。「おいッ、兄哥、何をばかな真似をするのだ、あぶねえじゃねえか」普請場の方で、この態を見て飛んできた、仲間の大工の一人だった。うしろから平次郎に組みついて、

「離しねえ」と、鑿を持っていき腕をねじあげた。

平次郎は、暴れ狂って、

「誰だっ、邪魔するな」

「誰でもねえ、和介だよ」

「なに、和介だと」

「オオ、おめえは何か、おれとお吉さんと、変なことでもあるように邪推しているってえことだが、それじゃ、

お吉さんがかわいそうだ」

「離せっ、畜生」

「いや、そいつがわからねえうちは、離さねえ。なるほど、おれはお吉さんの相談相手にはなってるが、決して色恋の沙汰じゃねえ、おめえというれっきとした亭主のある女——なんでおれがそんなばかなまねをするものか。よしまた、おれにそんな気持があったって、貞女のお吉さんが、おめえを裏切るようなことは、死んだってあるはずはねえ。お吉さんの貞操ただしことや、亭主に尽しなざる行いは、この近郷で、誰だって、感心なものだといっていねえ衆はねえんだぜ。それをおめえが、事ごとに、邪険にしたり辛く当るので、お吉さんは、泣き瘦せている。そこへ持ってきて、毎日の稼ぎ以上に、おめえは大酒を食らっているじゃねえか。その酒代をこしらえるのも、人知れぬ苦勞をしているお吉さんだ。そんなことから、何かとおれの家へも相談にくるので、おれも不憫と思って、小費いの都合をつけてやったりしているのに、それを、おかしい方へ気を廻して、おれとお吉さんが、妙な仲でもあるようにいわれちゃ、おれも、男が立たねえ」

「……痛えっ……おい和介。……痛えじゃねえか、手を離しやがれ」

「わかったかい、今の話は」

「わ、わかったよ」

「じゃあ、お吉さんの今日のこともおれに免じて、勘弁してくるだろうな」

「女房のことあ、亭主の一存だ。他人のさしずはいらざる世話じゃねえか」

「それあ、兄^{あにき}哥^{あにき}のいうとおりだ。おめえとは、元からの兄弟^{でし}子^{でし}、その弟^{でし}弟子^{でし}が、小生意気な真似をして済まねえが、これも、どうかして、お吉さんとおめえと、仲よく暮してもらいてえためにやったこと、腹を立てないで宥^{ゆる}しておくんなさい。……それに、ここはただの普請^{ふしん}場^ばとちがって、御城主様の発願^{ほつがん}による大事な御造営^{ごぞうえい}の場所——しかも勅額^{はつがく}までいただくことになっている建^{こん}立^{りゅう}だ、そんな場所へ、万一、不浄な血でもながすようなことがあったら……」同じ大工仲間ではあったが、弟^{でし}弟子^{でし}の和介^{わかい}は氣だてのやさしい男だった。涙さえ浮かめて、諄^{じゆん}々^{じゆん}と説いて聞かせたので、さすが兇暴な平次郎も、やや落着いて、

「離せよ、やいっ。……もう手荒なことはしねえから離せっていうのに」

「じゃあ、堪忍してくれるか」

「腹の立つ阿女^{あま}だが、今日のところは、助けてやら。早く家へ帰って、酒の支度でもしやがれ」と、いいすてて、ぶいと、平次郎は普請場の蔭へ走ってしまった。

九

「さ、お吉さん……はやく家へもどったがいい」和介も、他の者も、ほっとしながら、彼女をいたわって、着物の土など払ってやった。

「お上人様も、いつか仰っしゃった。念仏の功力^{くりき}は、寺へ来ていうからよいというものじゃない、剃髮^{ていはつ}して僧侶^{そうりょ}になったから、念仏の功力^{くりき}が増すわけでもない。在家の衆も、心さえ、そこにあれば、どこで申そうと、仏の御加護はあるものじゃと……。のう、お吉さん、ご亭主が念仏ぎらいなら、ご亭主の眼や耳にふれない限りでいうたがよい。……さ、また晩に、文句をつけられないように、早く帰って、酒など買っておかつしやれ」

「ご心配をかけました」お吉は、悄々^{しおしお}と、そこから立ち去った。

河和田の家は、遠かった。田の畦^{あぜ}や、森の蔭を、俯向^{うつむ}いて——自分の一足一足を見つめながら歩いてゆく。

「ああ、どうして、私はこう……」つい身の不運が、涙をさそってくる、歩む足もとへ、涙がこぼれて、道の草も枯れるかと思う。

——嫁にきたころは、良人の平次郎も、あんな気荒な人ではなかった。信心こそ持たない人だったが職人として腕はあるし、氣だてもよい良人だった。

それが、二人の仲にできた一つぶだねの男の子が、やっと、笑ったり這いだしたりする可愛い年ごろに、ふと病みついてしまった。——その時またちようと、村へ来ていた修験者が、病氣ならわしにまかせろ、きつと癒^{なほ}してやるというので、加持祈禱^{かじきとう}に、夫婦も共に、精を打ちこんで、病児の恢復を祈っていたところ、病氣は日ましに悪くなって、とうとう死んでしまった。

それからである——平次郎の氣が急に変ってしまった

のは。

（神も、仏も、あるものか。あいつらあ、神とか仏とか、ありもしねえ嘘ッぱちをいい触らして、飯のたねに、食い歩く山師だ）

仏壇も、神棚も、平次郎は川へ運んで行って流してしまった。

それからというものは、急に、酒は飲むし、飲めば酒乱になる。そして、仕事はろくにせず、すこし余裕があれば、博奕、女狂い、喧嘩、手がつけれない人間になった。

お吉は、良人の気持を、無理もないと思って、初めは素直にしていたが、元より貧しい職人の世帯である。折にふれて何かいうと、平次郎は、ふた言めには、

（出て行けっ）であつた。彼女の体には、生傷がたえなかつた。けれど、

（今に——今に、眼がさめる日も……）と、お吉は、貞節を守りとおしてきた。なんと怒られても、疑われても、彼女は、心のうちに、じっと涙をのんできた。

それも久しい年月である。いちど毒をあおつた良人は、このごろは、心までその毒にまわされたように、直るところか、いよいよ荒んでゆくばかりに見える。

他人の家庭を見ると、お吉はうらやましかつた。誰も皆、生々と、楽しげに働いている、また、その人たちの生活を見ていると、働く暇には皆、近くの宮村にある上人の庵室へ通つて、一体になつて、念仏をとなえていることがわかつた。

ふと、彼女の真つ暗な胸へも——その念仏の一声がながれ込んで、微かなる光のように思い初めた。

けれど、良人は、神仏を仇敵のように呪っている人である。お吉は、平次郎の眼をぬすんでは、宮村の上人の庵室へ行つて——それも庵室の中へは入らないで——垣の外へ佇んで中から洩れる法話の声や念仏に耳をすましていたのであつた。

一

秋の収穫も終っていた。

「——お上人様がお歸りになった。信州からおもどりになったげな」稲田から宮村の辺りへかけて、その日、人々はこぞって出迎えに出ていた。

親鸞が、自身信州へ赴いて乞い請けてきた一光三尊の善光寺によらい如来の御分身を出迎えたのである。

歸依の大檀那おおだんなたる大内国くにとき時も城を出て親鸞たちの一行をむかえた。小栗の城主尚家ひさいえもきていた。相馬、笠間などの大小名をはじめその家臣、郷士ごうし、町人、それを観る雑多な民衆——なにしろおびただしい人出である。この地方の文化が興ってから始めての盛観だという老人もある。

一光三尊の御分身は、伽藍がらんの建築が完成するまで、先ず宮村の庵室へ、仮に安置することになった。

夜になると、田や畑の者が、それを礼拝したさと、この法話を聞こうとして、狭い庵室に入りきれないほど押しかけた。毎夜のように、草庵は、明々あかあかとかがやく灯と、そうした人々の膝でいっぱい埋められた。

——秋も暮れてくる。野や田や、木々の葉は、蕭々しょうしょうと冬枯れを告げてくるが、宮村の草庵の灯は、いよいよ、

常世とこよの光明にみちていた。

年が明け、春が来る。さながらここは法の万華まんげの咲きみだれた浄土曼陀羅じょうどまんだらであった。

「ありがとうござりまする」

「また、あした参りまする」

「どなた様も、御免なされませ」

「どれ、わしらも——」

その日の集まりは、たそがれに終って、昼間の法筵むしろであつたので、多くは野に出て働かない町方の女房だの、老人だの、病人や子どもたちであつた。

みな、よろこびにあふれて、庵室からぞろぞろもどつてゆくのである。——今、法話はなしを終って、ほっと、ほの紅い顔して白湯さゆをのんでいる親鸞の前へ一人一人出て、こう挨拶をしながら——

その中に、一人の女が、壁のすみにうつ向いていた。すべての人が、立つてから出ようとするもののようにつつましやかに、まだ坐っていた。

もう庵室のうちは暗かった。そこらには、灯りがきている。夜風に明滅する明りの影に、その女の削けずったように痩せている顔のおくれ毛が、淋しげに、うごいていた。

「……あ」女は、気がついたように、眸を上げた。もうまわりに人はいなかった。急に恥かしくなったように、女は、上人の前へおそるおそる両手をついて、

「ありがとうございました」そして、一光三尊仏の壇へ向つて、白い手をあわせ、

「なむあみだぶつ」何遍なんべんかとなえて立ちかけた。

親鸞は、さっきから、その女を見ていたのである。

——いやその夜に限らなかった。もう幾度となく法筵のある時には、いつでも、壁の隅のほうに小さくなって、熱心に自分の話に聞き入っているこの女のあることを知っていた。——ふと姿の見えない時は、親鸞も心のすみで、

「きょうはどうしたか」と、軽く案じられるほど、いつでも注意していた女性なのである。

「——お内儀、ちょっと、お待ちなされ」と、親鸞は今までことばをかけたことのないその女に向って、初めてその日、こう声をかけた。

二

思いがけなく、上人にこう呼びかけられると、女は、冥加におののいて、

「は、はい……」と、綿のようにやわらかに、そのまま、ひれ伏した。

「同行衆は、もはや皆、おもどりなされた。おさしかえなくば、もすこし、話して行かれぬか」

「もったいないお言葉でございまする」

「そう、堅うならずともよろしい。親鸞は、誰とも親しい仲じゃ、お寄りなされ、隔てのう、もそっと、こちらへお寄りなされ」

「はい」

「お内儀。——お帰りは遠いのでおざるか」

「河和田の者でござります」

「それでは近い……。して、主どののは？」

「平次郎と申しまして、柳島の御造営に働いている大工でございます。わたくしは、平次郎の女房で、吉といいます」

「ほ……平次郎……。あの酒ずきでよう喧嘩をする男のお内儀か」

「さようでございまする」お吉は、顔をあからめて、聞き取れないような小さい声になった。

「ようお上人様にも、良人のひとの噂をお聞きでございましょうが、おそろしい一徹者のうえに、大の念仏がい。そのため、御庵室へ詣でたいと思っても、有難いお教えを聞きたいと願っても、良人のひとの手前、いつも思うにまかせませぬ」

「ム……」親鸞はうなずいて、

「さだめし、良人の氣に入るには、なかなか苦労がお在そうのう」

「い、いいえ……」お吉は、こんなやさしい言葉を初めて人の口から聞いた。村の人々も、自分を知ってくれる者は皆、なぐさめてはくれるが、親鸞の短いことばのうちには、何か胸を衝くような慈悲大愛の温かい息がこもっていた。張りつめていた胸の氷が溶けるように、彼女はつい、ほろほろと涙をこぼしてしまった。

「お内儀」

「はい」

「お身ひとり、苦患の底に苦しんでいると思われるな

よ。お身の貞節、お身の苦しみ、みな御仏も御覧ぜられている、この親鸞も、よう見ております。……なんぞ思ひあまることなとあるなら、ちょうどよい折じゃ、わしに話してみるがよい」

「……有難うございます」お吉は、畳へひれ伏したまま合掌して、

「この身に負わされた約束事と申しておりますから」

「それではならぬ、約束事、宿命と諦め、ただそのみで抑えていては容易に、心は安らぐまい、かよい女の身、もっと心持を楽におもちなされ、この親鸞とて、そなたと変りのない凡夫じゃ、愚人じゃ、ただ何事も御仏と二人づれなればこそ、こうして、気づよくもおられます。……その御仏の力をお借りなされたがよい、なんぞ、胸に思ひあまることがあれば、縋って、申されたほうがよいのです」

「お上人様……思ひあまることというのは、信心をすれば、良人の心に逆らい、信心を離れては、今の私は、生きてゐるそもないのでございます。この女の道と、人の道とを、一体、どうしたらよいのでございましょうか、それをお教えなされて下さいませ」

三

「そうか、よう解った」親鸞はうなずいて――

「良人の心に添おうと思えば弥陀に離れ、弥陀のおむねにすがろうとすれば良人の意志に反く。――そういわれ

るのじゃの」

「はい……」お吉は、頬に涙をまろばせながら、膝を、前へにじり寄せた。

「お上人様」

「おう」

「それはもう言葉にもいいような辛いことや恐ろしいことが、朝にも夜にも、この身を責め折檻するのでござります。……おねがいのでござります、お上人さま、どうぞ私を、尼にして、お弟子の末の末にでも、おつかいなされて下されませ」

「尼に？」眼をみはって、泣きおののく黒髪を見つめながら、

「まで。……尼になられたらどうなると思うておざるか」「この黒髪さえ断りましたならば、あの恐ろしい良人も、眼をさまして、心を持ち直してくれるかもわかりません。

――また、私も永い年月、どんな辛抱しても、うちの良人が真人間になってくれるよう、そして、世間のよい夫婦のよう、行く末に、今日の辛さや悲しみも、語り草にしてと思うて参りましたが……もうこのごろはその望みも持てなくなりました。身には生傷が絶えませんが、心には、暗いものがとれません、明けても暮れても眼を泣き腫らしているようでは、うちの良人の気持も荒ぶばかりでございます。所詮、二人が一つ軒下に添っているのは、この世ながらの地獄を作っているようなもの、あの人のためにも、疲れた、私の身にも、尼になるのが、いちばんよい道だと存じます。どうぞ、お慈悲と思うて、お剃刀

をいただかせてくださいませ」

「うむ、一応はご無理のないおたのみじゃが、しかしの、外の姿は尼と変えても、心のすがたをなんで変える」

「え……」

「黒髪を剃^おろしただけでは、心のすがたまで変えたとはいわれぬ。真実、今いうたようなお内儀の心ならば、まず黒髪はいつでもよい、なぜ、その心から先に変えようとはなさらぬか」

「お教えくださいまし、それが分れば、私は、お上人さまの仰^{おほ}っしゃるとおりに行います」

「よいいわれた。真^{まこと}、御^み仏^{ほとけ}に仕えようというご発^{はつ}心^{しん}ならば、いつも親鸞が申すとおり、朝^{ちよう}念^{ねん}暮^ぼ念^{ねん}、ただ念仏を忘れぬことです。念仏を申すことならば、血の池の底、針の山のいただきからでも、いえることじゃ。声を出していうて悪ければ、口のうちでいう一声の念仏は、寺入りして千万度いう唱名よりは尊いのでおざるぞよ。その日その日の生活の苦労のうちに申してこそ、その念仏は生ける人の声として、御仏のお耳へもきくと届く。――疑いたもうなのお内儀。雑^{ぞく}業^{ごう}俗^{しよく}生^{なり}の生活^{わい}の忙^{いそ}しきうちから申す念仏とて、きつと弥陀^{だいた}は受けたもうにぞ。……そうじゃ、親鸞が今、よい物を進ぜよう」そういつて、

「蓮位、蓮位」と、呼んだ。

弟子僧に、硯^{すずり}や筆や紙を運ぶようにいつつけて、親鸞は、六文字の名号を書き、それをお吉に与えて、

「これからは、ここへもお出でにならぬがよい。御仏は今かりに、平次郎の身にやどって、お身の信心を試して

おられる。良人の平次郎を御仏と申うて仕えたがよい」と、諭^{さと}した。

「お吉っ、お吉っ」

朱^{しゅ}を捺^なすったような顔に、青すじを膨^{ふく}らませて、河和田の平次郎は、こよいも、仕事袴^{ばかま}も脱^とらずに、帰るとすぐ膳の酒に向ってまた例のわめきだった。

「やいつ、いねえのか」

暮れたばかりのほの暗い所では、お吉が、何か野菜でも刻んでいるらしく、細かい庖丁^{ばうちよう}の音がしていた。

「はい」答えると、

「だって今、おまえさんが、漬物を持ってこいとおいいだから、漬物を出しているんじゃないやありませんか」

「べら棒め、漬物を出したって、酒のほうがもう空っぽだ。酒はあるか」

「ま、もうおしまいですか」

「買ってこいっ。……何かそこの物を持って行って、市で叩き売ってしまうなり、借りるなりして、酒を持っ
てこい」

「そんな算段をしなくても、もツと召し上がるなら、お酒はまだたんと買ってございますから、安心しておあがりなさいませ」

「ふうむ……このごろはいやにいつでも断^きれたことがね

えな。いったい、その酒の金はどうしているのだ」

「ですから私が、あなたの寝た後も、昼のうちも、こうして一生懸命に、機^{はた}を織ったり、櫛^{くし}を削^{けず}ったり、賃仕事をしているではございませぬか」

「普請^{ふしん}場の綱ツ引きには出ず、説教を聞きにゆく様子はなし、齒の浮くような念仏もふツつり止めて、このごろは気味のわるいように嫌に素直になりやがった。……やツぱり女って奴は、時々、半殺しの目に会わせてくれるのが薬だとみえる」

「さ、暖めて参りました、お酌^{しやく}をいたしましょう」

「ばかつ」一口飲んで、

「何だ、まだぬるいじゃねえか。酒飲みの亭主を持ったら、酒の爛^{かん}ぐらいはおぼえておけ」

「すみません、暖め直してきますから」

「いいいい。後のやつを、もつと熱くしておくんだぜ。それに、肴^{さかな}といやあ、毎晩、芋^{いも}か蓮根だ。あしたは弓

を持って、裏山の小鳥でも狽^とって焼いておけよ」

「いつも、そう思いながら、つい織仕事の暇も惜しいものですから」

「云い訳は止せ、酒がまずくならあ。気のきかねえ阿女^{あま}を嬢^{かかあ}に持つと、こうも世話が焼けるものかなあ」

「さ、こちらのが爛^つきました。熱いのをお酌^つぎいたしまし
ょう」

「熱ツ。……どじめツ、こぼさねえように酌^つげねえのか」

「あ、かんにんして下さい」

「う、うーい」平次郎は、おくびをしながら、

「ここんとか、久しくこの腕ツぷしを振り廻さねえから、癩の虫が退屈しやがって、なんだか、こううずうずしてゐるのだぞ」

「あまり過ぎると、体にこたえますし、あしたの仕事もありますから、もう横になってお寝みなさいませ」

「この横着者め、おれを寝かせて、ためえも早く樂をしてえのだらう。……ま、まだいくらも飲んじやいねえ、もう少し爛けてこい」

二

良人の酔いは、もう充分の度を超えているし、あしたの仕事に出る体のためにも気づかわれたので、

「お酒はもうございませぬ、それよりも、もうお寝みなさいませ」臥床へ夜具をしきかけると、その顔をかすめて、いきなり一枚の小皿が飛んできた。小皿は、幸いに彼女の顔へはあたらなかったが、うしろの壁へぶつかって、烈しい音と共に、粉になつて碎けた。

「この嘘つきめ」と、平次郎は険しい顔を向けてわめいた。

お吉は、何を怒られたのかちよつとわからなかった。

その、呆つ氣にとられたような顔がまた、酒乱の良人の氣持をさらに焦だてたものらしく、

「たつた今、いくらでも酒は買ってあるから安心して飲めと吐かしやがって、もう無えとは、なんのいい草だ」突っ立ってくると、何を云いわけする間もなかった。も

つとも、こんな場合、云いわけをすることは、よけいに良人の兇暴癪を募らせるものであることもお吉はよく知っている。

「畜生っ」黒髪をつかんで、平次郎は妻の体を前へぐつと引いた。そして、左右に振り廻したと思うと、烈しく、平手で妻の横顔をなぐった。

「……あつ、か、かんにんして下さい」

お吉は、それだけしかいわなかった。平次郎は、睨めすえて、

「すべためッ」自身も息がきれたのであろう、肩で大きく息を吐いて、しばらく、拳をかためていたが、酔いにたえかねたものとみえ、彼女の敷きかけている蒲団のうえに斃れると、そのまま、野獸のように、大きな鼻をかいて眠ってしまった。

「……もし、枕を、枕を」お吉は、酒顛童子のようになつて寝入った良人を、怖々とのぞいて、そつと、その顔を木枕へのせてやり、足の上へ夜の具をかけて、ほんと自分に回った。

それから、勝手元の片づけものを済まし、それが片づく、と、土間の機織台の前に腰をかけた。

松の根を焚いて、お吉は、それから夜のふけるまで、あしたの良人の酒代を稼ぐのであった。自分の体に生傷をこしらえたり、苛責の毒舌をあびせる酒を、寝ずに働いて、求めなければならなかった。

——だが、そうした不合理な苦役も、しんしんと夜が更けて、涙もわすれ、愚痴もわすれ、心に念仏を置いて、

一念に箴^{わさ}をうごかしていると、その箴の音は、いつか自分のかなしみを慰める音楽のように、一つの諧調を持って、苦役も苦役とは思わなくなってしまう。

「そうだ……こんな時に」彼女は、そつと奥をのぞいた。良人の肩^{いびき}を聞きすまして、彼女は、肌着の奥から何か大事そうに取り出した。——それはいつか稲田の親鸞上人が、彼女のために書いてくれた六文字の名号^{みょうごう}であった。お吉はそれを、良人の眼をしのんで、小さな軸^{じく}に仕立て、自分の心のまもりとして常に肌に秘めていた。

ふと、生きる力を失った時、ただ独りで泣きじゃくりたいような時——お吉は名号を取り出して、それに掌をあわせる。すると、親鸞の慈悲にみちあふれた姿に会う心地がしてくる。親鸞の手にみちびかれて、無碍^{むげ}光如来の膝近くへ連れてゆかれる心地がしてくる……。

今も、彼女はそれを思い出したのである。すると、かたと、奥の暗い中で物音がした。ハツと心の騒ぐほうが先で、お吉は、あわてて名号を巻きもせず懐中^{ふとこ}へかくした。

「何を見ていたっ」良人の平次郎が、いつの間にか恐ろしい形相を持って、後ろに立っていたのだった。

三

「出せっ、今見ていた物を見せろっ」良人の怒号を浴びて、お吉は、紙のように白くなってしまった。

「かくしたなっ、何か」

「いえ……」

「なんだっ、今、ふところへ隠した物はなんだ」

「……これは」胸を抱いて、彼女はすくんでしまった。

「ははあ、読めた。どうもこのごろ、おれに向って、てめえの様子がやさしすぎるわいと変に思っていたが、さては、隠し男をこしらえていやがるな」

「めっ、滅相^{めっそう}もない」

「うんにや、そうに違いねえ。うぬが隠し男を持っているので、なんとか、おれを甘口に乗せて誤魔化^{ごまか}していやがるのだらう」

「ど、どうしてそんな、大それたことを私が……。あまりといえば、情けないお疑いでございます」お吉は、鬢^{びん}の毛をふるわせて、良人のことばを、恨めしく思った。

「じゃあ見せろ。——見せられめえが、それは、男からきた艶文^{ふみ}にちげえねえ」

「とんでもない……そんな物ではございません」

「いうなっ、もう何も吐^ぬかすなっ。おれにはちゃんと解^{わか}っている。てめえの相手は、仲間の和介^{わすけ}だらう」

「えっ？」

「どうだ、おれの眼に、くるいはあるめえ。弟弟^{でし}子の和介の野郎と、てめえは、艶文^{ふみ}を交わしているのだらうが」

「なんで私が……ええあんまりな」

「しぶとい阿女^{あま}めが」平次郎は、猜疑^{さいぎ}の鬼^{おに}になっていた。妻のやさしい情けも、苦役して稼^{かせ}ぐ小費^{こづかい}も、みなその和介にむすびつけて日ごろから邪推^{じゃすい}していたものである。

「よくも……男のつらに泥を塗りやあがったなっ。……」

ウウム、見ていやがれっ、うぬも、和介の野郎も」どん——とお吉を一つ蹴放しておいて、平次郎は、奥へ駆けこんで行った。そして片肌を脱いで、逞しく盛り上がった筋肉を見せ、再び躍り出してくると、

「この不貞腐れめっ」振り上げたのは、彼の仕事道具である磨ぎ澄ました大手斧だった。

「——キャッ」お吉は、自分の身をどううごかしたか知らなかった。機陰へ、俯伏したのであった。平次郎が振り下ろした手斧の刃は、その機に懸けてある千すじの糸をばらばらに切ったので、糸は蜘蛛の巣のように、彼の体にもお吉の髪の毛にも乱れかかった。

「——待つて」と、お吉は絶叫したが、

「くそっ」平次郎の眼はまったく夜叉仮面のように吊り上がって、酒と、邪推と、白刃の三つに毒を仰飲ったように狂っているのであった。

「い、いいますッ——いいますから——まって、待つて」

「ええ、今さら、聞く耳はねえ、思い知れ」手斧の光は、せまい土間の中を大きく二振り三振り、風を斬った。

お吉は、壁にぶつかった、機にぶつかった。また、雨戸にぶつかって、転げた。

外へ、どんと仆れた雨戸は、彼女の体をまろばせて、次に、平次郎の荒い足にベリベリッと踏み破られた。

「——あれッ、どなたか、どなたか、来てくださいます」
闇へ向ってさけびながら、お吉は、家の外へ走っていた。
何もかも夢中であつた。

「——うぬっ」平次郎は夜叉になっていた。その手に提げられていた手斧は、彼女のすぐ後ろへ迫って、

「思い知れっ」と、また烈しい力で振り下ろした。

仏の加護というか、紙一重の差で、鋭い手斧の刃は、お吉の黒髪をかすめたのみで、横へ反れた。

「ちえッ」平次郎は、悪鬼の舌打ちをならした。そしてなお逃げ転ぶお吉を追って、

「阿女っ、逃がしやあしねえぞっ」と、さけんで躍った。

——お吉は走った。どこへどういう目的などは元よりないのである。藪や畑や雑草の中を、ただ怖ろしさに駆けられるだけ駆けたのだった。

「……アア」しかし、女の足には限りがあった。心臓が押しつぶされるように苦しい。お吉は、大きな息をあえいで、べたと大地に坐ってしまった。

と——その大地を打って、ばたばたと追いかけてくる者の聲音がひびいてくる。お吉はハッとしてまた起った。

——起ち上がったが、もう、肺はそれ以上に走ることに耐えなくなっていた。よろよろと蹠めいてしまう。

「待たねえかつ、畜生っ」平次郎の声だった、声までがもう夜叉の叫びのように物凄く、やがれているのである。

「ど、どうしよう」お吉は髪の毛の根まで熱くなった。息は喘げるし、助けを呼ぶにもこの深夜に誰がいよう。

もう後ろから来る荒い聲音は、すぐ近くまで追いついてきた。——彼女は前にはもう何も見えなくなっていた。真っ暗な足の先が、たとえ淵でも、崖でも、池でも、駈けずにはいられなかった。

と——彼女の眸のまへは、谷間の壁のような高い影に塞がれてしまった。お吉は、何物かにつまずいた。手をついた触感で、それが階段であると分ると、再び無我夢中にそれを駈けのぼった。

よろめく身を支える弾みに、なにか冷たい金属の肌が手にふれた。それは階段の上の擬宝珠柱であった。

「才、ここは柳島の御造営の伽藍じゃな。……才新しい御堂の縁」ほとんど無意識に近いうちに彼女はふと仏のふところを思った。慈悲の御廂の下ならば、同じ死ぬにも——狂乱した良人の刃物で殺されるにしても——幾分かなぐさめられる心地がする。

その時、平次郎がもう御堂の下まで来ていた。ドギドギと光る手斧の刃が、闇の中をうろついている。獣に似た恐い眼が、御堂の床下をのぞいていた。それから廻廊の横のほうへ廻りかけたが、気配を感じたものとみえ、やがてのしりと、お吉の上がった階段を彼も上がってきた。

つよい木の香が鼻を打つ。柳島のこの御堂も、昨日ですっかり落成していたのである。丸太足場も、筵掛もすっかり取払われて、きのうの夕方は、かなな屑一つないようにきれいに掃き浄められていた。そして、御堂の庭には、敷砂まで撒いてあった。

「いッ、いやがったなッ」吠えたける一声がしたかと思うと、平次郎は、お吉の影を見つけて、タタタタと躍り上がって、駈けてきた。

「——あッ、あれッ」

「うるせえッ」二十幾間にある廻廊を、お吉は黒髪をながして逃げまわり、夜叉の手斧はあくまでそれを追いつめにかかった。

五

——もうだめだ。お吉はそう観念した。

全身が、死をおもうて硬ばってしまった。妙に、走る意力もくじけて、

(御仏さま……お上人さま) とのみ心で叫んでいた。

——と彼女は眼の先に、深い死の谷間を見た。ちょうど御堂の廻廊の曲り角であった——お吉は欄干の角へ仆れるように手をかけた。

「ざまを見ろッ」

だっ——と躍ってきて、後ろから振りかざしてきた平次郎の手斧は、彼女の肩骨から頸へかけて、柱でもけずるように、ぴゅッ、とななめな光を描いた。

「——きゃッ！」これが——彼女が良人へ残して行った悲愴な終りの一声であった。それと共に、彼女のからだは、欄干からのめり落ちて、御堂の真下へもんどり打った。

ずうん——とその闇の下に、不気味な地ひびきを聞く

と、

「斬ッたつ」平次郎は青白い笑みをゆがめて、さげんだ。

「キ、斬ッた……」手斧ちようなをだらんとぶらさげたまま、彼はよろりと御堂の扉へよりかかった。そして、しばらくは茫然と眸をひらいて白痴のような口を開あいていたが、何か、冷やっこいものが、額ひたいから顔へかけて、たらたらと流れているのに気づいて、

「血……血だッ……」掌てのひらで、彼は顔をこすった。——と、彼の酒気はすっかり醒さめていたのである、ぶるるツと、背せばねから慄ふるいを立てて、

「——オ、才吉っ」と、うつろな声でよんだ。

急に、身の毛がよだってきたらしい。平次郎は、きよろきよと鋭い眼を闇にくばった。——手にさげている手斧ちようなの白い刃をながめた。

「あーっ、おれは」大変なことをしてしまったと彼は初めて気がついた。自分のすがたが自分の眼に見えてきたのである。

「……わ、わ、わ、……われアあ、どこへ行った、お吉っ」怖々こわこわ、欄干からのぞいてみると、永年、連れ添ってきた妻は、暗い墓場の穴みたいな闇の底に、死骸になって仆ふれている。

よろよろと、平次郎はあゆみだした。——眼も、耳も、口も、ぽかんとうつろにしたまま。

一段一段、彼は、悔悟の階段を下りてゆく。

——しかしもう悔いも男泣きも間にあわない。

大地は、冷々ひえひえしていた。——ひよっとして、自分のあ

るいている今の闇が——あの世という冥途よみの国ではあるまいかなどと思った。ぞつとして、うしろを振り返った——亡妻なきつまの顔が——血みどろになって——黒髪のあいだから怨みの眼を光らせて、自分の襟元へ、青白い手を伸ばしてきそうな心地が幾度もするのだった。

「そ、そうだ」柳島の境内を出ると、彼は、後あとも見ずに韋駄天いだてんのように駈け出した。息をきって、わが家やへ帰ってきた。裏の蓮根の古沼へ、どぼつと手斧を投げすててしまった。そして、家の中へ入るなり戸をかたく閉め込んで、頭から夜具をかぶって眠ろうと努めた。

一

どこか遠くの方で、嬰兒の泣く声がある。平次郎は、夜具の中で、ふと、数年前に死んだお吉と自分との間にできた——亡き児の声を思い出した。

「……似ている」彼はぞっとした。

嬰兒の泣き声は、地の底からするように聞いた。——また、ともすると、手斧の刃で、ぱんと、後頭部を一撃に斬って殺したお吉の亡霊が、血みどろな顔をして、自分と共に、この家に帰ってきているような気がしてならない。

（——ゆるしてくれ）必死に叫んだと思ったら、それは夢だった。——びっしりと冷たい汗の中に身は硬ばって眠っている。

死んだ児の泣き声——亡妻のうらめしげな顔——火の車、地獄、鬼、赤い火、青い火。

怖ろしい幻覚ばかりが、眼がさめても、瞼の前を往来している。がたがたと骨ぶしがふるえる。夜の明けるのが、刻々と、待ちどおしい。

「おッ」ふと寝床から顔を上げると、窓の破れ戸の隙間が赤く見えた。日の出だ、と彼は救われたように飛び起きた。そしてガラリと戸を開けてみたのである。

「——あッ」だが、空はまだ真っ暗だった。そして彼方の原を、十二、三名の僧形の人影が、おのおの、真つ赤な焰をかざして——それはもちろん松明であるが——肅々と無言を守って通って行くのが眼に映った。

「な、なんだろう」行列の先には、白木の箱を担ってゆく者だの、きらきらかがやく仏具や幟をささげて行く者もあった。

「……そうだ。わかった。すっかり忘れていたが、今日は柳島の御堂の建立が成就したので、その入仏供養がある日だった」——まアよかったと安心したように、平次郎は戸を閉めたが、すぐ次の不安に襲われて、そわそわしだした。

「待てよ……お吉のやつ死骸を……あのまま捨てておいたが、今日は入仏の供養に、朝早くからたくさん人が集まる。……すぐ死骸が見つけれられて、お吉とわかると……それにつれて、下手人も」すこしもじっとしてられないような彼の眼つきだった。

「まずいぞ」つぶやくと、帯をしめ直して、家の外へ駆けだした。

「人が集まってからじゃあ間にあわねえ。誰も知らねえうちに、お吉の死骸を……そうだ死骸さえかくしてしまえば」そしてふたたび、柳島のほうへ駈けて行ったが、その時、彼のうしろから、赫々と大きな太陽の光が、下野の山々を朱にそめてかがやき出していた。

「……しまった、夜が明けてしまった……。ええ、どうなるものか」太っ腹をきめて、平次郎はなお先へ急いだ。

もう、伽藍^{がらん}は暁のさえざえした光の中に浮き出していた。ちらほらと、廻廊や広庭には人影もあるいていた。新しい御堂の大扉はすでに開かれて、内陣の壇には、先刻の僧たちが、仏具や帳^{とばり}や蓮華^{れんげ}や香台などをせわしげに飾っていた。

「……はてな……この辺だったが……たしかに、この角^{かど}の欄干から」平次郎は、自分で殺した女房の死骸を、血眼でさがしていたが、死骸はもうそこに見あたらなかった。

二

「こいつあ、いけねえ」彼は、自分の危急を感じた。

お吉の死骸を、他人の手に持つて行かれたとすると——平次郎の身に嫌疑のかかってくるのは当然である。

ぱっと、彼はそこを逃げだした、家の方へも行かなかった。そのまま足を他国へ向けて、永久にこの土地を捨てるつもりだった。

だが——村境まで来て、すこし落着くと、それもまずいと思った。自分から土地を捨てて逃げれば、お吉の殺害を、自分で証明していることになる。

いくら脛^{すね}を飛ばしても、領主の令が伝われば、郡境^{こおりぎかい}や村境の木戸で、すぐ捕まるにきまっている。半日とは逃げきれないかも知れない。

「——山へ」と、眼を上げたが、意地わるく、胃の腑^ふは空になっていた、それに、炭焼や木樵^{きせり}まで、自分の顔を

知らない者はない。

「……そうだ」彼は、その時もう高くのぼっている朝の陽^ひで、初めて、自分のすがたを見直した。さだめし血みどろになっているであろうと思った、着物にも、何も血らしいものはないのだ。

だんだん腹がすわってきた。平次郎は、田へ下りて水で顔や手足を洗い、農家の裏にあった藁草履^{わらぞうり}を足に履^はいた。そして、わが家へも廻らずに、そのまま元の柳島へ引返してきたのである。

——入仏式の鐘はしきりに鳴りだしていた。この日は、嘉禄^{かろく}元年の四月の半ばであった。沃野^{よくや}には菜の花がけむっていた、筑波も、下野^{しもつけ}の山々も、霞^{かすみ}のうちから、あきらかに紫いろの山襷^{やまひだ}を描いていた。

もみ烏帽子^{えぼし}や市女笠^{しめつけ}や、白い頭巾——桃いろの被衣^{かすぎ}など、が、野や畦^{あぜ}を、ぞろぞろとあるいてゆく。

山家の娘や、老人や、若い者たちまで、新しい衣裳を着て、芳賀^{はが}郡^{ごおり}の大内へ——柳島の建立を見に——詣^{もつ}でに——たいへんな人出なのである。

平次郎は、びくびくとして、その人たちの中にまじって入って行った。自分の袂^{たもと}にさわる人間にもぎよつとした。しかし、人に馴れるに従って、大胆になってきた。彼は、いつのまにか、にやかな笑い顔を作り、平然と装^{よそお}って、

「よいあんばいですな」と、そばの者に話しかけたり、「よう、おはよう」と、仲間の者を見ると、こっちからわざと挨拶して行ったりしていた。

「平次、おめえは、仕事着のままじゃねえか。どうして今日は、垢あかのつかねえ衣裳を着てこねえんだ。お吉さんといういい女房もついているのに、気がきかねえ」大工仲間の老人にいわれて、平次郎は、ぎょつとしたが、「ところがね、あのお吉が、ゆうべ隣村の身寄りの者の家へ行ったきり、どうしたのか、今朝まで帰ってこねえんでさ。……で、面倒だから、つい、いつもの仕事着で来てしまったんですが、これじゃいけねえんですか」

「わるいことはないが、今日は、仕事は何もありゃあしねえ、みんなお上人様のお式を拝みに来ているのだから……」

「あつしも、きょうは、御本堂へ坐って、ありがたい入仏供養のありさまを、拝ませていただこうと思うんで」

「ふうむ、おめえ急に、信心家になったんだな」

平次郎は、そんな軽いことばにも、すぐ顔をうごかした。

三

平次郎は空虚うつろだった、人浪と念仏の声にただふらふらと押されているに過ぎない。心のどこかでは絶えず自分の犯した大罪の発覚をおそれ、あらゆる人間に向って鋭い警戒と神経が休まらなかった。

「ホウ、御本堂じゃ」

「なんとお見事な」

「あれに、御勅額も」群衆の顔がみな上を仰いで、眼を

みはりながらつぶやいているので、平次郎も初めて、本堂の正面に来て立っている自分に気づいた。

十二間四面の新しい木の香にかがやいている伽藍がらんには、紫の幕が張りまわされ、開かれた内陣の御扉みとびらには、おびただしい灯りが耀かがやいて見える。

下野しもつけの城主大内国時くにとときの一族をはじめ、久下田太郎秀国、真壁の郡司や相馬そうまの城主高貞たかさだなど——そういった歴々の帰依者きえしやも、きょうはすでに家臣をひきいて、本堂の左右にいながれ、伽藍成就がらんじゆのよろこびを囁ささやき合っていた。

平次郎は、遠くからその光景を仰ぎ見たが、太刀を帯びている国主や武士は皆、やがて自分を縛る鬼のように見えて、じっとしていられなかった。

「——誰か今朝のことを、噂うわさしていないか」

猜疑さいぎに尖とがった眼は、群集をかき分けて、ふたたび廻廊かいりやうの角かどにあたる所の——自分が殺人を犯した場所へ——怖々こわこわと行ってみた。

けれど、そこにも、人がいっぱいにいるだけで、なんの異状も見出されないし、

（河和田のお吉さんが殺された——）と、ささやいている者もない。

平次郎は、独り合点に、

「アア分った」と、胸のうちでつぶやいた。

「きょうはめでたい伽藍がらん開きと共に、入仏供養という、この村創はじまって以来の日だ。……それで、お吉の死骸を、寺の者があわてて始末して、伽藍が血によごれたなんてことも、そっと隠しているにちがいない」こう自分勝手

に解釈をきめると、平次郎は、なんだか不安心でもあるし、安心したような気もしてきた。

（落着いていろ、口を拭いていろ）と、彼は自分へつよくいつて聞かせた。

急に、辺りの者が、一斉にべたべたと大地へ土下座し始めたので、平次郎もあわてて坐った。

いや、その辺りばかりでなく、山門から境内の者すべて、一人として、立っている者がなくなつたのである。萱の風に伏すように、すべての人々が、頭を下げ、念仏を唱和し、やがて、撞き出された梵鐘の音と共に、しんとした静寂が見舞つた。

「……親鸞さまじゃ」

「……お上人様じゃ」ひそかな囁きに、平次郎はそつと首をのばして本堂のほうを見た。その時本堂の内では今しも稲田の草庵から移された善光寺如来の御分身が、金堂厨子の内ふかく納められ、導師親鸞がおごそかな礼拝を終わっているところだつた。

「——やっ」突然、こう頓狂なさけび声を揚げて、平次郎は、すべての人が頭を下げている中から、たった一人、発狂したように飛び上がった。

導師親鸞聖人のそばには、大勢の御弟子たちが従っていたが、その中に——親鸞のすぐうしろに、俗体の女すがたが、ただ一人まじっているのであつた。

「——お吉だつ。……オオお吉にちげえねえっ」彼はふらふらと歩き出したが、すぐ群集につまずいて群集の中へ仆れた。

四

「なんじゃ、この男は」

「怪態な」

「気が狂うてか」

「癲癇じゃろ」人々から眉をしかめられて、平次郎はハツと思つた。

（気のせいだ）なんで、お吉が生きているはずがない。しかも、国主、城主、侍衆などのいならんでいる本堂の上に、親鸞の側近くに従っているわけなどが絶対にない。（しまった……自分で自分の罪を口走るようなものだ）彼は、こそこそと、人の後ろへかくれ込んだ。しかし、どうしてもまだ気にかかるのであつた。またそつと首をもたげて——じつと気を落着けて——本堂のほうを窺つた。

親鸞のすがたの側に、やはりお吉の姿が明らかに見えるのである。導師親鸞は、式事をすまして、中央に坐っていた。お吉はうしろのほうに、両手をひたとつかえている。

国司と親鸞とのあいだに、なにか話が交わされているらしい。お吉も時々、おそろおそろ顔をあげて、親鸞のうしろで答えているかのように見えた。

「生きてるっ——。おう、おう、お吉。——お吉じゃあねえか」憑き物でもしたように、平次郎は両手をあげてまた狂つた。もうこんどは止らなかつた。群衆の頭の上

を踏みつけて、本堂の階段のほうへ遮二無二近づいてゆくと、前後もわすれて、

「女房っ、女房っ」唸きながら、そこを駈け登ってしまった。

「無礼者っ」廻廊にいながれている国司の家来たちがいちどに立ち上がり、群衆もこの異様な狼藉者に、わっと、驚いて立ちくずれた。

「ま、おまえ様は」お吉は、真つ蒼になって、絶叫した。

平次郎は、群衆へ何か告げ知らせたいような手振りで、「生きていたっ、生きていたっ——」と、さけびつづけた。

「ひかえろ」飛びかかってきた侍は、左右から彼の狂いまわる腕をつかまえて引き据えた。藤木権之助と広瀬大膳の二人であった。

「言語道断な奴めが」

「お場所がらをわきまえぬか」と、叱咤して、

「こりゃ平次、いつもの仕事場とはちがうぞ、ゆるし難い狼藉、きょうこそ、その素っ首を打ち落してやるから立てっ」襟がみを引摺ると、平次郎はもう瘦せ犬のように身を縮めているだけだった。

すると、凜として一方から、

「お待ちなされ」

つと、声がひびいた。

何者が遮るのかと、権之助が振り向いた。法名を乗念房という尾張守親綱の声だったのである。権之助は心のうちで、

（なぜ止めるのか）と、問い返すような眼を彼へ向けた。親綱は、

「上人の御意です」と、次にいった。

その一言に、誰もみな黙った。しいんと鳴りをしずめて、眸は上人のほうへ集まっている。親鸞は、やおら法衣のたたずまいを改めて、

「その者を、これへ」と、さし招いた。

五

そこに、彼は初めて、ありありと、うわさに聞いていた親鸞の姿を眼に見た。

「へ……へい……」どうしても、面をあげることができないのである。

「おもとが、木匠の平次郎か、わしが稻田の親鸞でおざる、よい折に会った、おそろしいことは何もない、いやむしろよろこばしいことすらある」

人の声か、仏の声か。

平次郎の耳の垢の隙間から諄々として入ってくる上人のことばは、皆平次郎にとって救いであり慰めであり、そして温かかった。

「——おもと、ふるえているの。そうか、おそらくはなんぞ勘ちがいしてござるのじゃろう、それでは、その恐怖から先に取り除けてあげよう」親鸞は、諭して聞かせた。

「今朝方じゃった——まだ夜の明けたばかりのころ、こ

の御堂の角に、不愍や、一人の女房が悶絶している。誰ぞやと手当てやれば、それはおもとの内儀——このお吉どのだった。お吉さんは、よく稲田のわしの所へも信心に見えられたが、良人の心に逆ろうてはと、ふつつり、足を止めていたのじゃ。わしがその折、御名号を書いて与えたが、見ると、今朝氣を失うている折も、確乎と、それをふところに抱いていた。——やがて、弟子衆の介抱で、われに回ると、さめざめ泣いてばかりおる。で——きょうのお式の前にと、別室へよび、仔細をつぶさに話してもらいました。平次郎どの、わしが証を立ててもよい、お吉さんは、おもとの疑うているようなそんな女子では決してない。世にもめずらしい仏性の女子じゃ、許してあげてくだされ、そして、愛しんでおやりなされよ」

「……………」

「のう、よいか」

「……へ、へい……」

「お内儀、念のため、良人に疑われた品、ここへ出して見せてやりなさい」

「はい」お吉は、摺り寄って——

「おまえ様……おまえ様は……」人々の前もわすれて泣き濡れていたお吉であった。磐石にひしがれたように首をうつ向いている平次郎の前に、名号をくりひろげて、良人の手をつかみ、良人の茫然としている意識を揺り醒ますようにいった。

「わたしが不義をしている——男からの手紙を内密で見

ていると——おまえ様が邪推をまわしたのは、この名号でございます。……勿体なくも、上人様のお筆でございますわいな、拝みなされ、良人のひと、これ、よう拝んで、お前様が人殺しの罪に墜ちなかつたお札をいうてくださんせ」恐々と、平次郎は、顔をもたげ、名号の文字をじつと見つめた。

「おお……」

「わかりましたか」

「……ウム」うなずいて、初めて彼は、妻の手をにぎり返した。

「……だが、お吉、おらあどうしても、おめえを手斧で斬った覚えがあるんだが……どこにも、おめえは怪我をしていないか」

「いいえ……。ああわかりました——それではお前様は、御堂の大廂から廻廊の角へ下がっている太竹の雨樋を斬ったのじゃ、それがわたしの身代りになって、今朝までは二つに斬れてぶらんとしておりましたが、お坊さんが、供養式の目ざわりというて外しておしまいなされたのじゃ」

「……あ、じゃあおれが手斧でたたつ斬ったと思ったのは」

「雨樋じゃ、それを、わたしと申うて、勘ちがいしていたのでござんしょう」

「……ウウウ……そ、そうだったか」肚の底からうめきながら、平次郎は初めて、人間らしい眼が開いた心地がした。

六

すべてが自分の心から映して、心を恐怖させたり、呪わせたりしていた錯覚だった。

水に映っていた形相の悪い影だった。

平次郎は、水に返った。まだ澄みきったそれにはなれないが、本来の性が心の底から湧きあがって、

「すまない……お吉……すまなかった……」

両手について、自分の妻へいったのである。お吉は、夫婦となつてから、初めて良人の口から、こんな真実の声を聞いた。

「あれ……勿体ない」良人の手をすくい取って、

「女房に向つて、すむすまぬもござんせぬ。その詫びなら、なぜ、わたしよりも、御仏さまへいうては下さいませぬか」

「? ……」平次郎は、唾のように、黙ってしまった。慚愧にふくれあがっている額の青すじが、彼の性格の中でありありと苦悶していた。

「のう、お前さま」お吉は、今こそ、良人の年来の氣もちをここで一転させようとするのだった。

「? ……」だが、平次郎は、うなずかなかつた。

じつと、押し黙っている。強情な一徹な氣性を、さながら二つの拳にあらわして、膝にかためたまま、黙っている。

「のう……」お吉のやさしい耳元のささやきにも答えな

いで。

前には、上人がいる。弟子たちがいる。

また、城主、郡司、その臣下、そして、集まっている無数の民衆がいる。

そのすべてが、仏の帰依者である。けれど、平次郎にはまだ、

(ウム)と、素直にいないらしい。

なぜ。それを平次郎は今、あたりの人々に憚って口にいえないらしかったが、彼の氣持をもし率直にいわせるならば、

(仏なんてない)と、自分に教えたのは、仏に仕える人であり、

(神もない)と、自分の頭脳へ沁みこませた人も、また、神に仕える人だったのである。

彼が、お吉との間にもうけた愛児は、ない神をあるように思い、ない仏をあるように信じたから、死なしてしまったのだと考えていた。

いかげんな僧侶だの、怪しげな山伏だの、そういう類の者に信仰へ導かれて、彼は、たった一人の可愛い子を死なすために、夫婦して、食べる物も食わず、着るものも着ず、稼いだ金や、ささやかな蓄えを、みんなそれらの祈祷料だのなんだのに捧げてしまったのである。

そのあげく、子は死んだ。お神札だの、お水だの、仏壇だの、なんだの、すべては彼の眼に忌わしく見える物を、一抱えも持つて行つて、溝川へ芥のように打ちすて

てしまった時に、平次郎は、

「——笑わかしやアがる、これで罰があてられるものならあててみる」と、天へ向って罵った。

それから、

（神だと、仏がだと、ふふん……）彼の性格は、また信念は、そうなってしまった。

誰にだって、彼は、そう信じていることでは、退かずにいい争ったものである。——だが、親鸞だけは、さつきから、なんとなくべつもののような気はしていた。

七

「——いってください、後生です。女房へ下げるその手を、どうして御仏さまには下げられないのでござんすか」

「お……お吉」

「いってくれますか」平次郎は、突っ張っていた肩を、がたと落して、

「……いう、いう……」と、顔をおおった。

「才オ、お前様」お吉はうれしさに、われを忘れて、良人の手を引っ張った。

二人は、かがやく灯へ向って、並んで坐った。善光寺如来の分身が、新らしいお厨子の内に、皎々と仰がれた。

平次郎は、ふと、羞恥むように、妻のほうを見てたずねた。

「……だが女房、なんというて、お詫びをいうたらよい

のか」

「さ……」彼女は考えて、

「やはりただ、なむあみだ仏——と、そう仰っしゃればようござんす」

「それだけでよいのか」

「ええ」

「たったそれだけで、おれが今日までやったいろんな悪いことが、みんな、お詫びになるだろうか」

「先の願いにもなります」

「では……」ふたりの掌がいっしょに揃って、合掌した。

燦として、外陣内陣の仏燈が、いちどに、光を改めた。

「なむあみだ仏——」

「なむあみだ仏——」

「おお、おいしいなされた」お吉のほほ笑みは、さながら、菩薩の笑みに似ていた。平次郎は、やめなかった。

「なむあみだ仏、なむあみだ仏——」ぼろぼろと涙がやまない。

「もう、ようござんす、ここは、家ではございませぬから」心から、笑って、夫婦は急に、親鸞のうしろへ退がった。

城主も、侍たちも、二人をながめている間、平次郎の過去の罪を考えている者はなかった。ただ美しいものを見るように見惚れていたのである。藤木権之助がすすんで、

「追ってお上よりも、何かのお沙汰があらうという仰せ

であるぞ。ようお礼を」と、二人のそばへ来てささやいた。

平次郎は、あわてて、武士たちの居ならんでいるほうへ頭を下げた。それは、家来たちの席であると注意されて、急いで、城主のほうへまた、お辞儀をし直した。

梵鐘が鳴り出した。人々は、座を立つ。供養の式は終わったのである。

だが、群衆はまだ去らないで騒いでいる。御堂へ向つて前栽の両側に、これから、城主と親鸞とが手ずから鋤を持って、双つの樹を植える式があるというので――。

その樹は、一方に柳樹、一方には菩提樹であつた。

下野の城主国時と、親鸞とは、大地へ下り、東西にわかれて、鋤をとった。

植えられる樹のうえに、もう無数の禽が舞つて来て、浄土の歌を囀っていた――。

八

いつまでも、境内を去らない群衆は、鳴りひびく梵鐘のあいだに、念仏を和して、

「あの平次郎でさえ、お上人さまは、お救いくだされた」
「親鸞さまのようなお方こそ、生ける御仏さまというのであるう」

「ありがたい」

「これでわしらの精神の曼陀羅もできるといふもの」
「安心して働こうぞ」

「楽しんで世を送ろうぞ」

「楽しみがのうてなんの人生ぞや、といつかも仰せなされた。ありのままの相をもつて、念仏し、世をたのしめとも仰っしゃった」

「こんな歎ばしい日はない」

「吉日じゃ」

「めでたい日よの」百姓たちは百姓たちと、工匠らは工匠たちと、商人は商人たちと――またその家族たちと――人々はこぞつて親鸞の徳を称え、国主の善政に感謝し、法悦の諸声は、天地に盈ちあふれていた。

城主の大内国時も、

「政治のための政治ではないけな――まことの民心をつかむのは、まことの心になって、支配者も、一体になることにあるということをお今日わしは教えられた。上人は、仏法最高の真理の把握者であると共に、経世救民のうえから、共に偉大な民治の父でいらせられる――」と、いった。

相馬の城主高貞や、久下田太郎秀国や、真壁、小栗などの近国の領主たちも、当日の参会によって、みな、少なからぬ感銘をうけていた。

そして、おのおのが、この新しい伽藍へ、応分の寄進を約して、いとも満足げに、やがてそれぞれ帰館の途について行った。

「おまえ様――」お吉は、そっと、良人の手をとって、ささやいた。

「……もう御堂の内には、どなた様もおりませぬぞえ。」

お式はすんだのでございます。……さ、さ、おまえ様も、階下へ降りて、お上人様へ、まいちどよく、お礼をいうてくださいませ」

「……ウム、ウム」素直な唾のように、平次郎はただうなづくばかりだった。

御堂の両側に、柳と菩提樹を植えて、手を洗いでいた上人の前へ、夫婦は、おそろおそろ来て、大地に両手をつかえ、

「ありがとうございます。……お上人様、なんとお礼を申しあげてよいやら、今はまだ、あまりうれしゅうて、ことばもございませぬ」といった。

上人は夫婦のよろこび以上に、大きな歎びにつつまれて、ほほ笑んだ。

「みなも帰った。おもとたちも、はよう家へ戻って、きょうから、家の中も、明るくするように努めたがよい。良人、妻、どっち一人の力だけでも、家は明るうならぬ。よいかの、心を共に協せて——」

「わすれませぬ」お吉は掌をあわせた。

すると、平次郎は、大地を摺り寄って、泣き濡れた顔を上げながら上人の袂へすがってさげんだ。

「——お救い下さいまし……お救い下さいまし。末永く」

「平次郎は何を悩む、おもとはもう充分に御仏の救いに会っておらるるのじゃ」

「では……私を、御仏のお弟子に加えてくださいまし。上人様のお弟子の端に」

「よし」——とすぐ上人はうなずかれた。そして、唯円房

という法名を、彼のために選んで与えた。

九

唯円房——

唯円房——

いくたびも平次郎は口のうちでくりかえしてみる。救いの師、親鸞に名づけられて、きょうから在家の弟子となった自分の名を——。

お吉も、共に、

「よい名でござります」と、よろこびにかがやく。平次郎は、改まって、

「お吉よ」と、やさしく呼んだ。

「あい」

「おまえのお蔭だ、おれがこうなって生れかわったのは——」

「勿体ない」

「二つにはまた、死んだ児のおかげだ。——こうして、御仏に導かれる縁を作ってくれたのは」

「ほんに……」

「また、仲ようして、よい子を生もう、お吉、生んでくれ」

「はい」

「そして、きのうまで、おれのしたことはすべて忘れてくれ。——きょうからは、生れかわった唯円房、きつと、人いちばい働いて、貧乏も取り返すぞ、おまえにさせた

苦勞も埋め合せしてやるぞ」

「そのおことばだけで、私はもう、なんといつてよいかわりません。……私も、きょうの暁、いちど死んだも同じ体です。これからは、唱名一念、夫婦して、御仏さまへおつとめをいたしましょう」

「オオ、お上人様が手ずから植えて——やがてあの御堂の両側に伸びてゆく——柳と菩提樹のようにな」

*

九条殿の執奏によって、弟子の真仏房がはるばる、都から奉じてきた、後堀河の帝の勅額は——

専修阿弥陀寺

と下賜しおかれた。

今ものこる高田専修寺はこの寺である。——親鸞が稲田にあったの農田生活十年のあいだに、こうして建立された伽藍なのであった。

もっとも、その十年のあいだには、ここばかりではなく、親鸞の師弟が杖をついた地方——たとえば越後、信州、上州、武州などの各地にも、蒔かれてあった胚子が、春に会ったように、簇々と芽となり、ふた葉となり樹となり花となつて、念仏曼陀羅の浄地を、各地に生み殖やしても行つた。

それは、あたかも大地が植物を伸ばして行くあの自然の力にも似た必然の勢いで——。

この勢いと時代のまえには、多年念仏門を呪詛してい

たあらゆる呪詛も、声をひそめてしまった。権力も、それには従うほかなかった。

だが——親鸞も、人間である、いつの間にか、よいお爺さんになつてきた。

もう六十にちかいのである。そして五、六人の子供たちの父であつた。——その以前に、前の玉日の前とのあいだに生げた一つづ種の範意は、京都で、父の顔を知らずに亡くなつてしまつたけれど——とにかく彼は今、一個の家庭の父としても幸福であつた。

しかし、彼は、その幸福の中に、綿帽子をかぶつて、屈んでしまふ人でなかつた。体力もまだ旺なものだつた、異常な精神力は、六十ぢかいとはどうしても、見えないくらいな艶のいい皮膚にもみなぎっている。

「雪が解けたら、また教化の旅に出かけたいの。——信州へも、越後へも。——久しぶりに東海道も遊行してみたい」ことしの冬は、云い暮している。この分では、まだまだ裏方の朝姫との間に、次の嬰兒が二人や三人は生れない限りもない。